
異世界戦国大乱記

秋雨 夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界戦国大乱記

【Nコード】

N6578J

【作者名】

秋雨 夜

【あらすじ】

とある平凡な大学に存在する奇妙なクラブ、「考古学研究会」。
一見お堅いように見えるクラブだが、そこは毎日がドタバタコメディな、何ともお軽いクラブだった。
そこにいる部員のキャラの濃さは、他の学生が語るに「学内一、変人が多い」とのこと。
そんな彼らがひょんなことから始めたオンラインゲーム「国盗り戦国乱世」。

戦国時代をモデルにしたゲームだが、プレイして僅か数時間、いき

なりの落雷でなんとゲームの世界に落っこちた！？おまけに何やら不思議な能力が身体に宿ってる！？

雨降る桶狭間で出会ったのはあの織田信長、そしてその信長に、今川義元を討ち取る手伝いをしろと命令されて！？

史実を完全無視した異界の戦国時代、群雄割拠するこの世界を舞台に、己の歴史の知識、雑学、唯一手元に残された携帯、そして炎や水を操る力を駆使して生き残れ！

考古学研究会の部員六人が武将を脅し、罵り、ぶっ飛ばして罷り通る！

ここでは正史なんてものは存在しない！はちゃめちゃ破天荒な異世界戦国大乱記、これより開幕いたします。

メインキャラ設定と思われるもの

○小川 健 「……そんなことより、煙草が切れた方が重要だ。買っていくってくる。」

：考研の部長を務める22歳。 あだ名は何故か「王子」。

好きな物は酒と煙草、ちなみに好んで吸う煙草の銘柄は『HOAP』である。

あまり進んで喋ろうとしないクールな男……を気取ってるようだが、考研では専らタダの弄られ&mp;貶され役。

異界の戦国乱世に落とされて、この一風変わった世界を渡り歩き、名だたる武將に会いに行こうツアーを提案した本人。

中国史に詳しく、山中と話がよく合う。

神憑きとして『炎』の能力を得ている。 この能力は攻撃に特化しており、防御の技が全くない。「攻撃は最大の防御」を地で行く能力で、破壊力は最大級だがその分体力の消耗が早く、一撃の威力の高さが求められる。

武器： 陽炎丸

紅蓮の柄と薄い赤銅色の刀身を持ち、鰐部分には双尾の狐のレリーフがある。 柄の長さに比べて刀身がかなり長く、形は野太刀に似ている。 切れ味は相当のもので、大抵の物なら豆腐を切るように何の抵抗もなく切れてしまう。

戦闘時テーマソング「A Little Faster」 The
re For Tomorrowより。

○梅本 佑樹 「だから！お前等勝手に動くな！そこに大人しく座つてろ！！」

：考研の副部長を務める21歳。 あだ名は「梅」、本人はあんまり呼んでほしくはない。

好きなことは模型造り、今造っているのは戦艦大和。

まとまりの全くない考研を必死にまとめ、書類製作やミーティングなどを一身にこなす苦労人。 その為か胃薬と栄養ドリンクが常備薬になっている。

戦国乱世に落ちてからもその損な役割は変わらず、気を抜けばすぐに勝手気儘に動き出すメンバーを叱っている。 それでストレスが溜まっているのか、よく一杯やりながら愚痴っている。

神憑きとしては『地』の力を得ている。 この能力は防御性に特化しており、攻撃範囲が広いのも特徴。 岩や砂、泥まで操ることも可能で、造形もお手の物と色々便利。

武器： 地国天

黄土色と金茶色の槌で、梅本よりはるかに大きい。 柄の上部に取手があり、それを引くと槌部分が外れる仕掛け。 槌の両サイドには、土竜の堀りが入っている。

戦闘時テーマソング「Alpha Dog」 Fall Out
Boyより。

○北 修子 「こんなもんがこの値段？冗談、あと三割下げ。それが妥当や。」

：考研の会計を務める22歳。 あだ名は雰囲気酷似していることから「マンボウ」。

好きな物は宝石、化石、着物、可愛い女の子と危険な香りが漂う。

医者の娘で金銭感覚がちょっとズレており、何故会計の座についてのか問題視されている。

貞子のような黒く長い髪に、死んだ魚の目と顔にあまり生気がない。

特技は真顔でキツイ暴言を吐くことと、宝石や着物の目利き。

神憑きとしては『水』の能力を得ている。

また、水に関連して氷の力も備わっている。この能力は攪乱や敵の足止めに長け、最も威力を発揮するのはやはり海上・水中戦である。

武器： 凧鯨

群青と濃紺のグラデーションが入った旋根。先端には鯨の牙のようなギザギザがつけられている。また握り以外の箇所は全てざらざらとした「鯨肌」で、刃を使い物にならなくしてしまう。

戦闘時テーマソング「Supermassive Black Hole」 Museより。

。谷中 若菜 「悪戯は、仕掛けてる間が最高だよ。ね、そう思うでしょ？」

：伊賀出身の孝研メンバーで、年齢は21歳。あだ名は高校時代からの引き続きで「殿下」。

好きなことは悪戯と絵を描くことで、二つともかなりレベルが高い。悪戯好きと言っただけあって、悪質なものから笑って済ませられるものまでその種類は選り取りみどり。

戦国乱世では伊賀出身というだけで忍に勧誘されているが、普通の忍ではなく自分の能力から戦忍に興味を持つ。

ワリと孝研の中ではまともそうに見えるが、あくまでもそれは「見えるだけ」であり、やっぱり彼女も少し変わり者である。

神憑きとしては、『雷』の能力を得ている。

この能力は全能力中最高距離を誇り攻撃力も高いが、コントロール

が極めて難しく、日々の鍛練が必要不可欠である。

武器：電王

一見金色に見えるが、よく見ると薄く虎縞の模様がある大弓。弦がないのが特徴で、雷を張って使う特殊な弓。

戦闘時テーマソング「God Speed」Anberlinより。

○山中 美那 「脅迫？人聞きの悪いことを……私はお願いしてるんですよ。」

：いつでも穏やか、丁寧な口調で喋る、一見大人しい雰囲気を持ち主。あだ名はシンプルかつわかりやすい「ミナちゃん」。

しかし時々ダークでブラックな空気を漂わせ、目が笑っていない笑顔で硫酸並の毒を吐くことも。

怒らせると一番怖いのはこの人じゃないかと専らの噂である。

好きなものは三国志で、この事を語り出すと止まらない。

戦国乱世では、豊富な歴史の知識を生かした脅迫が得意分野。

神憑きとしては『風』の能力を得ている。

全能力中最も安定した燃費を誇り、空中戦、偵察なども得意。特に『炎』との相性がよく、燃費の悪い『炎』のサポートが向いている。

防御力がやや心許ない為、攻撃を見切って避ける力が必要。

武器：舞風

萌木色と銀色の扇。大きさは両手を広げた程で、広げれば斬る、または盾に、畳めば殴ると三つの使い方がある。ちなみに、表には燕の絵が描かれている。

戦闘時テーマソング「Unbreakable」 Fireflightより。

○木下 千尋 「オレは大食いじゃないぞ。食べるのが好きな小食人間だ!!」

：メンバー中一番小柄だが、口の悪さでは北と張り合える。あだ名は単純に「チロ」。

主に銃器・火器・刃物を愛する危険人物で、食べることが大好き。食べ物が原動力と直結しており、執着力はもはや異常。

あれこれ考えるのが嫌いで、単純な性格をしており、面白ければそれでヨシという快樂主義者。芋虫・毛虫以外の虫に耐性があり、よく変な虫を捕まえてきては他人を脅かしたりしている。

神憑きとしては『闇』の能力を得ている。

基本的には周囲の影を様々な形に変えて攻撃するが、夜になれば闇そのものを操ることが可能。身を隠すのが便利な能力の為、伏兵や暗殺などに向いている。

武器：影蜈蚣

木下の身長程の長さの黒い棒。よくしなり、強度もあるので打撃力が高い。中程にうねる百足の螺黏細工があり、上下の先端には銀色の装飾がつけられている。

戦闘時テーマソング「A Fact Of Life」 Factより。

○用語について

神憑き：特殊能力者の呼び名。能力は炎、水、風、土、雷、闇、光の七つある。この能力は「資格のある者」しか宿ることがない。神憑きには三つの位があり、「率いる資格のある者」は『将位』と呼ばれ、最も強い能力を持つ。一国には必ず一人『将位』がおり、俗に言う殿様がそうである。

次に『官位』と呼ばれる位は、「将を護り、支える資格のある者」、つまり部下の軍師や武将が当てはまる。最後に『兵位』、これは「二つの位の手足となる者」がそう呼ばれる。これは兵卒に多く、神憑きの中でも最も下位の存在で、一般の人間でも正しい訓練次第で能力を開花させることもある。

神器：神憑きが仕様する特殊な武器の名称。不思議な鳥居、「妖鳥居」の向こうに存在する妖怪の世界にて、職人妖怪と呼ばれる妖怪達によって作られる。その作り方は門外不出、どのようにして作られているのかは誰にも解らない。解っているのは、制作時に神憑きの血液を必要とすることぐらいである。神憑きにとって神器はなくてはならないもので、これを壊されると精神崩壊を起こす程である。それは位が高くなればなるほど破壊されたときのダメージが大きく、将位となればそのまま死に至ることもある。しかし兵位だとそこまで神器は重要ではなく、普通の武器で戦う。戦では相手の神器を破壊することが敵将を「討ち取った」ことになる。

戦のシステム：基本は簡単に言えば神器の壊し合いである。ただし位の高いものは低いものになるべく手を出さないのがルール。だが例外もあり、将位VS官位となると話は別になってくるが、大抵は同じ位の者同士が一對一で戦う。

六武衆：主人公達の通り名。桶狭間での活躍の後、爆発的に広まる。その姿は悪鬼羅刹の如く、根の国より出でし化物のようだと言われるが、これは単なる誇張で本人達は極めて遺憾だと思っている。

六武衆については様々な噂がまことしやかに囁かれており、他国では実在するのか否か、とまで言われている。

メインキャラ設定と思われるもの（後書き）

設定してみました。

あんまり設定らしくないかもしれない・・・。

テーマソングはご愛敬、ほとんど洋楽だよ。

興味ある人聞いてみてネ。

歌詞で選んだワケじゃないよーだって英語嫌いだもの。

洋楽は好きだけど。

開幕（前書き）

歴史上の人物を罵ったりしてますが、決して作者は彼らを馬鹿にしているわけではありません。

そして正史に基づいた作品でもなく、時代背景や出来事は完全に作者のオリジナルですので、その辺りはご容赦ください。

開幕

「なあなあ、オレこんなの見つけたんだ。授業終わったらさ、皆でやらねーか？」

全ての始まりは、この一言だ。

ここはごく平凡な大学の、とある部室である。スポーツ部と文化部、クラブは大体この二つに分けられるが、このクラブは他とは少し変わっていた。

その名も「考古学研究会」、縮めて「こうけん考研」である。学内でも一番何をしているクラブなのかと尋ねられることの多いクラブだ。部員は今のところ六人で構成されている。少し紹介しておこう。

まずは部長の「おがわけん小川健」。通称『張りばて部長』。読んで字の如く、張りばてのような部長である。ぶっちゃけた話、いるだけの部長。趣味は喫煙と飲酒という、将来的に病気が心配なヤツだ。ちなみにあだ名は、何故か「王子」である。

副部長は「うめもと ゆうき梅本祐樹」。部長の仕事を一身に引き受け、日々胃痛の絶えない可哀想な苦勞人である。手先が器用でプラモ作りが趣味と普通そうに見えるが、日々金欠にて借金大王のレベルを貼られている。あだ名は「梅」だが、本人は微妙に呼ばれるのを嫌っている。

そして会計の「きたしゅうじ北修子」。医者の娘にしてクラブ一の目利き。化石と宝石と和服と可愛い女の子をこよなく愛する変人である。普段はボーっとしているが、口を開けばキツイ暴言を真顔で吐きまくる。あだ名は雰囲気こくじが酷似していることから、「マンボウ」である。

次に部員その一、「谷中若菜」^{たになかわかな}。出身が伊賀というだけで忍者疑惑が持たれている。絵や漫画を描くことと、夕チの悪い悪戯を仕掛けるのが得意である。あだ名は「殿下」。

部員その二、「山中美奈」^{やまなかみな}。普段は物静かだが、中国の事を語り出すと止まらない、その名も歩く中国辞典である。その柔和そうな表情とは裏腹、笑顔で黒い事を言い放ち、主に小川を凹ませる隠れブラックだ。あだ名はシンプルに「ミナちゃん」である。

そして最後、「木下千尋」^{きのしたちひろ}。身長は148センチと小柄だが、態度は誰よりもでかく口の悪さも北と張り合える程だ。刃物や銃器をこよなく愛する危険人物にして、勝手気ままでイヤだと言ったことは絶対やらない。北と馬が合い、よく二人で男性陣を貶^{けな}したり北をボコったりしている。あだ名は「チロ」である。

以上、男性二人と女性四人、これで全員だ。なかなかのキャラの濃さに、毎年新入部員確保が大変になってきているのがたまに傷なのだが・・・とりあえず話を戻そう。

ゲーム好きな木下の携帯には、「国盗り戦国乱世」という名のオンラインゲームの広告が映っている。

「まーた、チロの好きそうなヤツだな。」

梅本が苦笑いしながら携帯の画面をのぞき込んだ。

「最近戦国時代が有名ですよ。私もそれ、やってみようかと思っていたんです。」

「さっすがミナちゃん！目の付け所がオレと一緒にだな！」

につこり微笑む山中に、嬉しげに木下がまとわりついた。

「……俺はやらんぞ。めんどくさい。」

窓辺で煙草を吸っていた小川がボソツと言うのを聞きつけ、即座に宝石カタログを眺めていた北につっこまれた。

「面倒もなにも、どーせ暇なんやろ。彼女もおらん、することと言ったら家で一人酒が関の山やないか。」

「何でお前にそんなこと言われなくちゃいけないんだ!？」

相変わらずズッパリと痛いところを突かれ、小川が北に噛み付く。

「やかましいわ。二日酔いはそこで一人寂しくヤニでも吸ってろ。」

「男やもめに蛆がわき、女やもめに花が咲くって言うよね。」

遠慮もへつたくれもない北と谷中の口撃に、返す言葉もなく凹む小川。

「まあまあ、おいマンボウ、あんま言っでやるなって。けっこう気にしてるんだからよ。」

見かねた梅本が割って入り、北を押さえる。

「じゃあ、学校終わったらみんなでやろうか。」

「りょーかい。」

谷中がそう言い、皆の返事が部室に響いた。

そして、帰宅した六人は早速それぞれのパソコンの前に陣取る。
立ち上げを済ませるとオンラインゲームのTOPページが画面に映り、六人はスタートボタンをクリックした。プレイ人数を入力した後、アバターを作るところから始まりだ。チャット機能を使用して、六人はそれぞれ話し合う。

木下：【アバターだってさ。やっぱまずはこれだよな。】

北：【なんかめんどいな……。あたしは適当でいいや。】

性別、髪型、顔のパーツ、衣装。自分の好きなようにアバターを設定していく。

小川：【属性？何だ、こんなのもつけられるのか。】

梅本：【マンボウは当然水属性だろう？なんせマンボウだし。】

属性は炎、水、土、雷、風、闇、光の七つ。

山中：【まあ、一般的な属性ですよね。私は……。風にしますね。】

谷中：【じゃあ、僕は雷！チロちゃんは？】

木下：【オレは闇だ！個人的に！】

北：【梅の言いなりってのが気に入らんけど、やっぱり水やな。】

小川：【なら、炎。】

梅本：【なんだよ、俺は土かよ。地味だな……。】

それぞれアバターを作り終わると、モード設定の場面に進む。

山中：【モード設定って……。史実モードとフリーモードとあり

ますね。」

梅本：【あれだろ、ストーリーモードと自由戦闘。】

木下：【はいはい、オレは自由戦闘がいい！】

北：【そこはストーリーモードから始めるべきやろ、普通。】

谷中：【マンボウから普通なんて言葉が聞けるなんてね！。】

小川：【どっちでもいいだろ・・・早くしろよ。】

結局フリーモードを選び、ようやくプロローグのムービーが流れ出す。

「ここは群雄割拠する戦国の世。君達はチームを組み、天下統一を目指す。誰かの傘下につくもよし、他国を攻めて戦国武將を従えるもよし。戦い方は君達次第。君達に付与された強力な能力を駆使して、自由なやり方で天下を手にしてほしい。」

木下：【ふーん、ナルホド。まあいつちよやってみますか。】

北：【あたし、つまらんかったらすぐやめるで。】

谷中：【まあまあ、そんなつれないこと言わないで。】

谷中：【私は、結構期待してるんですが・・・。】

梅本：【ミナちゃん、好きだもんなあ。こーいうゲームは。】

小川：【さっさとしろよ。】

ムービーが終わり、日本地図が画面に現れる。戦闘フィールドを選択せよ、ということらしい。

小川：【どこを攻める？】

北：【まだ始めたばかりやから、あんまり難易度の高い場所は無理やな。】

山中：【じゃあ、桶狭間なんてどうですか？難易度も低いですし。】

梅本：【織田につくか今川につくか選ぶんだな。どうする？】

谷中：【そりゃー当然、織田でしょ？今川はやられ役！】

木下：【オレも同意見。今川でも飛ばしに行こうぜ。】

木下、谷中に続き、他の四人も満場一致で撃破する武将は今川義元に決定した。

木下：【そんじゃー皆さん、プレイ開始といきますか！】

この一言の後、六人はスタートボタンを押した。

～一時間後経過～

木下：【いやー、雑魚と言えど吹っ飛ばすのは気分爽快ですなー。】

北：【レベルはそこそこあがつとるな。そろそろボス戦行ってもいいんちゃうか？】

雑魚敵をサクサクと倒しながら、相変わらずチャット欄で会話を交わす六人。画面内では激しい雨が降っており、現実世界でも天候は同じ、雨が降りしきっている。時折ピカッと光る稲光が、窓から見えた。

さて、いよいよ今川軍総大将、今川義元を倒しに行こうかと息巻いたそのとき、凄まじい雷鳴が天も裂けよとばかりに響き渡り、激しい光が窓を突き破るが如く、部屋の中までも照らし出した。

このとき、もし幾つもの景色を見ることが叶うなら……異常な光景を視界に移すことができただろう。彼ら六人の住まう家のすぐ側に、同時に落ちる六つの巨大な稲妻の姿を。

間近に落ちた雷に驚き、停電よりも早く反射的に目を閉じた六人。

不意に、身体が圧倒的な力によって引き込まれるのを感じた。降ろした瞼を開けるより尚早く、前のめりに倒れ込む。見開いた目に映るのは黒一色。身体が感じるのは落下、それも何かに引っ張られるような急降下だ。ツバメやハヤブサなればいざ知らず、スカイダイビングなんぞたしなまぬ一般人にこの感覚はきつすぎた。夢か現か幻覚か、最早そんなことはどうでもいい。彼らができるのはただ一つ・・・意識のブラックアウトのみ。

とある嵐の日に、六人の大学生が忽然と姿を消した。落雷が消え去ったあと、残るのは煌々と光るパソコンの画面だけ。世にも奇妙な異界奇譚、開幕ベルがどこかで鳴り響く。

開幕（後書き）

とうとう投稿してしまいました・・・。

小説の投稿は初めてで読みづらいところもありますが、どうかぬる
い目で見えてやってください。
楽しんで頂ければ幸いです。

一の嘶 「異世界は存在する、と言った奴にノーベル賞をやれ。」

冷たい水が降ってくる。これは多分雨だろう。というか、何故全身がびしょ濡れなんだ。

「起きろ！ おい、起きろって！」

聞き慣れた声が耳に突き刺さって、彼らは目を開く。

「森……も、森？」

開口一番、真っ先に視界に広がる景色を、木下は口にした。

「森やなあ。ト。口とか。」

どこかズレた感想を言いながら、むくつと身を起こすのは北だ。

「いや、関係ないだろ。ってか少しはパニックれお前ら。」

がくつと脱力したように肩を落とし、梅本は頬を伝う滴を拭う。

「うつわー……びつしよびしょ。僕濡れるの嫌いなんだよねー。」

心底嫌そうに、谷中は地面から立ち上がってシャツの裾を絞った。

「ここ……どこなんでしょうか？ どうして私たち、こんなところに揃っているんでしょう？」

唯一マトモな疑問を口にした山中は、慌てて木の影に入り込む。

「……煙草が……使い物にならない……」

水を吸ってグニャグニャになった箱を、悲壮感漂わせながら小川は呆然と眺めた。

「……揃いも揃って、勝手気ままな連中である。」

辺りは緑一色だが、森というよりは林と言すべきか。激しい雨は止むことを知らず、延々と冷たい滴を落とし続けていた。

「ホントに何なんだ？オレら、みんな家に居た筈だよな？何で、こんなところに？」

雨を避けて、六人は一つの木の根本に身を寄せる。木下の疑問に、他は首を傾げることしかできない。

「私は雷が落ちて・・・びっくりして目を閉じたら、何かに引き込まれて真っ暗な中を落ちるのを感じました。そして、目が覚めたらここに。」

山中の説明に、全員が息を呑んだ。

「俺も、同じだ。ミナちゃんの言った通りの目にあつた。」
梅本が困惑したような顔つきで言い、残りの五人も頷く。

「どういうことや？何で全員、全く同じ目にあつとる？」

「解らないよ・・・。そんなことより、この場所がどこなのかを先にはつきりさせないと。」

谷中はキョロキョロと辺りを見回し、どうにかして手がかりを得ようと試みる。だがどこを見ても、記憶に引つかかるモノは見つからない。

「途方に暮れるってのはこのことだな。」

小川は天を仰ぎ、暗雲あんうんたる空を眺めた。

とりあえず、雨が一段落つくまでここにしようということで、六人はやれやれと木の根本に座り込む。

しかし一息つく暇など、彼らには与えられなかった。運命とは厳

しいものである。

にわかに物音・・・恐らく足音であろう音が聞こえ、誰か来たのかと六人はパツと顔をあげる。

「誰か来たみたいやな。道でも聞くか？」

「はは・・・言葉通じなかったらどうする？」

「そりゃー即死だな。オレ、英語無理だし。」

そんな冗談を言い合いながら、走ってきた数人の男達の姿を見て六人は固まった。

「き・・・貴様ら何者だ！？」

「今川の手の者か！！」

歴史を知る者でなくとも、現れた男達の姿形を示す言葉はすぐに浮かぶだろう。胸から腹を防御する、黒く丸みを帯びたシンプルな鎧。頭に被っているのは、三角の形をした黒い笠状の質素な兜。足にも同色の脚絆きゃはんを巻き、手には長く鋭い槍を握りしめている。

「え・・・？何コレ、大河ドラマの撮影？」

目を丸くして木下は男達を凝視する。

「んなワケあるか。今の大河ドラマってこんな時代設定じゃないだろ。」

梅本が溜息をつきながら言い、男達に近づこうとする。

「撮影中すんません。俺ら、ちょっと迷っちゃったみたいなんですよ。ここどこだか・・・うおあつ！？」

いきなり男の手から繰り出された突きを間一髪でかわして、梅本は仰向けにひっくり返った。

「何を意味のわからんことを！！今川の奴め、このような餓鬼共で俺達を馬鹿にしているのか！！」

男達はギリツと齒を軋ませ、六人を睨みつける。

「ちょ、いきなり何するんですか！？俺達はただ、道を……」
側にいた小川は梅本を助け起こすと、男達に食ってかかる。

「やかましい！！今川に組する輩が、今ここで屍にしてやるわ！！」

男達は槍を構えると、六人の言葉もろくに聞かずに襲いかかってきた。ザクツ、と地面に突き刺さる穂先に、これはヤバイと六人の顔が青ざめる。

「こーいうときって……どーするんやったつけなあ殿下？」
冷や汗を流しつつ、引き攣った笑みを浮かべる北に、同じく似たような表情の谷中が叫び声で答えた。

「逃げるが勝ちって、ことわざにもあるよねっ！！」

そう言うや否や、六人は回れ右して脱兎だつとの如く逃げ出した。

「逃げたぞ！追えっ、追って殺せっ！！」

男達の怒鳴り声をバツクに、血相を変えて必死で逃げる。

「これっ……どういうことでしょう……！？」

「わっかんねえ！！ってかあの槍モノホン！？モノホンなわけ！？」

困惑の極み、というような山中に、若干キレ気味な表情で喚く木下。

「どこまで逃げるんや!？」

「知るか!あのイカれた奴らが諦めるまでだよ!!」

走れメロス、いや走れ考研。止まれば確実にぶつた斬られるのは明白だ。カーブをきり、直線をつ切り、泥を跳ね飛ばし、落ちている枝やその他諸々(もろもろ)を飛び越える。

だが思いっきり年中インドア派、体育何それおいしいの?な連中が、長時間走るといふ行為を続けることは勿論出来ない。

「あつ・・・!？」

「ミナちゃんっ!!!」

ついに、山中が石に足をとられ転んでしまう。悲鳴に近い声で木下は名を呼び、手を伸ばして引き起こそうとするが。

「ここまでだ、死ねっ、今川軍!!!」

無情に振り下ろされる槍の穂先。終わりだ、と誰もがそう思ったとき、それは輝く金色の光と凄まじい衝撃波を以て彼らを救った。

槍を振り下ろした男は勿論、他の男達もまとめて、突然フツ飛んできたナニかに弾き飛ばされ、それはそれは美しい放物線を描いて地面に落下する。

ドシャツ、という音に、呆然とした顔でその場にへたりこむ六人。何が起きたのか。とりあえず今、自分達は生きている。斬られてもいない。当然、血も出ていない。

「・・・な、に?今の・・・」

「と、飛んできた・・・よな?」

やっと口から出てきた声は酷く掠れていて、風邪もひいていないのに喉が痛んだ。

「アレ．．．．．僕が投げた．．．．．石？」

死んだような目で呟く谷中に、他の視線が集中する。

「石．．．．？何で．．．？」

梅本の問いかけに、のろのろと谷中が先ほどまでの状況を説明した。彼女^{いわ}曰く、山中を助けようと近くにあった石を拾って、思い切り投げつけたただだ、ということだ。

「投げる瞬間．．．いきなり、腕が．．．バチバチッて。」

「．．．．で、あんなったのか．．．？」

小川の言葉に、コクンと谷中は頷いた。

「雷ですよね．．．？アレは。」

ふと、山中が何かを思いついたような表情をして、皆に確認をとる。

「多分．．．そうだろ。オレ、ちょっとだけ痺れたし。ほんのかるくだけど。」

間近でアレを見た木下が、うんうんと頷きながら言った。

「雷．．．雷．．．まさか。」

目を驚きに見開き、おもむろに山中は手を前に突き出す。そしてそのまま、目を閉じると眉間に皺を寄せて、何やら念じ始めた。

「な、何やってんの．．．？」

「ちょっと黙っててください。」

「す、すみません．．．。」

ぴしゃりと言われ、梅本は口を閉ざして引っ込んだ。

山中はジツと集中して、一心に何かを念じている。六人は黙ったまま、訝しい表情で山中を見守っていた。

一分、二分、三分・・・やがて、ヒュウヒュウと風の音が聞こえてきた。しかしそんな音を伴う風は吹いていない。どこから聞こえてくるのか？

「うえ！？ミナちゃん、手っ、手が・・・！？」

驚きの声をあげ、木下が山中の掌を指さす。

なんと、そこには小さなつむじ風がくるくると回っているではないか。

「これ、つむじ風だよね？」

谷中は目を丸くして、掌に現れたつむじ風を眺めた。

「ふう・・・やっぱり、こういうことなんですね。」

山中が一息つき、突き出していた手を下ろすと、つむじ風はふわっと消えた。

「こういうことって、何かわかったんか？」

北の問いかけに、山中はにっこり微笑んですかさず答える。

「マンボウさんは、水ですよ。」

「・・・はい？」「」

ハモる間の抜けた声に、山中はお構いなしに不思議な答えを告げていく。

「梅さんは土、王子さんは炎、チロさんは影ですね。」

「待った待った！何のことだ一体。」

小川が困ったような表情で山中に詰め寄る。

「だから、私達が使える力です。殿下さんはさっき見た通り雷。私は風でした。」

山中はぐるつと六人の顔を見回し、更に続ける。

「私達の頭がおかしくなつてなければ、完全にこれは現実です。多分、皆も出来る筈ですよ。」

それぞれ顔を見合せ、恐る恐る山中と同じように手を突き出し、力を込める。
程なくすると。

「で、出たっ!!」

「こりゃ、凄いな……」

小川は指先から炎を、梅本は大地を壁のように立ち上がらせ、北は水の球を掌てのひらに現あらわすことが出来た。

「おい、チロ！何でやらないんだ？何か凄いぞ、これ！」
興奮した面持ちで木下に呼びかける梅本に、木下は眉を寄せて言
った。

「オレが選んだの、影なんだぞ。影ないだろ、今。」
どんよりとした空をつまらなそうに見上げる木下。

「何言つてんだ。影ならあるだろ。」

そう言いながら小川は地面を指差す。

「曇り空つてのは、でっかい影じゃないのか？」

「……………あ、そつか。」

成程、と木下は納得して、掌を下に向けて力を込める。すると、
ザザッと黒い影が持ち上がりその手にまとわりつく。そして影は

うなづねと蠢^{いじ}き、鋭い爪を持った形に姿を変える。

「……うつわー、悪そうな能力だなー。」

「うるっせー梅干っ！！カッコいいじゃねーかよっ！！」

「梅干って言うな！！」

ジト目で言う梅本に、木下は心外だとばかりに噛みつく。

「まあまあ、梅干だか一夜干しだかはどーでもいいって。」

ケラケラと谷中は笑うが、次には表情を一変させて真面目な顔になる。

「これ、僕達がやってたゲームのアバターの設定……だよね？」
それに、皆は深く頷いた。

「ここ、そのゲームの世界……じゃないかな。」

何と奇想天外な言葉だろうか。それが真実だとすれば、何と数奇な運命だろうか。

「つーことは、あのスゲー落雷が引き金ってことか？」

低い声で、木下は唸るように言った。

「夢やったらええけど……現実やな、これは。」

乾いた笑いを浮かべ、疲れたように北は溜め息をついた。

「……これは。」

愕然^{がくぜん}とする彼等そっちのけで、山中は一人、先程フツ飛ばした男達を分析している。

その眩きに、どうしたと集まる五人。

「……おい、この家紋って。」

固まる梅本の言葉を引き継ぎ、小川が答える。男達が身につけている、有名すぎる家紋。その苛烈すぎる性格で恐れられ、戦国一と謳われた騎馬隊を易々と破った男。その異名は、『第六天魔王』。

「織田……信長……？」

見違うわけのない、戦国時代の御三家。

「じゃあ、この場所って……あのステージか？お、桶狭間！？」
木下はそう叫び、再びへたりと座り込む。

「僕達、今川軍だと思われてたんだ……。」
谷中は恐らく足軽であろう、男達に視線を向けた。
そして、天候の変化に気付き慌てて空を見上げる。

「雨が……止んでる？」

「あ、ほんとですね。」

山中も空を見上げ、嬉しそうに言う。それと同時に、何やらドドド、という音が聞こえてきた。

一の嘶 「異世界は存在する、と言った奴にノーベル賞をやれ。」（後書き）

まずは第一話です。

感想なんか頂ければ凄く嬉しいです。

二の嘶 「戦場体験は初心者です、ハイ皆様と一緒に！」

「これ、蹄鉄の音だ……！」

「隠れる……！」

サツと血の気が引くのを感じ、急いで六人は木の影に身を潜める。息を殺してそつと様子を伺い……言葉を失った。

雨の湿気が一瞬で消えるような、^{はき}覇気。

黒い馬に乗り、黒い甲冑と赤紫のマントをその身に纏^{まと}った男の姿。刃物のように鋭い切れ長の目と、口元に浮かべる不敵な笑み。

殺気や覇気なんてものに全く無縁の、ド素人そのものである六人でも男のオーラに吞まれた。

「お、織田……信長だね、あの人……。」

「織田瓜の家門背負った騎馬隊のトップ張ってんだから、そんなんだろ。」

声を潜めて、六人はヒソヒソと話し合った。

出来るなら、あんな恐ろしく禍々（まがまが）しい雰囲気をつつさげて登場した魔王様に見つかりたくはないものだ。見つかったら、確実に天国の階段を一気に駆け上ること間違いなし。

固唾を飲んで通過を見守るが、そうは問屋が下ろさなかった。道のちようと真ん中で信長は急に手綱を引き絞り、騎馬隊は急停止した。

「しまった……」

小川が戦慄く声で呟く。

「アレ……隠してない。」

アレ、とは谷中が倒した織田軍の足軽だ。ヒツ、という小さな悲鳴が喉から洩れる。同時に、信長の低い笑い声も聞こえてきた。

「そこにいるのは何者だ？」

たった一言。たった一睨み。しかしそれだけで六人の背筋は凍り付く。

「な、何でバレんの！？」

「知るかよ……！」

ガクブルと震える身体を寄せ合って、六人は硬直した。そこに追いつ打ちをかけるように、信長の声が響く。

「答えぬか。ならばそれもいいだろう。」

そう言い終わらぬうちに風を切る音聞こえ、次の瞬間一本の矢が、六人が隠れている木の幹にガツツ、と突き刺さった。

「………ツ！？！？」

恐怖にあげる筈の悲鳴もあがらず、六人はますます身を寄せ合う。

「そこから出てこれば……これ以上は何もせん。出てこぬというなら、そうだな……次は何本撃ち込んでほしい？」

一同、心の中で呟く。

（あ、マジに死んだ………。）

出て行って見逃してもらうか、抵抗して全身ハリネズミのようになって惨めにくたばるか、二つに一つ。出るしかないだろう、ああそうだとも、でなけりゃ死ぬ。

「………い、行こう。」

「う、うん……。」

膝がおかしくなったんじゃないのかと思うくらい、ガクガクと震える。身体 of 全ては氷のように冷え切り、恐怖に戦慄せんりつしている。動かぬ足を叱咤しったして、つまずきそうになりながらも六人は隠れていた場所から歩み出た。

「……ほお、餓鬼共か。」

炎のような目が六人を一人ずつ眺め、信長はにんまりと笑った。

「随分とけつたいな格好をしている。貴様らがアレを使い物にならなくしたのか？」

信長は谷中にやられてのびている男達を一瞥して、そう問いかけた。

「……あ、あの、それはですね……。」

目は口ほどに物を言う、という言葉がこの時ばかりは心の底から憎らしい。泳ぐ目に拳動不審になる態度。

信長は凶星か、と頷き、次の瞬間いきなり黒い刀身の大刀を抜き放って六人に向ける。

「答える。貴様らは今川の間人か？」

声なく高速で首を横に振る六人に、信長は火のような問いかけを続けた。

「ならばどこの者だ？」

それに、半泣きで木下が絞り出すような声で答えた。

「どこの……軍、にも……属して、ません……ただの、通りすがり……。」

「戦場を通り抜けようとするうつけなぞ、聞いたこともないわ。」

すかさず言い返され、言葉に詰まる六人。

「やはり、こやつら怪しすぎます。始末してしましましょう。」
家来であろう男の一人がそう言い、弓兵が一斉に弓を引き絞り、矢を向けた。終わりだ、絶対終わりだ、と六人そう思い、観念して目を閉じた。しかし、思いもよらぬ信長の言葉が弓兵に矢を降ろさせる。

「止めよ。使い物にならなくなればどうする。」
「つ、使い物……?」

ぴしゃりと言う信長に、どういうことだと閉じていた目を開けた。そこには興味深そうな目で、六人をじつと見つめる信長がいる。

「貴様らがのした彼奴等……いくら弱卒といえど、我が織田軍の一部。貴様等のような餓鬼共を殺すなど、朝飯前よ。しかしアレを倒したとなると、貴様等ただの餓鬼共ではないな。ついてこい、面白いモノを拾えたわ。」

信長は目で合図を送ると、いきなり六人は馬から下りてきた兵士に腕を捕まれ、馬上に無理矢理押し上げられる。

「なっ、ええ!? 何コレっ!？」

「待つて下さい、私達はその……!？」

慌てて制止を求めるが、信長はどこ吹く風とでもいうような表情だ。

そして行くぞ、と一言。

「ヤダヤダヤダっ、馬はイヤアアアアッ!!!!!!!!!!」

六人の悲鳴が後を引いて、騎馬隊は無慈悲に走り去った。

「・・・・・・・・う・・・・・・・・うおえ・・・・・・・・」

「気持ち悪い・・・・・・・・吐く・・・・・・・・」

「死ぬって・・・・・・・・コレ死ぬって・・・・・・・・」

馬上で飛んだり跳ねたりして元気でいられる程、六人は遅くない。文字通り死ぬほど荒々しい馬ドライブをたっぷり堪能して、車酔いならぬ馬酔いを絶好調で味わっている。

「貧弱だな。どこの世間知らずだ。」

地面に這いつくばり、うえーと情けなくバテている六人を信長や家来達は半ば呆れたように見ている。

「さて・・・・・・・・間抜けな今川軍は未だ暢氣のんきに休んでおるわ。おい、貴様等！今から今川軍に奇襲をかける。貴様等も手伝え。」

「・・・・・・・・はい？」

「同じ事は二度も言わん。貴様等が潰した部下共の代わりだ、存分に働け。」

ピタリと六人は黙り込んだ。

「そんな・・・・・・・・！？僕達、そんなこと出来ません！！」

「冗談じゃない！何で俺達がそんなこと！？」

「無理ですよ！！戦場で私達は足手まといです！！」

次の瞬間、口々に無理、嫌だ、という言葉が飛び交う。

「ならば今ここで殺してやろう。前に出る。」

血の気の引くような声で、信長は大刀を抜く。その目は絶対零度の冷たさで、六人を貫いた。

「俺は役に立たぬ塵などいらん。さあ、好きな方を選ばせてやる

う。俺に従うか、ここで屍と化すか。」

まさに前門の虎、後門の狼。背水の陣にて、四面楚歌の絶対絶命。こんな極論を突き出されて、目の前が暗くならない人間がどこにいますか。

スライスされて死ぬのは御免だが、人殺しの片棒を担ぐのも御免だ。しかし悩む時間はどこにもあらず、逃げだそうにも隙すら見つからない。

「腹をくくるしか……ないみたいだ。」

呻くように小川は言い。

「まさか、命なんかかける目にあうとは……。」
梅本は歯を食いしばる。

「弓矢に……気をつけてくださいね。」

山中は震える声で囁くように。

「せめて、誰も殺さずにな。」

北はいつものボケた表情を消し去り。

「能力があるつてのが、せめてもの救いだね。」

谷中は手を強く握りしめ。

「勝つたら……美味いもん、一杯食わせてもらおうぜ。」

木下は精一杯の虚勢を張って。

六つの顔が一斉に信長を見つめて、コクリと一つ頷いた。

「話は纏まったようだな。馬に乗れ。」

死刑宣告のように、信長はそう命じた。

「全軍……突撃せよ!!!!!!」

応、と勇ましい声上がり、騎馬隊は激しい蹄鉄の音と地響きをたてて、下方に見える今川軍の陣へと突っこんでいった。

「お、織田軍の奇襲だああああっ!!!!!!」

「皆つ、出てこいつ！！！！奇襲だぞつ！！！」

奇襲といえども、攻撃が全くないとはいえない。空を切り、何本もの矢がビュンビュンと飛んでくる。それが頬をかすめ、生きた心地がしない。

「・・・・・・・・ツ！？！？！？」

声なき絶叫をあげながら、六人は目の前の武將の背にしがみついた。動けるわけがない。振り落とされないようにするだけで精一杯だ。そこに、雷のような声で信長の激励が飛ぶ。

「どうした、何故戦わない！？ 戦わなければ死ぬぞ。貴様等は木偶の坊か？俺の部下を倒したようにやってみせろ！！！」

あまりにも勝手な言い分に、ついに木下がぶち切れた。

「うるっせえんだよ！！ノブナガだかノザワナだか知らねえけど、無茶なことばかり言うな、この腐れ魔王っ！！！！！」

そう絶叫するやいなや、黒い影が木下の手にまとわりつき、いきなり槍のように伸びて今川の兵士を薙ぎ払った。

「うわあっ、何か伸びた！？」

仰天する木下に、信長はニヤツと笑う。

「チロちゃん、今のどうやって出したの！？」

「わかんねえ！何かムカついたら急に・・・・とりあえずムカつけ！」

「アホか！どうやってムカつけてんだ！？」

谷中に答える木下だが、要領を得ていない。文句を言おうとする梅本に、北の一言が突き刺さった。

「そーいや、この前梅がナンパにつきあったこと……彼女に言っただわ。」

「テムエふざけんなあああ！?!?言うなって言っただろお
おおおお！?!?」

その途端、大地が壁のように立ち上がって敵の侵攻を阻んだ。

「心の鬱憤をありつたけ吐き出せば良いんですね。」

山中はそう呟くと全身に力を込めた。

「就活なんか……大ッ嫌いですっ！……!」

珍しく大声を張り上げて、誰もが思っていることを叫ぶ。

「カンボジアなんか二度と行きたくねえええっ！……!」

「不景氣のアホンダラ、デフレスパイラルなんかとっとくたば
れ！……!」

「色々やることありすぎてめんどいわあっ！……!」

この状況でよくもまあ、そんな絶叫が放てるものである。寧ろこの世界に対する文句はどこにもないのか。

とりあえず攻撃のやり方が解った六人が次々に喚き散らすと、火の玉が、水球が、雷が、つむじ風が、一斉にわき上がり今川の兵士達を攻撃する。しかし威力や大きさは小さく、あまり効果はないように思えた。

「あれは……神憑きだ!!」

「なんと、あのような子供がか?」

ざわざわと、敵味方の区別なくあちこちで驚きの声があがる。

「カミツキって何……?」

「知るか、ボケ。」

「人間じゃないね……僕達。」

「し、死なずにすみそう・・・」

常軌を逸脱した出来事に、何度目かわからない茫然自失状態に陥る。

ところが、いきなり高々と笑い出した信長の声に、我に還った。

「面白い！やはり貴様等、普通ではなかったか。神憑きだったとは本当に良い拾い物をしたものよ！！」

そうこう言っている間に、今川軍の本陣深くまで侵入する織田軍。もう本陣は完全に包囲されていた。ようやく止まった騎馬隊に、深々と安堵の息をつく六人。

「そ、そ、それ以上まろに近づくでない！！こ、この下賤の輩めっ！！」

引き攣った情けない声が聞こえて、馬から下りた六人はそちらに顔をむける。

「うわ・・・超・まろだよアレ。」

「生で見ると・・・どうも気色悪いな。」

「ダッセエ。公家つて、オレ嫌いだな。」

「幽霊みたいですよ。あ、それともオカメでしょうか。」

「あれぞ、変態！やな。」

「何か、桶みたいな体型だね。かつこ悪いかも。」

「ふむ・・・やはりそう思うか。俺も同意見だ。」

好き勝手な感想を、信長も含み口々に言い合う。今川義元の姿形は、イメージ通りの公家スタイルだ。白塗りの顔に、額の上部につけられた眉墨、やたら煌びやかな衣装。ホントにコイツ戦う気があるのかと問いただしたくなるような格好だ。

「い、いきなりまるを見て、言うことがそれか！？ 無礼すぎるでおじやるぞ！？」

初対面なのに思いつきり失礼な感想を述べられ、もったもなことを義元は叫んだ。

「やはり公家とやらは脆弱やこつちやへすぎていかな。貴様等が調子に乗るにはこの乱世……少々厳しいぞ。」

信長の静かだが冷たい声に、義元は冷や汗を流しながらも豪奢な弓を構えた。

「そちのようなうつけに……まろは屈せぬぞ……！」

豪、と風を纏った矢が放たれ信長に飛ぶが、彼は冷たく一笑して抜き払った大刀を一振りした。

途端に黒味を帯びた炎が刀身に宿り、義元の矢は炎と刃に軽く打ち落とされた。

「……口ほどにもない。興も冷めたわ、公家。」

チツと舌打ちし、今度は六人に大刀を向ける。

「特別にアレとやり合わせてやろう。ありがたく」

「「おもわねーよっ……！」」

またまたとんでもないことを言い出す信長に、素早く六人はつつこんだ。

「ほう、ならば死」

「すいまっせんでした！？全力で殺らせて頂きまっす……！」

そしてあっさり玉砕する。半ば泣き顔で六人はびしつと敬礼し、織田軍から矢の嵐が来ないうちに義元の前に立ちはだかる。

「な、なんじゃそなたらは。」

「お前の敵だこんチクショー。」

グスン、と涙しながら木下が吐き捨てるように言った。

「・・・・・・・・六対一は卑怯だと思つのですが。」

「某ファイナルなファンタジーゲームでも同じことと言えるか？」

「・・・・・・・・そうですね。」

山中と梅本はそう言つて、やれやれと肩をすくめた。

「何を悠長に話している。餓鬼共、さつさと仕留めろ。」

いつもの凶悪そうな笑みを浮かべて、信長は顎をしゃくつてみせる。

「ほんつと、いつそ清々しいまでの魔王つぷりやな。」

ああ、忌々しいと北は唸る。

じりじりと義元を包囲した輪は狭まつていく。

「お・・・おのれ・・・こ、このまろが・・・このまろが、
斯^{かよう}様な蛮族に討ち取られてたまるかああああっ！！！！！」

「いきなりキレたよこいつ!？」

耳障りな声で絶叫した義元、そして突如現れた幾つもの竜巻。

そのでかさに、ざざつと六人の顔からは血の気が引く。

「ヤバイよな、ヤバイだろ、ヤバイに決まつてる!!」

標的は当然、この六人。

「また逃げんのかよおおおお!!?!!?」

体力と相談して決めたいが、そういうわけにもいかない。助けを
求めるように、信長とその他大勢に視線を送るが。

「・・・・・・・・打つ手なし、というときだけ助けてやる。貴様等も
手出しするな。」

「仰せのままにつ!」

鮮やかにスルーされた。

「この人でなし！ バカ！ 極悪人！ いぶし銀！」

「最後のは個人的に褒めてるだろ！？」

竜巻に追いかけて回されながら、ギャーギャーと喚く六人。しかし誰も助けに來ない。というより、皆興味深そうに彼らを眺めている。

「竜巻の作り方は！？」

「三分じゃーできんわな。」

「まずはコレをなんとかするのが先だろうが！？」

爆発するような音、木霊するのは阿鼻叫喚。

試しに谷中が雷を放ってみるが、威力が弱く巻き込まれてしまう。さすがにゲームと現実は凄まじく異なり、荒れ狂う竜巻に為す術もなく倒れてしまうのだろうか。

あたふたと駆けずりまわる六人を、冷静に觀察する信長。それに家來の一人が声をかける。

「よろしいんツスカ？」

「彼奴等は普通の神憑きとは違う……そうは思わんか、またひ又左？」

逆立った髪は、磨き上げた鋼の色。浅黒い肌をしたその身体は、信長に負けじとがっしりしている。大きな手が握るのは、これまた持ち主にふさわしい厳つい槍。

信長の隣に立った『槍の又左』こと前田 利家は微かに頷いた。

「そりゃ、確かに妙な雰囲気は感じますがねえ……見たところ、どこにでもいそうな餓鬼じゃないツスカ。あれじゃ、神憑きでもいっつまでもつか。」

胡散臭げな目つきで、利家は義元とやり合う六人を眺めた。それに信長は愉快そうに笑うと利家に言い放つ。

「たわけ。だから貴様はいつまでも俺に名を呼ばれんだ。」

「すんませんねえ、いつまでも『又左』で。」

片や期待の眼差しを、片や冷めた眼差しを送りつつ、二人は六人の戦いを観戦し続けた。

二の壱 「戦場体験は初心者です、ハイ皆様と一緒に！」（後書き）

やっと第二話出来ました・・・。
疲れました・・・。

三の嘶 「能ある鷹の爪は、無理矢理引きずり出せ。」

魔王とその家来が彼等の戦いをのんびり観戦しているとは露知らず、命の瀬戸際に立たされている六人。

「私…疲れて、きました……」

「俺…も…駄目だ…」

小柄な見た目通り、真つ先に電池が切れかかってくる木下と山中。

「へたばると……死ぬぞ。」

「そーいう、お前こそ……!!」

よろめく小川の腕を掴んで支える梅本。

「こりや、ちよつとマズイわ……う!？」

「マンボウ!？」

足を滑らせ、バランスを崩した北が転びかける。

その拍子に、北の着ていたジャンパーから飛び出る何か。

「あああゝ!?!あたしの携帯っ!？」

途端、北の絶叫が響き渡る。

「バツカ、んなもんほつとけ!!」

「アホ!みすみすあたしのドラ。エデータ捨てられるかあ!？」

小川の叫びに同じく絶叫で答え、北は落ちた携帯に手を伸ばす。

寸でのところで携帯を掴み捕り、いそいそと服の裾で拭い取った。

そのとき、指先が当たったのか携帯がパカツと開く。

画面を覗きこんだ北は、思わず目が点になる。

「何やコレ……!？」

そこには、正に棚からぼた餅と言える情報が映っていた。

『プレイヤー：北 修子

使用可能技：水流弾、雨喚び

友軍

1：谷中 若菜

使用可能技：電磁砲、雷撃

2：木下 千尋

使用可能技：影爪、影盾

3：梅本 祐樹

使用可能技：地壁、岩石落

4：山中 美奈

使用可能技：旋風、風喚び

5：小川 健

使用可能技：発火弾、火炎之鞭
』

なんと、自分達の情報である。何故こんなことが携帯に映っているのだろう。

「皆！携帯持つてるかあ！？」

これは伝えなければ、と北は竜巻から逃げまくる仲間達に呼び掛けた。

「何なんだよお前こんな時に！？」

「マンボウのクセにホイミとか唱えるボケ！！」

「後でテメーの携帯逆パカするぞコラァ！！」

……完全に逆ギレしている。

「いや、あたしケアルの方が好きやから。」

「うつせえ黙れマンボウ!!!」

非常時にもボケとツツコミを忘れない、それが考研。

「って、ちやうね。お前ら携帯持つてるか？」

いきなりの質問に、荒れ狂う風をかいぐる彼等は困惑する。

「そんなもん、見てる暇なんかねえだろ!？」

風の音に負けじと、木下は怒鳴った。

「ええから見てみ!!使えるで、これは。」

珍しく強い調子で言う北に、皆は渋々とポケットに手を伸ばし、携帯を掴み出す。

それを開き、ハッと顔付きを変える。

「使用可能な技って……え、ポ。モン？」

「あんな、わかったところで」

「水流弾ツ!!!」

梅本と谷中の文句を遮り、北の叫びが響いて、バスケットボール程の水球が爆音をたてて竜巻に突っ込んだ。

水球が炸裂すると、その威力絶大、竜巻が弾けるようにして消える。

「マジで……?」

圧倒的な威力で竜巻を押し伏せた北に、愕然とする今川と仲間達。

「……気付きよったわ。」

「スゲエ……何スカ、アレ。」

北の放った水球の威力に、にんまりと笑う信長。

利家は今までの冷めた目から一変、食い入るような視線になる。

「何か、名前呼んだらやっともに出たわ。」

あはは、と北は暢気に笑ってみせる。

「名前……名前、か！」

何かを思い付いたように、木下の目がキラツと光る。そして深く息を吸い込むと気合い一発、腹の底から声を出した。

「かあげづめええっ……！」

その呼び声に呼応して木下の足元が波打ち、グウツと黒い影が身を起こした。

そして影は木下の両手にまわりつき、龍の手のように姿を形作る。

「伸ばしてっ！」

威勢のいい指示通り、両手の影が竜巻に向かって飴のように伸びる。

「ズバツと！引き裂く！」

言葉通り、竜巻は鋭く変化した影の刃に引き裂かれて消えていく。

「やった！やっぱり、名前が鍵だぜこれ！」

木下は飛び上がって喜ぶ。

「説明しろよ、意味がわからん！」

苛々と小川は説明を求めた。

「名前つてのはさ、存在を固定するための呪なんだ。今までのオレ達だと、感情の高ぶりだけで攻撃が出ただろ？それだと本当の威力は発揮されなかったよな。」

木下はキツ、と義元を睨み付けた。

「ふさわしい名前を与えて初めて、オレ達の力は固定されるんだ。名前は凄く大事なモンだって、陰陽師でいった気がする!!」

「結局情報源そっちかよ!？」

しかしその話は否定できない。現に木下の言う通り、実証されたのだから。

「ま、とりあえず反撃出来るってことだよね?」

逃げ回る足を止めて、六人は呼吸を整える。

ガラツと雰囲気の変わった彼等を、義元は青ざめた顔で見詰めた。試合開始のゴングは、これから初めて鳴るのだ。

今までよくも好き勝手やってくれたな、とでも言いたげに、邪悪な笑みを浮かべてにじりよっていく。

「ひい……か、風切り羽根ツ!!」

豪華な弓から放たれた矢が、六つに分かれて目標に唸りをあげて飛ぶ。

「地壁、×6!!」

梅本がダン、と片足で地面を踏み鳴らすと、六人それぞれの前に大地から壁が立ち上がる。

まともに喰らえば切り傷だけではすまない攻撃だが、その壁は見事に矢を防ぎ、尚且ビクともしていない。

「おお、脆くなかった!!」

そして感心する梅本。

「せーのっ、雷撃ツ!!」

続く第二波、地壁を貫き、バリバリと雷が今川に向かって牙を剥く。

「このようなもの……！消し飛ばすおじゃ……！」
今までの非力な攻撃とは違う、とやっとなかったのだろう、義元の顔付きが変わる。

ギョルギョルと風が圧縮され、襲ってくる雷へ砲弾の如く発射した。雷と風の塊がぶち当たり、互いに弾けて強風が吹き荒れる。

「集まって……旋風です！」

あまりの強さに飛ばされそうになりながらも、山中の言葉に反応して強風が集まっていく。

総勢十個のつむじ風が彼女の回りを飛び交い、更に小川が加勢する。

「発火弾……。」

炎の玉が風と混ざりあい、紅のつむじ風と変化する。高速で回る紅い風、一声放てば、全てのつむじ風は一気に義元を攻撃するだろう。

しかし公家だろうと何だろうと、総大将を名乗るからにはみすみす敗北するわけにはいかない。

「させぬおじゃ……！」

つがえた矢に、竜巻が蛇のように絡み付いた。

「撃たせるか今川おじゃ元……！」

「はよ終わらせたいねん、邪魔すんなや……！！」

させるかとはかりに木下の影が弓を押さえ付け、北の水流が義元の顔めがけてバシャバシャとかけられる。苦し紛れに放たれた竜巻が暴れるが。

「ダメだよ、危ないでしょ？」

笑顔で谷中が次々に雷撃で撃ち落とした。

「「発破ーっ！！！！」」

動きと視界を封じられ、ジタバタする義元をばっちりロックオンして、山中と小川が声を揃えて真っ赤なつむじ風を解き放った。

「「たーまやーっ！！！！」」

炎と爆風がモロに直撃し、妙にか細い悲鳴をあげて、義元の姿はかき消された。

勝負あり。考研・初陣……見事な勝利である。

三の嘶 「能ある鷹の爪は、無理矢理引きずり出せ。」 (後書き)

桶狭間は一応一段落です。

やっぱり戦闘というものは、文章で書くと物凄く難しいですね。
誤字とか多くてすみません。

四の噺 「お話ししましょ、そーしましょ。 前編なんです。」

義元をよつてたかつて倒すと、六人を急激な疲れが襲った。
その余りの疲労感に、立っていることすらままならない。

「つ…かれた……」

「立つ…てらんない…」

ふらつと倒れる背中を、力強い手が支える。

「よくやったな。」

「こんなちつちえのに、大したもんだ。」

「後は信長様に任せな。」

いつの間に近くまできていたのか、織田軍の兵士達が次々に六人を
受け止め、感心したように言う。

「まあまあだな……だが、ド素人にしては上出来といったところか。」

ニヤリと笑いながら歩み出てきた信長に、もう返す言葉すら出ない。

「さて、公家よ。 貴様の敗けだ。」

黒焦げになって、パツタリ倒れてる義元は、よろよろと起き上がる。

「貴様の獲物……名は『青柳』と言ったか。この織田 信長が確かに破壊した。」

義元の傍らに、焼け焦げ、砕け散った弓が転がっていた。

「……まるの、青柳が……」

義元の震える手が、残骸となった弓に伸び、そのままぎゅっと抱き締める。

「貴様の身柄……拘束させてもらうぞ。」

信長がそう言い、サツと身を翻した。

入れ代わりに、兵士が義元の肩と腕を掴んで引き上げる。連れられていく義元を虚ろな目で見送り、六人の意識は完全に落ちた。

「お、桶狭間……白塗り妖怪……！」

「魔王に……喰い殺される……」

「ハリネズミ……死ぬ……」

うんうんと唸る六人の顔を見ながら、利家は溜め息をつく。

あの後、引っくり返って気絶してしまった彼等を抱えて、城まで帰る途中の織田軍。

だが、いつまでも気絶されていては、正直邪魔である。

なので、彼等が起きるまで小休憩をはさむことにしたのだ。

「どうだ、起きたか？」

「寧ろこのまま死にそうなツラしてるッス。」

瓢箪に入った、酒だか水だかを飲みながら様子を見にきた信長に、利家は退屈そうに六人を指差す。

「……どけ、又左。俺が直々に起こしてやろう。」

「ちょ、待つて下さいって！！こんなになされてんのに、信長様が出ていったら今度こそ永眠しちまいますよ！？」

「貴様俺を何だと思ってる……？」

慌てて信長のマントを掴んで引き止める利家にムカついたのか、信長は眉間に皺を寄せる。

「さすがの俺でも、目を開けて最初に見るのが魔王様ってのはちょっと……」

「人相の悪さなら、貴様も俺と張り合えるだろうが。」

「信長様ほど、人間離れた強面じゃない自信はあるッス。」

信長と利家が下らない話をしていると。

「うう………ん？」

間延びした呻き声がして、パカッと谷中の目が開いた。

ムクツと身を起こし、ぼうつとした顔で、信長と利家の方に目を向け、そして。

「ひゃあああああっ！？！？何かいるうつうう！？！？」

文字通り飛び上がって悲鳴をあげ、連鎖反応を起こしたように残る五人も跳ね起き、口々に悲鳴をあげる。

のわーだの、ひょーだの、パニックを起こす六人を、利家は必死になだめて落ち着かせようとする。

「あゝ、大丈夫だつて、な？いくら信長様だつて、人捕って喰ったことはねえから、多分……多分な。」

「確実にないわー！」

ゴスツと信長の拳骨が利家の頭にめり込む。

「ツテエ！？何するんツスかあんた！？人がせつかくあやしてやつてんのに！？」

「喧しいわ、この犬又左が！！黙っておれば下らんことばかり言いおつて！！」

額に青筋を浮かべて信長が怒鳴る。
今度は信長と利家の言い争いになり、それに引き換え段々と六人は落ち着いてくる。

「あれ……誰だろ？」

「犬又左つて言つてたね。」

「もしかして、あの日サロでブリーチな兄ちゃんつてさ……」

「まさか……前田 利家？」

信じられん、と六人は目を剥いた。

確かに前田 利家の幼名は犬千代、そして槍の又左と呼ばれている。

「率直な感想言つていいかな？」

「……なんなら八モるか？」

「おーけー。」

それぞれ顔を見合わせて一言。

「「「チンピラヤンキー。」」」

ブレずにしっかりハモれた。

「誰がチンピラヤンキーだ誰があ!？」

「お、食い付いた。」

利家がグリーンと振り向き、大声で吠える。

「意味がわかったんですか？」

目を丸くして問いかけた山中に、利家はフン、と鼻で笑った。

「何となく失礼な言葉だと思ったただけだ!！」

……と、まあゴタゴタは置いて。

「え…と。改めまして、お初にお目にかかります…?」

こんな時だけ、部長だからお前が言えと背中をつつかれた小川が、
恐る恐る頭を下げた。

それに続けと全員も一礼する。

「もうお前達は知ってるみたいだが、一応名乗っておく。俺は前田
利家、こちらは織田信長様だ。」

さらりとした自己紹介を済ませて、利家は軽く身を引いた。

「俺は、小川 健といいます。」

「梅本 佑樹です、初めまして。」

「あたしは北 修子。」

「僕は、谷中 若菜です。」

「私は山中 美那と申します。」

「オレは、木下 千尋ですっ！」

それぞれ名前を言い、もう一度頭を下げた。

「さて、まずは褒めてやろう。今川との戦い……未熟だったが、よくやったな。」

微かだが信長の目元が柔らかくなり、見る者が見れば満足そうな笑みが浮かんでいることに気付くだろう。

「利家さん、こいつ偽者？」

やはりそうなるのがお約束だ。

疑うような目で、六人は信長を見る。

「貴様等……削ぎ落とされたいか？」

「『ゴメンナサイ。』」

どす黒いオーラを漂わせる信長に、一斉に土下座する六人。

「で……貴様等は一体何者だ？何処から来た？」

気を取りなおして、信長は底光りする目で六人を探るように見た。

「お前達が気絶してる間に、持ち物を探してみたら……こんな妙な力
ラクリを見つけてな。」

利家の手から、六つの携帯がそれぞれ放り投げられる。

「こんなものはこの俺も見ることがない。それにだ……何故こいつ
が前田 利家だとわかった？」

信長はズズイツと身を乗り出し、彼等を見据える。

利家が正式に名乗ったのはついさっき。

「俺の幼名を、お前達みたいな餓鬼が知る筈がないしな。」

利家もズズイツと身を乗り出す。

そして二人は声を揃えて脅すように言った。

「「洗いざらい吐け……いいな？」」

魔王とその手先に齒向かう度胸は、多分ない。

「別の世界……か。」

「こりゃまた、予想の斜め上をいきますねえ……」

これまでの経緯をかいつまんで話すと、感心したように二人はほうと息を吐いた。

「その、何だ？この世界は、ばられるわあるど、っていう世界なんだな。お前達からすると。」

利家が言い辛そうに言葉を紡ぎ、六人はそれに頷いた。

四の壱 「お話しましょ、そーしましょ。 前編なんです。」（後書き）

今回は話が長くなりそうなので二つに分けました。

突然ですけど、場面場面にあつた音楽を聞きながら書くと凄く進みますよね。

みんなのテーマソングとか決めたいな・・・って、気が早いですね。

五の壱 「お話しましょ、そーしましょ。 後編なんです。」

「ばられるわあるど…か。ならば、多少の違いは生じるにせよ、貴様等は未来を知っているということになるのだな。」

信長は思慮深い顔になり、何かを考え込んだ。それに、ギクツと六人の肩が跳ねる。

もしかして、自分達を利用するつもりか、と六人は身構えた。

「……案ずるな。俺は、先の知れた未来など望まん。」

しかし、彼等の思いを見透かしたように、信長は笑ってみせた。その笑みの渋さに、しばし見惚れる。

「ですがねえ、世の中こういう人ばかりってワケじゃねえッスよ。」

利家の言葉に、信長は頷いた。

「厄介な人間も多いからな。気をつけよ、あまり言い触らすものではあるまい。」

たとえ異世界と言えど、この世界は六人の住まう世界の歴史をモデルにしたものだ。

「あの…今度は俺達から質問してもよろしいですか？」

小川が遠慮がちに口を開いた。

「いいだろう、答えられるものは全て答えてやる……又左がな。」

「って、何で俺ツスカ!？」

ビシッと利家からつつこみが入るが、信長は偉そうに腕を組んで一言。

「そんな面倒なことは、家臣である貴様がやれ。」

「聞かれたのはあんたでしょうが!!」

「……給料削るぞ。」

究極の脅しに、あえなく利家は撃沈した。

「わかりましたよ、やりやいいんでしょ!!」

ああもう!と投げやりに言い捨てて、利家は六人に向き直った。

「で、何だよ。」

苦笑いしつつも、梅本が最初の質問をする。

「カミツキって俺達の事を呼んでましたけど、あれは何の事ですか？」

「お前達が使える能力のことだ。ちなみに信長様は炎、俺は水だぞ。」

利家はそう言って、掌に水球を出してみせた。

「じゃあ今川は風なんやな。大概の人が持ってるの?」

次は北が尋ねる。

「いいや、神憑きは普通の人間にはなかなか宿るモンじゃないぞ。」

よつこらせ、と利家は座り直して、更に詳しく説明を始めた。

「神憑きには『位』ってモンがあつてな。上から「将位」、「官位」、「兵位」の順位がつけられてる。「将位」は『率いる資格がある者』しかなることが出来ない位だ。「官位」は『将を護り、支える資格のある者』が、「兵位」が『二つの位の手足となる者』って具合にな。」

懷から帳面を取り出すと、そこに小筆で位の名を書き記して見せ、六人は帳面を覗き込んだ。

「それじゃあ、大名で殿様な人は「将位」、軍師や配下の武將は「官位」ってことになるんだ。「兵位」は……文字通り、歩兵や弓兵？」

「下位だと例外でな、わりと兵の中にもいるぜ。」

谷中がへエ、と感心したように相槌を打つ。

「はいはい、次はオレ。何で今川を討ち取らなかったんですか？」

木下が手を上げ、不思議そうに尋ねた。

そう、疑問はそこだ。信長は義元の弓を壊しただけで、その場で首をとることはなかった。だが利家は怪訝そうな顔で首を傾げる。

「何言つてんだ？ちゃんと討ち取ったじゃねえか。」

「…もう、首を跳ねてしまわれたんですか？」

少し悲し気な顔で山中が問う。そこに信長が口を挟んだ。

「首などとして、何に使うのだ？」

「……………あれ？」

間。

「成程、首を塩漬けにするのか。まるで漬物だな。」

「でも後始末大変そーッスね。夏場とか。」

負けた武将は首を落とされるのだと説明された信長と利家。というか、漬物だとか夏場大変だとかそういう問題ではないような気がする。

「こつちだと、神器を破壊することが「討ち取る」ってことになるんだ。」

神器と聞き、いきなり北と木下が口を開いた。

「洗濯機、テレビ、冷蔵庫やっとな。
やたのがみ くさなぎのつるぎ やさかにのまがたま

「八咫鏡、草薙剣、八咫瓊勾玉だぞ！」

「どうでもいいから黙ってる！」

すっぱーん、と梅本が二人の頭をしばき倒した。

「すみません、気にせず続けて下さい。」

頭を押さえて呻く二人を白い目で見やり、小川は溜め息をつきつつ先を促した。

「お、おう。神器ってのは…まあ簡単に言えば、神憑きが使う武器だ。でもタダの武器じゃねえ。己の分身……魂の片割れみたいなモンだ。」

急に利家は表情を変え、自分の左胸に手を当てる。

「それを壊されるってことが、どれ程デケエ事か……考えただけでも、心の臓が抉られるような感覚だぜ。しかもテメエにあう神器は、一生に一つしか得ることが出来ない。」

六人にはその感覚がまだわからないが……利家の言葉は岩のような重みを含んでいることだけはわかった。

「ですが、他の武器で戦うことも出来るのでは？」

山中がそう言うが、利家は首を振った。

「無理だな。自分にあう神器じゃないと、どんな名器でも神憑きの力に耐えられず壊れちまうんだ。」

そこで、利家は六人を見る。

「ちなみに、お前達も神器はあるぞ。鍛冶屋で造ってもらえるかな。」

「近々必要になってくるやろうな。あたしらが帰れるまで。」

ゲームのクリアが、元の世界に戻る条件ではないのかと六人は考えている。それはすなわち、戦いに身を投じなければならないということだ。

「武器だけではないぞ。戦い方も貴様等に叩き込んでやろう……フフフフ。」

とりあえずは、魔王様は協力してくれることになった……のだろう。

信長の黒い笑いに、ムンクのような顔で後退る六人。それに哀れな視線を送る利家。

「さて、話は一度終わりだ。……先に行っている。」

脱け殻のようになりながら、フラフラッと漂うように歩いていく六人を見送り、利家は声を潜めて信長に言う。

「……あいつら、鍛え上げれば化けますね。」

「曲がりなりにも「将位」である今川を、神器なしで潰したのだ。彼奴等の位は、俺にもわかりかねるわ。」

信長の目は好奇心に爛々と光っている。

その様子を見ながら、利家はあの不幸な六人に心の底からエールを送るのであった。

（頑張れよ、餓鬼共……。）

話を終えた六人は、馬に乗り城までの道のりをガクガクと揺られている。

「あんたら見事だったぜ、今川軍をあんなに短時間でやっつけちまうとはな！」

「神憑きが六人も加勢してくれるたあ、俺達運がいいぜ！」

親しみを込めて、口々に兵士達が話しかけてくる。

「あ、あの…ありがとうございます。」

「兄ちゃん達もカッコよかった!!」

「……………どうも。」

馬鹿丁寧にお辞儀したり、人懐っこく話しかけたり、居心地が悪そうにしたり……………それぞれのリアクションをとりながら、織田軍一行は帰路を急ぐ。

目指すは恐らく、伝説の名城『安土城』。魔王が君臨する幻の城……………その全貌は如何に？

五の壱 「お話しましょ、そーしましょ。後編なんです。」

（後書き）

次はいよいよ安土城です。

そろそろ他の人も出せそうになってきました。

六の嘶 「城って、中に入るまでが長すぎて疲れるよね。」

いくら馬が苦手でも、ぶっ続けで乗っていれば嫌でも慣れる。だが、痛みというものは、いくら味わつても慣れないものだ。痛いものは痛い。

「尻が……あり得ないくらい痛い……」

「どんな感じに……？」

呻きながら言う小川に、同じように憔悴した顔で北が聞く。

「……割れるように、って言えばいいんだろ……。」

「相変わらず面白味のない奴だなっ。」

「つまらない人って、モテないみたいですよ。」

「関係ないよなそれ!？」

笑顔の山中と木下は、やたら「モテない」「つまらない」を強調して言い、小川は痛いのを堪えつつ、妙に元気な二人を恨めしそうに睨む。

「だいたい、何でお前等そんなに元気なんだ？」

二人はふふん、と得意気に笑うと、回りにいる兵士達を眺める。

「この兄ちゃん達にお尻痛いって言ったら、当て布くれたんだぞ!羨ましいだろや二中!！」

「色々気遣って下さって、あまり辛くないんですよ。」

多分、見た目が見た目なだけに余計気遣われるのだろう。

小っちゃいつてことは、便利だね。

「僕も意外と疲れてないよ。当て布があるのとないのとじゃ、全然違うよね。」

「俺は上着をその代わりにしたぞ。」

愛想のいい谷中、要領のいい梅本も然り。

「……あたしらだけか。」

「……ハア。」

愛想の悪い小川と北は、肩を落として頂垂れた。
そんなこんなで、お城を目指して大行進すること数日。

「お、見えたぞお前等！」

前に行く利家が、励ますように前方を指差す。
その方角を見て、六人は言葉を失った。

目の前に堂々とそびえ立つ山。

その山のほとんどは、ほぼ巨大な城郭だ。

山の周囲をぐるりと、堀だか池だかわからないが、水に取り巻かれている。

適する言葉は、『絶海の孤島』だろうか。

「キャ、キャッスル・オブ・安土……」

感動というより、異怖の響きが大きい。

今までは、図体だけはでかいが、無機質で表情のない灰色のビルしか目にしていなかった。

だが、幻の城である安土城を見て、その姿に気圧される。

「す、凄いです……」

「これが…ゲームの世界の景色だって…わかってるのに。」

ぼうつとした顔で、六人は呟くように言った。

安土城を目前に、一行は馬の足を早める。

城下町だろう、賑やかなところに入ると、町人や農民が歓声を上げて迎え出していた。

「信長様、おかえりなさいまし！」

「無事のお戻り、嬉しゅうございます！」

飛び交う温かい言葉に、六人は眉をよせた。

魔王様は、意外と人気者。

「てっきり寂れた温泉街みたいな雰囲気かも、って思ってたのに。」

「それが、黒い霧が漂ってて、ドクロとか転がってるとかな。」

谷中と北が、感嘆したように辺りを見回した。

「…俺は貴様等の世界ではそんなに悪人なのか。」

さっきから後でヒソヒソ聞こえてくる六人の言葉に、ほんのちょっぴり悲しい魔王様なでした。

城下町を通り抜けて、いよいよ安土城に入城する。

城の周囲を取り囲む大きな堀には、白っぽい岩の橋が掛かっていた。

「凄いな、この橋どうやって掛けたんだ？」

目を丸くして梅本は石橋を眺めた。

「地の神憑きが掛けたのさ。」

「こんな大規模なことまで出来るんですか！？」

梅本と相乗りしている兵士が答え、梅本は仰天した。

見るからにがちりしたその橋は、叩いて渡る必要などないだろう。

そこを渡り、門番が守る大門を抜けると、そこはもう安土城内部だ。

既に大勢の出迎えがいて、城下町同様かなり賑やかである。

ようやく、本来の入り口……現代でいう「玄関」の一手手前まで辿り着くと、一行は馬から下りる。

「これでやっと、ゆっくり出来るな。」

疲れはてた顔で北が腰を叩き、他も無言で頷く。

身体は慣れぬことを続けたせいか、今にも壊れてしまいそうだった。

何より、服を着替えたくてたまらない。

雨や汗、泥で汚れた服を着たままでいるのは、綺麗好きな現代人にとって、え、これ何て拷問？状態だ。

下馬してへバっていると、この小汚ない雰囲気に似つかわしくない、柔らかな声がした。

「殿……！よくぞ、御無事で！」

「……………誰だよあのお嬢様は。」

光沢のある白い着物がヒラリと揺れ、濡れたような黒く長い髪が輝く。

サラサラ、と衣擦れの音をさせて現れたのは、何とも美しい女性だった。

そのお上品な様子に、疲れで気の逆立った六人は、ジロツと彼女を見る。

だが次の瞬間、信長の発した言葉に啞然とする。

「無事も何も、公家如きにやられる俺ではないわ……………今帰ったぞ、お濃。」

「の、濃……………！？濃ってあの、濃姫！？通称お濃ちゃん！？」

本当の通称は『^{まむし}蝮の娘』であるが、六人がイメージする濃姫とは随分とかけ離れた清楚な姿に、驚きを隠せない。

あわあわと間抜け面を晒している六人に気が付いたのか、濃姫は仲睦まじく話していたのを止めて静々と近寄ってきた。

「貴殿方は……？殿の配下の方々ではないと思いますが……。」

急いで姿勢を正して、六人は丁寧に名乗ろうとしたが。

「ああ、俺の拾い物だ。薄汚れていて悪いな。」

「……名乗らせるよオイ……！」

信長の適当極まりない紹介にすかさずつつこみが入った。

「まあ……それはお可哀想に……！」

どこかを勘違いした濃姫は、悲痛そうな表情をして口元を押さえた。

「殿、この方々……わたくしがお預りしても宜^{よろ}しゅうございますか!？」

「ああ、好きにしろ。」

「即答かよ。」

そして何か思い付いたのか、両手を握り締めて信長に許可をとる。あつさりOKを出した信長は、シッシツとまるで犬でも追い払うように手を動かした。

「少しは見れるような格好をしてこい。見苦しくてかなわん。」

「誰のせいだ誰の。この俺様何様魔王様が……。」

木下の悪態にそーだそーだと喚きあうが、着替えさせてくれるという魅惑的なお誘いに乗らない筈はない。

「参りましょう。うんと綺麗にして差し上げますわ。」

にっこり笑って言う濃姫に、二つ返事で六人は後に従った。

ところ変わって、ここは安土城の湯浴み処。

「ちょ、待つて下さいって一人で出来ますから!？」
「止めるよ!ー!うわっ服を剥ぐな!ー!」
「そ、それだけは!それだけは勘弁してくれ!ー!」
「ギヤアアア!ー!?変態変態変態イイイ!ー!」
「お願いですから止めてください!ー!」
「あー!ー!気持ちエエわ!ー!」

一名を除いて、侍女の皆さんに丸洗いされていた。
一応、男女は分けられているからご安心を。
だが聞こえてくる悲鳴と絶叫は似たり寄ったりで、出てくる頃には皆、死んだ鯖目状態だった。

「フ、フーゾクつてあんなのだぜ多分!ー!」
「もうお婿にいけねえ!ー!」

野郎二人は着物を着せられ、とりあえず解放されるが。

「いやホント化粧とかいいですから!」
「こんな苦しい帯やダ!ー!」
「あたし、この柄いややわ。」
「かんざしは遠慮したいです!ー!」

女性陣はまだ弄られまわされていた。

嵐のような時間が過ぎて、やっと彼女達が出てくる。

「あら!ー!案外地味ですわね。」

断固化粧を拒否したのだろう、意外にナチュラルな顔だ。
着物も華美なデザインを全力で避け、なるべく無地を選んでいる。

壮絶な戦いだっただのか、妙にげっそりしていた。

「……大丈夫か？」

恐る恐る尋ねた梅本に、彼女達は力なく首を振ることだけしかなかった。

六の壱 「城って、中に入るまでが長すぎて疲れるよね。」 (後書き)

の、濃姫しか出せなかった……。

ちなみに安土城のイメージはWikipediaの安土城図を参考にしました。

こんな感じですかね、多分。

ヤ二中はヤ二中毒……つまり煙草中毒のことですよ(笑)

七の嘶 「感動の再会？おかしいよね絶対。」

着替えを済ませると、濃姫が口を開いた。

「そう言えば、殿がお呼びでしたわね。もし、この方々を殿の元へとお連れして下さいな。」

「畏まりました。」

侍女にそう言い、濃姫は嫌そうな顔をする六人に微笑みかける。

「安心なさつて。殿は確かに、お顔は怖いですけど……本当はお優しい方ですわ。ただ、厳しい面だけが目立ってしまうだけで。」

そりや嫁にはそう映るだろ、とは言えずに、一つ頷くだけしかなかった。

濃姫と別れ、再び侍女に案内されて、とある部屋に辿り着いた。

……何故か雰囲気为重々しく感じる。

「失礼致しまする。お連れ致しました。」

「うむ。入れ。」

信長の声がして、スツと襖が開いた。そこに広がる光景に、六人は絶句する。信長をはじめ、スラッと並ぶのは……重臣、と呼ばれる家来だろう。

「何なのアレ！？何であんなのがワラワラ雁首揃えて座ってんのさ！？」

真っ青な顔で、谷中が梅本に声を潜め食ってかかる。

「いや、俺のせいじゃないから！？殿下、落ち着けて首がとれる
！！」

襟首を捕まれ、ガクガク揺すられながら、梅本は彼女の肩をペシ
ペシ叩いた。

「そこに座れ。」

おっかなびつくり部屋に入ると、信長が座る場所を指定する。
視線が物凄く痛い、と、思うことは六人一緒。緊張する身体を叱
咤して、何とか腰を下ろすことが出来た。

「ほお、少しはマシな姿になったようだな？」

ビビっている彼等の姿を楽しんでいるのか、信長はにやにやと笑
っている。

「お、お陰様で……。」

答える小川の声は上擦っていた。

「そうか……。貴様等をここに呼んだのは他でもない。貴様等を
俺の家臣共に紹介してやろうと思ってな、ここに呼んだわけだ。」

信長は、自分の前に並ぶ重臣達をぐるりと見回す。

「此奴等が、先程まで俺が話していた者達よ。此奴等はこちら見え
て神憑きでな…今川を討ち取ったのは俺ではなく、此奴等だ。」

途端、大きなざわめきが波打った。

「神憑き…！？そんな馬鹿な…！」

「このような子供らが…！？」

それを気にもとめずに、信長は悠々と、重臣である彼等にとつてはとんでもない言葉を言い放つ。

「彼奴等をこの城で暫し飼^{しば}うことにした。」

重臣達が啞然としたのが、黙ったまま話を聞いている六人までもが、手にとるようにわかった。次の瞬間。

「何を言っておられるのですか殿！？」

「なりませんぞ！もし間者であればどうなさるのです…！」

否定の言葉が次々と飛び出し、部屋は騒然となるが。

「……黙れ。」

鶴の一声、氷のような信長の声に、一斉に口を閉ざした。

「俺の決めたことだ。口出しは許さぬ。」

圧倒的な眼力で彼等を黙らせ、信長は続ける。

「こやつらには、命を賭しても成さねばならぬ使命がある。その為には、神憑きとしての戦いを知り、学ばねばならない。だが、一つだけ言っておく。」

そこで信長がすつくと立ち上がった。

「妙な誤解をするな。こやつらの成さねばならぬことは、決して俺の天下布武を邪魔するものではない。」

そう断言し、チラリと六人の方に目を向けた。

怪しさ満点な存在である六人は、なんとという紹介の仕方だ、と頭を抱えたい気持ちだった。そんな含みのある言い方で、疑いが晴れるとは到底思えない。

「俺は信長様の言うことを信じるぜ。こいつらも認めてやる。」

今まで黙って腕を組み、話の流れを見守っていた利家がおもむろに口を開いた。嘘も方便、心強い援護射撃だ。

重臣達はしばらく、困惑と戸惑いの視線を交わしあっていたが、やがて一斉に信長に向かって平伏した。

「殿の、お言葉のままに……。」

声を揃えて言う重臣達に、信長は満足そうに笑い、再びその場に腰を下ろした。

「まあ、少々変わった餓鬼共だが…戯れるには申し分ないだろう。しっかりしごいてやれ。」

そういうわけで、無茶とも言える命令が利家の後押しにもよって通り、とりあえずは不審者扱いされることはなくなった……表向きは。

六人は気疲れのせいで、溜め息を吐き出しながら部屋を退出する。

何だか、疲れが倍増になったようだ。

「っていうか……眠っ……」

廊下を歩く彼等の瞼は、今にも落ちそうだった。

無理もない、普通の一般人が体験するには、余りにも濃すぎる出来事を連続で味わってきたのだ。

空腹もあるが、今はとりあえず夢も見ないで眠りたかった。

「どうぞ、こちらへ。」

彼等にあてがわれた部屋だろうか。襖を開けると、そこには楽園とも言える光景が広がっていた。

「おお……ふ、布団……!!」

白くて柔らかそうな、六つの布団が敷かれている。

フラフラとそれに近付くと、まな板が倒れるように布団に倒れ込む。もう身動き一つ出来なかった。

一分もしない間に、彼等の意識は暗い眠りの海の中へと落ちていった。

どれだけ眠っていたのか？うつすらと意識が戻ってくる。

ゆさゆさ、と肩が誰かに揺すられて、呼び掛ける声が聞こえた。

「もし、起きてくださいまし。もし、神憑き様……」

重たい瞼をこじ開けて、軋む背中をぐいっと伸ばし、モゾモゾと起き上がる。そこには、薄紅の着物をきた、双子の侍女の姿。

「お目覚めですか？」

「うい……」

ポケットとした目で、六人はぼんやり宙を眺めている。まだ完全に目が覚めていないのだろう。

「さあ、しゃんとしてくださいまし。お腹がすいていらっしやるでしょう？ ご飯を用意致しましたよ。」

「ご、ご飯！？ 食い物っ！？ どこどこ、どこにあるんだ！？」

小柄だが、食べ物への執着心は誰よりもしつこい木下が真っ先に反応する。

「そりゃありがたいな。ろくなもん食べてなかったから。」

梅本はそう言って、腹を擦る。

移動中の食事とくれば、質素を通り越して嫌がらせかと思いたくなるようなものだった。

「その前に、わたくし達の名前を申し上げておきますね。」

双子の侍女はきちんと正座すると、丁寧に頭を下げた。

「わたくしは春と申します。」

「わたくしは夏と申します。」

次は、二人声を揃えて。

「貴殿方のお世話役を勤めさせていただくことになりました。どうぞよろしくお願い致します。」

流石双子、寸分の狂いもないシンクロ率だ。

「あ、よろしくお願いします。」

六人も正座して、同様に頭を下げる。そして立ち上がるうとするが、春と夏に止められた。

「お待ちを。実は、殿御とどのの世話役もいるのです。」

「俺達のですか？」

小川と梅本は顔を見合せ、再び座り直す。

春と夏は頷くと、お入りください、と襖の方に呼び掛けた。すると、襖がするすると開く。

「しばらくぶりじゃの。まろがそちらの世話役おじゃ。」

「こ……この声は…！？」

めちゃくちや聞き覚えがある。というか、嫌でも知っている。現れた姿に、六人はあつ、と驚きの声をあげた。

何と、部屋に入ってきたのはあの今川 義元だった。

七の嘶 「感動の再会？おかしいよね絶対。」 （後書き）

まさかの今川さん再登場。

可愛くないですかね、この人・・・ゲームとかでは。

ちなみにこの今川さんは見栄っ張りで弱いけど、意外と気持ちの割り切りは早くて潔い人です。

次回の投稿はもう少し先になりそうな予感。

まあ気長に待ってくださいまし。

八の嘶 「飯は命だお宝だ、喰わねば何にも出来ません。」

「何でテメーがいるんだこの今川焼イイイイ!?!?!」

「おじゃあああ!?!」

ドドドツ、と六人は凄まじい形相で義元に詰め寄った。
猛牛のような勢いに、義元は部屋の隅まで逃げ込む。

「まあまあ、落ち着いてくださいまし。」

クスクスと笑いながら、春と夏が六人を押さえた。

間。

「殿が言うには、貴様等はどうせ何も知らぬだろうから、今川殿に色々教えてもらえ、とのことらしいです。」

「で、出てきたんがこれか。」

これ、と北に指差された義元は、心外だとばかりに言い返した。

「これとはあんまりおじゃ! まろは織田殿から、正式に世話役としての命を承ってきたのじゃぞ!」

「んなこたあ、どうだっていい。大体、よくも自分の敵とそんなに仲良く出来るよな。残る今川家はどうするんだ?」

顔をしかめて小川が言う。すると義元は微かに悲し気な表情になり、苦笑を浮かべた。

「まろが負けた今、あの領地は織田のものじゃ。将は一つの国に一人しか必要とされてはおらぬ。負けた国は、勝った国に従うのが運^{だめ}命ぞ。それはどこの国でも覚悟の上じゃ。」

義元はきっぱりと言い切る。

その潔さは尊敬出来るだろう、多分。

「でも、どうしてそんなに元気なんですか？大事な武器を、壊されてしまったんでしょう？」

山中は腑に落ちない、というような表情でそう尋ねた。
確かに利家の話では、神器と呼ばれる武器を壊されることは、並々ならぬ損失感を与えられるらしい。

「壊された数日間……自刃したくなるほどじゃった。まるで生きたまま死んでおるようなものおじゃ。じゃが……青柳がまろを庇って砕け散ったのに、そのまろが自刃しては、青柳が尽くしてくれた誠意に泥を塗るようなもの。」

義元は晴れやかな顔をして笑ってみせる。

「まろは生きねばならぬ。生きて今川家を支えることが、敗国の将の唯一出来ることおじゃ。」

超・ポジティブシンキング今川。

そう言い切った義元を、六人は信じられないような面持ちで見る。

「どうしようミナちゃん、今川がカッコいいぞ……。」

「頭でもぶつけたんでしょうか？」

「あの見た目でさっきのセリフはないよねえ、マンボウ？」
「ま、あたしらは春夏双子さんに世話になるからええけどな。」

女性陣からは、相変わらず容赦ない言葉を浴びせかけられる。
男性陣は深々と溜め息をつき、義元から目を逸らす。
多分、そんなことを堂々と言えるのは義元だけだろう。

「どこまでも失礼な奴等おじゃ……。」

何だか言い返す気力もなくて、義元は肩を落としてそう呟いた。

義元と双子の侍女に連れられて部屋を出た六人は、食事が用意されている部屋へと向かう。

「ここですよ。」

「どうぞお入りくださいまし。」

そう言って開かれた襖の向こうに、きちんと並べられた六つのお膳。

「いやったああー！ まともな飯ーっ！」

目の色を変えて、真っ先に木下が飛び付く。

「餓えた犬だな……。」

ガツガツと米を貪る木下を、冷たい目で小川は眺めた。

「まあ、チ口は食い物が原動力と直結してるからな。」

梅本はそう言いながらも、もぐもぐと魚を口に運び、山中や北にいたっては無言だ。

とにかく空腹を満たすために、ひたすら食べる。一心不乱に食べる。食べて食べて食べまくり、やっと一息つくことができた。

「ああ、美味しかった…。」

「身に滲しみみましたね。」

満腹になり、食後のお茶をたしなんでいると。

「よう、お前等！ちったあ動けるようになったか？」

スパン、と利家が襖を開けて登場した。

「あ、トツシーだ。」

「前田のトツシーだ。」

「トツシー何か用？」

勝手にあだ名で呼ばれている。

「トツシーってもしかしくなくても俺のことかよ。」

目を丸くして自分を指差す利家に、六人はこっくりと頷いた。

「だってそっちのほうがいやすいしね。」

「お前等なあ……。」

につこり笑って谷中が言うと、利家は困ったような、照れたような顔でガリガリと頭を掻いた。

「いや、んなことはどーでもいいんだ。お前等、城の案内してやるから一緒に来いよ。」

利家の誘いに、めんどくさい、と言おうとした北の口を塞ぎ、六人は立ち上がった。

「安土城は広いからなア、最初は絶対に迷うぜ。慣れないうちは、あんまり遠くまで行くなよ。」

六人を後ろに引き連れて歩く利家の姿は、まるで面倒見のいい兄貴分のように、周囲から微笑ましい視線を送られている。

「そうですね、あんな山の中に、押し込むように城が建ってますからね。」

山中は好奇心に輝く瞳で、あちこちを見回す。

あの幻の安土城、中を見学出来るなんて、一生に一度もない大幸運だ。

「じゃあまずは、突撃トッシーのお部屋訪問だね。」

「記念すべき被害者第一号だなっ！」

「お前等俺の部屋で何するつもりだ。」

ニシシ、と笑いあう谷中と木下に、若干引き攣った顔で利家が出た。

だがそこは兄貴分（仮）、ちゃんと案内してくれる。

「ほら、ここが俺の部屋だ……頼むから暴れんなよ。」

何だかんだ言いつつ、見せてくれた部屋の感想は？

「意外と小綺麗だな。」

「春画とか散乱してると思ってたのに、つまらんわ。」

梅本はとにかく、北の言葉に利家はワナワナと震えながら言い返した。

無論、怒りによるものだ。

「何処から来るんだ、その発想は……？ 仮にも女だろ、お前……」
「身体的にはな。」

北はどうでもよさそうに答えた。

流石、孝研の干物女にしてオッサン女マンボウ。

恥など無縁の厚顔無恥。

「ハイ、次。」

「ここが廁だ。」

「そこそこな造りだな。」

「次。」

「んで、書庫だ。」

「カビ臭い……」

「次だなっ。」

「台所だ。」

「レトロ通り越してるだろ。」

……と、城をふらつくこと約一時間。

一度外に出て、利家はある場所に向かう。

「今度は鍛練場だぞ。お前等もいずれ行く場所だ、道ぐらい覚えとけ。」

近付くにつれ、何やら勇ましい声が響いてくる。

「おお、やってるやってる！」

広いグラウンドらしき所で訓練を積む兵士達。互いに手合わせや筋トレなんかをしている。その大勢の中で、一際良く目立つ人物がいた。一際大きな体軀を誇る、岩のような男。

「おい、おやじ殿ー！」

利家が手を振りながら大声で呼び掛けると、その大男はくるつと振り返った。

「おやじ殿……？」

「にしちゃあ、全ッ然似てないぞ。」

いぶかしげに大男を見る六人。

すると、その大男はのそのそと近付いてくる。

近付けば近付く程、その異形はよく目立った。真っ黒な肌に、ギョロッとした目、ゴツゴツした体つき。

「何アレ、妖怪なんたら入道？」

「ちげーよ！ありや柴田 勝家様だっ！！」

「……噓ん？」

利家の言葉に、六人は絶句する。

どんどん近寄ってくる勝家にビビり、彼等は押し合い圧し合いしながら利家の背後に隠れた。

「利家……案内か……？」

「ああ。信長様の御命令でな。」

「……そうか。」

まじまじと勝家は、利家の背後を見詰める。

「僕は……柴田、勝家と……申す。名を聞いても、よいか？」

なるべく優しい声で勝家が話しかけると、六人はおずおずと利家の背後から出てきた。

そしてそれぞれ名乗ると、勝家は何とも嬉しそうに笑ったではないか。

「……ん。」

「……え、くれるの？」

おもむろに勝家は懷をこそごそ漁ると、薄い紙に包まれた六枚の煎餅を取りだし、彼等に手渡す。

「あ、ありがとうございます……？」

何故煎餅。何故出てくる。

まあくれるモンはもらっとけ。

ハテナマークを乱舞させながらも、六人は煎餅をパリッとかじった。

八の瀬 「飯は命だお宝だ、喰わねば何にも出来ません。」 (後書き)

お次は柴田 勝家さんです。

厳ついけどまったりした性格の優しい人設定です。
気に入られるとお菓子がもらえます。

丸の壱 「驚き桃の木山椒の木、ってもう沢山だ。」

訓練道場を出て、つらつらと喋る利家の話を聞きながら歩いてい
ると、ふと山中が足を止めて後ろを振り返る。

「どうしたんや？」

「いえ…何か、視線を感じるような……？」

北と山中は、怪訝そうに視線を感じた方向を見る。そこに、利家
がやれやれと肩をすくめて呼び掛けた。

「明智殿、森殿。隠れてないで、出てくりやいいじゃないですか。」

すると、物影からギクリというように息を呑む声が聞こえた。

「べ、別に隠れていたわけじゃない！」

「わ、私は……蘭丸様に引っ張られて……」

一人目は、鮮やかな青と紫の着物を着た、いかにも小姓ですとい
いたげな格好の美少年。

少女のような顔付きをしているが、やや吊り上がった目は、警戒
心露に六人を睨^らんでいる。

二人目は、黒く長い着物に黒灰色の羽織のような物を羽織った、
長い髪の女性だ。

右目が前髪で隠れ、肌は病的に白い。俯き加減の姿勢は、全体的
に暗い印象を受ける。

「明智？明智光秀のこと？何処にいるんだ？」

一人は森 蘭丸だとわかったが、もう一人がわからない。
しかしここで、はあ？というような顔をした利家が爆弾発言をブ
チかました。

「何言ってんだ、明智殿ならいるだろ……あの方だ。」

指差す先に、あの暗い女性。

「え……あ、明智さん？」

「は、はい……。」

シン、と一瞬辺りが静まり返り。

「マジでええええ！？」

「あり得ん！あり得んぞ！」

「女体化か…萌えるわー。」

「ミッチーがオンナノコだあ！！」

「マニアな設定だな……。」

「お綺麗な方ですね。」

全員が同時に叫んだせいで、何を言ったのかはわからなかったのが幸いだった。あまり聞かれたくない言葉が少し含まれていたからだ。

「おいっ、お前達！僕を無視するな！」

光秀ばかり注目されているのが気に入らないのか、彼女を押し退けて蘭丸が六人の前に立った。

そしてキツ、と利家を睨み付けると、いきなりギャンギャンと彼

に向かって怒鳴り始めた。

「利家殿も何を考えているんです！？いくら信長様の許しが出たからって、こんなどこの馬の骨ともわからない人達に、城の中を案内するなんて！？」

蘭丸の勢いは止まることを知らない。

今度は六人に向かい、ビシツと言いつつ。

「信長様に良いようにされたからって、調子に乗るなよこの無宿人！！少しでも怪しいことをしたら、この森 蘭丸が即刻切り捨てやるからな！！」

しかし六人の興味はあつさり蘭丸から逸れていた。

「明智さんって影があるけど美人だね。」

「黒じゃなくて、もっと派手な着物着ればいいと思いますよ。」

「薄幸の佳人……好みや……」

「これからミツチーって呼ぶぞっ！」

「この羽織、変わった形だな。」

「……………いいな。」

総員が華麗に蘭丸をスルーし、光秀の周りにたかっていた。

光秀は恥ずかしいやら困ったやらで、おろおろしている。

「……………！」

ビキツと蘭丸の額に青筋が浮くのを、利家はニタニタ笑いながら見ていた。

何かと口煩いこの少年がどう出るか、実に楽しみなのだ。

「何だよ、あのガキ。」

「小姓だかペッパ―だか知らねえけど、随分高飛車だな。」

チツ、と舌打ちして、小川と梅本は吐き捨てるように言った。

自分達が不審者であるということは十分に理解し自覚しているが、あそこまで敵愾心剥き出しにされては気分が悪い。

「あいつは信長様にゾッコンだからな。信長様の気がお前等に向いてんのが、めちゃくちゃ気に入らねえのさ……しかし犬野郎ってかよ……。」

笑いを噛み殺し、利家は口元を手で覆い隠した。
余程面白かったのだろう。

「ま、あいつのことはテキトーにあしらっとけ。イチイチ腹たてたらキリがねえ。」

「……りょーかいトツシー。」

その後、更に安土城の中を歩き回り、滝川 一益、池田 恒興、佐久間 信盛など多くの武将達に引き合わされ、挨拶をして回った。六人を快く迎えてくれる者もいれば、森 蘭丸のように怪しむ者もいた。

挨拶が一通り終わる頃には、六人はすっかり疲れはてていた。

「ありやー挨拶って名前の城内引き回しだぜ。」

「疲れたよ……お陰でお腹は減ってきたけどさ。」

部屋に戻り、やれやれと六人は一息つく。

「そんなそちらには！」

「「「うわあ!?!」」」

いきなり襖が開いて、盆を持った義元と春と夏が現れた。

「このまろが茶を持ってきてやったおじゃ。」

「「ちなみに甘味もありますよ。」」

盆の上に、急須と人数分の湯飲み、それに小さな茶菓子が置かれている。

「ちょうどええわ、あたしお茶飲みたかったから。」

「ご機嫌で北が手招きする。お世話係三人は素早く湯飲み茶を注ぐと、彼等に配り終える。」

「あの、貴殿方も一緒にどうですか?」

山中の誘いに、三人は目を丸くした。

城主のお客である彼等が、一介の世話係を茶に誘ったのだ。

「そんな、とんでもない!わたくし達は……!」

「二つ返事で頷こうとした義元の口を二人がかりで押さえ、春と夏は首を振る。」

「いいじゃんか、別にゆっくりしたってさ。」

木下が彼女達の袖を引っ張り、座らせようとする。

「だーっ、いい加減に離すおじゃ!?!苦しいぞよ!?!」

自分を押さえる手を振りほどき、義元が叫ぶ。

「まろは喜んで頂くおじゃ。せつかくの誘いを断る理由など、ないのじゃからな。」

ササツと義元は六人の傍らに座り、懷から何故か湯飲みを取り出した。

「何故そこから湯飲みが出てくる。」

「公家たる者、これくらいの物がすぐ出せずにどうするおじゃ？」

お前は某万能執事か。

そして元・公家の間違いではないのだろうか。

そそくさと湯飲み^に茶を注ぐ義元を、呆れたように双子は眺めるが、やがて苦笑しながら頷く。

「わかりました。わたくし達も、御相伴致しますわ。」

そう春は言い、夏は湯飲みを取りに行く。

しばらくすると、六人の部屋から楽しげに笑う声が聞こえてきたのであった。

九の嘶 「驚き桃の木山椒の木、ってもう沢山だ。」（後書き）

明智さんを女の子にしてみました・・・。

蘭丸君はツンデレ設定です。

次回は鍛錬、そして武器のお話になればいいな。

十の斬 「インドア派の耐久力って、障子紙よか低いんだぜ。」

とにもかくにも、六人の安土城での生活はそこそこ華麗に始まった。

朝、普段ならあり得ない時間に叩き起こされ朝食を食べる。そして義元による字の読み書き講座を受け、小休憩の後、武術と馬術の鍛練。

たっぷり死ぬほどこいびられた後、特別に昼食をとり二時間の休みを挟む。

その後は、何故か魔王様とのお話タイムが待っている。充実しくる日々のスケジュールに、毎日六人は真っ白に燃え尽きてしまう。

「……何、この濃すぎる日課。」

ばったりと部屋にぶっ倒れ、彼等は呆然と呟く。

馬術はともかく、一番辛いのは武術だ。まず最初に課せられたのは、「攻撃を避ける」こと。技を見切る能力を、徹底的に叩き込まれた。

しかし六人は一般人、パンピー中のパンピーである。

身体には打撲切り傷擦り傷など、生傷が絶えない。忘れちゃいけないのが筋肉痛だ。訓練初日の次の日なんかは、指一本動かすことすら出来なかった。

無理が祟って、発熱して寝込むことが何度あったか。

そんな中、世話係三人と利家以外に、よく彼等の力になってくれたのが勝家と濃姫であった。

勝家は、何処からどう調達してきたのか、よく饅頭だの大福だのを差し入れし、濃姫は気晴らしに城下へ連れて行ってくれたり。

そんな気遣いもあってか、なんとか六人は地獄のような日々を乗り切っていた。

そんなある日、いつものように武術の鍛練を行っている、彼等はふと身体の変化に気付いた。

一兵卒達が繰り出す槍を一心に避けていると。

（あれ？なんかトロい？）

やたらと攻撃が遅く見える。

（み、見える！私にも見えるぞ…！）

テンションがあがり、某赤い彗星のセリフが浮かぶ。

「はい、ちよつと休むか。」

「了解です。」

わらわらと六人は集まり、汗を吹きながら視線を交わしあう。

「……なあ、何かさ…見えるよな？」

最初に口火を切ったのは、小川だ。

「やつぱり？やつぱり見えるよな？」

続く梅本の言葉に、他もうんうんと頷く。

「普通、僕達みたいな一般人が、こんな短期間で才能開花するかな？」

「オレ、なんか反撃出来そうな気がすんだけど。」

谷中と木下は身体のあちこちを見回す。

「あの、少し試してみませんか？」

「試すって何を？」

山中の提案に、北が尋ねた。

「槍をぶんどるんですよ。それで反撃してみませんか？」

につこりと笑い、山中はそう言う。

「……え？」

ポカンと口を開けていると、山中は楽しそうな顔で続ける。

「試す価値はありますよ？一泡吹かせてやりましょう。」

久し振りに見る、山中の黒笑。

「……えーっと、ミナちゃん何かお怒り？」

恐る恐る木下が尋ねると、山中はフルフルと首を振る。

「いいえ？ただ……今まで好き放題に扱われていたのを思い出しまして、何だかこう、黒い感情がですね……。」

「……それを怒りと言わずに何て呼ぶんだ……？」

薄ら寒くなるような雰囲気漂わせる山中を、皆は遠巻きに眺めた。

休憩が終わり、訓練が再び始まる。

彼等は山中の提案通り、槍を奪い取る隙を虎視眈々と狙う。シュツ、シュツと突き出される槍、そして柄を握り直すその時を、見逃さなかった。

「もらったあー!!!」

「いっただきっ!!!!」

「ゲットだぜっ!!!!」

六人の手が蛇のように伸び、一瞬の隙をついて槍を奪い取った。そしてそれを構え、相手の首筋に突き付ける。流れるような動作だった。

「…出来た……。」

あまりの上出来っぷりに、当の本人達も驚きを隠せない。というか、何故ここまでうまくいったんだ？

「中々見事だ、餓鬼共!!!」

固まる空気を切って、厳めしい声が響いた。

「の、信長様!」

「信長様だ!」

深紫の着物を粋に着こなした信長が、楽しそうに笑いながらそこに立っていた。

「も、もしかして…さっきの、見てた？」

六人の背に、嫌な汗がタラーリ流れる。

魔王様はずかしくと近付いてくると、彼等の頭に手を伸ばした。思わず目を閉じるが、頭に感じたのは優しい感覚。

「へ………？」

驚いて瞼を開けると、信長が満足そうな顔で六人の頭をそれぞれ撫でていた。

「あのー、もしもし？」

どういつ状況なのか理解できずに、目を白黒させていると。

「よい出来であつたぞ。」

つまるところ、褒められているらしい。どう反応していいか困りきって、されるがままになっていると。

「何だ、気に入らんのか？ふむ……お濃に褒めるときはこうしてみろ、と言われたんだがな。」

「いや、まさか魔王様に頭撫でられる日が来ようとは、ゴマ粒ほども思わなかったんで。」

「俺が褒めたのがそれほど意外か。」

感想をストレートに言えば、信長は顔をしかめて腕をくんだ。

「信兄も案外、やさしいトコあるんだなっ。」

「バカ、その呼び方は……！」

慌てて梅本が木下を止めようとするが時既に遅し。

「……のぶにいい？」

珍しく驚いた顔で、信長は木下の失言を繰り返した。

「しいいまったああああ！！！！」

頭を抱えて絶叫する木下。そして一斉にアサツテの方向を向き、他人のフリをする仲間達。

「信兄とは俺のことか、おい。」

「ごめんなさいすみません口滑りました殺さんで下さい！！」

ペコペコ頭を下げて謝りまくる木下。どうなるのかと思いきや。

「ああ、成程……そう言えば又左が妙な名で呼ばれていたな。俺は「信兄」なのか。」

何か気に入ったっぽい魔王様がいた。

「貴様等の兄になる気はないが、まあ好きに呼べ。」

「……え、オレ死なないの？」

「なんで死ぬんだ。」

木下の頭を再び撫で、信長は残りの五人を手招きして呼ぶ。全員が揃うと、信長はおもむろにこう言った。

「貴様等、武器が欲しいか？」

「武器って、神器のことか？」

北が興味深そうに尋ねると、信長はこくりと頷いた。

「まだ早いんじゃない……。」

小川はあまり乗り気ではなさそうだ。

それもその筈、まだまだ自分達は武器を持って戦えるレベルじゃないと思うからだ。

「普通の餓鬼共が、数週間の訓練で敵兵の槍を奪い取り、首に突き付けることが出来るとは思わんが？」

信長はスツと目を細め、ジツと六人を眺める。言われてみればそんな気がしなくもない。

「あたしは賛成やけどな。武器の使い方と同時に教えてもらおうや。」

北は武器を持つことに期待しているようだった。

「明日、朝飯を食ったら城の裏に來い。遅れたら……わかるな？」

信長は武器を与える気満々のようだ。それだけ言うと、信長はさっさと立ち去ってしまった。

十の斬 「インドア派の耐久力って、障子紙よか低いんだぜ。」

（後書き）

武器がいよいよもらえます。

次回はやつとファンタジーっぽいことが書けるかも……。

いよいよ鍛冶屋に行くお話です。

作者が趣味に走ります、多分。

そしてあだ名についてはぬるい目で見逃して下さい。

十一の嘶 「有り得ない世界には、有り得ない事が付き物だ。」

次の日の朝。

六人は城の裏に勢揃いし、信長を待っていた。自分にあつ武器は
いったい何なのか、様々な想像が脳裏を駆け巡る。

「ていうか、何で集合場所が裏なんだろう？」

「それはあたしも気になってたわ。普通裏じゃなくて表やでな。」

谷中が口にした疑問に、北も賛成の意を示す。

目に映る景色は、繁る木々と風に揺れる草や花。とてもじゃない
が、この場所に加治屋があるように思えない。

変わったところと言え、少し離れたところにポツンと建つ朱塗
りの鳥居くらいだ。何かを祀る祠もなく、ただあるだけ。

「何なんだ、この鳥居。」

小川はそこに近寄り、しげしげと眺めてみる。何の変哲もない。

「おい、勝手に入るな！大人しく待ってもいられないのか！？」

偉そうな叱責が聞こえ、六人は顔を歪める。一発で誰だかわかつ
た。

その方向を見れば、いつもの派手な着物を着た蘭丸と信長が立っ
ていた。

「何だペツパーかよ。」

「信兄おはよー。」

蘭丸をやっぱりスルーして、六人は信長に挨拶する。

「ああ。感心だ、遅れなかったようだな。」

信長はニヤツと笑いながら言う。

「ぺっばあとは何だ！？それは僕のことか！？」

「うるさいな、どうでもいいだろ。」

後ろでは蘭丸と小川が言い争っている。それを聞きながら、山中が鳥居のことを信長に尋ねた。

「あの、加治屋さんはどこにあるんですか？あの鳥居は何か関係が……？」

もう一度辺りを見回してみるが、やっぱり何も見つからない。

「関係は大アリだな。ついてこい、余り騒ぐなよ。」

何やら愉快そうな表情で、信長は自分の背後に六人を集まらせる。

「いいか、ここから先は人間の世界じゃないんだ。ちゃんと礼儀をわきまえろよ！！」

蘭丸の言葉に、六人は顔を見合わせた。

人間の世界ではないとは、どういうことだろうか。

こんな辺鄙なところで、何をするつもりなのか。黙ったまま、信長の様子を見守っていると、彼は鳥居に近付きそつと触れる。すると、ぐにやりと鳥居の向こうの景色が歪んだ。

「な、何だ…!？」

「気持ち悪るっ!!」

「静かにしろ。」

騒ぎそうになる彼等を一声で黙らせ、信長はゆつくりと鳥居を潜る。恐る恐る六人も後に続くと、鳥居を潜った瞬間、景色が一変していた。

「何処だろう、ここ…?」

見えるのは、ガヤガヤと賑やかな通り。あちこちに店が並び、祭囃子のような音楽が聞こえてくる。

だが、道を行き交う者の姿は人間ではなかった。

「よ、妖怪! 妖怪だぞ梅!」

興奮する木下は、梅本の着物の袖を引っ張る。

「わかったわかった、凄いいい。」

それをテキトーにあしらひ、スッ飛んで行こうとする木下の襟首を掴む。

「だから騒ぐな、バカ!」

蘭丸は苛々と、声を押し殺して言うが。

「蘭、あまり言っでやるな。貴様も落ち着かんか。」

信長の注意に、蘭丸は不服そうだが渋々と従ひ、木下は梅本に殴

られてやつと静まる。

「ここは一体…？」

「雰囲気的には、某有名アニメ映画に出てくる風呂屋みたいだな。」

確かにそうだ。原色の目立つ建物が多く、まさにその表現がぴつたり当てはまる。

「ここは妖怪が住む世界さ。僕達人間の住む世界とは一線を引いて、あの『妖鳥居』を境に広がる世界だ。」

鼻高々と話す蘭丸の説明を聞きながら、六人は信長の後を必死についていく。

「神憑きの武器は、妖怪達が造っている。人間にはわからない技法だね。」

「企業秘密つてワケか。」

通り過ぎる者達は、翼ある者、牙や角を持つ者、足がなく這う者、目が身体中にある者など様々。

「着いたぞ、ここだ。」

やつと信長がとある建物の前で足を止めた。

煤けた看板には、『明王堂』と彫られてるのが辛うじて読めた。

「タダでさえ夢みたいな世界なのに、更に夢みたいな出来事がどんどん起きてるな。」

「ゲームの設定つて、こんなのだったか？」

ふらふらと飛ぶ鬼火を片手で払い、小川と梅本は看板を見上げた。

「餓鬼共、離れずにしつかりついてこいよ。はぐれたら妖共に喰われてしまつぞ。」

信長はそう言い、明王堂みやうどうの中へと入った。

すると、すぐに一匹の三毛猫が出迎える。勿論普通の猫ではない。背丈は木下や山中程もあり、黒いハツピのような物を着ている。よく見ると、尻尾が二股だ。

「おや、尾張の旦那じゃないか。どうしたつての？」

キラツと瞳孔の細い目を輝かせ、化け猫は人懐っこそうに言う。

「久しいな、コマ。」

信長はそう挨拶し、蘭丸も丁寧に頭を下げる。

「へエ、お小姓も一緒？後ろの子達は？」

コマという名の化け猫は、ひょこつと蘭丸の背後を覗き込んで、彼等に好奇心一杯に近寄ってきた。

「実は、彼奴等に武器を拵えてやってほしい。」

「……こいつは驚きだ。俺も長いこと出迎えをやってるけど、こんな変わった神憑きはお目にかかったことがないね。」

ニコッ、とコマの瞳孔が開き、マジマジと六人の顔を眺める。

「あの、変わってるってよく言われるんですけど…一体何がどう変わってるんですか？」

谷中がそう尋ねると、コマはニイツと笑う。

「どう、って言われても、変わってるモンは変わってるとしか言えないよ。アンタ達に宿る力は、ちいっとばかりじゃないのさ。」

何が面白いのか、コマはからかうような物言いだ。

「そんなら、うかうかしてられないね。鍛冶屋に伝えておくから、アンタ達は一つ目に見てもらいな。」

コマはそう言うなり、サツと四つ足になり奥に走り去った。

「一つ目って、一つ目小僧のことやろか？」

北はコマが走り去った方向を眺めながら、首を傾げる。

「ふん、何も知らない田舎者ではなさそうだな。」

「やかましいわ、女形坊主はおべべの心配でもしとき。」

憎まれ口に憎まれ口で言い返し、齒軋りする蘭丸を無視する。

「小僧という見た目ではないがな。」

信長はそう言い、奥の部屋へと進む。後に続くと、今度は小ぢんまりした部屋が見える。

赤い枠縁の、やたら派手な障子に閉ざされていた。

「ここからは貴様等だけで行け。俺は待っている。」

信長に背を押されて、六人は恐々とその部屋に足を踏み入れた。中は薄暗く、何やら不思議な香りの香が焚かれている。

「六人もいるのか。今日は珍しく仕事が多いね。」

いきなり暗がりから声がして、彼等は飛び上がる。

目を凝らしてそこを見ていると、勝手に行灯に火が灯り、声の主を照らし出した。悠然とくつろいでいるのは、煙管片手に此方を興味深そうに眺める少女だった。緋色の着物に山吹色の帯、一見遊女のような出で立ちだ。

「座りなよ。いつまでもそこに立たれてたら、私の仕事が出来ない。」

少女はそう言い、座布団を勧める。見たところ、目の数は二つ……人間と変わりがない。

「私は^{いちもく}壱目。わかりやすい名前だろ？」

座布団に腰を下ろす六人を見ながら、壱目は煙管を灰皿に打ち付けた。

「さて、それじゃ始めようか。アンタ方の神器の見定めをね。」

壱目はそう言い、おもむろに目元を手で覆い隠すように撫で下ろした。

十一の囁 「有り得ない世界には、有り得ない事が付き物だ。」

（後書き）

思い切り趣味に走りました。

好きなんです妖怪。

二股しつぽの猫なんて特に・・・。

十二の嘶 「占いの前ってやたらと緊張しない？」

手が顔から完全に下り、再び壱目の顔を見た六人は、わあっと悲鳴をあげたいのを必死で抑え込んだ。

それもその筈、さっきまで普通に二つの目があったのに、今は不気味に光る大きな目がギョロリと動いている。

「だから言っただろう？ わかりやすい名前だってね。」

壱目は悪戯が成功したようで、ケラケラと笑っている。

「やっぱ、一つ目じゃないと見えないんだな！」

何やら木下は納得したような顔で、怖がりもせずに壱目の目を見ている。

「詳細希望や。」

「もちコースだマンボウ！」

北の要望に応え、木下はVサインをきめた。

「昔はさ、一つ目じゃないと神様のなんたるかは見えないうって言う言い伝えがあつて、神官がワザと片目を潰して儀式を行ってたトコもあつたらしいんだぞっ！」

嬉々としてそんなことを説明し、他がへエと相槌を打つ。

「おや、アンタ人間なのに詳しいんだね。随分的を得たことを言うじゃないか。」

壱目は意外だというように、単眼を見開いた。

「オレ、妖怪は昔から大好きなんだ。」

得意気に木下は胸を張ってみせた。

「この調子だと、ずっとチロちゃんのターンだね。」

そんな彼女の様子を見ながら、谷中がそつと山中に囁く。

「仕方ありませんよ。だって私達、この分野には詳しくありませんし……。」

山中も苦笑して、そう囁き返すのであった。

「よし、じゃあ始めるよ。まずはそうだね、アンタにしようか。」

壱目は小川を手招きして、目の前に座らせた。

「いいかい、静かに、動かないでくれよ。」

小川は緊張するのか、若干強張った顔で頷いた。壱目は一度深呼吸すると、ゆっくりとその単眼を覆う瞼を開き、彼の顔を真剣に見つめ始めた。

壱目は何やらブツブツと呟き、広げていた帳面に書き込んでいく。見定めとやはらずに終わり、彼女は書き記した紙を破りつつ小

川に手渡した。

「これを後でコマ公に見せな。今は中を見るんじゃないよ。次はアンタだ。」

壱目に次々と呼ばれ、同じように何かを書かれた紙を渡される。まるで占いのようだった。全員の見定めは大体三十分程で終わった。

「何かミヨーに緊張したね。」

「……この紙、気になるな。」

壱目にお礼を言って部屋から出た後、彼等は手にした紙を開けたそうにしていた。

「お前達、終わったのか？」

偉そうな声に振り向けば、蘭丸がそこにいたが、信長の姿が見えない。

「あれ、信長さんは？」

「様とつける！信長様は奥座敷でゆっくりしていらっしゃる。僕が待っていてやったんだ。」

心底嫌そうに蘭丸は言い、ぐるりと六人を見回した。むかつ腹を立てたい六人だが、今は自分の武器のことが気になる。

蘭丸を見ないフリして、化け猫のコマを呼ぼうとすると。

「終わったかい？六人もいちゃあ、意外と時間がかかるもんだね。」

グッドタイミングで奥からコマが出てきた。

「コマさん、これをき目さんから渡せって言われたんですが……。」

「

山中がそう言い、コマに紙を渡す。

「ああ、そうだね。じゃあ皆のもくれるかい？」

コマはピンクの肉球のついた手で、次々に紙を受け取っては目を通す。そして何が面白いのか、ニヤニヤと笑った。

「フフ…皆がさア、柄にもなく張り切ってるんだよ。ご指名を今か今かって待ちわびてるんだ。」

コマは鋭い牙を見せ、愉しげに言った。

「お小姓さん、旦那のそこに行ってきた。後は俺が引き受けるからさ。」

コマの言葉に蘭丸は嬉しそうに笑うと、振り向きもせずに行ってしまった。

「……多分信長と二人きりになれんのが嬉しいんやで。」

シラーツとした目で蘭丸を見送った北は、そう呟いた。

「……だろうな。」

梅本も同意見のようだ。

「さて、それじゃあ行くつか。皆がお待ちかねだから。」

ヒラヒラと手招きするコマに従って、六人は彼の後に続いたのであった。

コマに案内された場所は、まさに巻物に出てくるような百鬼夜行のような光景だった。様々な妖怪がところ狭しと集まり、爛々と眼を光らせながら六人を眺めている。

「ど、どこのお化け屋敷だよこれ！」

梅本は身体を強張らせて、低く呻いた。

彼等のいた世界では、妖怪なんてお伽噺にしか登場しない存在だった。妖怪よりも、幽霊の方が信じられていただろう。

それが、この異世界には妖怪が普通に存在しており、今自分達はそれをリアルタイムで感じているのだ。

「磯女…山姥…土蜘蛛…鉄鼠…ふふ、ふふふ……。」

木下といえば目に入る妖怪の名前を次々に言い当て、気持ち悪い笑いを溢れさせていた。

「さて、それじゃあアンタ達の神器を拵える妖を紹介するよ。まずは小川殿だ……紅葉！」

コマは紙を広げ、百鬼夜行の中に向かって呼び掛けた。蠢く群れから颯爽と歩み出てきたのは、名に負けぬ程の紅い姿。

紅蓮の髪に白蛾はくそうの如き顔、巫女装束を纏った絶世の美女。しかし、その焰のような髪からは、二本の黒い角がによつきりと生え、袖口から覗く指先には狂暴な鉤爪が見えていた。

「行きな、くれぐれも不躰ぶじつけなことはしないようにするんだよ。八つ裂きにされちまったって、責任とれないからね。」

焼けつきそうなオーラを放つ鬼女・紅葉に、完全に腰が退いている小川。しかしコマは更に彼をビビらせることしか言わず、背を押した。

他の仲間達も、小川の心配をしている暇はない。

「何か捕って喰われそうや……あたしヤバいんとちゃうかな……。」

北は自分の腹周りを擦り、流石に青ざめた顔をした。

「わ、私達……ガラスープにされちゃいます……!」

「オレもミナちゃんも、骨ばっかだしなあ。」

痩せている木下と山中は腕の細さを眺めて溜め息をつき。

「僕は普通だと思いたいけど……一番食べやすかったり?」

谷中は冷や汗を流して後退りする。

「お前等まだマシだろ!俺なんか…俺なんかなあ!」

最近ちよっぴりお腹が気になる梅本は、八つ当たり気味に叫ぶ。

何か論点がズレているような気がしてならない、とコマは一人思うが、余計なことは言わずにいておいた。

「どうでもいいけど、次言つよ。梅本殿は……鎖岩^{さがん}！」

同じようにコマが呼び掛けると、今度はズルズルと何か太い蛇のような生き物が這い出てきた。胴回りは電柱よりも太く、身体には鎖のような模様がかった。

「ありや野槌^{のちづち}だなつ。」

「にしても、どうやって武器を造るんでしょう？」

山中は野槌の、妙にのっぺりした姿を見て首を傾げた。

十二の噺 「占いの前ってやたらと緊張しない？」（後書き）

まだまだ暴走は続きます。

そして作者の一言、「鳥山石燕はやっぱり偉大だ！」

百鬼夜行っていう言葉の並びがスゲーいいと思うのですよ。

十三の斬 「妖々跋扈、正直生きた心地がしません。」

「梅、気をつけろよ。野槌って、何でもかんでも呑み込んだじゃうらしいぞ。」

「何でテメーは言うかなそういうこと!？」

木下の忠告に、梅本は彼女の襟首を掴んで喚いた。

「ほら、早く行きなつての。次は木下殿だよ、新月!」

コマは呆れたように梅本を押し退け、次の妖怪の名を呼ぶ。現れたのは、漆黒の身体をした大百足だった。無数にある足の先だけが赤く、煌々(こうこう)と輝く双眼がジッと木下を見下ろす。

「で、デッケエ……!!」

恐る恐る、だが好奇心に瞳を輝かせて、木下は大百足の元に向かった。

「山中殿は……東風^{ひざかぜ}之!」

上から羽ばたきの音と共に山中の前に降りてきたのは、松葉色の山伏装束を纏ったこれまた美しい女性。

背に生えた黒い翼から、鴉天狗だとわかる。鴉天狗は値踏みするように、山中を鋭い目で見つめている。しかし山中は毅然とした態度で鴉天狗の元に歩み寄っていた。

「谷中殿は、裂空^{れつくう}!」

「うわあ!？」

バチバチと電気を纏った黄色の体毛を持った生き物が、ストンと谷中の肩に乗ってくる。

鼬のような、狐のような形をしていて、どこことなく愛嬌のある顔つきだ。恐らく雷獣だろう。いきなり肩に飛び乗られた谷中は驚いてよろめくが、意外と可愛い雷獣の顔にちよつと安心するのであった。

「最後は北殿だね。えーつと……磯姫！」

固唾を吞んで妖怪の群れを見る北の前に、ぬうつと突き出てきたのは、蒼白な顔の女の首だった。びっしり濡れた長い黒髪、深い群青の蛇体。

磯女という妖怪は、薄笑いのような表情で、北を眺めた。

「以上、計六人だ。確かにこの猫又、コマが割り振らせてもらった！」

妖怪の群れに向かってそう叫び、コマは六人の背中を見送る。

「さあて、どんな神器が出来るかな。あの子達が出てくるまで、尾張の旦那と一杯やりながら待つとしようか。」

そんな呟きを残して。

妖怪に連れられ、六人は一人づつ、それぞれ別の場所に通された。目の前には洞窟があり、そこから焼けるような熱風が吹き込んで

きていた。恐らく、あの洞窟が妖怪達の仕事場なのだろう。

何をされるのかとビクビクしていると、妖怪達は口を揃えて血を寄越せ、と言い出した。血を吸われるのかと身構える六人だが、どうやら少し意味が違うようだ。

血は命の源、魂や心を溶かす液体であり、神器を^{いっしょ}拵えるにはどうしても必要なものだと言明された。

求められる血の量は、差し出された器に一杯。大きさは御猪口^{おちぎ}程度だが、今まで血を流すことに無縁の世界で生きてきた六人、はいそうですかとナイフでざっくりいける程、痛み慣れているワケがない。

散々躊躇い、ビビる六人だが、苛々しはじめる妖怪に喰われるのは御免である。渡された小刀を握りしめ、腹を決めて勢いよく刃を腕に突き立てた。

普段の切り傷とは比べられない程の痛みと、ドツと溢れる赤い液体に、意識がブツ飛んでいきそうなのを堪えてなんとか器に血を注ぎ込む。どうにか一杯注ぎ終わると、その場にうずくまり、傷口を押さえつけた。痛い、とにかく痛い。

知らぬうちに涙がぼろぼろ零れて、止まらなくなる。よくやったとばかりに、妖怪達はすかさず手当てをしてやり、とりあえず六人のやらなくてはならないことは済んだようだ。

「……やっぱり、全員同じ目にあってたか。」

全員が蒼白な顔で出てくると、小川が消え入りそうな声で言った。

「オレ、こんな怪我したの初めてだ……。」

木下はグズグズと鼻をすすり、白い包帯を巻かれた腕を擦った。

「でも、これでいい武器が出来るんだよね。」

「そうじゃなかったら祟つたるわホンマ。」

溜め息をつき、谷中と北は疲れたように頂垂れた。

「血なんて……久しぶりに見ました……。」

「大丈夫かよ、ミナちゃん。倒れそうだぞ。」

ふらふらする山中を梅本は心配そうに見守った。しかしこれしきで音を挙げていては、これから先、生きてはいけない。

噴き上げる血飛沫など、どれだけ見ることになるだろう。それを見れば、意地でも慣れなければならぬのだ。痛みにも、他人を傷つけることにも。

彼等の道のりには、幾つもの壁が立ち塞がっていた。若干シリアスな心持ちになって歩いていると、向こうからコマがやって来るのが見えた。

「おや、ちよいと来るのが遅れたね。お疲れさん、大丈夫かい？」

何やら美味しいものでも食ったのか、コマは前足をペロリと舐めている。

「大丈夫も何も、エライ目にあつたわ……あんなえげつないことするとか、あたしら聞いてへんで。」

忌々しげにコマを一瞥し、北は舌打ちする。

「んん？尾張の旦那は、何も言っていなかったのかい？俺はてつきり、何をするのか知ってるモンかと思つてただけだ。」

北の言葉に、コマは目を丸くして驚いたような表情を作った。

「……あー、何となくわかったかも。」

谷中は力ない笑みを浮かべ、額を手で押さえた。他も同様、げんなりした顔になる。

「あの魔王様のことから、敢えて何も言わなかったのかもな。」

「…サデイスティックな顔だしな。」

梅本と小川は、顔を見合せて完全な魔王面で高笑いする信長を想像した。

……恐ろしく似合う。

「ドSで鬼畜さんですか……。」

「ミナちゃん、顔がビミョーに怖いぞ……。」

俯き、ボソツと呟く山中のオーラに木下はやや退き気味だ。

「ま、まあお喋りはこのくらいにして、旦那のトコに戻ろうか。」

どす黒い雰囲気を追いつ追いつくように、コマはわざと明るい声で六人に呼び掛けた。

コマに連れられて、店の入り口に戻ると、信長と蘭丸が待っていた。

「終わったか。」

信長が非常に上機嫌に見えるのは気のせいだろうか？いや、気のせいではない。

「…なかなかお楽しみだったようで。」

「機嫌よさそーデスネ、この人でなし。」

「悪趣味の放火マニア。」

「シヨタコンのロリコン。」

ジト目で信長をシラーツと見やり、次々に彼を罵る。

「…最後辺りの聞き慣れん言葉の意味を今すぐ教えろ。」

「「「テメーで考えるバーカ！！！」」」

多分良い意味じゃないとわかったのか、信長は目元をひくつかせ、唸るように言った。しかし六人は捨て台詞を吐くと、脱兎の如く逃げ出す。

「待たないかお前達イイイイ！！！」

「待てと言われて待つヤツがいるだろうか！！いや、いない！！！」

鬼の形相で六人を追いかける蘭丸だが、こういうときだけ足が神がかり的に早くなる現代人。たちまち見えなくなってしまうた。

「……元氣と度胸のある子達だねえ。」

「全くだ。」

ポカンとした顔で六人を見、コマは信長に言った。やれやれと信長は溜め息をつく。

「そう言えば、彼奴等の戦装束だが……頼んだぞ。」

「勿論承知さ。あの子達の姿形は雲外鏡の奴がすっかり映したから、あとは女郎蜘蛛の姉さんをお願いしておくよ。」

ニツとコマは笑ってみせ、信長はよろしく頼む、と言い置いて、手のかかる連中の後をゆつくりと追ったのであった。

妖怪の住む世界から無事に帰還した六人は、城に戻り暫しの幸せを楽しんでいた。

「やっぱさ、鳴福屋の大福がオレが一番うんまいと思うぞつ。」

「いやいや、笹部堂の笹の葉煎餅もなかなかイケるよ。」

そう、細やかな贅沢、おやつタイムだ。いつもならお世話係三人組が勝家と一緒にだが、今日は六人だけだった。

「……なあ。」

和気藹々、ほのぼのまったりしていると、不意に小川が口を開いた。

「何だ、煎餅欲しいのか？」

「いらん。」

じゃあ何だ、と五人の目が小川に向けられる。

「皆、携帯はどうしてる？」

「……携帯？」

そう言えば、と彼等の頭の中に、現代社会にはなくてはならない
小さな相棒の存在が浮かんだ。

十三の瀬 「妖々跋扈、正直生きた心地がしません。」 (後書き)

今回はちょっと長めに書いてしまいました。

次は携帯電話の謎についてです、多分出来上がった武器の話も出せたらいいな。

ちなみにタイトルの「妖々跋扈」は某とんでも弾幕ゲームに使われている音楽の一つです。

・・・・・・あのゲームのアレンジ曲好きだなー。

十四の斬 「最優先事項は欲しいもの、疑問は二の次三の次。」

桶狭間での戦で、偶然開いた携帯に何故か自分達の能力データが映っていたことを、六人はすっかり忘れていた。

「それよりも、もつとんでもないことが一杯おきましたからね……携帯の不思議にまで、気をとめられませんでした。」

山中はそう言いながら立ち上がり、携帯がしまわれている箱を持つてきた。

「何か久し振りに見るな。」

梅本は箱を開けると、自分の携帯を取り出してパカッと開いた。

「……何コレ。」

同じように携帯を眺めていた谷中が、驚いたように目を見開いた。

「どうした？」

北の問い掛けに、谷中は黙ったまま携帯の画面上部を指差す。

「コレ、電波立ってるぞっ!？」

「マジかよ!？」

真っ先にそこを覗き込んだ木下が叫ぶと、他の仲間達も一斉に谷中の周りに集まる。見れば、確かに電波が立っていた。しかもちゃんと二本。

「普通、圏外の筈ですよね？」

眉を寄せて言う山中に、彼等は頷く。

この世界に、携帯が存在していることなどあり得ない。

「試しに、電話してみよつか。」

「……そうだな。」

北の出した提案に小川が頷き、早速梅本の携帯に電話をかけてみた。すると、彼の携帯から聞き慣れた着メロが流れ出したではないか。画面には、「王子」としっかり表示されている。

「じゃ、メールは？」

「オレ、やってみる！」

木下が山中にメールを送ると、やはりメールの着信音が山中の携帯から流れ出す。

「…携帯、使えるで。」

「何でだろ？どーいうこと？」

出された結果に、首を捻る六人。

ちなみに、六人以外の友人に電話をかけてみたところ、「電波の届かないところにいます。」という音声が届いただけだった。

「僕達だけに通じる携帯か…何で繋がるのかはわかんないけど、これは凄く便利かもよ？」

面白そうに笑うと、谷中は携帯を軽く握り締めた。

「便利も便利、とんでもない代物やでこれは。」

ニヤリ、と北は悪どい表情をつくる。

携帯の存在しない時代、これさえあれば連絡もとりたい放題、密書だつて送りたい放題だ。もし奪われても、使い方などまず解らないだろう。

「つまりは俺達の強みになるわけだ。バラバラになる事があったとしても、連絡はとれる。」

小川の言葉に皆は頷き、サツと携帯を懐にしまいこんだ。

「でもさ、充電とかどうすんだ？」

「………。」

木下の素朴な疑問に、一斉に沈黙が降りる。

「今は電池満タンだけどさ、多分絶対減るぞ？」

「チロ、それは気にしない方向でいくぞ。」

梅本は低く言うと、木下の肩をポンポンと叩いた。

「……ま、そーだな。」

考研よ、いいのかそれで。

携帯の謎をあつさり放棄して、六人はおやつを切り上げて訓練場へと向かったのであった。

武器製作の注文を出して、暫く経過した。

相変わらず訓練は度を超したハードさだったが、六人は徐々に体力や反射能力が「平凡」から外れていくのを感じていた。

「背後から殴りかかれたのを避けることが出来る学生なんて、私達くらいでしょうね。」

攻撃をかわしながら、山中は苦笑する。

「ホンマやわ。体育の評価なんか、いつも1やったのに。」

北も俊敏に動き回る。

最初の頃は喋る余裕なぞ皆無だったが、今ではちらほらと会話が出来るようになった。

随分飛躍的な進化である。気性の荒い木下や梅本なんかは、たまに隙を突いて反撃を仕掛けることもしばしばあった。

「まあ、皆本当によく頑張っていますのね。」

むさ苦しい空間におしとやかな声がして、訓練中の兵士達はぴたっと動きを止めた。谷中が首を傾げて、声の主に問い掛ける。

「お濃ちゃんだ。どしたの、こんな男臭いところに。」

艶やかな菖蒲色の着物を纏った濃姫は柔らかに微笑むと、足早に六人に近寄ってきた。

「あら、わたくしだっていつもお部屋に籠りきりじゃありませんわ。今日は素敵なお知らせを持ってきましたのよ。」

「素敵なお知らせ？」

六人は顔を見合せ、あっと勘づく。

「「神器！」」」

彼等の嬉しそうな顔に、濃姫も笑って頷いてみせた。

「殿、皆様方をお連れしました。」

濃姫に連れられ、六人は見覚えのある部屋に案内された。重臣達に紹介されたときに入った、あの広い部屋だ。

信長の前に、それぞれ緋色、金茶色、群青、若草色、山吹色、漆黒と六色の絹がかけられた物が六つ、白木の台に乗せられていた。その隣には、神器を拵えた妖怪達が各自きちんと座している。少し様子が違う点と言えば、鬼と鴉天狗以外の妖怪達が人間の姿に化けていることぐらいだ。

「来たか。」

信長は六人の顔を一人ずつ確認すると、彼等に神器と向かい合う位置に座るよう指示した。

「貴様等の神器が出来上がった。早速名付の儀を行うぞ。」

何やら大層な言葉に、六人は眉を寄せる。それを見て、信長の隣に座った濃姫が説明を付け足した。

「名付の儀と言っても、そんなに構えなくてよろしいのよ。神器

に名をつけることで、皆様方の大切な仲間としてお迎えするだけですわ。」

すると、今まで黙っていた妖怪の一人、紅蓮の髪をした鬼女・紅葉がおもむろに口を開いた。

「あの化け猫の言う通り、随分と風変わりな子達だ。名付の儀すら知らぬとは。」

深紅の瞳がジロリと六人に向けられた。

「斯様な幼子等がこの神器、扱いきれるのかえ？」

薄笑いを浮かべて言うのは、濃紺の着物を纏った女。袖から覗く手の甲には鱗が見えた。蛇体の妖怪、磯姫だ。

見下しきつた態度に、六人はむっと顔をしかめた。

「確かに俺達は普通とは違うかもしれないけど、あんた等に馬鹿にされる必要なんか何処にもないな。」

負けじと梅本は妖怪達を睨み返した。

「あんまり余計なこと言っとつたら、評判悪なるんとちゃう？どうでもエエから、はよ始めてや。」

北は目を細くして、どうしても良さそうな態度で言った。

「全くだ。紅葉、磯姫……余り遊ぶな。この方々に失礼ぞ。」

一つ翼を羽ばたかせて、鴉天狗の東風之が二人に釘を刺す。

「名を与えることで存在を固定し、己の魂の片割れとして共に戦う……。」

「名をつけた神器は大切なものじゃ。大事に扱われよ。」

目付きの鋭い、黒い長髪の男に化けた大百足の新月、ずんぐりした体型の老人に化けた野槌の鎖岩が次々に言う。

「さあ、どうぞ。君達の分身の御披露目だ。」

幼い少年の姿の裂空が手を伸ばし、六つの神器を指し示した。六人は期待に高鳴る胸を押さえ、それぞれの絹に手を伸ばしたのであった。

十四の漸 「最優先事項は欲しいもの、疑問は二の次三の次。」（後書き）

うおお、なかなか終わらん……。

次ももう少しこの話が続きそうです、すみません。

早く進めたいんですけどなあ……。そううまくいきませんね。

十五の斬 「名前をつけていざ挑め、でもお手柔らかにお願いします。」

絹を掴んで一気に引つ張ると、隠れていた武器の形が露になる。
その途端、おお、という感嘆の声が六人の口から漏れた。

小川の前には、真紅の柄と赤銅に似た色の刀身を持つ大太刀。柄の長さに比べ、刃の部分が異様に長い。

「……凄いな。」

燃えるような色合いに、小川は溜め息を混じらせながら言った。

梅本の前には、金茶色の柄に茶色の打撃部がついた大槌。その大きさは、彼の身長を軽く越えている。

「ってか、持てんのか俺。」

ゴツくて重そうなハンマーを、梅本は不安そうに眺めた。

北の前には、鮮やかな群青と水色の旋棍。先の部分には鮫の歯のようなギザギザが付けられていた。

「まさかの近接戦かいな。」

一番不釣り合いだ、と北は苦笑した。

谷中の前には、黄金に輝く大きな弓。だが、不思議なことに弦が張られていない。

恐らく、何か仕掛けがあるのだろうか。

「うーん、ゴージャス。」

派手だが品の良い装いに、谷中は満足そうだった。

山中の前には、身長半分くらいはあるだろう巨大な扇。手で持つ部分が少し長く、優しい萌木色が美しかった。

「何だか、軽そうな武器ですね。」

某有名な三国志ゲームに登場する武器を思い出したのか、山中はニヤツと笑っている。

木下の前には、艶のある黒い棒。中程には、きらびやかな螺黏でうねる大きな百足の細工が施されてあった。

「長っげえ……俺、大丈夫かな。」

木下は自分の身長を気にしながらも、キラキラした目で神器を見つめた。

「名をつける。」

信長が命じると、彼等は一斉に手を伸ばして己の神器を掴んだ。どんなに重そうでも、手にとれば扱いやすい重さになるのを感じて驚く。

そして、頭の中に一つの言葉が弾かれるように浮かび上がった。

「…陽炎丸。」

小川は紅の太刀に。

「地国天にする。」

梅本は大地の色を宿す大槌に。

「凧鮫や。」

北は海のような旋棍に。

「電王だね。」

谷中は天を裂く雷の弓に。

「舞風、です。」

山中は吹き抜ける風を起こす扇に。

「影蜈蚣ッ！」

木下は夜を模した棒に。

名前を与えた瞬間、六人の身体から「能力」である炎や雷が溢れ、神器に炸裂した。

「うわあああ！？高い買い物がああ！？」

「え、詐欺？詐欺なのこれ！？」

予想もしていなかった展開に、大パニックになる六人だが。

「安心しろ、貴様等の神憑きとしての力が神器に宿っただけだ。」

呆れたように信長は言い、笑いを必死で堪えている妖怪達に軽く会釈した。

「態々のお越し、痛み入る。」

「何の、新鮮な反応を久しぶりに見た故、こちらも楽しめたわい。」

鎖岩が面白そうに言い、妖の彼等は立ち上がった。

「せいぜい精進なされよ。我等の拵えた武器：無駄にならぬように。」

東風之は六人に、微かだが微笑みかける。

「武運を祈る。」

「君達の噂が聞けるの、待ってるよ！」

新月と裂空は、力強い励ましの言葉を送る。

「それでは、これにて御免。」

「おさらばえ、人の子等……。」

紅葉と磯姫がそう言うやいなや、たちまち妖怪達の姿は溶けるように消えてしまった。

「……び、びつくりした……。」

妖怪達を見送り、六人はホッと胸を撫で下ろした。

せっかくの武器が壊れてしまいかと、ヒヤヒヤしていたのだ。

「いちいち驚くな、鬱陶しい。」

「殿、さっきのは殿が悪うございますわ。」

面倒くさそうに溜め息をつく信長だが、濃姫に手を叩かれて、うっと言葉に詰まる。

「そう言えばさ、信兄の神器の名前って……国重？」

木下が期待に満ちた顔で尋ねると、信長は得意気に笑ってみせる。

「ほお、よく知っているな。いかにも、俺の神器は黒炎・国重だ。」

「あー、魔王っぽい魔王っぽい。」

「似合いすぎだろ、期待を裏切りませんな。」

いかにもっぽい文字の並びに、彼等はストレートな感想を述べる。

「…それは褒めているのか？」

「『もちコース。』」

テキトーな答えを信長に言っつて、六人はそれぞれ神器を掴み上げる。

「早速、訓練開始ですね。」

山中は舞風を一撫でして、サツと立ち上がった。

「オレ、コイツのこと気に入ったぞっ！」

「危ないから止めんかい！」

はしゃぐ木下は、気合いたっぷりに影蜈蚣をぶんぶん振って、梅本に怒られていた。

「というわけで、信兄さんありがとね。僕達頑張るよ！」

弾んだ声で谷中がそう言い、六人はドタバタと喧しい足音を響かせて部屋から出ていった。

「…………成長したものだ。」

その様子をしみじみと眺めながら、どこか満足そうに信長は呟く。きつと、彼等はこれからもつと成長してゆくだろう。まだまだ未知数の能力だが、いずれ周囲を凌駕する武人になる。

信長はそう思わずにはいられなかった。

神器をひつ掴んで訓練場に登場した六人を迎えたのは、利家、勝家、光秀の顔馴染み。

「帰ってきたな。」

ニヤツと含み笑いをする利家に、嫌な予感がする六人。

「何で皆がここにおんねん。」

顔を歪める北に、勝家がのんびり答える。

「神器の…訓練を、してやろうと………思ってたな。」

六人は顔を見合わせ、納得した。

確かに餅は餅屋、神器の扱いに長けた者に教えを乞うた方がいいだろう。

「あの、私達ではご不満ですか…?」

悲しそうな顔で問われては、はいそうですねって言えない。

「『お手柔らかに……。』」

物凄く気合いが入ってるように見える教官の顔を、冷や汗ダラダラで眺めて一言。

そう言うしかなかった。

「何してる！？もう少し踏み込め！」

「膝をつくな……！まだ……休ませんぞ……。」

「目を閉じないで！視界を閉ざせば、避けられませんよ！」

1対2のツーマンセルで挑むが、六人は片腕一本で軽くひねりあげられてしまう。

片や神器、片や練習用の武器。なのに手も足もでない。一番大変そうなのは谷中だ。

彼女の神器は弓だが、弦が張られていない。どうするのかという
と。

「まさか……雷を弦にするなんてね……。」

呻くように谷中は言って、必死に力のコントロールをする。

雷の能力はコントロールが非常に難しいようで、調整を行いながらも攻撃をしなければならない。

「うお！？おわあ！？」

梅本はでかいハンマーの扱いに四苦八苦、それに振り回されている状態だ。

「どーやって…使うねん、コレッ!？」

「私もわからないです…!」

北や山中は、あまり見慣れない形状の武器に、どうすればいいのかわかっていない。

「イテッ、ちょ、タンマタンマ!？」

「……無理、だ…!」

小川と木下も同じ、武器を持つての戦い方なんて一向にわからない。

しかし鬼教官三人は、習うより慣れろとばかりに彼等を打ち据える手を弛めない。

訓練場には、痛そうな打撃音と六人の悲鳴が始終響き渡った。

十五の斬 「名前をつけていざ挑め、でもお手柔らかにお願いします。」（後書

やっと武器編終わったー！！

いよいよ主人公達が尾張から出ようとします。

でもその前に、ちょっと番外編を書きたいと思ひまして。

番外編の前編はもうあげてますんで、よろしければどうぞ！

ちなみに「旋棍」はトンファーという沖縄の武器です。

んでもって「影蜈蚣」は「かげごしゅう」と読みます。

十六の嘶 「思い立つたら即実行、って無理だろ準備とか多すぎるから。」

神器の訓練を朝から晩まで重ねること数週間。

やっぱり六人の肉体変化は著しく、自分の身体ながら気味悪ささえ感じていた。既に一端の「武人」と化し、一兵卒では相手にならないところまで成長している。ああ、何というレボリユーション、これぞトランスフォーマー！。

やはり異世界に落ちたことや、自分達が少し変わった「神憑き」であることに、関係があるのかないのか……。憶測が彼等の間を飛び交うが、依然答は闇の中。

「そろそろいいかなーとか、思うんだよね僕。」

夕食を吸い込むように食べた後、ポツリと谷中が呟いた。

「……何がいいかなー、なんだ？」

一人酒をチビチビやりながら、小川が聞き返した。

「ん？ここから出るの。」

谷中は皆に向き直り、更に続ける。

「もう大分神器を使えるようになったし、馬だって普通に乗れるし。いつまでもここに居るわけにもいかないでしょ。それに、もとの世界に戻るには、ゲームクリアが必要かもしれないんだよね？」

その言葉に、皆ハッとした顔付きになる。

「そうだったなあ…。でもよ、仮にここから出るとして、その後どうするんだ？行く先々で、大名にケンカ吹っ掛けるわけにもいかないだろ。」

梅本は腕を組んで言う。彼の言うことも一理あるのだ。

「天下統一が条件っていつでも、どうやればええんやろうな？武力行使… なんやろか。」

「たった六人で、武力行使ですか…？」

北の疑問に、山中が不安そうな表情を浮かべる。

それはいくら何でも無理な話だ。

「でもよ、オープニングムービーで流れた前置きには、「自由なやり方で天下を手にしてほしい。」ってあったよな。色んなクリアパターンがあるってことじゃねえの？」

思い出したように木下が言い、一つの仮説を立てる。

確かに、「天下」といつても様々な取り方がある。

「…まあ、クリア云々よりも、この世界をもっと見てみたいと俺は思っただが。」

珍しく楽し気に小川は微笑み、空になった徳利を置いた。

「たまには良いこと言いますね。私も、そう思っていたところでした。」

好奇心に瞳を輝かせ、山中は弾んだ声で賛成する。
現状をとりあえず楽しめ、それが孝研。

せつかくこんな体験をしてるのだ、まだ見ていない武将の顔を拝みに行くのも悪くない。

「そんなら決まりやな。いつ出る？」

「準備が整い次第、いつでもいいな。」

六人は期待に口元を綻ばせ、就寝の準備に入った。
翌日。

「ここからお発ちになるのですか？」

朝食を持ってきたお世話係三人組に、彼等はその話をしてみる。

「そうなの……神憑きとしての力の積み上げにも、そろそろ外に出てみるのもよいおじゃ。」

ふむふむ、と義元は頷きながらお膳を置いていく。

「神憑きの方々がお使いになる能力は、実戦の中で初めて成長すると聞いたことがありますわ。」

「実際に刃を交えなければ、能力は開花しないということですね。」

双子は納得したように言い、白湯を注いでいく。

「まずは信兄にはなさんといかな。」

そそくさと和え物に箸を伸ばし、北はもぐもぐと口を動かしながら言った。

皆はこくりと頷き、朝食を食べ始めた。

「ほう、ここから発つか……そろそろ言うてくる頃だと思っていたぞ。」

朝食を済ませた後、六人は連れ立って信長のもとを訪れていた。彼は煙管片手に、くつろいだ格好で彼等を迎える。

「それで、馬の手配はどうする？」

「馬？」

信長の問いかけに、六人は首を傾げる。

「当たり前だろう。まさかその足でふらつくつもりだったのか？」

バカかこいつら、と言いたげな表情で信長は六人を見る。

「いや……そこまでお世話になってもいいものなのかと……。」

困ったように言う小川に、信長は鼻で笑う。

「たわけが……貴様等の馬を調達した程度で、簡単に揺らぐような城ではないわ。」

そう言いながら信長は手を伸ばし、紙と筆をひっ掴んで何やら書き始める。

「そうだな、長旅にも耐え、長時間走らせても息切れせぬ馬がいい

か。となると、並みの馬では務まらぬ……妖馬、それも鬼の血をひいているものがないな。」

ぶつぶつと呟き、紙に書き込んでいく。

「ヨーバって何だろな？」

「鬼って言いましたよね？」

「なーんかやな予感するな。」

信長の様子をジツと見守り、六人は顔を見合わせる。

馬の調達をしてくれるのはありがたい。

だが普通のが欲しいのだ、普通のが。

「…こんなものか。おい！」

書いた紙、多分注文書であろうそれを折り畳み、信長は声をあげる。

すると、直ぐ様侍女が部屋に入ってくる。侍女は信長のから注文書を受け取ると、六人が声をかける間もなく退出してしまった。

「おお、他にもくれてやる物があつたな。」

「まだあるの!？」

武器と馬、この二つでも十分なのに、まだあるのか。
谷中がぎよつと目を見開く。

「確か今日、届く筈だ……貴様等の戦装束よ。」

「い、戦装束……？」

うわあ、と何とも言えない表情が六人の顔に浮かぶ。

「女郎蜘蛛の仕立て屋に頼んだものだから、かさばるものではないぞ。奴等の糸だ、畳めば畳むほど小さくなる。」

彼等の心配とはやはずれたことを言い、信長は一人楽しそうだ。

「戦装束か……めっちゃめっちゃデザインに不安があるのはあたしだけか？」

「いや、心配すんなマンボウ、全員そうだから。」

北は肩を落として言い、梅本はそんな彼女の腕を軽く叩く。

魔王様直々のデザインだったらどうしよう、というのが心配のタネだった。

若き頃からエキセントリック傾奇者であつた信長、そんな彼から頂く装束……袖を通せるか不安である。まあ、そんな彼等の心配はさておき。

「早速旅支度をしてこい。資金の心配はするなよ……大人しく頼っておればよいわ。」

煙管の灰を叩き落とし、信長は悠然と言った。

「信兄つてさ、意外と良い奴なんだな！」

「意外と、は余計だ。」

にこにこ嬉しそうに笑う木下の額を、信長は容赦なく指先で弾く。

「何から何までお世話になってしまって……でも、正直助かります、ありがとうございます。」

痛い痛いといびい言う木下を、梅本が掴んで引きずって行くのを後目に、山中は深々と頭を下げた。

「なに、タダの暇潰しよ。装束が届いたら呼んでやるから、それまで城内で必要な物でも物色してるがいい。」

素っ気なく言い捨て、信長はそっぽを向いた。

六人はそんな信長の態度に苦笑しながら、彼の部屋を出ていった。

そこから、城内を練り歩いて支度を整える。

まずは一通りの物が入る葛を六つ。

火打ち石、折り畳み式行灯、万能小刀、薬入れと薬、着替え……。

「携帯やすぐに使うかもしれないものは、専用のポーチを作って、身に付けておいたほうがいいですね。」

山中の提案に、もっともだと頷き、お世話係の双子に裁縫の願いを出す。

裁縫には無縁の現代人、快くOKしてくれた双子に感謝しなければならぬ。

そうこうしていると、勝家がのっそりと現れ、戦装束のお届けを知らせてくれた。

「信長様が……呼んで、いらっしゃる……。」「
「来ちゃったぜマジで。」

ちよつと不安そうな口調で、梅本が呟いた。
しかし自分専用の戦装束、見たくない筈がない。
期待半分、不安半分な心持ちで、彼等は勝家の後についていった。

襖を開けると、畳の上に広げられた鮮やかな衣装が目飛び込んできた。

「……これ、僕達の？」

目を白黒させて、谷中は呻くように言った。

「ああ、そうだ。なかなか良いものだろう。」

手近な一枚を掴み上げて、信長はサツと広げてみせた。予想通り、派手だ。

「……とりあえず、着てみるか……？」

せっかく用意してくれた装束を、袖を通さぬまま葛にしまつてしまつのも憊びないので、小川の一言に頷く。

「きつと……似合う。」

「……やとええんやけどな。」

勝家の言葉に、北は力なく答えて。

「これ、けっこうカッコイイな。オレ、気に入ったぞ！」

「ご機嫌に言う木下の衣装は、漆黒とくすんだ赤の二色で、形は『西遊記』に登場する孫悟空のようだ。

「この虎皮？つばいのよく目立つね。僕、タイガースファンの人から喜ばれるかも。」

山吹色の上衣に、白いズボンに似たものを穿き、腰には虎皮の覆いを巻き付けている。

確かにタイガースファンが喜びそうな出で立ちだ。

「そこそこ動きやすい服ですけど、私の柄ではないような…。」

山中は、鶯色の着物に桜色の帯、松葉色をした細身の袴。これは意外と可愛い装いだ。

「……何か、どういふべきやろ、コレ。」

北は濃紺のノースリーブ型上衣と、膝丈のズボンに脛当て、そして碧瑠璃のケープを纏う。まるで忍者のようである。

「いやー、こりゃ毘沙門天みたいだな。」

梅本は明るい茶色と黄土色の衣装…なのか？

彼の言う通り、形は七福神の一人、毘沙門天を連想できる。

「…………赤い。」

小川は紅と朽ち葉色の、神主だか平安貴族だか、そんな形の衣装だ。

もともと黒が好きな彼には、恥ずかしいくらい派手である。

「さすが、女郎蜘蛛の見立てだ。似合っているではないか。」

信長はご満悦そうに六人を眺め、隣の勝家もうんうん、と頷いている。

「これもメイドイン妖怪なわけやな。」

どおりで伸縮性やフィット感がハンパないわけだ、と北は納得した。

これで旅支度に必要なものは、だいたい揃った。
あとは、移動手段である馬の到着を待つばかり。

十六の嘸 「思い立ったら即実行、って無理だろ準備とか多すぎるから。」（後

久しぶりの投稿です。

最近お仕事探しや体調不良で続きがUP出来ません……………（泣）

お仕事も見つからないし、踏んだり蹴ったりです。

えー、衣装に関してはテキストに想像願います、だって難しいんだよ考えるの……………。

今回は『考研、旅立ちの日へ』ですっ！

十七の嘶 「旅っていつても、旅行とかじゃないから。」

更に翌日、城に馬が届けられたわけだが、何やらトントン拍子に物事が進んでいく。

それはともかく、戦装束に続く魔王様セレクト第二弾、馬を目にした六人は、目が点になった。

「これ…馬だよな…。」

「馬なんじゃないの？」

小川と谷中はポカンとした顔で「それ」を見詰め。

「かつこいい！！スツゲエ！！」

「ヨーバって、そういう意味だったんですね。」

木下と山中は目を輝かせて。

「何でもアリかよ。ま、もう慣れたけど。」

「あたしは…あの馬がええなあ。」

梅本と北は感心したように吟味を始める。

期待どおり、馬は普通じゃなかった。

あるものは二本の角が生え、あるものは額にもう一つの目がある。ギラつく鱗のあるものや、明らかに顔が馬とはかけはなれたものもいた。

「これは妖馬。妖の…鬼の血をひく混合種です。なので持久力があるともあって、長旅には最適なんですよ。」

異形の馬を引き連れた光秀が、化物馬を紹介する。

信長曰く、彼女は妖馬の扱いに長けているらしいのだ。

「人慣れは十分にさせてある筈なので…どれでも好きな子を選んでもあげて下さい。」

光秀はそう言い、遠巻きに妖馬を見ている六人を手招きする。恐る恐る近寄ってきた彼等を、妖馬達はじっと見詰める。

「俺は…こいつがいい。」

最初に手を伸ばしたのは、小川だった。

選んだ妖馬は赤みのある鬣に、口元からは白い牙が覗いている。

馬は嫌がることなく、小川に撫でられていた。

「見た目が凄いけど、意外に大人しいんだな。」

その様子に安心したのか、梅本も気に入った妖馬に近寄っていく。彼が選んだのは、二本角の馬。

「あたしはこれやな。」

北は、鬣の代わりにヒレの生えた馬の首を軽く叩いた。

「僕はこの子にするよ。」

谷中は鱗のある、ワニに似た顔付きの馬を。

「私は、この馬を頂きます。」

山中は白い一本角の馬に歩み寄った。

「オレはこいつが好きだなっ！」

残る木下は、三つ目の黒馬をにこにこしながら撫でる。

旅の相棒が決まり、光秀から妖馬の世話をもう一度教わりなす。これで後は荷造りをきちんと済ませれば完了だ。

六人が安土城を発つまで、あと少し。

「これはここに入れるんか？」

「…火打ち石ってどうやって使うんだ？」

「瓢箪！オレの瓢箪はっ！？」

がやがや煩いことこの上ない荷造りタイムである。

お世話係の双子が作ってくれた、ウエストポーチらしきものに必需品を入れ、背負う葛には着替えその他諸々を詰め込む。

ちなみに、それぞれの神器はどうしているのかというと。

「神器って何でもありませんね。」

「だねー。こんなトコにしまえるとか、僕びつくりしたよ。」

山中、谷中の二人は早々に荷造りを終え、掌から電気と風を出現させる。

すると、そこからあの荷物としては大きさがあり得ないだろう神器が、スツと顔を覗かせた。

それぞれ能力を象徴する『モノ』から、神器を呼び出せるらしい。

「まるで召喚士になったみたいだよ。」

「その内、召喚獣とか喚べたりしますかね？」

のほほんと話していると、梅本から手伝ってくれ、と情けない要請が出る。

それを軽やかにスルーして、慌ただしく動き回る仲間達を眺めていると。

「失礼しますね。」

「「「お濃ちゃん！」」」

ひよこつと襖から顔を出した濃姫は、ごちゃごちゃになった部屋を見て目を丸くした。

「ごめんな、今ちよつとエライことになってるから。」

着物を葛に押し込もうと苦戦中の北が、唸るように言った。

「構いませんわ、すぐに済みますもの。少しだけよろしい？」

散らかった物を踏まないように気を付けて、濃姫は六人に近寄っていく。

作業する手を止めて、彼等は濃姫の周りに集まった。

「どうぞ。これを渡しておきたくて……。」

彼女の手から六つ、小さな巾着が手渡される。

それはずっしりと重く、金属が擦れる音から、中に何が入っているのか容易に想像がついた。

「これ…お金、か？」

木下が巾着を握り、濃姫を見上げる。

「少し重たいけれど……必要なものでございましょう？殿とわたくしからの餞別ですわ。」

につこり笑って言う濃姫に、慌てて山中が口を開く。

「とんでもないです……！こんなに沢山、頂けません！」

巾着を返そうとするが、濃姫はその手を押さえて頑なに離そうとしない。

「受け取って下さい。わたくしだって、貴方達にはお世話になったんですもの。それに、これは絶対必要になってくるものですから……」

そこから無理です、受け取れ、というやり取りが数回続いたが、ついに六人が根負けして恐縮しながらも巾着を受け取った。

「どうしても申し訳なく思うなら……いつかまた、わたくしのお買い物にお付き合いしてくださいな。」

濃姫はそう言い残して、部屋を出ていった。

六人は暫く巾着をジッと見詰めていたが。

「ま、貰えるモンは貰ったか。」

「ちったあ遠慮しやがれ、このど阿呆！！」

あっさりと巾着をしまおうとする北の後頭部に、木下の拳が炸裂したのであった。

何はともあれ、荷造りも終了していよいよ出立の日が訪れた。

「今までお世話になりました！」

「感謝の言葉ありません！」

信長を始め、城内から多くの見送りが来ていた。

「……精々努力して生き残れ。貴様等は元手がかかってるからな、その辺で死んだら殺すぞ。」

物騒な信長の激励に、引き攣った顔で苦笑した。

そこから口々に別れの言葉が、顔馴染みになっている重臣達や使用人達から送られる。

「…そう言えば、義元さんの姿が見えませんか？」

あの能天気な元・公家の姿が見えないことに気付いた山中が、辺りを見回す。
すると。

「ま、間に合ったおじゃ！」

慌ただしく義元が双子と共に走り寄ってきた。

「「ぎりぎりせえふですね！」」

双子の手には、何やら小さな包みが六つ。

「どうしたの、そんなにくたびれて。」

谷中が声をかけると、三人は息切れしながら六つの包みを押し付けてきた。中を開けると、大きなおにぎりが四つ入っている。

「…弁当、か？」

まじまじとそれを見て、小川が呟いた。

「お腹が空いたときにどうぞ。」

「特に木下様は必要なものでございましょう？」

双子はくすりと微笑んで言い、丁寧に一礼する。その隣に義元が並んだ。

「まるももう少ししたら、今川家に戻るつもりおじゃ。そちらともここでお別れ……達者で過ごせ。」

差し出された彼の手を六人は握り、妖馬に跨がった。

「……それじゃ……行ってきます……!!」「」「」

その言葉を残して、蹄の音も高らかに、妖馬達は一斉に走り出す。たちまち遠く離れていく六人の姿を見送り、信長は静かに息を吐いた。

「行ってしまわれましたね。」
「……ああ。」

濃姫が信長の顔を見上げ、そう呟いた。

「何故…配下におこうとなさらなかったのです？」

あの六人を手放した理由を濃姫は尋ねた。

もし、彼等がいつか国中に名を響かせるようになるなら…信長の前に立ち塞がるかもしれない。

そうなるなら、いつそ自分のものにしてしまったほうがよかったのではないのか。

しかし信長は首を振り、ニヤリとした笑みを浮かべる。

「彼奴がどこまでやれるか、楽しみではないか。いつか俺と対峙する日が来るかもしれないなら……それもまたいいだろう。その時には容赦せん。」

要するに、彼等の成長を楽しみにしているということだろう。

濃姫はやれやれと溜め息をつき、苦笑しながら六人の走り去った方向を眺めた。彼等の旅路の無事を祈って。

「ちょ、待つ、早い早い早い！！？」

「ストップ、じゃなかった、もつとゆっくりだっつーの！！！」

「はよ走りや、鬱陶しいな……下手くそ。」

「あのさ、何処に行くか考えてる？って聞いてないねー。」

「妖馬さんって、普通の馬に比べるととっても早いですね…！」

「しまった、おやつ持ってくるの忘れたぞっ！？」

六人六色、アホなことを口々に言いながら、気の向くままテキトーに走っていく。

縦横無尽、しかし五里霧中。行く先は駆ける馬の気の向くまま、彼等を乗せて何処へ行く？

十七の囁 「旅っていつでも、旅行とかじゃないから。」（後書き）

やっと旅立てました！

ここまでくるのに結構時間かかりましたね・・・。

そろそろペースダウンが目立ちます、多分次があがるのも少し先になる予定です。

でも気長に待つてあげてください、ハイ。

ではまた次回！

十八の嘶 「実戦、そして人助け……戦国は気忙しいネ。」

さて、魔王様の城を離れて、この世界をふらつく旅に出た六人。
颯爽と妖馬に跨がり城を出たはいいが。

「なあ、これから何処に行く？」

目的地など定まらぬ旅路だ、何処に行くかはその場のノリと勢い
だけで決まる。

「一応、西にも東にも行けますけど……私は甲斐に行ってみたいで
すね。」

山中は片手だけで手綱を握り、器用に懷から地図を取り出した。
絵の上手い谷中に頼んで作ってもらった、特製日本マップだ。

「甲斐といえば、武田信玄だね。」

「お館様ー！お・や・か・た・さ・まー！！」

谷中の一言に、木下が大はしゃぎし始める。

彼女の好きな武将の中には、武田信玄が上位にランクインしてい
るのだ。

「甲斐か……。俺は別に、何処でもいい。」

「じゃあまずは甲斐だね。」

小川がそう言えば、谷中がパシリと地図中の甲斐を指先で弾いた。
ところが、皆は北の一言に再び沈黙することになる。

「……道、誰もわからんやん。」

甲斐へ行く道を、人間を見つける度に尋ね進むこと数時間。
今六人は、山越えの真つ最中だった。

「ここを道に沿って行けば赤力ブ村があるんだっけ？」「蕪木村だ。」

森林浴を楽しみながらボケる木下に、小川が村名を言い直した。

「そう言やあ、ちょっと前に道聞いた人が言ってたなあ。この辺、盗賊がよう出るって。」

唐突に、薄笑いを浮かべながら北が口を開いた。

「そうですね。何でも、集団で取り囲んで相手を襲うとか。」

山中の顔にも、ブラックな微笑みが浮かんでいる。

「確か倒せば金が貰えたよなあ……！」

背後から何かが自分達をつけてくるのを感じて、梅本が聞こえよがしに叫ぶ。

「腕試しには丁度いいよね……そいつら。」

谷中がピタリと馬を止めるや否や、掌から出した雷から神器を呼び出し、振り向き様に矢を放った。切っ先に帯電させた雷が、金色の尾を引き飛んでいく。

それを合図に、残る五人も次々に神器を呼び出した。そんな彼等の目の前にバラバラと現れたのは、檻褸同然の着物を着た男達。

「おまえらがこの辺を荒らす盗賊だなっ！！！」

影蜈蚣を構え、威勢良く木下が男達を睨み付けた。

下品な笑みを顔中に張り付けた男達は、六人の煌めく神器に目が釘付けになっている。

「大将、こいつら神憑きだぜ…あの武器、高く売れる。」

大将、と呼ばれた男は見上げるような巨漢で、質素な胴丸を身に付け、手には戦斧を握っている。

「いかにも、俺はここの一帯を縄張りになっている大盗賊、黒蜘蛛様よ！テメエら、命が惜しけりゃその神器を置いていけ。」

ガハハハ、と在り来たりな笑い声とセリフを吐き、盗賊・黒蜘蛛は完全に舐めきった目で六人を見る。

「黒クモ…？」

盗賊っぽい名乗りを上げる黒蜘蛛に、小川はボソツとその名を反芻する。そして。

「ダセエ……片仮名で書くと尚ダセエ……。」

「まあ、言えとるわな。恥ずかしい野郎やなーあいつ。大盗賊とか自分で言っちゃってるトコとか特に。」

小川と北は、哀れみをたっぷり含んだ視線を向けた。

「しかもあのオッサン、全然クモっぽくないぞ。オッサン、名前変えた方がいいんじゃないのか？」

木下は親身になって提案してやる。

当然、黒蜘蛛は額に青筋を浮かせて怒鳴った。

「やかましい！！ふざけた餓鬼共だ、神憑きがデメエらだけと思っ
な！！！」

黒蜘蛛の背後からユラリと立ち昇る熱。

「火の神憑きですか。でも……大丈夫ですね。」

不敵に呟く山中は、鋭利な眼差しで戦闘体勢に入る。

「そんじゃ、いっちょ腕試しと行こっか。」

「やっぱ見たいよな、自分の武器の具合ってヤツをさ。」

興奮を隠しきれない声で、唸るように谷中と梅本は言った。

安土城で骨の髄まで叩き込まれた武術の成果、そして大切なパートナーである神器の実力、それを発揮するときが来た。

気持ちが高ぶるのは、やはり武人としての感覚が出来上がってきたからだろうか。

しかし六人を「たいしたことない神憑き」としか見ていない盗賊達は、彼等の目付きが変わったことに気付かない。

今までか弱い獲物ばかりを狙い、それで成功を納めてきた連中である。加えて自分達の大將は神憑きで、敗け知らずときた。

その自信の上にあぐらをかき、ふんぞり返っているのは当然のことだ。

「やつちまえ！」

蛮声が響き渡り、一斉に男達が襲いかかってくる。黒蜘蛛の他にも神憑きがいるようで、風が巻き起こり、雷が弾ける音がする。

「れつつ・ぱーりいー！！！」

Y A—H A！と某六爪流の使い手の掛け声を真似して、真っ先に木下が突っ込んでいく。

「こら、勝手に走るなって！」

慌てて梅本が後を追いつ、残る仲間も続いて走り出す。

「死ねええええ！！！」

白刃を振り下ろそうとする男の顔面目掛けて、木下が影蜈蚣を叩き込む。

所々錆の浮いた刀は、しなやかで強靱な打撃に脆くも折れ、男は手加減ナシの一発に引っくり返った。

さらに影蜈蚣を振り上げると、背後から真っ黒な影がぬうっと立ち上がり。

「ぶっ飛ばせっ！」

楽し気な指示に従い、そこからドスドス飛び出る影の槍が、次々と盗賊達を突き飛ばす。

意気揚々の木下だが、その背後を雷の刃が狙う。

「後ろからは感心せんなあ。」

雷の神憑きである男の真横から、旋棍・風鯨の強烈な突きが脇腹に打ち込まれ、同時に水流が放射線状に唸りを上げて飛ぶ。

「さんきゅ、マンボウ！」

「おう。にしても楽しいなあ、コレ。」

ニヤーツと二人は口元を歪ませ、次なる獲物を探した。何やらスイッチが入った彼女等を眺めつつ、山中、谷中の二人も問答無用で暴れていた。

「いやあ、Sモード入っちゃったねえ……ほいっと！」

矢を無駄使いたくない谷中は、腰に吊り下げた小袋に入っているパチンコ玉程度の鉄球をビシビシとぶっ放つ。

それだけなら大したことないが、放つ玉全てが稲妻を纏って飛ぶのだ、当たればタダではすまない。
たとえ接近されても。

「まずは何ボルトから行こうか!？」

大弓・電王がスタンガンよろしく、バチバチと青白い電流を相手に叩き込む。

「目障りですね、私殺意が湧いちゃいました。」

山中は鉄扇・舞風を開き、鎌鼬と共に、踊るように盗賊を切り裂いて行く。

開けば刃に、畳めば鈍器にもなるこの神器は、その可憐な見た目にもよらず、十分に頼れる武器だった。

巻き起こされた風は多くの旋風となり、吹き荒れる。

「……死なせたりしないだろうな。」

「そこらへんはわかってんじゃないか？ あいつらだってバカじゃないから。」

黒蜘蛛の前に立ち、小川と梅本はやれやれと肩をすくめた。

「な……何だデメエら！ な、何者なんだ！？」

ポイポイ宙を舞う呆気ない子分達の姿を目の当たりにし、先程までの自信が崩れた黒蜘蛛は、上ずった声で叫んだ。

「……何者と言われても、返答に困る。」

「だよなあ。考古学研究会メンバーですって言っても、わからないだろうし。」

二人は顔を見合せ、うーんと悩む。

「……それは後に回すか。」

「まずは、コイツの始末からだな。」

長太刀・陽炎丸と大槌・地国天を構え、黒蜘蛛を見据える。

「ほっ、ほざけー!!」

余りにも余裕そうな表情に、黒蜘蛛は焦りと意地からか戦斧を掲げ、猪のように突進してきた。

ブン、と空気を切って戦斧が振り回される度に、炎が勢いよく吹き出す。

しかし。

「オッサン、大振り過ぎだ。」

攻撃をかわして、地面に屈み込んだ梅本が、下方から地国天を振り上げ戦斧を弾く。

金属同士がぶつかる耳障りな音が響き、黒蜘蛛の足下からせり上がる土の壁が彼のバランスを崩した。

「王子、いいぞー！」

バネ仕掛けの床に引っ掛かったように、宙に放り出された黒蜘蛛。そこに同じ手法で飛び上がった小川が、陽炎丸を抜刀して迫る。何事か喚く黒蜘蛛から、炎が沸き上がり小川を狙うが。

「威力は……俺達よりも下か。」

陽炎丸は逆にその炎を刀身に取り込み、黒蜘蛛を一刀の元に切り捨てた。

鮮やかに着地した小川の後ろに、ドシャツと落下する巨体。

「オレ達の勝ちだっ！！」

「良い出だしやな。」

うず高く積み上げた盗賊の上に立ち、木下が北とハイタッチを交

わす。

「ああ、スッキリしました。」「同じく以下同文。」

武器の汚れを拭いながら、山中と谷中は晴れやかな顔で笑いあう。彼女達の周辺は気絶した盗賊達がバタバタと倒れ、その中でこやかに立つ女四人は、さぞかしおっかないだろう。

「皆、大怪我させてないだろうな？」

「俺達が言つか、それを……？」

多分、一番相手に大怪我をさせているだろう自分達を棚に上げて確認をとる梅本に、小川が静かに突っ込んだ。

「大丈夫だつて、かるーい切り傷だ切り傷。」

あっけらかんと梅本は言い放ち、軽い蹴りを黒蜘蛛の脇腹に入れる。

「う………何で……こんな餓鬼が……こ、ここまで高位な……力を持つてる……？」

身体を苛む痛みよりも、驚きのほうが強いのだろう。黒蜘蛛は呻きながらもそんな言葉を吐き出した。

「あたしらの知ったことか。強いて言うなら、魔王様のお陰かな。」

冷たい視線で黒蜘蛛を見下ろし、北は鼻で笑う。

「魔王………！？ま、まさか……六武衆つてのは………テメェらのことか

…!？」

「ろくむしゅう?」

なんだそりゃ、と顔を見合わせる六人。

「ま、魔王の戦に…いきなり現れて…何人もの敵兵を…叩き潰し…将位の神憑きですら、一撃で倒した…六人の神憑き…!？」

「「「いやいやいや、違うから。かなり無理矢理感溢れてるから、それ。」「」」

物凄く尾ひれが付きまくった話に、六人は手をぶんぶん振りながら否定した。

だが、当たらずと言えども遠からず。

「多少は当たりですけどね……。」

山中は苦笑いを隠せない。それもそうだ、まさか自分達に『六武衆』なんて、大層ご立派な通り名が付けられているとは思わない。

黒蜘蛛と言え、とんでもない連中に喧嘩を吹っ掛けてしまったと、顔を真っ青にして縮こまっている。

「で、どうするコレ?埋めるか?」

「アホか、埋めてどーすんだよ。」

「じゃあ、狗の餌にしますか?」

「それも却下だ!」

黒蜘蛛を取り囲み、冗談だか本気だかわからないやり取りを繰り返す。

「わ、わ、悪かった!許してくれ、頼むこの通りだ!もう足を洗う

から、命だけは――！」

地面に額を擦り付けて、黒蜘蛛は必死に謝りたおした。

「そんなの僕達に言われてもねえ……じゃ、洗えばいいんじゃない？その方が良いし。」

興味無さそうに言う谷中に、黒蜘蛛はとりあえず死ぬことはないようだ、と胸を撫で下ろした。

「と、ところで……アンタ達の腕を見込んで、頼みたいことがあるんですが……。」「……はあ？」

恐る恐る六人を見上げて、そう切り出す黒蜘蛛に、彼等は首を傾げた。

「あれやな、例の小屋って。」

藪に身を隠し、六人は草や苔でカムフラージュされた低く小さな小屋を観察する。

「あの中に、得体の知れないモノがいるっていう話でしたよね？」

山中は藪から少し身を乗り出し、巧みに隠された小屋を眺めた。

「さて伊賀出身の殿下さん、あの小屋は何小屋ですか？」「忍小屋

じゃない？」

木下の問いかけに、谷中があっさり答える。

忍小屋——文字通り忍が使う小屋である。

普通の山小屋のようなものもあれば、この小屋のように隠されたものもある。中には忍の使用する武器や薬なんかが置かれているが、その場所もちよつとやそつとで見つかる所にはない。

で、黒蜘蛛の頼みとは何なのか？

それは……。

「ちよつと前に、偶然子分が見つけたらしいこの小屋……その中に入った奴が死体で見つかった、だっけ？」

「……以後、三人の子分が同じ目に会い、内部を搜索したが誰も見当たらず。」

梅本と小川が黒蜘蛛に聞いた話を繰り返す。

「で、コレは化け物の仕業やと思うから、強ーいあたしらに、中におる化け物を退治して欲しい、か。」

最初はめんどくさいと断った六人だが、礼は弾むという言葉にころつと態度を変え、俄然やる気で調査を始めた。

旅の心得その1、金の執着は貪欲に意地汚く。

「忍小屋ってことは……中にいるのって多分、忍さんでしょうか？」

「化け物ちゃうやん。」

山中と北は呆れたように言い、盗賊達の意外な臆病さを嘲笑った。

「……まずは中に入らないとな。どうする、梅が先頭を切るか？」
「何で俺なんだよ。」

「お前の武器が一番デカい。忍の武器なら小さいから、十分ディフェンス面では頼りになる。」

小川はもつともらしいことを言い、ジーッと梅本を見る。
ところが、谷中が異論を唱えた。

「そうだね。でもはたして武器は本当に小さいかな？神憑きなら、武器の大きさになんて関係ないんじゃないの？」

「……あ。」

その不穏な発言に、皆は一斉に彼女の方に顔を向ける。
うっかり失念であるが。

「梅ッ、お前なら出来る！！」

「やれば出来る子だお前は！！」

「うるせえ！！遠巻きに応援すんなデメエら！！」

ちよつと離れた場所から、フレ、フレ、と手を振る仲間達に、
苛つく梅本は怒鳴った。

勿論小声でのやり取りだ。で、しばらくの間、行け、嫌だの言い
合いが続き、結局「赤信号、皆で渡れば怖くない。」作戦に落ち着
いた。

つまりは、全員でそろそろと近付いて行くということだ。
余計に危険ではないのか、考研。

「……ってかさ、もし忍ならもうとつくに感付かれてんじゃないの？」
「……もう何も言っな、ワケわからなくなる。」

木下から目を反らし、梅本は溜め息をついた。

全員で固まり、そーっと、そーっと……。攻撃、未だ来ず。

先頭の梅本が、小屋の入り口らしきところの草を細心の注意を払って退ける。やっぱり、攻撃は来ず。

そこを押し合い圧し合いしながら、覗き込むと。

「怪我人……怪我人!？」

粗末な壁にぐったりともたれ掛かる黒装束が見え、血の染み込んだ土の床が視界に飛び込んできた。

十九の嘶 「飯喰えば 元気になるなる 忍なら。」

慌てて六人は駆け寄り、動かぬ黒装束の身体を抱えた。

「ミナちゃん薬！早く薬用意して！」

「マンボウと王子と梅はお湯だぞっ！」

谷中と木下が同時に叫び、黒装束の上半身と覆面を引ん剥く。

現れた顔は、自分達より年下であるう少年。

山中は腰の入れ物から傷薬の壺を掴み出し、軟膏を掌に落とした。

「応急措置はしてあるみたいですね。」

傷に軟膏を擦り込みながら、山中は素早く具合をチェックする。

「そりゃ忍ならね。チロちゃん、包帯そっちに大きいのあったっけ？」

「あるぞ！サラシもいるよな。」

谷中に包帯を渡し、更に木下は折り畳んだサラシも引っ張り出す。

「えーっとおー……あつた、鍋！」

梅本は小屋中をガサゴソして隠された鍋物を見つけ。

「水はこんなもんやな…王子、火。」

「わかった。」

能力を使用し、北は水を入れ小川は火を起こす。

旅の心得その2、怪我の対処はテンポよく。

「よし、出来た!!」

「手当て完了!!」

「お薬も十分足りましたね。」

綺麗に包帯を巻き、満足げに手当てチームが頷く。

「こっちもお湯沸いたぞ。」

「……部屋も暖まるな。」

「白湯でも飲ませるか?」

湯沸しチームもOK、少しずつ小屋の内部が暖まってきた。

「……う……。」

「あ、起きた。」

微かな呻き声が聞こえ、少年が目を覚ましたことに気付く。

全員で周りを取り囲み、もしものときに備える。

少年の虚ろな目が、ぼうつと彼等の顔を捕え…ハッと光が戻る。

「……!!?」

「そら押さえる!!」

暴れだそうとする少年を六人がかりで押さえ付け、素早く彼の口の中にサラシを突っ込み舌を噛み切られないようにする。

モゴモゴ呻き、シタバタする少年に、六人は代わる代わる声をかけた。

「…落ち着け!」

「何にもしないからさ！」

「あたしら敵ちゃうで！」

「傷に響くよ！」

「暴れないで下さい！」

「オレ達が手当てしたんだぞっ！」

必死に話しかけて、何とか理解してもらおうと尽力する。
やがて疲れが出てきたのか、少年は息を切らしながら動きを止めた。

「ふう……もう暴れるなよ。頼むから。」

流石に全力で押さえ続けるのは、六人がかりでもキツイ。
梅本は溜め息をつき、少年に言い聞かせるように言った。

「オレ、飯の用意する。お湯もあることだし、貰ったお握りで雑炊でも作るぞ。」

少年の足から手を離し、木下は湯気の立つ鍋に向かった。
そして全員分の葛からお昼御飯のお握りを出すと、沸き立つお湯の中に全部放り込む。

「たしか味噌は……あつたあつた!!」

「何で持ってたんだお前は。」

用意周到とはこのことだ。木下はウエストポーチタイプの袋を漁ると、味噌を入れた袋を掴み出した。

「これな、凄いいんだぞ。乾燥させた味噌をタブレットにしてるんだと！」

袋の中から摘み出したのは、成程確かに味噌タブレット。
これを鍋に入れ、かき混ぜて溶かすと……。

「出来たー！名付けて「味噌が効いてるねでも具がないのがちょっと悲しい雑炊」だ！」

「タダのねこまんまじゃないのかそれ。」

時々入る突っ込みをスルーした木下は、葛の中に入っているご飯セットを取りに小屋の外に出ていった。

「もう暴れない？」

じつと自分達を見る少年と目を合わせ谷中が尋ねると、少年は暫くの躊躇の後、微かに頷いた。

「よし、じゃあ外してあげるね。」

手を伸ばし、口に突っ込んだサラシを引き抜き、同時に押さえつけていた身体を離してやる。

少年は山中に背中を支えて貰いながら、ゆっくりと上体を起こした。

そして何か言おうと口を開いた時。

「くおらこの梅干しとや二中野郎！！テメエらなあ、自分の持ち物ぐらいちゃんと整理しやがれ！！茶碗と匙探すのに、どんだけ時間かかったと思っただああ！？」

足音荒く木下が入り込んできて、梅本と小川に茶碗を投げつける。

「ちょ、投げるなよチ口！」

「…割れたらどうするんだ！」

「知るか！雨水でも啜ってる！」

茶碗をナイスキャッチして文句を言う二人を一喝して、木下は目を丸くして自分を見ている少年にハタと気付いた。

「お？何だやつと離してもらったのか。ちょっと待ってるよ、今飯入れてやるからな。」

鼻歌を歌いながら、茶碗に雑炊をよそっていく。
それを後目に、少年は再び口を開いた。

「怪我の手当て、真にありがとうございます。私は……辰市と申します。」

忍の本名は明かさないのが決まり。

多分偽名だろうが、六人は特に気にした様子もない。自分達もそれぞれ名乗ると、木下が茶碗を各自に手渡した。

「しょーもない飯だけど、喰わないよりはマシだろ。怪我人は一杯喰えよな。」

山盛りに雑炊の入った茶碗を渡すと、辰市と名乗った少年は丁寧に頭を下げた。

「ありがとうございます。」

「あんたがずーっと見とった通り、毒なんぞ入っとらんからな。」

早速雑炊を掻き込み、北は匙で辰市の茶碗を示した。辰市は一つ

頷くと、恐る恐る雑炊を口に流し込んだ。

「……っ！」

一口食べて、そこから一気にガツガツと食べ始める。その様子を見届け、六人も食事を再開した。

「それで、辰市さんは何処から来たんですか？」

食器を北に洗わせて、五人は改めて辰市の周りに集まる。

山中の質問に辰市は、少し黙り込んだ。

忍という職業上、あまりペラペラと自分のことを喋るわけにはいかない。しかし。

「俺達は全国をフラフラ見て回る旅の途中でね。これから甲斐に向かう予定なんだ。」

梅本の言葉に、辰市の顔に微かな反応が見えた。

「甲斐に、でございますか……？」

（（かかった。）（））

ニヤリと全員が内心で笑った。

恐らく辰市は甲斐の人間。これで甲斐への道案内が出来るというわけだ。

最初は、シメあげた盗賊の誰かにやらせようと思っていたが、小

汚ないし見映えもよくないし、何より嫌な噂を立てられなくなかった。

「……もしかして、甲斐の人間か？」

小川が確認の為に聞き返せば、辰市は曖昧な態度をとるだけだ。それにムツと顔をしかめて、木下が嚙みつく。

「何だよ、ハッキリしねー野郎だなっ！オレ達、別に盗賊とかそんなのじゃないぞー！変な勘ぐりすんな、アホー！」

「それにや。あたしらは、甲斐への道がわからんで困ってるんやで？ちよつとくらいお礼してくれても、バチは当たらんと思うけど。」

洗い物が終わったのか、手を拭きながら現れた北も応戦する。

続いて谷中と山中の二人も。

「案内くらいしてくれてもいいと思うけどなー。僕達、そんなに怪しく見えるわけ？わー失礼。」

「だいたい貴方が何であろうと、私達には関係ないことです。」

女性四人に次々と責められ、辰市は困ったような顔で視線をさ迷わせた。

「いえ、あの、その……」

どうしたものか、と言いたげな辰市の肩を、ガシツと掴むのは小川と梅本。

「……当然、案内してくれるよな。」

「得たら返す、当たり前のことだよな。」

ニイツと笑い、全員がジリジリ詰め寄ってくる。
凄く眩しい笑顔が、妙に怖い。

「わ、わかりました……！やります、やらせて頂きます！」

怪我の手当てを受け、飯まで食わせてもらったのだ、立場上嫌だと言えない。

自分が忍という事実がちょっと困るが、恩を仇で返すと、「あのお方」がきつとお怒りになるだろう。

溜め息について、辰市は目の前の六人を眺めた。

変か普通か、と聞かれれば、間違いなく「変だ」と答えるだろう。一体、どういう素性の人間だろうか。

着物や持ち物の質から、農民や商人ではなさそうだし、かといって武士や忍でもないだろう。

「よし、それじゃ王子の着物貸してやれよ。」

「……何で俺のヤツなんだ？」

「お前の背丈が一番ぴったりっばいから。」

梅本は辰市を指さし、小川はまじまじと自分と彼とを見比べる。

「……葛は？」

「小屋の外の道です。」

山中がそう言えば、小川はやれやれと言いたげに着物を取りに行く。

「申し訳ありません……私のような者が着物をお借りしてしまって甲斐まで辿り着けば、ちゃんと新しい着物を買いますので……。」

忍とは本来「汚れ役」である。それ故、汚らしい者として扱われるのだ。

辰市は深々と頭を下げようとするが、即座に頭を押さえられた。

「何言ってるのさ、良いってそんなに縮こまらなくて。アレはもとからああいう性格なんだ、気にしなくてもいいよ。」

谷中は苦笑しながら頭を上げさせ、辰市は目を丸くして彼女を見つめた。

「……何やってる？」

「別にー。ほら、さっさと渡す渡す。」

戻ってきた小川は、首を傾げながらも着物を辰市に投げ渡した。

「じゃあ、私達は外に出ていますので…。着替え終えたら呼んで下さいね。」

「二人とも手伝ってやれよー。」

女性陣は小屋を出ていき、残されたのは男三人。

「さて、じゃあ着替えるか。辰市だっけ、お前身体は大丈夫か？」

「…無理なら手伝うぞ。」

そんな二人の申し出に、辰市はぶんぶんと首を振った。

「そ、そこまでして頂く必要はありません！私は大丈夫ですので…。」

「

随分と慌てたような様子を見て、二人はあっさりと引き下がった。そりゃそうだ、会って間もない他人に、着替えを手伝ってもらいたくはない。

辰市は出来るだけ素早く着替えを済ますと、自分の脱いだ装束を畳んでしまう。

「お待たせいたしました。」

「…そんなに待ってないがな。」

ぼーっとしていた二人が振り返る。

小川の着物は彼に丁度いい大きさのようだ。

そして、いいタイミングで外から呼び声がした。

「終わったんか？」

返事の変わりに、辰市を連れて小屋の外に出る。

「おお、着丈も全然問題ないな。怪我は大丈夫か？」

「はい、お陰様ですっかり動けます。」

心配そうな木下に、辰市は微笑んで言った。

「あ、そうだ。案内してもらった前に、黒蜘蛛のオジサンに報告しないかね。」

「えー…メンドイ。」

思い出したように谷中が言うが、周りは乗り気ではなさそうだ。そのまま放って行けばいいじゃないか、という意見があがるが、谷中は首を縦に振らない。

「忘れたの？礼金」

「「「よし行こう。」」」

最後まで言わないうちに、即座に態度を変える。
素晴らしい変わり身の早さである。

「あの、何の話でしょうか？」

辰市の問いに、北は手をヒラヒラさせて一言。

「こつちの話や、気にせんとき。」

説明するのが面倒だし、何かややこしいことになればもっと面倒くさい。

辰市は北の素っ気ない態度に、素直に引き下がる。

「それじゃあ、黒蜘蛛さんのところにいきましょうか。」

「りょーかい。」

生い茂る草や木を掻き分け、やっと自分達の馬が待機している場所
所に到着する。

荷物は馬の側に置きっぱなしだが、見るからに普通とはかけはな
れた姿の「妖馬」に近付こうとする物好きは、そういない。

「ただいまー写楽！荷物番ありがとな。」

真っ先に木下が三つ目の愛馬に駆け寄り、首筋を撫でてやる。

「写楽？」

梅本が聞き返すと、木下は嬉しそうに頷いた。

「いい名前だろ！三つ目なだけに、写楽にしたんだぞっ！」

「僕は黄麟にしたよ。この子、麒麟に見えなくもないしね。ちなみに女の子だった。」

「私は白竜にしました。」

よしよしと、谷中と山中の二人も愛馬を愛でる。

「……俺は、赤兎にする。」

「何を張り合ってたんだオイ。そしてまさかの赤兎かよ。」

その様子を見ていた小川がさかさ言い、呆れたように梅本が突っ込んだ。

「あたしは…そうやな、翡翠にするわ。ヒレが翡翠みたいやし。」

何やら次々にお名前披露会が始まっている。

「梅は何にする？」

「んなもん後でもいいだろうが！」

とりあえず話を進ませようと、苛々しながら梅本は急かすが、何やら服の袖を引っ張る力を感じて振り向いた。

すると彼の袖をくわえて、ジッと自分を見つめる愛馬の姿。

妖馬は知能が高く、人語を理解出来るらしいのだ。どうやら自分

にも名前が欲しいらしい。

「あー、わかったよ！わかったからそんな目で見るなって！」

溜め息をつき、梅本はしばらく考えたあとポツリと呟いた。

「……地角、でいいか？」

真っ黒な瞳がクルリと動き、馬はたちまち袖を離した。

「ほら見ろ、喜んでるじゃんか。」

どことなくご機嫌そうな梅本の馬を見て、木下は笑う。

「はいはい、もう行くぞ。辰市さん、悪いな。」

地角を従え、梅本はなかなか話が進まないのを辰市に詫びた。

「い、いえ。私は大丈夫です。」

謝られたことに戸惑いながらも、辰市は六人の観察を続けた。妖馬、しかもかなり質のいい妖馬を持っている。

何処か良家の出身なんだろうか？

だが彼等のおちやらけた雰囲気、その考えをぶち壊す。

辰市は黙ったまま、六人の後に従ったのであった。

十九の噺 「飯喰えば 元気になるなる 忍なら。」 (後書き)

やっと更新できました！

ホントにペースダウンしちゃってすみません・・・。

なかなか進めにくくて(汗)

次くらいから甲斐に突入出来るかと思います。

二十の噺 「つつじって、漢字で書ける人いる？」

小屋を後にして、黒蜘蛛の元に戻る六人＋忍。彼等の帰りを今か今かと待ちわびていた黒蜘蛛は、六人の後ろにひっそりと立つ辰市に目を向けた。

「ど、どうですかい、大将達。化け物は……？」

「ああ、それコイツ。」

梅本は辰市を指さし、黒蜘蛛は目を見張った。

「こ、こんなガキが！？」

仰天した声が響いて、六人はやれやれと肩をすくめた。

「手負いの忍が潜む忍小屋に、不用意に近付いたあなた方の不運を嘆くしかありませんね。」

そう言う山中の背後で、辰市が合点のいった顔をする。

「……で、俺達はもう行っていんだよな。」

いい加減、こんなむさ苦しい所にいるのは飽きた、と小川が眉を寄せる。くるっと全員が背を向けようとすると。

「ま、待ちやがれ！そのガキは置いていけ！」

いきなり黒蜘蛛が叫び、六人は面倒くさそうに視線を向けた。

「何で置いて行かなきゃなんないんだ？」

木下の問いに、黒蜘蛛はギャアギャアと喚きたてる。

「そいつは俺の子分を三人も殺したんだ！そいつだけはぶっ殺してやらねえと、俺の気がすまねえ！！」

彼の言い分を、六人は鼻で笑い飛ばした。

「よう言うわ、義賊ならともかく、お前らどない見ても悪党やないか。」

「今まで何人殺したか知らないけど、それはちょっとムシの良すぎる話じゃない？」

北と谷中は顔を見合せ、嘲笑する。

「……仲間想いなのはいいが、自分の行いを見直してからそういうことを言うんだな。」

不快感を剥き出しにして、吐き捨てるように小川は言った。

うつ、と言葉に詰まる黒蜘蛛を厳しい目で一瞥し、六人は再び背を向けてその場から立ち去った。

さて、六人は辰市の案内のもと、甲斐を目指す。

今日の目標は、今夜の宿代わりに利用する蕪木村まで辿り着くことだ。

「カブキ村は、何か美味しいものあるかな？」

「蕪木村だ。」

やっぱり村の名前を間違える木下に、小川の訂正が入る。

「蕪木村は…そうですね、猟師が多く住んでおりますので、山鳥や猪が美味しいかと。」

律儀に答える辰市に、周りは苦笑を隠せない。

「辰市さん、ちゃんと掴まってるよ。落馬したら笑えないからな。」

梅本は相乗りしている彼の身体を、小まめに気遣う。

「はい、大丈夫です。梅本様こそ、窮屈にしまして申し訳ありません。」

辰市に深々と頭を下げられ、逆に梅本は面食った。

「いや、別にいいけど。」

そこまで丁寧な謝らなくても、と思うのだが、やっぱり忍と言う身分故か。

とまあ、ほのぼの進んでいると。

「しまったああああ！！？」

「うおっひょい！？」

いきなり木下が絶叫し、驚いた北の口から何か妙な奇声があがる。

「礼金巻き上げんの忘れうぶっ!？」

「うるせえ守銭奴!!」

すかさず梅本が手拭いを投げ、見事に彼女の顔面にヒットする。

「梅ー、手拭いに石入れちゃ駄目だよー？」

「雪合戦じゃ反則やな。」

谷中、北・・・そういう問題ではないと思う。

「イツテエなこの野郎!オレ一応女!」

「ええ!?女性の方なんですか!？」

「酷いよタツちゃん!？」

もう何もわからない。

……一度仕切り直して、テキパキと予定通り一行は蕪木村に到着した。

「肉!久しぶりの肉ですよマンボウさん!」

「……猪と鹿やな、チロさん。」

蕪木村の村長は、七人を快く泊めてくれた。

事前に宿代として渡したお金の力もあったせい、その日の夕飯は牡丹鍋と焼き肉(鹿肉)というデラックスコースを頂けたのだ。

「やっぱ、肉もたまには食べないと物足りないね。あ、王子

水ちよーだい。」

もぐもぐと肉を咀嚼しながら、谷中は王子に渡された水を煽った。

「辰市さんも食べてますか？」

焼き肉を摘まみ、山中は居心地悪そうに座る辰市に話しかけた。

「あ……はい、ありがとうございます。」

「そんなに固くならなくてもいいのに。やっぱり忍って扱い酷いの？」

辰市の強張った様子を見かねて谷中が問えば、少しの迷いの後彼は答えた。

「いえ……そういうわけではないんです。私のお仕える方は、忍には大層寛大な方で、大切にしてくださいます。ですが、何分にもこんなに大勢と食事をとることは初めてなので、やはり緊張してしまつて。」

照れるように辰市は俯いた。

「……じゃあ、貴重な体験だな。」

玄米の上に肉を乗せ、小川は即席肉丼をかつ込んだ。この時、全員が予想した辰市の「お仕える方」とは。

（（（武田信玄だつたりして…？）））

孫子兵法の言葉、「風林火山」を旗印に掲げた、戦国一の武将。

その通り名は『甲斐の虎』である。

虎と呼ばれるからには、さぞや猛々しい人物かと思いきや、身分がずっと下の忍を大切にするなど、寛大でおおらかな精神を持つ武将だ。

「優しい人ですね。辰市さんは、いい人にお仕え出来て良かったですね。」

山中の言葉に辰市はこくりと頷いたあと、意を決したように真面目な顔付きになった。

「あの、甲斐にお着きになったら……宿は決めておられるのでしょうか？」

六人は首を横に振り、決まっていなことを告げる。
すると、辰市はよかった、と呟いた。

「何がよかったんや？」

「いえ、こちらの話ですからお気になさらないで下さい。」

北が首を傾げるが、辰市は素知らぬ顔で牡丹鍋に手を伸ばすのであった。

翌日、村人に丁寧にお礼を言つて蕪木村を出た。

その後、三、四日は村を見つけては泊まらせてもらったり、野宿したりしながら進んでいった。

「さすがに……いい加減、風呂に入りたいんだが。」

呻くような小川の言葉に、無言で六人は頷いた。

毎日濡らした布で身体を拭いてはいるのだが、やっぱりお風呂が恋しい頃合いである。

「あー、髪ネチネチやし。」

特に北は髪が長いので、気持ちが悪そうだ。

「もう少し我慢して下さい。今日中に到着すると思いますので……。」

辰市の励ましに緩慢な動作で六人は頷き、疲れたように溜め息をついた。

ようやく待ちに待った甲斐へと到着したのは、ちょうど昼を過ぎた頃だ。

「やっと着いたぜこのやろー!」

「風呂があたしを呼んでるぜばかやろー!」

さっきまでダダ下がりだったテンションがグンと上がり、木下と北が阿吽の呼吸で叫び出す。

「静かにしろよ、恥ずかしいだろ!?!」

現代にいた頃もこの世界でも、彼の役割は変わらず「保護者」のままだ。

「あの、宿のお話なのですが……。」

遠慮がちに辰市はあるお願いを六人にしてみた。

「私に少し時間をくれませんか？是非お招きしたい「宿」があるんです。」

「それってお金いくら？」

すかさず谷中が問う。

どれだけ懐が潤っていても、ムダに高い宿には泊まらない。

「……うまく行けば、格安で泊まります。」

うまく行けば、という言葉が引つ掛かるが、それよりも格安という言葉が魅力的だ。

しかし、その宿が何処にあるのかということは、六人が何度尋ねてみても辰市は口を開こうとしない。

「……念の為に聞くがお前、俺達をどうこうする気はないよな？」

声を潜めて小川は囁くように言った。

それを聞いた瞬間、辰市の顔付きが変わる。

「確かに私は賤しき身分にございます。ですが、命を救って頂いた方を貶める事は決して致しません。」

辰市は声を荒げて、しばし小川と睨み合つ。

「わかった。疑って悪かったな。」

小さな溜め息をつき、小川は目を逸らして謝った。

「いいえ、それでいいんです。」

苦笑して辰市は言い、自分達のやり取りをジッと見ている五人に向き直った。

「で、何処なんだその宿は？」

辰市によつて連れられた「宿」。

果たしてそこは宿と呼んでいいのやら……。

規模のデカさは安土城と比べると、そりゃ多少は小さい。

六人の予感は見事に的中していた。

甲斐にこんな馬鹿でかい屋敷……むしろ要塞じゃないのかコレ？
と言いたくなるような箱モノを持つ人間なんて、一人しかいない。

「た……辰市さん、このお屋敷の名前って……？」

目が点になっている山中に、彼は笑顔で答える。

「躑躅ヶ崎館、といいます。」

分かっていても絶句してしまう。

城を持たない武田信玄の住まう屋敷だが、その広さは城レベルにしか見えない。

「魔王様の次は甲斐の虎……遭遇率パねえな。」

門番の兵二人に話をつけている辰市を眺めながら、小声で梅本が言った。

「お待たせしました。どうぞお入り下さい！」

それぞれ馬を引きながら、門番の視線を気にしつつ門をくぐると。

「たーっーいーちいいい！ー！！」

何かが辰市にタツクルをぶちかましてきた。
見えたのは、菖蒲色の残像。

「心配したんだからあああ！！アンタ初の単独任務でしょ！？無事に帰ってきてくれてよかったよおお！！！！」

「ちょ、待つ、待って下さいあやめ姉さん！」

艶やかな黒髪をポニーテールにした少女が、辰市にガツチリとしがみつки、彼の頭をぐりぐりと撫で回している。

「誰やねん、アレ。」

「彼女かな？」

あまりの激しさに、啞然とした顔でその様子を眺める六人。

「あら、貴方達だあれ？辰市の友達？」

一頻り騒いだ後、ぐったりしている辰市を放り出してようやく少

女が六人に目を向ける。

「一応、そこで萎びとる奴の連れや。あんたは？」

極めて大雑把な答えに、少女は気にした様子もなく名を名乗った。

「あたしはあやめ。辰市の姉！」

「タツちゃんのねーちゃんだったのか！」

目を丸くして、木下は二人の顔を見比べた。

言われれば成程、似てなくもない。

「こ…この方々が、怪我をしていた私の手当てをして下さったんです。」

復活した辰市がそう説明すれば、あやめの顔付きが変わる。

「ちょ、それじゃ辰市の恩人じゃない！？やだ、あたしったら何てご無礼を……！！」

「別に畏まる必要なんてないですよ。私達、そんな大層な身分じゃありませんし……。」

慌てるあやめに、山中はにこやかに言った。

「うっそあ！？じゃあ何でそんな凄い妖馬とか持つてるの？」

「……よっぽど良い馬なんだな、お前。」

凄いと言われて嬉しいのか、小川はご機嫌な赤兎の頭を撫でてやる。

「あやめ、辰市……いつまでお客を立たせておくつもりだ。」

和気藹々とした空気が流れる中、別の低い声が飛び込んできた。
見れば、白地に流水の柄が入った小袖を着た男が一人、呆れたようにこちらを見ている。

「「い、板垣様……！」」

あやめと辰市が同時に叫び、慌ててその場に片膝を立てて跪いた。

「板垣……つてさ。」

聞いたことのある名前に、出来るだけ小さな声で木下が山中に耳打ちする。

「はい……信方さん、でしょうか。」

眉を寄せて、六人は男の姿をジッと見つめた。

男は辰市の前に屈み込むと、彼の肩に手を置き、噛み締めるように言った。

「辰市、よくぞ……よくぞ、戻ってきてくれた。」

「いいえ……！私がまだまだ未熟なせいで、板垣様にご迷惑をお掛け致しました……！」

声を微かに震わせ、辰市はその場に平伏する。

「お前が謝ることは何もない。顔を上げ、立ってくれ……。」

静かに男は辰市を立たせて、ポカンと傍観している六人の傍まで

くると、慇懃に一礼した。

あまりにも丁寧な態度に面食らい、こちらも急いで頭を下げる。

「某は板垣信方と申す……。此度は我が忍、辰市をお助け頂き、誠に感謝している。」

「はっ……。！？いやいや、俺達そんな大したことしてないですから！んな馬鹿丁寧に頭下げないで下さい！！！」

板垣信方と言えば、『武田四天王』と呼ばれる知勇を兼ね揃えた大物の一人だ。そんな人間に頭を下げられちゃ、居心地が悪いのなんの。

梅本はアワアワしながら信方に顔を上げるよう、必死で説得する。

「いや、部下を助けて頂いた方に頭を下げぬなど、某には出来ぬ。」

「いや、ホントに困りますから！何か後々困りますから！」

何とか信方の顔を上げさせて、ふう、と一息。

「……板垣様、この方々、まだ宿を決めておられないのです。どうか、お屋敷に泊めて差し上げることが出来ませぬか？」

おずおずと辰市が口を開き、板垣に懇願する。

それを聞き、板垣は険しい表情を浮かべたが、それも一瞬のこと。

「いいだろう。しかし、お館様にも了承を得ねばならん……。そなた等、馬を預けてくれまいか？」

どうなるのかと固唾を飲んで見守っていた六人は、あっさりと出たOKに半ば目を丸くした。こんな何処の馬の骨か知れない奴を、そう易々と引き入れていいのやら。

しかし、断るのも特に理由はないし、何より勿体無いではないか。
というわけで、彼等は信方に向かって頷いた。
いざ、甲斐の虎穴に入場である。そこで得るものは、はたして虎
児か、はたまた別の何かか……。

二十の噺 「つつじって、漢字で書ける人いる？」

（後書き）

躑躅ヶ崎館にやっと入館です。

今回はワリと早く上げられたかな・・・？

お次はいよいよ甲斐の虎と面会です。

二十一の嘶 「イメージなんて、容易く壊れるもんだよ。」

愛馬を厩に預け、信方に案内されて館に入る。

「見た感じは神社や寺みたいやな。」

「この廊下長いねー。なんか僕、走りたくなるよ。」

キョロキョロとあちこちを見回しながら、六人は奥へと進んでいく。

二、三回角を曲がったときだ、物凄い怒鳴り声が聞こえてきたのは。

「お館様アアアア！！！」

一度聞けばわかるほど、その声は激怒している。

一体何事だ、と目を見張る六人に、信方はやれやれと目元を手で覆う。

ドタバタと足音と共に現れたのは、真っ黒な小袖に小豆色の羽織を着た男。左目には、小袖と同色の眼帯が。

「板垣殿！！お館様は！！何処にいらっしゃるか！！ご存知ないか！？」

鬼気迫る表情で信方に迫る男は、今にもガルルと唸りそうだ。信方はげんなりしながら溜め息混じりに言った。

「またか……申し訳ない、勘助。」

勘助、という名前にまたまた反応する六人。

「まさか…まさか、あの人ってよ……？」

梅本は眼帯の男を指差す。ちよつと前的大河ドラマの主役だった、その彼の名は。

「山本 勘助……通称ヤマカン！」

それは正しい通称ではないが、山勘という言葉が彼から派生したというのは間違いない。

「板垣様が謝る必要などシラミほどもありません！悪いのは全てお館様！毎度毎度毎度執務をほっぽりだして……！」

勘助は余程頭にきているのか、顔はもはや鬼の形相だ。

「何か……毎日胃痛や頭痛が絶えなさそうですね……。」

怒れる勘助、項垂れる信方があんまり可哀想で、山中はポツリと呟くと。

「お分かり頂けますか！？全くお館様という方は！いつもゴキカブリのように逃げるんです……！」

ゴキカブリとは、文字の雰囲気からもわかるようにゴキブリのことだ。

「……甲斐のゴキカブリ……」

ボソツと小川が言えば、頭の中にゴキブリの着ぐるみを着た信玄

ドンガラガツシャン、と色んなものを引っくり返して大暴れする音がして、やがて収まった。

「やっと捕まえましたよ、お館様……。」

ニタアとした笑顔も眩しく、勘助は何かをズルズル引き擦りながら再登場する。手からは縄が伸びており、その先に縄でぐるぐる巻きになった何かがあった。

それは人の形をしていて、ぐにぐにと動いている。

「……………！？」

六人は一斉に信方に目を向ける。

何だありや、という意味を含んだ視線に、信方は深い溜め息をつくことで答えた。

「勘助…すまんが、お館様を少し貸してはくれんか？」

まだ絶句したままの六人を一瞥し、げんなりした様子で信方は言った。

「………そう言えば板垣様、そちらの方々は一体？」

「それを今から説明するから、一度お館様を解放してやってくれ……。」

信方と勘助のやり取りを、何処か遠くで聞きながら六人は感じた。

（（（誰が嘘だと言ってくれ……）））

ちよつとした波乱と失望と悲しみの後、やっと六人はともに甲斐のゴキ……いやいや、甲斐の虎と名高い武田 信玄と正式に面会することができた。

「お初にお目にかかります、ゴキ力……ごほん、信玄公。」
「今儂のことゴキ」お館様。「……うむ、お主等の名を聞こう。」

小川の言葉に信玄が反応するが、笑顔の勘助の一言でたちまち抑え込まれる。

六人の名乗りが済み、どういった経緯でここを訪れたのかを話すと。

「そうであつたか……辰市をのう。儂からも礼を言おうぞ。感謝する、小川殿、梅本殿、北殿、山中殿、谷中殿、木下殿。」

信玄は六人に向かい、深々と頭を下げた。

「わ、私達、本当に何もしてません！貴方のような一国の主に頭を下げられては、どうしたらいいか……！」

困りきつた山中がそう言えば、顔を上げた信玄は豪快に笑う。

「なんの、大切な家臣を助けてもらい、頭の一つも下げんなど儂には出来んよ。」

安土城にいたときとは違うこの扱いの差！魔王様と比べれば、信

玄公はとってもいい人だ。

「お館様。辰市の、この者達をしばらくここに置いてやってほしいとの頼み……聞き入れて頂けましょうか。」

信方がそう訪ねると、信玄はすかさず頷いた……のだが。

「いや、おかしいやろちょっと。」

北は顔をしかめて、まともりつつある話に割り込んだ。

「そんな簡単に決めてええんか？あたしら、まだ名前しか言っていないやで？怪しいやろ絶対。」

彼女の言うことは至極までもで、他の五人もうんうんと頷いている。

しかし信玄は不意に真面目な顔になり、静かに言い放った。

「怪しい者は、自ら進んで怪しいなどと言わぬもの。もしお主等が忍で、儂の命や情報を奪いに來たのなら……そのような殊勝なことなぞ言わんだらう。」

どっしりとした言葉と構え方に、六人は目を丸くする。

「ま、どうしても疑って欲しいなら牢が空いておるかの……。」
「いえ、それはナシの方向性で。」

慌てて言えば、信玄は豪快な笑いを響かせた。笑い声のでかいおっさんである。

「お主等が何処の何者であるかはどうでもよい！それこそ妖怪変化の類であるうとも、受けた恩を儼は返すつもりぞ？」

武田 信玄……ちよいと器が広すぎやしないだろうか？

「信玄様、スゲー！！やつぱり武田最高だなっ！！！」

「そうか！武田最高か！」

わあつと歓声をあげる木下に、ノリよく信玄も便乗する。

はしやぎ声をBGMに、木下以外の五人は信方と勘助の方に向き直る。

「お館様が決めたことを、我等がどうこう言えるものではない。」

「というよりも、異議を申し立てても無駄だからな。」

呆れたような視線を信玄に送り、武田の家臣二人は苦笑いを隠せない。

というわけで、甲斐での宿は躑躅ヶ崎館に決定した。

「あゝ、スッキリした……。」

手拭いで髪を拭きながら、六人は深々と一息ついた。面会の後、やつとお風呂に入ることか出来たのだ。

ネタネタもベタベタも綺麗さっぱり洗い流して、新しい着物を着て、あてがわれた部屋でまったり寛ぐ。

「想像していたより信玄様は何というか……お気楽なおジサマですよね。」

山中は、あのチャラかしいイメージが信じられないようだ。

「……ヤマカンも、醜男と聞いていたが、俺にはそう見えないな。」
「それ、あたしも思ってた。めっちゃ普通やでアレ。足はちよっと引き摺ってたけど。」

小川の言うことに、北も首を捻る。

「ま、いいんじゃない？だってほら、ゲームの世界だし。」
「どんな違和感もその一言で片付けれるよなー。」

木下と梅本は幸せそうな顔で、畳の上をころころ。

まるでアザラシのようだ。しかし、完全に気を抜ききっていると
いうわけではない。

彼等は何気ない風を装って、互いに目配せをしあった。天井裏から、微かに感じる気配……恐らく忍だろう。覚えのある感覚は、神憑きのものだ。

（やーっぱり、監視されますか。）

誰の指図かは知らないが、当然と言えば当然だ。

向こうは六人が神憑きであることを知っているのだろうか？

色々と話したいが、忍がいるとあっちゃ、そう簡単に口を開くわけにはいかない。

やれやれ困ったと思っていると、いきなり襖が開き、何かがシュバツと入り込んできた。

驚いて素早く身構えるが。

「頼む、匿ってくれ！」

「『また逃げたのかよ。』」

すかさずツツコミを入れた相手は、さっきまで謁見していた甲斐の虎。

「わ、儂だつて遊びたいんだもん!!」

「その面でもんとか言うな、気持ち悪すぎるやろ。」

鬱陶しそうに言う北に、とにかく匿えと信玄は迫った。

彼等は溜め息をつく、一人が荷物から代えの着物をつかみ出して立ち上がった。そのまま信玄の前に着物を広げて壁を作り、残りの五人がその前に座り込む。ちよつと着物の鑑賞会してました、のポーズだ。

すると、廊下をズルツ、ズルツと歩く音が聞こえた。

「お館様ーア……お館様ーア……何処に行きやがったんですかーア………！」

まるで地を這うような声がして、ピタリと部屋の前で止まった。そして、スウィツと襖が数センチ開き、勘助が顔を覗かせた。その雰囲気たるもの、井戸から這いずり出てくる某有名な幽霊のようだ。

「あ、あの……何か？」

冷や汗を流しつつ、谷中が尋ねると。

「……ここにもいらつしやらない……。」

低い呟きの後、無音で襖が閉じられて、ズルツ、ズルツと足音が遠ざかっていく。

固唾を吞んで、彼の足音とおっかない気配がなくなるのを待ち、全員が半ば止めていた息をようやく吐き出した。

「ち、超怖い……あの怖すぎるでしょ、信玄様！？しかも何アレ、どこの怪談なわけ！？」

止まらぬ冷や汗を浮かべたまま、谷中は信玄の襟首を掴んで揺さぶりまくった。

「勘助怖い勘助怖い勘助怖い勘助怖い……」

信玄はというと、揺さぶられながら蒼白な顔色で、勘助怖いと呟いている。

「あれ……武田の裏の支配者やな。」

「オ、オレ……今日一人で厠行けないかもしれないぞ……。」

「そ、その時は私、お付き合います……。」

北と木下と山中の三人は、引き攣った顔でくつつきあっている。

「信玄様さあ、頼むから俺達巻き込まないでくんね？」

「……というか、匿ったことがバレればこっちまで飛び火がくるんじゃないのか？」

梅本は呆れが頂点まで達したのか、もう半笑いだ。
そして小川のもつともな言葉に、皆ピタリと動きを止める。

「「「よし引き渡すか。」」」

「ちよ、待たんか！お願い待って！」

六人が真顔で手足や襟首を掴むと、信玄は半泣きで抵抗する。

「うるさいなつ、あんなのに殺されたら洒落にもなんないんだぞっ
！！」

木下は苛々と言い、信玄の手をぐいぐい引つ張る。

「ホントに待たんか！儂はただ逃げてきたわけではないのだぞ！」

話があるのだ、と信玄は必死に言い、彼等は疑り深い眼差しを向けながら渋々手を離れた。

「しょーもない話やったらあの妖怪軍師すかさず召喚したるわ。」

舌打ちする北に、信玄は真つ青な顔で頷いた。

あの武田信玄に完全にタメ口をきいている辺り、イメージの崩壊とやらは恐ろしい。

信玄の前に座り、さっさと話せと催促すると、彼は一つ咳払いをして、天井に向かいピシリと言い放った。

「儂はこの者共に話がある。見張りはよい、元の場に戻れ。」

すると、微かな物音と共に忍の気配も消え去った。

「さて、本題に入ろう。これは儂の推測に過ぎぬが、お主等、『六武衆』だろう。」

躊躇いもへつたくれもない、直球ストレートの言葉。

「……何故、そう思う？」

六人はサツと顔を強張らせ、小川は静かにそう尋ねた。

「ふふ……武田の強味の一つは、忍の使い方よ。儂の情報収集力、なめてもらっては困る。」

初めて信玄の顔が、険しくも不敵な戦人のそれに変貌した。

「成程。流石は武田の忍、感服いたしました。それで、私達をどうするつもりですか？」

きちんと姿勢を正した山中は、落ち着き払った視線で信玄を見る。

「どうもせんよ。言うたであろう、お主等が何者であろうと、儂は恩を返すつもりだと。」

ここまで言い、信玄は楽しそうに笑ってみせた。

「ただ、下手に隠すより、開き直ってしまったほうが儂はよいと思うたでな。」

「それはそうとして、結局何なんだ？それだけを言い、あの妖怪軍師の目を盗んでここまで来たのか？」

長い息を吐き出し、梅本は正座から胡座に座り直した。どうも真意が掴めない。

「もう一つは、何の用で甲斐に来たのか、ということよ。まさか尾張の小僧の密偵、というわけでもないのだろう?」

信玄は六人の顔をそれぞれ見回し、答えを促す。

「オレ達、信玄様に会いに來ただけだぞ。他は特にない!」

あつさりと木下は言い、他の五人も真顔で頷く。

そのあまりにも単純明快な理由は、信玄の目を丸くさせるには十分な威力を持っていた。

二十一の嘶 「イメージなんて、容易く壊れるもんだよ。」

(後書き)

やっと甲斐の虎のご登場です。

ええ、イメージをスタボロにした感じは十分あります。

ごめんなさい石投げないでください。

一応大好きなんですよ武田。

ヤマカンも風林火山見てからすごい好きですよ。

それ見て大河ドラマはまりましたから。

・・・・次回は甲斐の武田ライフをお送りします。

二十二の斬 「頭のいい奴ほど、単純な奴のことを深読みすることがある。」

信玄はしばらく黙ったまま、六人を眺めた。甲斐の領主として、一大名として、人を見る目が曇っておらぬ自信がある。彼等は、偽りを言っているように見えない。

「では何故、儂に会いたいと思った？」

「あんたが有名な大名やから。」

すかさず北が答え、信玄はどう反応したものか非常に困った。

「……ホントに、それだけ？」

啞然とした顔で、念を押すように尋ねても、六人は頷くばかり。シーン、としばらく部屋が静まり返り、やがて信玄の肩が震え始める。震えは全身に広がり、彼の口からは噛み殺した笑いが流れてきたではないか。

どうして笑われているのかわからない六人は、顔を見合せながら眉を寄せる。

「そんなに変なこと言ったかな、僕達？」

「変、なんでしょうね。あの様子を見ると。」

とりあえず、信玄の笑いが収まるまで待つこと数分、やっと静かになった。

「いやあ、お主等は面白いの。儂も多くの人間と会ってきたが、ここまで単純な理由で儂のもとまで来た人間は、お主等が初めてだ。にしても、道中で辰市と会わなんだら、どうやって儂と会う算段だ

ったのだ？」

からかうように問う信玄に、六人は答える。

「遠乗りのときに追い掛けるとか。」

「高いところから観察するとか。」

「キレーなお姉ちゃん使ってたぶらかすとか。」

「食べ物で釣るとか。」

「投げ縄で捕獲するとか。」

「闇討ちとか。」

「後半儂の扱いおかしくね？」

何処かズレている彼等に、全力で信玄は突っ込んだ。
何なんだろうこのやり取り、過去にいる気がしない。

「じゃあ、とりあえずは警戒が解けたと解釈してもよろしいんですね？」

一頻り笑いあつた後、山中が信玄に尋ねた。

「一応はな。だがあと少しは忍の目がつくだろう……儂の家臣が納得するまでは。」

チラリと天井や周囲に目をやり、信玄はよっこらせと立ち上がった。

「さて、ここでずっと居るのも暇だの。どうだ、儂と一緒に」

「おゝやゝかゝたゝさゝま……！！」

背後、僅か数ミリ開いた襖から聞こえた声に、ザザアツと見事な

血の引きつぷりを見せる信玄。

息を呑む六人の前で、信玄の頭をガシツと掴む手があり。

「ここにいらっしやいましたか……探しましたよ……！」

「つか、かか、かんかん、勘助！？」

隙間からぬるりと液体のように出てきたのは、目を爛々と光らせた妖怪軍師、勘助である。

「随分とお楽しみのようでしたが……そろそろお引き取りしてもよろしゅうございますか？」

彼の隻眼がぎろりと六人を見据え、有無を言わさぬ口調で問われる。

勿論、この状態でヤダと言えるほど彼らは恐いもの知らずではない。

「問題ないであります、軍師殿！」

起立して敬礼し、信玄に哀れみの視線を向ける。

さよなら甲斐の虎、我々は貴殿の尊い犠牲を忘れない。

部屋の外に消えた彼の姿を網膜に焼き付け、六人は敬礼の手を下ろした。

断末魔の悲鳴が躑躅ヶ崎館に響き渡るまで、あと数秒。

「……やはり見破られましたか。」

「そのようだな。」

その頃、六人の部屋に忍を放った張本人二人は、聞こえる主の悲鳴に苦笑いしながら碁を打っていた。

一人は板垣 信方、もう一人は蘇芳の小袖を着た男だ。焦げ茶色の髪を後ろで一纏めにし、虎縞の組紐で結わえている。

「甘利殿は彼等をどう思っておられる？」

パチリ、と黒石を置き、信方は彼を……甘利 虎泰に問いかけた。彼も信方と同じ、『武田四天王』の一人である。

「彼等が巷で噂になっている『六武衆』であることは間違いないでしょう。三つ者や各地に散った歩き巫女からの情報から、勘助殿も判断できると申しておりました。まあ、既にお館様が話をなさったのなら、我等が下手に勘繰る必要はございませんまい。」

虎泰は白石を打ち返し、腕を組んだ。

「それに、彼等中々腕がたつと思いますぞ。我等が放った忍をお館様が退かせたとき、少しも驚きを浮かべなかったようですから。」
「ああ。六武衆という名……噂に塗り固められた張りぼてというわけではないな。」

パチリ、パチリ、と碁石を打つ音が部屋に響く。

「失礼致します。」

聞き慣れた声がして二人が顔を上げれば、やたらとすすきりした表情の勘助が入ってくる。

「お二人とも、ここにおりましたか。」

碁盤の前に腰を下ろす彼に、虎泰が声をかけた。

「勘助殿、一応聞いておきますがお館様は？」

「先程執務室に縄で縛り付けておきました。逃げられないように、忍の者十人程で警備に当たらせております。」

碁の形勢を見ながら、よどみなく勘助は答えてニタリと笑ってみせる。

「万が一、抜け出そうとなされても……すぐ某に知らせがくるようにしております、ご心配なさらず。」

その笑みに、心配しているのはお館様だと言えない二人。

「さて……お二人はあの六人、黒か白かどちらと思われますかな？」

勘助の質問に、二人は困ったような表情を作った。

「勘助、我等はあの六人と会って日が浅い。いきなりそのようなことは。」

「某は、あの者共……少々きな臭いかと思います。」

きつぱりと断言した勘助に、虎泰は尋ねた。

「その理由は？」

「あの者共が六武衆であることは間違いないでしょう。ならば……何故我々がそれを「感じない」のか、おかしいと思いませんか？」

勘助は片手を上げる。

すると、袖口からよろりと黒い蛇のようなモノが現れた。彼は影の神憑き、これは彼が操る影なのだ。

「神憑きは神憑きの気配を感じる事が出来る。その気配を消すのは、熟練の忍または厳しい鍛練を積んだ者が出来ること。そして気配を消している筈の忍を見つけるとなると、『将位』程度の者でなければ出来る芸当ではありませんまい。」

勘助は一つ息を吐くと、更に続ける。

「それをあの者共は容易くやってみせた。何よりおかしいのは、神憑きである我々が、あの六人から神憑きの気配を感じないということにありましょう。」

信方と虎泰は黙り込み、うつむと唸った。

何とも特異な、というよりは異常な話である。

「それは私も思っていたことですが……しかし、「特異である」という理由で、白か黒かを決めることは出来ませんぞ。」

虎泰は碁石を眺めて、そう言った。

「……お館様がお会いになり、彼等を判断なされたのだ。その判断が吉と出ればそれでよし、もし凶と出れば、その時は我等が始末をつければ良いだけのこと。」

碁の勝負がついた。どうやら黒の勝ちのようだ。

信方はそう言いながら立ち上がった。

「そしてこれは某の私的な意見……というより勘なのだが、彼等はあ

まり疑わなくともよいかと思うぞ。」

何せ、忍の介抱をし、同じ釜の飯を食い、着物まで貸してやるよ
うな者達だ。

微かな微笑みを浮かべ、信方は部屋を出ていく。

後ろ手に襖を閉め、廊下を少し歩いたところで忍の名を呼ぶ。

「辰市、あやめ。」

「ここに。」

スツと現れた忍に、信方は命じる。

「あの六人の世話をしな。そして、毎日某のところに報告を。
お前達のほうが、彼等も気を許すだろうから。」

「……然るべく。」

現れたときと同じように消える忍を見送り、信方は溜め息をつい
た。

「さて、お館様の様子でも見に行くのでしょうか。」

信方、虎泰、勘助の三人に、物凄く深読みされているとは露知ら
ず、六人はころりと引っくり返っていた。

だが好奇心旺盛な孝研、いつまでも一つの部屋にいられる筈がな
い。

「ひーまーだーぞー……」

芋虫のようにうねうねしながら木下は呻き、それに皆こっくりと頷く。

勝手にふらふら歩いて良さそうな雰囲気じゃないし、かといってこのままここににいるのも嫌だ。

「なー殿下。いつそのこと、遊んでもらうか？」

「あー、それいいかも。」

「何する気だお前等。」

遂に木下が音を上げ、谷中の膝に顎を乗つけて何やら提案し、谷中もそれに賛成する。

嫌な予感を感じた梅本が声をかけると。

「この人に、だよ！」

素早く立ち上がるや否や、木下は影蜈蚣を呼び出し天井をドカッと突いた。

するとその板が撥ね飛ばされ、影が伸びる。黒い手のようになった影に掴まれ、落とされたのは一人の忍。

すかさず谷中が電王を帯電させると、忍の刀や苦無がジャラジャラと引っ張り出されて電王にくっつく。

「凄いです、磁力まで出せるようになったんですね！」

ぱちぱちと手を叩き、山中が称賛の声を上げる。

「……進歩したな、難しかっただろ？」

小川は興味深そうに電王を覗き込み、つんつんと苦無を突つつく。

「で、何して遊ぶんやコレと？」

影でぐるぐる巻きにされ、モゴモゴ言ってる忍を眺めて北が暢気に言った。

「んー……何する？」

「俺に聞くなアホ。」

木下の様子に頭が痛い、と梅本はがつくり頂垂れる。

「……とりあえず、解放してやれよ。見ろ、何かピクピクしてる。」
「その人窒息してますよ！？」

小川が無表情で忍を指差し、山中が慌てて戒めを解くように言う。
スルツと木下が影を解くと、忍は物凄い勢いで息を吐き出し、軽く咳き込む。

「あらー、危つく死なせちゃうとこだったね。」

電王にくつついた色々を外しつつ、谷中はへらへら笑う。

「……笑い事ではないだろうがああ……!!」

やっと呼吸を整えた忍の男は、怒り心頭とばかりに怒鳴った。

「やつかましーなあ、あんた仮にも忍やろ？んなギャーギャー騒ぎなよ見苦しい。」

「何故貴様等にそんなことを言われなければならんだ!？」

なんかやたらと偉そうに言う北に、益々怒鳴り散らす男。

「なーオッサン、オレ暇だ。何かして？」

もう無茶苦茶である。

影蜈蚣をしまい、木下が何かを期待した眼差しを向けた。

その無邪気な様子に、男は背中に嫌な汗が流れるのを感じた。

（何故…俺はこいつらが神憑きだと気付かなかった？何故、こいつらは俺が潜む場所がわかった？）

男はようやく、この六人を見張れという命の意味を知った。

「この人、固まってませんか？」

山中が顔を覗き込み、目の前でヒラヒラと手を振ってみせる。

「……！！？」

サッと距離をとり、男は六人を改めて見る。

（子供にしか見えん……しかし、あの力は……。）

色々と考えていると、いい加減痺れを切らせた木下が彼の肩を叩いた。

「オッサン、暇だつてば。」

「俺はまだそんな呼ばれ方をする歳ではないわ！」

何度も失礼な呼び方をする木下に、男は苛々と睨みを効かせたが

そんなものは効果なし。

「じゃあ名前言えば？そうでなきゃ、僕達ずっとオッサンって呼ぶよ。」

谷中はそう言いながら、奪い取った手裏剣を弄ぶ。

「……貴様等のような連中に名乗る名はない。早くそれを返せ。」
唸るように言ってみるが、やはり効果なし。

「……ねえ、チロちゃん。」
「はいはい、殿下。」

谷中と木下は、何か思い付いたのかニツと笑う。

（（（またまた悪いこと考えてるな……）））

その様子を見ながら、他の四人は小さな溜め息をついた。
退屈の極みに達しているこの二人、甘くみていると、とんでもない悪戯を仕出かすのだ。

「忍刀もーらいつ！」
「僕は苦無頂きっ！」
「なっ、何イ！？」

忍道具のうち、刀と苦無をひっ掴み、脱兎の如く逃げ出す二人。
男は目を白黒させると、大慌てで二人の後を追いつけていく。

「……俺は暫く寝る。」

「俺もそうするか。」

小川と梅本はその場でごろりと横になり。

「あたしは面白そうやから見に行くわ。」

「私も一緒にします。」

北と山中はよっこらせと立ち上がると、三人が飛び出して行った方へと向かった。

「待てっ、待たんか!」

「待てと言われて!」

「待つ馬鹿なんぞいるか!」

ドドドッ、ダダダッ、右に左に直進に。

「オッサン遅いぞ!」

「オッサンバテちゃった?」

「だからオッサンではないと言っているだろうがああ!」

時折後ろを振り返り、ますますヒートアップさせるような言葉を投げ掛けてからかうと、男は青筋を立てて叫んだ。

そんな大騒ぎをしているものだから、あっという間にこの鬼ごっこは至る所の家臣や侍女に目撃される。

「一体何の騒ぎだ?」

「何やら賑やかですね。どうかなさいましたか？」

笑い声や囃し立てる声を聞きつけ、勘助と虎泰が顔を出し……目を丸くする。

「忍なら捕まえてみせるー！」

「ほらほらこつちだよー！」

「貴様等アアアア……！」

素早くジグザグに走りながら追跡を上手く避ける二人と、それを鬼の形相で追う忍。

「……甘利様。」

「はい、勘助殿。」

勘助はぼかんとした顔で、虎泰に呼び掛ける。

「板垣様の勘は、当たっておりますな。」

「……そのようですね。」

苦笑いを浮かべ、虎泰は走り回る三人を微笑ましく眺めるのであった。

二十二の嘶 「頭のいい奴ほど、単純な奴のことを深読みすることがある。」

忍と鬼ごっこ。

最早フツーじゃない主人公達です。

んー、武田は有名な人や出したい人が多くて難しいですね。

武田四天王は全員出したいし、あの表裏比興の者も出したいし、逃げ弾正も出したいし……あー、居すぎだ武田！

二十三の嘶「武田ファミリーと一緒に、やっぱ交友って大切だと思うんだな。」

強制鬼ごっこがしばらく続いた後、やっと二人は奪い取ったものをかえしてやる。

「はー、面白かった！はい、返してあげるね。」

「捕まらなかったから、オレ達の勝ちだなっ！」

首筋に「うつすらと」かいた汗を拭い、谷中と木下はすっきりした顔で言った。

「くそ……この俺がッ……良いように……振り回されるなど……！」

ゼイゼイと息をきらし、男は悔しげに二人を睨み付ける。

「随分遊ばれたようですね、空蝉。」

笑いを押し殺したような、しかし柔和な声がして、二人は振り向く。

「あ、甘利様に山本様！？」

空蝉、と呼ばれた男は、急いでその場に跪いた。

「見た目によらずお上品な名前だなー。」

「喧しい！！！」

やっとわかった名前に、木下が茶々を入れ、谷中は二人の重臣に一礼した。

「お初にお目にかかります、六武衆のお二人。私の名は甘利 虎泰と申します。以後お見知り置きを。」

いきなり丁寧に自己紹介されて、二人は目をぱちくりさせた。

「某は山本 勘助と申す。貴殿等の噂はかねがね聞いておるぞ。」

続いて勘助にも名乗られ、急いで二人も一礼した。

「谷中 若菜です。」

「木下 千尋です！」

勘助は身を少し屈めて、まじまじと二人の顔を見つめた。

「お主等、歳は幾つだ？」

「スゲー！ホントに眼帯だぜ殿下ー！」

「本物はやっぱカッコいいよね！萌える萌えるー！」

二人も勘助の顔を見て、口々にはしゃぎだす。

「……………っ！」

勘助の困惑したような表情に虎泰は横を向き、吹き出しそうになるのを堪えた。人の話を聞いちゃいない。

「虎泰さんの髪の紐って、やっぱり自分の名前から虎柄にしたの？」

「はっ……………？い、いえそういうわけでは。」

すぐくどうでもいいことをいきなり聞かれ、虎泰も勘助と同じ表

情になる。

この後、勘助と虎泰は二人の質問攻めにあうのだが……他のメンバーはどうしているのだろうか？

飛び出して行った二人を追った北と山中は。

「……どこや、ここは。」

「私に聞かれてもわかりません。」

まあ、案の定というか、定番のオチというか…迷子になっていた。

「何であいつら、こーいうときはあんなに足早なんねん。」

「体力もつきましたから、以前より質が悪くなってますよね。」

ブツブツ言いながらその辺りを歩いていく。

「もし、そこのお嬢さん。」

「あたしも暇やから、何かしたろと思ってたのに。」

「マンボウさんの「何か」は嫌な響きを持ってますよね。」

ああだのこうだの、言い合い歩いていると、後ろから声がかける。

しかし「お嬢さん」というガラではない二人 特に北は は、右から左へと聞き流す。

「そら、色々出来るやる。」

「具体的な例をあげないところが嫌ですね。」

「あの、その二人のお嬢さん？」

もう一度呼び掛けられ、やっと自分達のことだと認識する。

振り向いた二人は、その声の主を見て盛大に顔を引き攣らせることになった。

その人物、多分男だと思うのだが…如何せん、キラキラしていた。ふんわりとした飴色の髪、透けるように白い肌、明るい鳶色の瞳。美青年という言葉がしっくりくるその容姿に、山中の脳裏にある人物の名が浮かんだ。

「もしや貴方は……高坂 昌信様？ あの、『逃げ弾正』といわれる……？」

「私の名をご存知なのですか？」

大当たりだったのか、青年は驚いたように目を瞬かせた。

「はい、有名ですから。」

「これはこれは、貴女のような愛らしいお方に知っていただけいるとは光栄です。」

高坂 昌信、「武田四天王」の三人目だ。

常に慎重な采配と引き際の良さから、『逃げ弾正』と称される名将だ。また大変な美男子で、衆道が日常的だった戦国時代に信玄の「お気に入り」だった。

「私は山中 美那と申します。こちらは北 修子さん、私達の仲間です。」

北は無言でぺこりと頭を下げ、昌信はニコリと笑って口を開いた。

「貴女方が、『六武衆』でございますね。噂とは随分とかけはなれたお姿だ。」

「あのさ、さつきから気になってんのやけど……どんな噂なん、それ。」

あんまり噂噂と言われるものだから、どういつぶうに噂されているのか気になる。

「ここで立っているのもなんですから、よろしければお茶でも飲みながらお話いたしましょうか？」

魅惑的なお誘いに、二人は当初の目的を忘れてあっさりと頷き、正信の後に続いたのだった。

彼の部屋は直ぐ近くで、昌信は通りかかった下男にお茶の支度を命じて、二人を中に招き入れた。

「めちゃくちや綺麗に片付いてんなあ……性格細かいんやな、高坂さん。」

書物から筆、書簡の一つに至るまできちりと整理整頓されつくした部屋に、北は思わず感嘆の息を吐いた。

「私達の部室も、こんなふうだとどれだけいいでしょうか……。」

山 中はいつでも凄惨極まりない大学の部室を思い出し、やれやれと肩をすくめた。

「どうぞ、お座り下さい。」

昌信の勧めに従い、二人は部屋をキョロキョロ見回しながら腰を下ろした。

「他に、あと四人の方々がここにいると聞きますが……」

「ああ、野郎二人は部屋で寝とる。残りの二人は、忍のオッサンからかってどっか行っただわ。」

大雑把な説明をして、北は早速足を崩す。

ちなみに、袴を穿いているから見える心配はない。

「忍をからかう、ですか？」

昌信は目を丸くした後、くすくすと笑いはじめた。

「真面目そうな人でしたし、今頃盛大に遊ばれてそうな気がします……。」

忍の顔を思い出して、山中は少しだけ呆れたような顔をした。

そのとき、失礼いたします、と部屋の外から声がして、先程の下男がお茶を持って入ってきた。

二人が礼を言いながら受けとると、下男は驚いたように目を見開き、直ぐ様に引き下がってしまった。

何だありゃ、と首を傾げていると、昌信はまた笑いながら口を開く。

「魔王の戦を助太刀し、悪鬼羅刹あつきせしの戦い振り、将位の神憑きすら一撃の元に打ち砕き、その姿は根の国より出で鬼のようだと言われた『六武衆』……本当に噂はアテにならないものですね。」

しみじみ言う昌信に、二人は聞き捨てならないとばかり食い付いた。

「何か前に聞いたときより酷くなつてへんか、それ？」

「その噂を流した方々に、是非とも会いたいのですね。」

北は嫌そうに顔をしかめ、山中は笑顔だが目が笑っていない。尾ひれどころか、背びれ胸びれまでくつついているではないか。

「私も驚いているのです。どのような方々かと想像していたのですが……。」

今自分の目の前に座り、お茶を美味しそうに味わう二人を見て、

昌信は苦笑を隠せない。

何ともポアツとした、平和そうな顔をしているではないか。

「なあなあ、お茶菓子とかあらへんの？」

「出来れば甘いものを頂きたいですね。」

「……………（汗）」

訂正、想像よりもド厚かましい。

北と山中が、正信の部屋でお茶を味わっているとき、小川と梅本

は……ぐーすか寝ていた。そりやもう、大の字になって。

「失礼しまーす！」

「あやめ姉さん、もう少し丁寧に入りましょうよ！」

安らかな午睡の静寂を破ったのは、やたらと元気な声と慌てたような二つの声。辰市とあやめだ。

そのおきゃんな高音に、よく寝ていた二人はスッと目を覚ます。これも安土城で叩き込まれた覚醒法だ。

「んっだよ、うつせーなあ……。」

「……辰市、と……誰だ？」

ふわあつと大あくびをして、二人はのっそり起き上がった。

「あやめだって名乗ったでしょ！？もう、覚えといてよ！」

「あやめ姉さん、騒いじゃダメですってば！」

あやめは顔をしかめて喚き、辰市は必死で姉を抑えようとする。

「……で、お前等何しに来た？」

目を擦りつつ、小川は二人に尋ねた。

もし、何も用がないのに来たなら、遠慮なく二人を叩き出すつもりだ。

寝起きってのは、誰しも機嫌が良くないものだから。

「残りの方々は何処に行かれたのでしょうか？」

「知らね。二人ずつに分かれて、好き勝手してるぞ。」

溜め息をつき、梅本は床をつついて、忍二人に座るよう促す。
恐縮しながらちよこんと座る辰市と、遠慮無しで座るあやめ。
小川は両者の性格の違いに苦笑する。

「実はあたし達、板垣様から貴方達の世話役を任命されちゃってね。
で、挨拶に来ただけ……いないなら仕方ないわね。とりあえず、
お二人に挨拶しておくわ。」

「忍という身分上、至らぬところもあるかと存じますが……精一杯、
御世話役を務めさせて頂きます。」

「「そりゃご丁寧にどうも。」」

深々と頭を下げる二人に、こちらも一礼する。

すると、あやめは何か珍妙なモノを見るような目をするではない
か。

「……何だ？」

気付いた小川が問えば、あやめは不思議そうに言う。

「やっぱり、貴方達変よ。貴方達、『六武衆』なんて通り名がつい
てる凄い人なんでしょ？なのに、どうして私達に頭下げたりするの
？」

そんなことを聞かれても、と二人は顔を見合わせて、うーんと唸
った。

「別に意味とかないけどさ。ってか、身分とか俺達よくわかんねー
しな。」

「……こだわる必要もない。」

未来の人間に、身分のどうこうなんて関係のないことだ。
むしろどうでもいいことで、考えるようなことではない。

「だから、そんなに恐縮しなくてもいいぞ。あんまり丁寧にされると、居心地悪いから。」

「……これは辰市に言ってるからな。」

梅本は辰市を見ながら言い、小川はあやめをジロツと見る。

「何よ、あたしだってやるときはちゃんとやるんだからね！」

キーキー突つ掛かるあやめを小川は片手であしらひ、聞こえないフリをする。

「ま、六人全員がこんな感じだし、辰市さんも肩の力抜いて、そこそこテキトーにやってくれりゃいいから。」

身分の壁をさらつとぶち壊し、梅本はぽかんと呆けたような顔をしている辰市に笑いかけた。

「……わかりました。梅本様……いえ、梅本殿がそう言うなら。」

「ま、そういうことでよろしく頼むわ。」

未だにワーワー言い合っている小川とあやめを後目に、二人は館の内部についての話を始めるのであった。

同時刻、甲斐と敵対する越後では、こんな会話が交わされていた。

「甲斐の虎の元に、見慣れぬ客が訪れたとの知らせが。」

「……見慣れぬ客？」

薄闇の中、密やかな声が僅かな警戒の響きを含んだ。

「して、どのような者共だ？」

「男が二人、女が四人……何れも武士の装いではありませんが、商人や茶人でもない様子。皆、妖馬に騎乗しておりました。」

声の主は女と男、そして女のほうが報告を受けている。

「妖馬か……近頃、噂になっている『六武衆』という可能性は？」

「神憑きとしての気配は感じない、とのことですが……しかし、あの武田 信玄が謁見を即座に許したようです。ですが、全員がまだ年若く、もし神憑きであるならとても手練れといえるものではありません。」

女は溜め息をつき、呆れたように言った。

「全く……『六武衆』とは一体何なのだろうな。ここところ、話が乱されていて一向に正体が掴めない。まるで蜃気楼のようではないか。」

噂が噂を呼び、真実が偽りに姿を変えていく。

ここまでごちゃごちゃしているなんて、恐らく誰かが話を攪乱させているのではないのだろうか。

「如何いたしますか？」

黙ってしまった女に、男が声をかける。

「一度、私の方からお館様に話をしてみよう。お前は引き続き知らせを私に報告してくれ。」

「……然るべく。」

スッと消えた男を見送り、女は立ち上がった。

「甲斐の虎……一体何を考えているのか。」

いずれ、また戦が始まる。

その時、彼がどう出てくるのか……もし仮に、『六武衆』を手に入れていたのならば。

「私が、始末しなければいけないかもしれないな。」

不敵な微笑みを浮かべ、女は低く呟いた。

そんな不穏な空気を、甲斐でのほのほと過ごす六人は知る筈もなく。

「なーなー殿下、今日の晩飯ってなんだと思う?」

「チロちゃんはいつてもご飯のことばかりだねー。まあ僕も気になるけど。」

片や夕飯に思いを馳せ。

「ミナちゃん、これ何やる？うわ、あたし読めんし。」

「こちらは……もしかして兵法書でしょうか？そりゃマンボウさん読めませんよ。」

片や他人の部屋をガサゴソ漁り。

「もー大変なんだよ、あいつらは全然纏まりねえしさ。俺何回胃を痛めたか……。辰市も色々ありそうだな。」

「お疲れなんですな、梅本さん……。私もあやめ姉さんがあんな感じなので、大変なんです。」

片や日々の苦勞をブツブツ語り合い。

「もー！何であたしばかり怒られるわけー！？板垣様ったらいつもいつも辰市ばかり褒めるのよ！酷いと思わない、小川ッ！？」
「……だから、それを俺に言っでどうなるんだ？ってかお前、呼び捨てかよ。」

片やずれていく愚痴を嫌々聞き流す。

さてさて、これからどうなることやら……。一寸先は闇、ということだろうか？

二十三の嘶「武田ファミリーと一緒に、やっぱ交友って大切だと思うんだな。」

ちよこつとだけ出てきました、越後の人々。

さあ次回はどこまで進展するかなー……………。

早く進めたいけどなかなか進まないんですね。

でも気長に待っていてくださいまし！

そしてお気に入り登録が50件になりましたー！！！！

祝・50件、皆様このようなまだまだ未熟な作品をお気に入り登録してくださってありがとうございます！

評価のほうも順調に上昇しておりありがたいかぎりです。

これからも頑張ります！

二十四の噺「拉致と誘拐の違いは何だ。」

今日もいい天気だ。

青い空、爽やかな風、煌めく太陽……そしてこんな日は、昼寝するに限る。

甲斐の虎も、のんびりと傍らで寝そべっているが。

「って、違いエだろ！」

「ふあ!？」

盛大に跳ね起きた梅本は、自分達の隣で引っくり返っている信玄の腹に容赦なく肘を落とした。

「何で一国の主が俺達と一緒に昼寝してんだよ!？」

「がはっ……そこに突っ込まれるとは思わなんだわ……！」

「普通突っ込むわ!!！」

唸りながら梅本は額を押さえる。何だかもつ、頭が痛い。

「うっさいなあ、何騒いで……何で信玄様がここにおんねん!？」

どんちゃん騒ぎに気付いた北は、隣で悶絶する信玄に驚いて飛び起きる。

「いやあ、仕事が一息ついたから、ちょっとお主等と遊ぼうと思うて部屋を覗いたのだ。そしたら、お主等があんまり気持ち良さそうに寝ていたものでつい……。」

「……子供か、あんた。」

目を開けた小川は、身を起こし呆れたような表情をしてみせた。
今目覚めたのは四人。他の三人はいつ目を覚ましたのか、タオル
ケット代わりの布はもぬけの殻だ。

自分達は余程眠かったんだろう、全く気付かなかった。

「春眠暁を覚えず、か？」

「……猛浩然だな。当たらずといえども遠からずと言った所だ。」

ちよっぴり孝研っぽいやりとりを交わして、四人は立ち上がり、
ぐちゃぐちゃとした布に足をとられないよう注意しながら部屋を抜
け出した。

「あいつら、どこに行ったんだ？」

谷中、山中、木下の三人は、どこににいるのか。

梅本が辺りを見回してそう言ったとき、ズドン、と物凄い爆音が
鼓膜を乱打した。同時に、荒れ狂う風が館中を吹き抜ける。

「な、何事や!？」

耳を押さえて北が叫び、爆音のした方向を見る。

バリバリ、と空に見える白金の筋は……雷だ。

「……鍛練場の方だ。」

「嫌な予感がするの!。」

小川と信玄は顔を引き攣らせて呟く。

四人は目配せをして、一つ頷くと脇目もふらずに爆音のした方向
へと向かった。

「あは、あはははは…… やっちゃった」

プスプスとあがる煙、黒焦げの地面、バタバタ倒れている人々。その中、無傷で笑っているのは、電王を手にしている谷中だ。

「……雷って、本当にコントロールが難しいんですね。大丈夫ですか、お二人さん。」

開いた舞風を畳み、山中は背後でムンクの顔になっている辰市とあやめを氣遣った。

「雷の一撃も防げるんですか…… 丈夫で何よりです、舞風。」

そして、着物の埃を叩いて落とす。

「おい、何したんだよお前等！大丈夫か！？」

駆け付けてきた梅本達は、この惨状に言葉を失った。

「…………… 何だこれ。」

やっと一言、これだけ言えた。

「いや、あのね…… 鍛練に付き合ってもらってたんだけど…… 新しい技使ったら、こーなっちゃってさ……。」

未だにビリビリと震える空気を纏い、困りきった顔で谷中は頭をかいた。

「む？そう言えば、もう一人ちっこいのがおらんぞ。」

げんなりしていた信玄は、いつもちよろちよろしている木下の姿が見えないことに気が付いた。

「雷に消し飛ばされたんとちゃうか？」

ボソツと北が物騒なことを呟いたとき。

「失礼なこと言うな、この馬鹿マンボウ！」

足元からそんな怒声がしたかと思うと、彼女の影から勢いよく黒い棒が伸びる。それを呼び出した風鯨で防ぎ、北は二、三步下がった。

「ちょ、何でんなトコから出てくんねん！！」

影蜈蚣を握り締め、影から姿を現したのは木下だ。

「新しい技だぞっ！影抜けって言うんだと！」

得意気に木下は言い、今度は梅本の影に入ると、小川の影から飛び出してくる。

「影から影へ自由に行き来出来るみたいなんだ。便利だよな！」

新しい技の結果に、彼女はともご機嫌そうだ。

「う……な、何という威力か……！」

「あ、ごめんね虎昌さん！大丈夫？怪我不い？」

すぐ近くで倒れていた男が、呻きながら半身を起こし、谷中は急いで駆け寄る。

真紅の派手な小袖と、それに合わせたかのような紅蓮の髪。とにかく第一印象は「真っ赤」である彼は、梅本達にとって初見だった。

「こりやまた派手にやられたの、飯富。」

にやにやしながら、信玄は飯富と呼ばれた男を見下ろした。

彼は飯富 虎昌。『武田四天王』の最後の一人である。戦場での猛々しさから、『武田の猛虎』と呼ばれており、かの有名な武田の赤備えの元祖でもある。

「お館様……この飯富 虎昌、六武衆を甘う見ておりました……。」「ホントにごめんね。まさかあんなに凄く爆発すると思わなかったんだ。」

谷中は虎昌に肩を貸して、申し訳なさそうに言う。

「殿下さん、よく制御をするのが難しいと嘆いてますものね。」

「そーなんだよ。ちよつと気を抜くと、すぐに爆発しちゃうんだもんな。」

近寄ってきた山中も、虎昌を支えてやる。

「辰市ー、あやめー、水くれよ！オレ喉乾いたー！」

「は、はいただきます！」

木下に袖を引かれ、辰市はあやめと共に井戸の方へと走っていく。

「ところで信玄様、さっき勘助様が信玄様のことを探していましたか……。」

「ム？勘助がか？」

思い出したかのように山中が信玄に言えば、彼はきよとした顔で首を捻る。

「……仕事を放り出していた、というわけではないようだな。」

「失礼な！儂だってやれば出来る子だもん！」

「だから、もんって言うな。んで、子って歳でもないやないか。」

小川の苦笑いに対して信玄が反論し、更に北が呆れた表情で溜め息をつく。

「とりあえず行けば？あ、水ありがとな。」

三つの水を持ってきた忍っ子二人に礼を言い、木下は手をヒラヒラと振る。

信玄は頷き、勘助を探しに行く。

「おい、お前等ここ片付けた方がいいんじゃないか？その人、俺達が連れてってやるから、三人で片付けろよ。」

何か色々散らかっている鍛練場を見回して、梅本はそう提案してみる。

「あー……そうだね。暴れたのは僕達だし。」

「このままだといけませんね。」

「一応、出来るとこだけやつとくか。」

ハハハ、と力なく笑い、三人は虎昌を梅本達に預けて、何かの残骸や黒焦げの材木を撤去しにかかる。

それを後目に、梅本達は頭上にピヨピヨひよこが回っている虎昌を運んだのであった。

その日の夕刻、越後では。

「……面が割れた、と？」

「はっ。飯富 虎昌に肩を貸し、部屋に入るところを目撃したとのことにごさいます。」

女の纏う気配が、瞬時に変わった。

「他の者共はどうだ？」

張り詰めたような空気の中、女は男に問う。

男はしばらく躊躇った後、静かに首を横に振った。

「わかりませぬ……。本当に、我々にも掴めないのです。武田は忍の扱いに長けている。それ故、敵側の忍に対する感覚が鋭敏……こちらがわも、二、三人を忍ばせるのがやつと、と言ったところなのです。情報の不足も理由の一つですが……気配を感じないというのが、最も我々にとっては苦しいことにごさいますれば……。」

男は悔しげに言い、深々と頭を下げた。

「しかし、何とか顔は確認することが出来ました。如何いたしますか？」

女は組んでいた腕を下ろして、言い辛そうに口を開いた。

「実は……お館様に話をしてみたところ、非常に興味を持たれてな一度会ってみたいと仰せられてしまった。」

彼女の苦虫を噛み潰したような表情に、男は深い溜め息をついた。

「出来れば、此方に連れてこいとの命が？」

女はこくりと頷いた。

「……然るべく。」

「すまん、やりづらい仕事だと言つのはわかっているのだが…。」

男は微かに苦笑した後、一礼して姿を消した。

その日の夜。

「ところで、今武田の戦状況はどうなってるんでしょうか？」

ふと思い出したかのように、山中は髪をとかす手を止めて言った。

「戦の状況？」

仰向けに引っくり返っていた梅本は、その言葉に反応してむくつと起き上がる。

「はい。実は鍛練場の片付けてをしていたときに、信玄様と勘助様が通るのを見かけたんですが……何やら深刻そうな顔でしたので、戦関連のことではないのかと思ひまして。」

少し考え込むような素振りを見せる山中。

「……考えすぎじゃないのかと言いたいとこだが、実際、桶狭間の戦い以外俺達は他の戦のことを知らないよな。」

いつどこで手に入れたのか、小川は黒い煙管を吸いつつ、山中に同意する。

「武田と言えば、vs村上、vs上杉、vs織田が有名どころだけどき、戦だとどのあたりなんだろーな？」

「この世界やと、何か色々とずれてたり狂ってたりするんやろうな。」

木下と北の二人は、互いを団扇で扇ぎ合っている。

「多分そうだろうね。明日、誰かに聞いてみようよ。素直に教えてくれるかな？」

「教えてくれなかったら、無理矢理にでも聞きだせばいいだろ？」

笑いながら言う梅本の手荒い言葉に、谷中はそれもそうか、と納

得する。随分と物騒な思考である。

とにかくにも、そろそろ就寝の時間である。鍛練場で暴れた三人は疲れているのか、目蓋が徐々に下がってきている。

「オレ、もー寝る……眠いぞ……。」

最初に力尽きたのは木下、その後山中、谷中と倒れていく。

当然、梅本、北、小川の三人はまだ眠たくないわけで、彼等は物音をたてないようにしながら部屋を抜け出した。

向かうところは、月のよく見える館自慢の庭だ。

「たまには月見酒と洒落込むか。」

梅本がぶらぶらと手にぶら下げているのは、白い徳利。

「……あの世界じゃ、こんな綺麗な星や月なんて見ることはないな。」

上機嫌な小川は、煌めく星空や煌々と輝く月を見上げて呟く。

「起きてりゃ、殿下も一緒に飲もうと思ってたんやけどな。あの様子じゃ、起こせんア。」

北は幸せそうに爆睡する谷中を思い出し、苦笑した。

ちなみに、山中と木下はハイパー級の下戸なので、酒を飲むことが出来ない。

こんなにもいい月夜なのだ、何もしないで寝るなんて勿体無いじゃないか。

三人は夜の冷たく透き通った空気を味わいながら、庭へと入り込んだ。中に座する庭石に腰かけ、彼等はそれぞれの御猪口に酒を注ぐ。

「『乾杯ー！』」

ぐいっと煽り、ぷはあつと息を吐く。喉を通り過ぎる味と香りを
楽しみ、しばし時を忘れた。

程好く酔いが回りかけた頃、それは突然に起こった。ほわほわし
てきた感覚をにわかに刺す、微かな気配……神憑きのものだ。

「……何だ？」

御猪口を置いて小川は辺りを見回すが、動くものはない。

「えらいちっちゃい気配やな。こりゃ、隠れとる忍並みにちっちゃ
いで。」

例えるなら、蚊に刺されているときに感じる痛みのように微かだ。
眉を寄せて北はばやいた。

全く風流もへったくれない、なんて不粋な輩だろうか。せつか
くの月見酒が台無しだ。

「何処から来てるんだ……？上、か？」

怪訝そうな顔で梅本は空を見上げて、目にしたものに度肝を抜か
れる。

彼が見たものは、空から急降下してくる数人の忍達だった。

「何だありやあ!？」

「ドえらいノーロープバンジーやなあ。」

「感心するところが違う!!」

小川は北を殴り、神器を喚ぼうとするが。

「……これは…粉…!？」

はらはらと舞い落ちてくる粉末を吸い込んだ瞬間、急にだるさと眠気が身体を襲った。ヤバいと思う暇もなく、力なく崩れ落ちる。意識が途切れる瞬間、聞こえた言葉。

「…捕獲、完了。」

倒れた三人の傍らに降り立った忍は、屈み込んで彼等を担ぎ上げた。そのまま軽々と飛び上がる様子が、忍の体力の壮絶さを物語っている。

さて、彼等は一体何処に連れられて行くのだろうか？行方は月と星のみが知っている。

「……ふあ？」

気配を感じたのかはたまた偶然か、パカッと谷中の目が開いた。むくつと上半身を起こし、ぼんやりした視線をさ迷わせる。

「……たい焼き、食べたい……。」

ぼつりと眩き、ばたつと引っくり返る。そして聞こえるのは、穏やかな寝息。

三人がいなくなったことに気付くのは、朝日が昇ったときになりそうだ。

二十四の噺「拉致と誘拐の違いは何だ。」（後書き）

鯛焼きってあんこも美味しいけど、カスタードやキャラメルなんていう色物もおいしいですね。

さて、いよいよこの進みにくい話にも変化が訪れました。

攫われた三人の安否は？ 何が目的なのか？

ちよいちよい出てくる謎の男女は何者なのか？

あー、やっとここまで来れたですよ……。お次は攫われた三人に焦点を当てて書いていきますー！

二十五の囁 「U・N・毘沙門天は彼女なのか？」

side 越後

霞がかった意識がほろほろと戻り、朦朧とした思考が状況を求めた。

今自分達は何処にいるんだ？

背中に感じるのは、布団の柔らかい感触。

接着剤でくつつけられたような目蓋を無理矢理抉じ開けて、小川はようやく周りの様子を見ることが出来た。

「ここ……は？」

ぼうつとしたまま、何度か瞬きを繰り返した後、昨晚のことを思い出して飛び起きようとしたが、中々満足に動かない。

「……畜生……ふざけんな……！」

悪態をつきつつ、必死で上体を起こす。

「……起きろバカ野郎……！！」

幸せ面を曝して寝ている二人が無性にムカついて、小川は苛々と叫んだ。

すると、呻き声をあげながら目を覚ます「バカ野郎」二人。

「なん、何だあ……？うわ、だりィ……。」

「なんか……気持ち悪いわあたし……うぶっ……！！」

口を手で押さえる北に、梅本と小川は這いずるようにして距離をとった。

「てめ、ここでマーしたらぶつ殺すぞ……！」

「しゃーないやんけ、出るもんは出るんや……！」

「……偉そうに言っな。」

何だかんだと文句の言い合いをしていると、いきなり襖が開き、三人は揃ってそちらに目をやる。

「ほう、驚いたな。あの薬を吸い込んで、もう目が覚めたのか。」

目に入ったのは、水色の着物を着た女の姿。

キリッとした目は三人を捉えて、驚きの為か軽く見開かれていた。黒く真っ直ぐな髪は、首筋辺りで切り揃えられており、細く白い首には群青の数珠のようなネックレスが見えた。

「あんた、誰や？」

スツと目を細めて北が問いかけると、女は微笑しながら言い返した。

「私の名が知りたければ、お前達から先に名乗れ。それが礼儀だろっ？」

口調こそ静かだが、威圧的な響きは隠せない。

「アホかあんた。他人拐つといて、どの面下げて礼儀だの何だの抜かせんねん。出直せ変態。」

「お前が変態言っな！」

梅本に後頭部をしばかれながらも、北は淡々と言つてのけた。
女は、このどつき漫才を驚いたような顔で見っていたが、やがて二
ヤリと唇を歪ませた。

「随分と威勢のいいことだ。この私が誰だか」

「あんたが何処の何者で、どんだけ偉いかはどーでもええ。能書き
垂れとらんとさっさと吐き、このグズ。」

言葉を遮り、久し振りの毒舌が炸裂して、梅本と小川は溜め息を
ついて頭を抱えた。流石に、女も口元をひくりと引き攣らせている。

「……成程、あの魔王の元にいたという話は嘘ではなかったのか。
とんでもない肝の据わりようだ。」

苦笑して小さく呟き、女は三人の元まで歩み寄り腰を下ろした。

「私は上杉が家臣、直江 兼続と申す。此度の無礼な振る舞い、ど
うか許して欲しい。」

手を付き、彼女は……直江 兼続はそう述べて頭を下げた。
その名を聞き、三人は絶句する。

「な、直江……？ホントにあんた、あの直江 兼続なのか？」

呆然として梅本が言えば、兼続はきよとした顔で頷いた。

「いかにも、私は正真正銘直江 兼続だが……何故そのように驚い
ているのだ？」

「……いや、なんかその、想像よりも勇ましい感じだったんでつい。

「急いで小川が取り繕い、他の二人もうんうんと頷く。」

「そ、そうか。勇ましいか……。」

兼続は何やら微妙な表情だ。

「三人も名前を告げ、一体何の目的で自分達をここに連れてきたのかを問いかけた。」

兼続は少しばかり躊躇していたが、やがて口を開いた。

「武田との戦の為だ。お前達は『六武衆』と称される、類稀なる神憑きなのだろう？あの『武田の猛虎』といわれる飯富 虎昌を、手合わせながらも無傷で倒したとの報告も入っている。」

「『はいちよい待ち。』」

「明らかに話がおかしいので、三人はハモリながら手を前に突き出す。」

「……飯富 虎昌を負かしたのは俺達じゃない。それは別の三人だ。」

「誤認やで。あたしら、飯富さんの介抱はしたけどな。」

小川と北の言葉に、兼続は驚愕を隠せない。

「そ……それでは、お前達は全くの無関係者なのか！？『六武衆』ではないと……？」

「いや、それも違う。一応、俺等も『六武衆』。でも、飯富さんとやりあったのは俺等の仲間なんだ。」

梅本はそう言い、地国天を喚び出して見せた。

「それに、通り名に六ってついてるから、六人おるってわかるやろ？何であたしらが関係者とちゃうって思ったんや？」

そう北が問えば、兼続はやれやれと頭を押さえて答えた。

「お前達は知らんだろうが……『六武衆』についての情報は、信憑性のないものや誤報が多いのだ。ましてお前達がいた場所は、忍の扱い方が上手い武田……あの小賢しい虎が、のうのうとお前達の情報を素直に流すと思うか？」

三人はへエ、と感嘆の声を出した。

見た目や行動はちゃらんぽらんだが、ちゃんと仕事してたんだ、という意味で。

「それに、情報を攪乱しているのは武田だけではない。」

（（（信兄、今川焼、GJ……！）））

内心で魔王様と白塗り元公家に礼を述べ、微かに笑う。

「……で、あんたは俺達に武田と戦えって言いたいのか？」

小川が面倒そうに尋ねると、兼続は頷いた。それは、武田の元にいる三人ともやりあわなければいけないということだ。

「……言っておくが、断ろうなどと思わないことだ。」

「よう言っわ、さっきから何人忍ばせとんねん。最初からあたしらを脅そうっていう魂胆やろ、見え見えやっちゅーの。」

北は部屋中を見回しながらせせら笑った。
隠れているのはザッと十何人、気配を消しているのだろうか、三人にはちゃんバレだ。

「……気配を絶った忍を見つけるとは、ますます戦に欲しいものだ。」

不敵に笑う兼続と睨みあう三人。一触即発な雰囲気が一瞬漂うが。

「控えよ、兼続。私はそなたに、斯様な命を下した覚えはない。」

キン、と耳を貫いた声に、びくつと身を震わせる兼続。

同時に感じる気配に、三人は思わず腰を浮かせて身構える。

静かに襖が開き、現れた姿に彼等は目を丸くした。

頭には白い頭巾を被り、灰黒色の着物だが、法衣だかわからないものを着ている。切れ長の涼しげな目に、スッと通った鼻梁、顔立ちが綺麗な中性的だ。何処か神秘的な空気の漂うこの人はまさか。

「上杉……謙信？」

恐る恐る、小川がその名を口にすると、彼の人は柔らかな微笑を浮かべて、軽く一礼した。

武田 信玄が人間味溢れる武士ならば、上杉 謙信はどこか人間離れた武士といったところか。

「御初に御目にかかる、『六武衆』の方々。此度は我が家臣、兼続が御無礼致した……お前達も下がるがよい。」

謙信がピシリと命じれば、わらわらと感じていた忍の気配が、潮の退くように遠ざかっていく。

「流石、越後の龍。鶴の一声と言つには惜しい一声やな。」

のんびりと言つた北に、慌てて梅本が彼女の頭をしばいた。

「アホかお前はああ！！？もうちよい丁寧に喋れボケ！」

「梅ッ、お前も騒ぐな！」

小川は必死で梅本を抑えるが……しかし喧しい。

「いったいな、さつきから人のことバシバシしばいて。武将だの何だの言つても、一皮ひん剥いたら誰でもタダの人間やんけ……。」
「頼むからもう黙つてろ！！！」

北 修子、恐るべく無頓着なヤツである。

ユニゾンで怒鳴った後、小川と梅本は素早く土下座した。切り捨て御免？冗談じゃない、ごめんなさい。

「すみません、すみません、コイツちよつとアホでしてマジですいません。」

「後でしっかり殴つときますんで、見逃して下さい。」

ペコペコしていると、ぷつと吹き出す音がして、笑いを必死に堪える声も聞こえた。

そーっと顔を上げると、謙信は袖で顔を隠してくすくすと笑っている。

「何とも面白い者達だ……。私がタダの人間か……成程正論、間違いないな。」

やっと笑いが鎮まったのか、謙信は袖を下ろした。

「やはり、毘沙門天のお告げ通りだ。そなた達が此度の戦に変化をもたらすと。」

「毘沙門天のお告げ？」

梅本が怪訝そうに聞き返せば、謙信はしっかりと頷いた。

「十日程前のことだ。私がいつものように、毘沙門天に祈りを捧げていると、不意に私の頭の中に、そなた達をここに連れてくるように、という言葉が湧き出てきた。それからすぐだ、兼続からそなた達が信玄の元にいると聞いたのは。」

三人は顔を見合わせて、首を捻った。

アレか？この上杉 謙信は、ちよつと電波入ってるのか？

なんて失礼なことを思いながら、北が具体的には自分達に何をどうしてほしいのかを尋ねた。

「まあ、毘沙門天は置いといて。あたしらは結局どうすりゃええの？戦に出ればええだけ？」

「戦に変化をもたらす、とのお告げだったからな……私としては是非とも参戦して頂きたいところなのだが、そなた達に無理強いはさせたくないのだ。意志が固まったら、私に伝えてはくれまいか？」

謙信はそう言い、先程から黙ったままこのやり取りを見ていた兼続の方に向き直った。謙信と目があうと、気まずそうに兼続は顔を伏せる。

「兼続、この上杉のことを、お前は誰よりも想ってくれているのはわかる。だが、彼等を脅して戦に駆り立てるのはならん。」

優しく諭すように、謙信は兼続に語りかける。

「このことは、彼等が己の意思で決めること。わかるな、兼続。」

「……申し訳ありません。出過ぎた真似を致しました。」

深々と頭を下げて、兼続は謙信に謝罪する。

何というか、すんなりと自分の非を認めさせてしまう辺りが凄い。

「……武田のアレとは大違いだな。」

「違いすぎて笑えてくるぞ、俺は。」

「いや、アレはアレで楽しいやん毎日。」

信玄とのおちやらけた日々を思い出し、力ない笑いが込み上げてきた。

とりあえず、危ない目にはあわなくて済みそうだった。

だが問題が消えたわけではない。

いくらあの上杉 謙信の頼みだからと言っても、武田にいる三人とやり合うわけにもいかないし、まずは仲間達とどうにかして連絡をとるのが先決。

残念ながら、未来の便利グッズである携帯を持っていない。そりゃそうだ、寝間着の中でも携帯を握り締めているわけじゃない。

どうしたものか、と三人は頭を悩ませるのであった。

side 甲斐

朝っぱらから、甲斐の躑躅ヶ丘館は上に下への大賑わいだった。皆が目覚めたのは、谷中、山中、木下が行方不明の三人に気付き、館中を走り回った足音と騒ぎ声によるものだ。

そこから家臣総出の搜索が始まり、庭で置き去りになった徳利と三つの御猪口を見つけたときにや、大騒ぎだった。

「どうしよう!?!どうしよう殿下!?!もしヤバいことになってたらどうしよう!?!」

木下はジツとしていられずにうろろ動き回り。

「大丈夫だって、そう簡単にやられたりしないよ……多分。」

自信がなさそうに言う谷中。それを黙って見ていた山中が、静かに一言。

「チロさんの影抜けで、何とか出来るんじゃないんですか?」

間。

「忘れてた!!」

ハッとした顔をして、木下が叫ぶ。

「しかし、いきなり移動してはまずくないか?」

「敵の本拠地の真ん中に顔を出すわけにはいきませんよ?」

信方と虎泰は、早速影に飛び込もうとしている木下の肩を押さえて止めた。

「何だよ、じゃあどうするんだよっ!」

「何か、連絡が取りあえるものがあればよいのだが……。」

腕を組んで考える信玄の隣で、木下はブーブーと文句を言う。それに、やれやれと言いたげな視線を送りながら山中は谷中にそっと耳打ちした。

「殿下さん、あの人達の携帯……こっそり持ってきて下さいませんか?」

「うん、わかった。」

合点がいったのか、谷中は素早く走り去り、直ぐに戻ってきた。そして額を寄せ、何だかんだと言いつけている武田軍団の中から木下を呼ぶ。

「何か良いこと、思い付いたのか?」

「はい。チロさん、影の中に潜んでいるときは、上の様子って見えますよね?」

確認するように問う山中に、木下は頷く。そこで山中は周りから見えないように、携帯を彼女に渡した。

「これを渡してきて下さい。良いですか、なるべく身体は外に出さないように、上手くやらなくちゃ駄目ですよ。」

たちまち木下の顔がキリリと引き締まり、携帯を三つ、懷に放り込んだ。

「僕達の気配は、どうやらわからないみたいだから便利だね。影の中だと、尚更見つからないよ。」

谷中は早速自分の携帯を忍ばせたのか、懷を軽く叩いた。
作戦会議、終了。

「お館様！オレ、一応行ってみる！影から出なけりゃ、絶対に大丈夫だから！」

信玄や勘助が止める間なく、木下はそう言うや否や、近くの影に飛び込んだ。

胸に抱えるのは唯一の連絡手段、無事に届ける事が出来ればこっちのものだ。

木下、初の単独任務だが……騒動なしに上手く遂行できるのだろうか？

二十五の噺 「U・N・毘沙門天は彼女なのか？」 (後書き)

タイトルについてはつつこみなシの方向でお願いします(笑)
はい、やっと出てきました越後の龍。

上杉 謙信は本当に謎の多い武将だと思いますか？

どこかズバ抜けるような感じがして、それこそ「電波」な武将だったと思えるんですが私的に。

ちなみに直江も女性にしました、ええ先に謝つときますごめんなさい。

さて、謙信様は今のところ男か女かどっちかは明かしてません。

謎が謎呼ぶ上杉編、それでは次回でまた！

二十六の斬 「Dive in越後！デリバリーは確実にね。」

side 越後

「どーしたもんかな。あいつら、どったんばったんしてなきゃいいけど。」

寢間着から着替えて、梅本は遠い甲斐の三人を思う。

つくづく、未来の世界の便利さを痛感していた。

とにかく、参戦の相談も兼ねて、三人だけにしてほしいと上杉主従に退出を申し入れて、今はうだうだと話し込んでいた。

「……武田との戦、例えば、川中島の戦以外ありえないな。ということは、武田側は村上との戦を無事に済ませたってことになるのか。」

小川はうーむと唸る。

確か、村上との戦で「砥石崩れ」と呼ばれる痛恨の大敗を喰らったとき、武田は多くの重臣を失った筈だ。それこそ、板垣 信方や甘利 虎泰といったような大物を。

「……歴史の狂いつてのは、やり難いもんだ。川中島の戦は、何回かあったみたいだが、今回では何回目だろうな。」

「四回目だったら泣くぞ、俺は。」

五回に渡る戦の中でも、最も激しい戦いが行われたのが、第四回川中島の戦である。この戦で、軍師・山本 勘助が戦死した。

北は両者の話を聞きながらポアツとしていたが、ふと何かが自分の太股辺りをつつくのを感じた。

それは細い棒のようなもので、つんつん、つんつん、と一定の間を置いてつついてくる。

普通なら、驚いて飛び上がっているところだろうが、生憎普通とは随分かけはなれた世界に来てしまったもので、あまり驚くことがない。

この自分をつつく何かを直ぐ様理解して、北はニツと笑った。そして辺りの気配を探り、敵がいなかったことを確認すると、床を叩いて合図を送る。

「何やってんだ、お前？」

「安心し、来たわ。」

梅本にヘラツとした笑みを寄越して、北は立ち上がり影を映すと。

「よう！大丈夫みたいだなっ！」

安心したような顔で、木下がにゅるんと影から出てきた。

「……そうか、一度出入りした影から影へ、自由に移動出来たんだな。」

「おふこーすだ、Mr・プリンス！」

グッ、と親指を立てて木下は言い、懐から彼等の携帯を渡してやる。

「おお、GJだチロ！」

梅本は携帯を引っ掴み、懐に隠す。

「で、ここ何処なんだ？」

「ああ、ここ上杉んト」。

部屋をキョロキョロと見回して、木下が肝心な事を聞くと、北はあつさりと答える。

「……は？」

「だから、上杉。越後。天地人。」

ピタツと動きを止めた彼女に、北は更に追い撃ちをかける。

「う、上すむぎっ!？」

「はい落ち着こうな。」

叫ばうとした木下の顔を、梅本はすかさずべちつと掌で押さえた。

「マ、マジで？ここ、マジで軍神ん家？」

「マジマジ。ちよいと前に、愛の人と二人セットで会ったから。ちなみに、俺等を拐えって命令したのは愛の人だってさ。」

あんぐりと開いた口に気付き、木下は急いで口を閉じる。

「上杉のご要望は、あたしらに戦に出て欲しいんやと。」

「上杉の戦……思い付くのは一つか。川中島で間違いないな。」

腕を組み、木下は三人を眺めた。

「理由って、オレ達が有名だからか？」

「……軍神が言うには、毘沙門天の「お告げ」らしいぞ。」

「お告げ？ 毘沙門天と謙信様って会話出来んのか！？」

小川は目を丸くする木下に、深々と溜め息をついた。

「そんなもの信じられるか。だが、そうとしか言わなかったんだ。俺達が、戦に変化をもたらすとかなんとか……。」

しばらく難しい顔をして、何やら考えていた木下だが、答は出る筈もなく放棄。

「ま、いいや。皆が無事ってことがわかったし。てなわけでオレは帰るけど、戦に出るのか出ないのかは全員で決めようぜ。もしかしたら、ホントに変化があるかもしれないし。」

再び北を立ち上がらせ、影の上に乗る。

「じゃーな！ あ、それとメールは細かく寄越せってミナちゃんが言ってたぞ！ こっちもメールするから、携帯は絶対に見つからないように隠しとけて。」

ぴらぴらと手を振り、木下は影の中に潜っていった。

「とりあえず、あたしらの居場所と拉致られた理由はチロから伝わるな。」

「連絡ってことは、やっぱり戦の情報だよな。まあ、どうせ俺等はどうちの味方にもつかないし、躊躇うこともないか。」

「……戦に出ると決めれば、重要な情報も手に入る。やり取りしていて損はないだろ。」

中々悪いことを考える三人だが、本来彼等には戦云々のことは

関係ないことだ。

誰かに忠誠を誓ってるわけでもなし、必死で天下を狙ってるわけでもなし。

三人は立ち上がると、部屋を出ていく。勿論、情報収集の為でもあるが、半分は恐らく春日山城だと思われるこの城の観光だ。

「春日山城と言えば、ほぼ空想で描かれた石垣や天守閣が見所だよな。」

城好きな梅本はつきつきと言い。

「越後の特産品ってなんやろ？」

北は早速物色の姿勢に入り。

「……謙信は酒豪で有名だったな。美味しい酒があるといいけどな。」

酒と煙草が生き甲斐の小川は、まだ見ぬ美酒に心弾ませて。

side 甲斐

一方こちらでは、影に潜った木下の帰りを待ちわびていた。

「木下殿は無事であろうか……？」

信方は心配そうに言い、庭でうろつろしている。

「板垣、少し落ち着かんか。にしても、お主等は静かだの。」

信玄は特に不安そうな様子もなく、淡々と待っている谷中、山中の二人に目を向けた。

「……一応、心配はしていますよ。ですが、そんなに居ても立つてもいられないというわけではありませんね。」

表情を変えることなく、山中はあっさりと答えた。それに谷中も続く。

「そーそー。皆一筋縄じゃないかなような連中ばかりなんだよ?」

停雲落月、なんてことはないらしい。

二人の言葉に、勘助はフツと笑った。

「確かに、ご両人の言う通りですな。特に北殿はあんな性格故、拐った側は気が抜けてしまっているかもしれない。」

ある意味大胆不敵な北を思い出したのか、勘助は困ったように言った。

「俺はまだ、あの三人とは余り話したことはないが……きっと谷中殿のようにお強いんだろうな。」

虎昌は目を輝かせ、一度手合わせ願いたいものだ、なんて言っている。

そんな中、谷中の影から木下が飛び出し、着地にしくじってふらついた。

「あだつ!？」

「うわあ!？」

当然なんの前触れなく、人間が影から出てくればびっくりする。谷中も然り、よろめいた木下を避けようとするが、見事に巻き込まれてその場に引っくり返った。

「……何やってんですか、二人とも。」

溜め息をついて、山中が二人を白い目で見た。

「いや、ちょっとした戯れ?」

「どいてよ、チロちゃん苦しいってば!」

「ごめんごめんと謝りながら、木下は谷中の上から身体を退けた。

「で、報告は?」

信玄が報せを促せば、木下は立ち上がってピシッと敬礼をキメる。

「聞いてびっくりだぞお館様ッ!! あいつら、上杉 謙信のところにいる!!」

それを聞いた瞬間、辺りが一気にざわつき始めた。

「……やはり、越後の龍の元であったか。だが、実行した者は彼奴ではない。そうであろう?」

ニヤリとした笑みを浮かべ、信玄は確信したように尋ねる。木下は頷き、報告を続けた。

「実行犯は直江 兼続だ。で、皆丁重に扱われてるぞ。拐った理由は、戦に出て欲しいからなんだと。お館様、その戦って川中島でやるんだろ。」

きつぱりと言い切り、じつと木下は信玄を見つめた。

「何故、川中島だと断言出来る？」

信玄は何気無い風を装って尋ねたが、目付きは何かを探るように細くなっていた。

「武田と言われれば上杉、この両者の関わる戦など、川中島以外思い付かないじゃないですか。」

山中は木下の隣に立ち、当然だともいうように笑ってみせた。

「だよねえ。それがどうかしたの？僕達、何か変なこと聞いた？」

「…いや、お主等の言う通りだ。」

谷中も首を傾げて問い掛けるが、信玄は曖昧に答えるだけだった。

「…とにかく、今一度忍を集め、春日山城の探索に当たらせよ。武田が忍の力、日ノ本一と示すがよい!!」

「…はっ、お館様!」

「見ろよ、凄いぞ！春日山城も良い城だよな。大きさは派手さは安土城に軍配が上がるけど、雰囲気的だと、こっちの方が上品だ。」

三人は揃って春日山城を見物中だ。

北はバラバラでもいいんじゃないか、と意見を……いや、ゴネたのだが、敵地での単独行動はよくないと二人に諫められて、渋々言うことを聞いたのだ。

「なあ、もうええやん行こうや。あたし飽きた。」

「……酒が飲みたい。」

「お前等学科は何処か言ってみろ！」

後ろでブーブー文句を垂れる二人に、梅本は苛々と一喝した。ちなみに、文化財学科である。

「わーったよ、行きやいいんだろ行きや。」

舌打ちして梅本は歩き出そうとする。
すると、彼を呼び止める声がした。

「見ない顔ですね？」

振り返ると、そこには初老の男が一人立ち、物珍しそうな視線を送っていた。

髪は真っ直ぐで長く、色はロマンスグレー。一つに纏められた髪は、片側に寄せられ、ほっそりとした肩に垂れていた。柔らかな琥珀色の瞳は、強い好奇心を色濃く湛えている。

漂う雰囲気は、上品で穏やか。

「…誰や、あんた。」

腕を組み、北が相変わらずな調子で尋ねると、男はおつといけな
い、とばかりに佇まいを正した。

「これは、とんだ失礼を。私は名を宇佐美 定満と申し上げます。

」

「……ウサミミ？」

「「違う！！」」

北がまた、ふざけたことをへらつと笑って言うと、梅本と小川の
二人はダブルで後頭部をしばきあげた。

「……？ ウサミミとは」

「いーえ何でもないんですよあはははは！」

食いついた話題を、梅本は高笑いで無理矢理強制終了させる。

「……は、はあ。」

何か納得いかなさそうな顔だが、この話は流れた。

「……宇佐美 定満、と名乗られましたか？」

仕切り直して、小川が確かめるように問えば、彼は頷く。

宇佐美 定満、彼は謙信が若かりし頃から傍に仕えていたが、詳
しいことはあまりわかっておらずミステリアスな存在の軍師とされ
ている。

「はい。宜しければ、貴殿方のお名前を伺っても？」

何処か見透かしたような口調に、もう既に名前なんか知ってるんじゃないか、と三人は言いたかったが、名乗らないわけにもいかない。

それぞれ名を告げると、定満は琥珀の眼を軽く見開き、微かな微笑みを見せた。

「貴殿方が……殿のお告げによって招かれた『六武衆』なのですか。

」

話の伝達の早いこと。定満の視線を受けながら、三人は同じことを思った。

「なあ、あたしお腹空いたわ。何か食べたいんやけど。」

北の言葉に、そう言えば目覚めてから満足に食事らしき食事をとっていなかったことを思い出す。

「……色々あつて忘れてたな。宇佐美さん、飯が食いたいんだが、どうすればいい？」

会ったばかりの自分に、いきなり頼ってくる三人。

定満は内心驚いていたが、それを顔に出さずにこやかに答えた。

「実は、私もまだ食事をとっていないのです。一緒に参りましょうか？」

来たばかりで城の勝手を知るよしもなく、彼等は定満のありがたい提案に二つ返事で頷いた。

定満は定満で、この不思議な三人と早速話することが出来て大満足である。元より、『六武衆』には興味はあったのだ。

「それでは、行きましょうか。」

定満に連れられ、三人は後に続いた。

〽春日山城「食堂」にて〽

「いや待てよ、食堂？食堂ってあの食堂？」

何だこりゃ、と梅本は前に広がる光景に目を剥いた。

そこはまさに食堂。社員食堂だとか、学生食堂だとかに当てはまるもの。

「……いつも、ここで食事を？」

「はい。殿の提案でして、こうすることで、我々や兵の統率力が増し、戦でも士気が上がるようです。」

定満の話を聞きながら、小川は食堂の中を見渡した。

そこには一兵卒も将も関係なく、和気藹々と食事が行われている。

「武田にはない施設やな。まあ、斬新やろ。まさか南蛮仕様やとは思わなかったけど。」

北が目を向けているのは、テーブルと椅子である。

この頃、まだ海外の代物は伝わっていないのだが、流石は異世界。設定が本当に無茶苦茶だ。

「おや、北殿は中々目の付け所が宜しいようで。」
「そりやどうも。」

ざわざわとした中、数多くの視線が自分達に注がれている。
それをなるべく気にしないように、三人は空いている椅子に腰掛けた。

「何か、こつも見られるといい気はしないな。」
「……居心地は良くないな。」

早速顔をしかめる梅本と小川に、定満は苦笑した。

「それは仕方ないことでしょう。貴殿方は、ご自身の奇怪さを知らないようだ。」

「アホ、何処の世界に自分のことが変やと思う奴がおんねん。」

上杉の二大軍師の一人をアホ呼ばわりし、北はフンと鼻で笑った。

「……それもそうですね。お気を悪くなされたら申し訳ありません。」

ざわざわ、とますますざわめきが大きくなった。そりやそうだ、あの宇佐美 定満をアホ呼ばわりする奴なんぞ、そうザラにいない。

「……まあ、そんなことはどうでもいい。」

小川は興味なさげに話題を終わらせて、ジャストタイミングで運ばれてきた食事に手を伸ばす。

もぐもぐと口を動かしながら、三人は甲斐の三人に送るメールの内容を考えていた。

二十六の囁 「Dive in越後！デリバリーは確実にね。」

（後書き）

ウサミミさんこと宇佐見さんの登場です。

・・・この人ホントわけわかんない人ですよね。

さて、ここからどうしようか。

ちよつと悩み気味です。

甲斐の三人とはここからずっとメールでやりとりします。

次回は上杉の皆とお話タイムです！

二十七の嘶「肝心な話は、メールですとめんどくさい。」

周囲の視線を無視して、三人は黙々と食べる。そんな中、小川はふと自分の椀の中に食べた箸の山菜が何故かあるのに気付く。はて、と首を傾げ、味噌汁を啜るフリをしながら注意深く椀を見ていると……。

「おま、勝手に何を入れてるんだ!？」

「チツ、見つかったか。」

ガチツ、と素早く小川はこっそり伸びてきた箸の先を挟む。それがつまんでいるのはあの山菜、犯人は北だ。

「自分で食べ、それくらい!」

「嫌や。あたしこれ嫌いやもん。」

「だからって俺のトコに入れるなよ!!」

激しい箸の空中戦……最早ドッグファイトと言えるような戦いを、梅本は深い溜め息をついて眺めた。

「行儀悪いぞ、お前等。」

一応、一言注意するが。

「そんなんやから彼女も出来んねん、この生臭野郎が。」

「それとこれとは関係ないだろ!!? いいからそれ入れんな!」

「うっさいなー、好き嫌いすんなや!」

全くもって、何一つ聞いちゃいねえ。そんな様子を唾然と見ている定満に、梅本は申し訳なさそうに言った。

「すみません、こいつらいつつもこんな感じで。俺、一人じゃ手に負えなくて。」

色々と苦勞してそうな彼を見て、定満は励ましの意味を込めて梅本の湯飲み茶に入れてやる。

「謝ることはありませんよ。私でよろしければ、愚痴くらいは聞きますから……。」

何やら妙な友情が芽生えてきている。

「毎度毎度あいつらは揉めるし……その度に俺は一人で止めなきゃならないし……だーれも叱ろうとしないし……。」

入れてもらったお茶をまるで酒のように煽り、グチグチと梅本は呻きだす。それを若干困った顔で聞いてあげつつ、定満は未だドツグファイトを続ける二人を見、やれやれと首を振ったのだった。

さて、食事をしに行ったのか、愚痴を言いに行ったのかよくわからない時間を過ごした後、三人は謙信に呼び出しを受けた。

「……話すことなんか、何もないぞ。」

「お前達から武田の情報を聞き出そうなど、少しも思っていない。」

前に行く兼続は、笑いながら小川の呟きに答えた。

「謙信様は、純粹にお前達に興味を持っておられる。武田や織田の元でどう過ごしていたのか、聞きたいそうだ。」

それはそれで、何やら答えにくい。何をしていたのか、と聞かれれば、ロクなことしかしていなかったような……？

「謙信様、六武衆の三人を連れて参りました。」

あれこれと考えていると、兼続の声で我に還り、三人は慌てて廊下に膝をついた。

「入れ。」

「し、失礼します。」

許可を得て、三人は恐る恐る戸を開き、中に入った。それを見送って、兼続はその場を離れた。

「定満との話は、楽しかったか？」

「軒猿、とやらのお知らせか。」

にこやかに問いかけてくる謙信に、北は顔をしかめて言い返した。すると、謙信は目を丸くしてみせる。

「よくご存知だな。」

「そりゃ、俺等も色々と学んでるんだよ。」

よつこらせ、と梅本は腰を下ろして軽く笑う。

軒猿とは、上杉が使う忍の名称だ。

「……で、一体何を俺達に話させようっていうんだ？」

小川の探るような視線を受けて、謙信は苦く微笑んだ。仕方ない、彼等は無理矢理連れて来られたのだ。

例えば自分が命じたことでなかったとしても、彼等にとってここは敵の巢窟……警戒するなのというのが無理である。

「何を、と言われても……そなた達が織田や武田でとう過ごしてきたのか、私は興味を持ったただけなのだがな。」

「ふうーん……。」

シラーツとした目で三人は謙信を眺めつつ、しばらく黙って考える。

嘘は言ってなさそうだし、何かを企んでいるわけでもなさそうだ。それに、上杉 謙信は何よりも『義』を大切にする武将だし、みすみす自分から不義なことはしない筈だ。

「……話したくないことは言わない。それで良いなら。」

姿勢を正して、三人は会話の体勢に入った。

謙信は嬉しそうに微笑むと、彼等に丁寧な礼を述べる。そこから、謙信の質問に答えていくのだが。

信兄は濃姫さんにベタ惚れ、信玄は甲斐のゴキカブリで裏の支配者は山勘、光秀さん萌えー……と、本当にろくな話がない。もう一度言おう、ろくな話がないのだ。

調子に乗れば、いくらでも事実をねじ曲げられる三人は、脚色を加えに加えていく。あまりのハチャメチャ振りに、謙信は人目も憚らず声をあげて笑った。

「甲斐のゴキカブリとは、それは少し酷すぎる例えではないか？」

「いや、ホントに動き方がゴキカブリそっくりですね、勘助さんにギリッギリに縛り上げられて……。」

特に謙信が目を輝かせて聞きたがったのは、やはり好敵手の話だからか、信玄の話だった。

ただ、信玄の話と言っても、仕事をサボって勘助に縄で宙吊りにされた話だとか、信玄の食事に唐辛子を仕込んでやっただとか、そういうアホな話ばかりだ。

「えらい謙信さん、信玄のオッサンの話を聞きよるなア。」

ニヤニヤと笑いながら北は謙信に言う。その笑みのいやらしいこと、すかさず梅本のチョップが額に炸裂した。

「そ、そうだろうか？ 私はそんなに…信玄殿のことばかり聞いているだろうか？」

首を少し傾げて、戸惑うような表情を浮かべる謙信に、今度はこちらが困ってしまう。ちよっとからかっただけなのに。

「……そうとは、思わないがな。」

「おう、俺も同意見。アレだろ、相手があの甲斐の虎だし、色々情報収集したいんだろ。」

小川と梅本は取り繕うように言い、この微妙な空気を流そうとする。

「ま、別にどうでもええんやけどな。」

「お前が言い出しつぺだろ。」

自分が振った話題にも関わらず、興味なさそうに放棄する北に、梅本が呆れ顔で溜め息をついた。

「……時に、そなた達。参戦の話はどうなったのだ？」

その質問に、三人は眉を寄せて視線を交わしあつた。彼等の様子を見て、謙信は少し申し訳なさそうに俯く。

「急かしている訳ではないのだが、やはり気になってしまつてな。私達の『義』の為に、早く答えが欲しくなってしまうのだ。」

「……その義、つてヤツが、あたしにはイマイチわからへんわ。」

義理と人情、ならよく聞く言葉だが、謙信が唱える『義』とは一体何ぞいや？

北は説明を求め、小川をチラ見する。彼は面倒そうに北に向き直り、さらつと言つた。

「人として行ふべき正しい道のことだ。物事の道理に叶っていることも意味に入る。」

まあ、これは小川がわかりやすいように噛み砕いた説明だ。

ちよつと詳しくいうと、これは儒教のいう「五常」という教えの一つ。五常とは、人が常を守るべき五つの道をいう。

仁・義・礼・智・信と五つの徳があり、仁は思いやりや慈愛、礼は礼儀や敬意、智は正しい知識とわきまえる心、信は誠実さや信じる心との意味がある。

ちなみに滝沢 馬琴著、「南総里見八犬伝」でもこの五常は使われている。話を戻して。

「ふーん、そういう意味だったのか。仁侠とか義侠とか、色々奥深いな。」

ヤクザものには必ずと言っていいほど出てくる言葉を、梅本は思い出して一つ頷いた。

「ふふ……そなた達、意外と博学だな。」

「どういう意味だそれ。」

からかうように笑う謙信に、些かむつとした顔で梅本はじろつと視線を向けた。

まあそんな感じで、何事もなくほのぼのとは過ぎていった。

さて、謙信との話が終わり、部屋に戻った三人は、周囲の無人を確認してやっと携帯を開いた。勿論、甲斐チームと連絡をとるためである。

「あ、早速来てるわ。」

北の携帯にメールマークがあり、それを見てみると。

【おせーんだよ、この馬鹿マンボウ！いつまで待たせんだ、お陰で大福一杯食っちゃったじゃねーか！】

実に木下らしいメールに、何やらガツクリくる三人。そしてスクロールしていくと、付け加えた一文が。

【ちなみに四個だぜ！！】

「……多いのか少ないのかわからない個数だな。」

「そしてもものすげーどうでもいい内容やな。」

げんなりしつつ、小川と梅本にも届いているメールを開く。
小川には谷中から。

【チロちゃんの報告から聞いたけど、元氣そうで安心したよ。そうそう、上杉では二日酔いなんて無様な醜態を曝さないようにね？そんなことしたら】

何故か尻切れトンボのメールだ。
間違えて送信ボタンを押してしまったのだろうか。

「王子、二日酔いになれよ。」

「……何だよ。」

「いや、どういう制裁が待ってるのか気になって。」

「俺が感電するそこそんなに見たいのか!？」

小川のちよつと涙目つぱい目で睨まれながら、梅本は自分の携帯を見る。山中からだ。

【川中島についてですが、どうしますか？上杉さんの予言じみた言葉も気になりますよね。】

「なんだろ、ちよつと期待外れだ……」

「ま、ミナちゃんやしなア。」

至極まともな文面に梅本は肩透かしを喰らい、北は納得するように言った。

彼等はその場に座り直すと、返信の為にカチカチとボタンを押し始めるのであった。

side 甲斐

越後チームのメールを、甲斐チームが見ることが出来たのは、昼が少し過ぎたころ。

いち早く気付いたのは山中で、彼女は残りの二人に呼び掛け、今現在携帯を覗き込んでいた。

「やっぱり、音も振動もないと気付くのが遅れるね。」

うーんと唸りながら、谷中は小川の返信を見ている。

【今のところ、戦に関する情報はない。恐らく参戦すると言えば情報が流れてくるとは思うんだが。ちなみに感電は勘弁してくれ。】

「カンデンにカンベン……何だよ、くっだらねー洒落だなっ!!」

ゲラゲラ笑いながら木下は画面を指差し、谷中と山中はジト目で溜め息をついた。

「マンボウさんは、何と言ってますか？」

山中が木下の携帯を見ると。

【何処の大福？ちなみにあたしは豆大福が好きや。】

「君達は、何でそんなことをやり取りしてんのさ。」

呆れ顔で谷中は額を手で覆った。

ダメだこいつら、早くなんとかしないと。

最後は梅本からのメールだ。

【参戦については、俺等はどっちでもいい。一応そっちもお館様と話したらいいんじゃないのか？】

「確かに、一度きちんと話す必要がありますね。」

山中はそう呟くと、おもむろに立ち上がる。

「ミナちゃん、何処行くんだー？」

行儀悪く寝そべる木下に、彼女は起き上がるように手で指示してこう言った。

「もう一度、お館様のところに行って色々お話しようかと思いました。あ、そうそうチロさんにお願いがあるんです。」

きょとんとした顔の木下に、素晴らしい笑顔で山中は笑いかけた。途端、木下の顔色が変わる。

（こ、これは悪名高き西太后の笑み……！）

谷中もギョツと目を剥いて、山中の眩しい笑顔を見つめた。

清王朝末期の中国に君臨した女帝、西太后。残虐にして残忍、権力に狂う統治者。

まあ、いくら何でも山中がそこまで非道な人間というわけではないが、この笑みを浮かべたときは、大概被害者にドえらい出来事がおこる。

肉体的損害ではなく、メンタル面で。

「チロさん、少し耳を貸して下さい。」

谷中が見守る中、おずおずと木下は言う通りにすると、山中はヒソヒソと何事かを耳打ちする。

「う、嘘だろっ！？オ、オレそんなこと出来ないぞ！？」

「チロさんにしか出来ません。獲物は大きいんです、従わせるにはそれなりの餌を用意しないと。」

「で、でも……！」

「木や葉でも、土の中でもいいんです。数はそうですね、五〇六匹くらいあれば十分な威力かと。」

「うゝ……土の中なら、何とかいけるかも……。」

「頼みましたよ。それじゃ早速、行つて下さい。」

何が何やらわからない顔で谷中が見守る中、木下は気合いを入れるようにペシペシと頬を叩き、部屋の外へ飛び出して行ってしまった。

「……一体、何頼んだの？」

首を傾げて山中に問いかけると、彼女はくすくすと笑った。
可愛らしさを全く感じない、毒を含んだ声だ。

「保険ですよ、いざというときの。」

「……あ、そうなの。」

詳しく聞かない方が良さそうだと感じた谷中は、あっさりと頷くだけにしておく。余計な詮索は、我が身に火の粉が降りかねない。

「さて、それでは私達はお館様のお部屋に行きましょうか。」
「りょーかい。」

二人は一足先に信玄の元に向かう。

木下に、最強にして最悪の兵器捕獲を任せて。

二十七の嘶「肝心な話は、メールですとめんどくさい。」（後書き）

更新遅っ！

待っていてくれた方もそうじゃない方も、お待たせ致しました（汗）最後にupしたのが5月の29日って……………。

今月に入って初めての更新です。

理由はですね……………お仕事探しです、ハイ。

もういい加減に見つけないとマズイかな〜っと思いつつ、のらりくらりと探してまして……………。

そういう時って、なんか書けないんですよ。

えーっと、次回作ももしかしたらもっと思くなるかもしれません（泣）

でも気長に待ってて下さい、お願いします。

二十八の嘶「ほら、どんな人でも苦手なモンは必ずあるワケで……」

（信玄の部屋）

武田 信玄は、いつになく真剣な表情で何事かを考え込んでいた。戦のこと、好敵手・上杉 謙信のこと、そして彼等……六武衆のこと。

「さて、どうしたものかの。」

誰に聞かせるでもなく、そう呟くと。

「お館様。入ってもよろしいでしょうか？」

入室を伺う声がして、返事をする間もなく障子が開いた。

「おお、美那殿に若菜殿。」

「「お邪魔します。」」

二人は真っ直ぐに信玄のところまで来ると、彼の目の前にストンと座った。

「どうかしたかの？三つ者達の情報ならまだだが……。」

山中は信玄の目をジッと見据えて、静かに口を開いた。

「それはいいんです。幾ら優秀な忍と言えど、こつも短時間でお仕事をするには、無理がありますから。」

山中は淡々と続ける。

「お館様、単刀直入に聞きます。此度の戦のこと、教えて貰えませんか？」

「ちょ、いきなりすぎない!？」

谷中は驚いて山中の肩を掴んだ。

「……聞いてどうする？お主等も、戦に加わるつもりか？」

表情を変えず、信玄は穏やかに問い掛けた。

「上杉にいる仲間が、参戦を求められているというのは、先程の報告でご存知の筈です。上杉が参戦を無理強いすることはない、とは思いますが、もし万が一……何かしらの理由で戦うことになれば、私達も打って出るつもりですよ。」

「仲間同士で戦う気でいるのか？」

信玄は困惑したような顔を山中に向けた。しかし、彼女は首を横に振る。

「いいえ、私達は私達のやりたいように動きます。恐らく、軍に乱れを生じさせる可能性もありますし、参戦において、少し無理なお願いをすることもあるかもしれません。私達は自分の為にも、お館様が此度の戦でお考えの策を知らなければなりません。」

谷中は固唾を吞んで、二人のやり取りを見守った。そして、このピリピリする空気を味わわなくて済んだ木下を、心の底から羨んだ。

（っっていうか、僕空気？空気だよね絶対。）

内心でやれやれと肩を落として、黙ったまま見守ることにする。

「それはならん。正式に戦に加わるのではないというのなら、お主等には教えてやれることは少ない。それに、そのような勝手を儂が許すとても?」

信玄はスッパリとそう言い切り、厳しい顔をして山中を見詰めた。

「許してもらわなければ困ります。」

山中が毅然とした態度で言い放った瞬間、ドタドタと足音がして、勢い良く障子が開いた。

「燃え尽きたよ……真っ白にな……!」

「ホントに真っ白になってんだけど!」

ふらふらっ、と今にも倒れそうになりながら登場したのは、小さな木の箱を持った木下だった。何をしてきたのか、着物の袖口が土で汚れている。

「殿下あああっ!! オレ頑張ったぞおお! やってやったぞバカヤロー!」

「ふぐあっ!」

そしてびいびい泣き喚きながら、谷中にタツクルをぶちかましてきた。その様子を呆然とした顔で見ていた信玄は、山中がにこりと微笑んでいるのに気付いた。

「チロさん、お疲れ様です。それじゃ、それをお館様に見せてあげ

てください。」

「うっ、りょーかい……」

キユツと木下は顔を引き締め、懷から箸を取り出した。

「お館様……御免！」

勇ましく言うや否や、木箱の蓋を開けて何かを摘まみ出し、信玄の鼻先に突き出した。

箸の先でうねうねとのたくるように蠢く、「対信玄用最終兵器」。黄色味を帯びた白い体はぶよぶよしており、茶色く平たい頭に、ソーセージの先のような尻。それは、まごうことなき「芋虫」。種類は多分、コガネムシの幼虫だろうか？

「え、虫？何で虫！？」

虫が嫌いな谷中は猛スピードで距離をとり、訳がわからない、と言うように山中を見ようとしたが。

「ッ——！！？！？」

一気に顔から血の気が引き、文字通り真っ白な顔になった信玄のあげた声なき悲鳴に、谷中は目が釘付けになる。

「え？ちょ、え？どついうこと……？？」

何が何やら、谷中は説明を求めて山中の隣ににじりよった。

「やはりそうでしたか……。チロさん、そのまま抑えておいてくださいね。」

陸に挙げられた魚同然の信玄を眺めつつ、山中は面白そうに話し始めた。

「武田 信玄には、芋虫が大の苦手という逸話がありましたね。その苦手っぷりは、相当のものだったらしいんです。ですから、私達の中で唯一虫に耐性のあるチロさんに頼んで、芋虫を捕ってきてもらったんですよ。」

谷中はそれを聞いて、頭を抱えた。

「また…何つー大それたことを。もしその逸話と違ってたら、どうするつもりだったわけ？」

若干咎めるような響きを含んだ声に、山中はきっぱりと言い切った。

「歴史モノのゲームには、大概逸話が練り込まれてるもんですよ。」
要するに、結果オーライということだ。

「ミナちゃんミナちゃん、お館様が大変なことになってるぞっ!？」
幼虫を突き付けていた木下の、慌てたような声が飛び込んできて、二人がそちらに視線を向けると。

「わー！？出てる、何か出てるから!？」

口から今にも魂が抜けそうになってる信玄がいた。
谷中は急いで背中に回り込み、思い切りひっぱたくと、何やらふ

わふわしたモノがしゅぽつと口に引つ込む。そして目の焦点が戻り、信玄は這うようにして木下から離れ、何かを喚こうとしたが、間髪入れずに木下の袖の中から伸びた影が口を塞いだ。

「いやはや、これはこれは素晴らしい話のネタですねえ。このことを「色々な」方々に教えて差し上げれば、もっと素晴らしいことになりそうですよね……。」

むぐむぐと呻く信玄に近付き、山中は囁くように言う。そして更に、谷中から追い撃ちが。

「これさー、甲斐の庶民さん一同は知ってるのかな？」

ラスト、木下からトドメの一撃。

「もう指疲れたぞ……虫、落としちまう……。」

みるみるうちに、信玄の身体が強張っていく。

要点を纏めると、芋虫のシャワーを受けなければ、このことを誰彼構わず吹聴されなくては、この三人の要求を呑め、ということだ。

信玄が死人のような顔で、コクコクと頷いたのは言うまでもない。

side 越後

チーム・the 甲斐の見事な脅迫をメールで知った越後の三人は、馬鹿笑いしたいのを必死で堪えた。

「芋虫でここまで効果があるなんて……！」

「なっさけないヤツ……！甲斐の虎なんぞ辞めて、甲斐の虎猫にゃんにゃんにしたらええわ！」

梅本と北は口を押さえて、ヒイヒイと変な息を吐き出した。

晩御飯を食べた後で、これはキツかった。満腹になった腹が痛くて、二人はピクピク痙攣している。

「……にしても、流石ミナちゃんと言っべきか。」

小川はその様子を見ながら酒を煽り、ニヤニヤ笑いながら呟いた。

「まあ、これで参戦の下拵えが済んだな。後は、俺等の答次第ってワケか。」

やっとこさ復活した梅本は起き上がり、痛む腹部を擦りつつ胡座をかいた。重要なところはそこなのだ。しかし、遊び半分ではないと言える事ではない。

「……元の世界に帰る為に、やらなくてはいけないことでもあるしな。」

小川は猪口を置いて、二人に向き直った。

最大の問題点でもある、「帰る為の方法」。ゲームクリアの条件は『天下統一』、仲間達の間では、様々な天下統一のパターンがあるかもしれないという考えが挙がっているが、この方法が一番無難ではっきりしているのかもしれない。

「とりあえずは、死なへんように技術もあるしな。ヤバなったら逃

げたらええんやし。」

ゴロリと横になった北は、右手から尻鯨を喚び出して眺めた。そう、魔王様のお陰でなんとか生き延びる為の力は備わっている。

「試しに、出してみるか？」

「……明日考えようぜ、俺はもう寝る。」

一体どれだけ飲んだのか、小川の周りには徳利が散乱している。そりゃ眠くもなるだろう。

徳利をがらがらと脇に押しやり、布団に潜り込んでいく小川を呆れたように一瞥して、梅本と北は携帯をパタンと閉じた。そして明かりを消して布団に入り込み、眠りに就いた。

二十八の嘶「ほら、どんな人でも苦手なモンは必ずあるワケで……」

（後書

今回はちょこつと短めでした。

武田 信玄が芋虫大嫌いという逸話を見たとき、うんうんわかるわかるって思ったけど……意外と乙女なんだねお館様。
感想よろしくお願いします〜！

二十九の噺 「戦国って、燃える逸話とか伝説とか多くな？」

草木も眠る丑三つ時……今でいう深夜二時って知ってた？いや、そんなことはどうでもよくて。

「……あ？」

不意に、ぱかつと目が開いた。なんてことない、よくある話だ。そういうときは、妙に頭が冴えてきて、中々眠れないものだ。

むくりと北は寢床から身を起こした。少し離れた所では、男二人がくうくうと寢息をたてて寢ている。

男女同じ部屋で寝るなんて、同室を申し入れたときはえらく驚かれたものだ。だが、孝研ではそんなものに恥じらいを感じる乙女なんぞ誰一人としていない。

そんなことをつらつらと考えながら、北は物音をたてないよう注意して部屋を抜け出した。眠れないならいっそ、辺りをふらふらしてみるのもいいだろう。

白い襦袢一枚では肌寒いので、その辺に畳んであつた瑠璃色の小袖を羽織って。

真つ暗な廊下は携帯の照明で照らして、外側の道を探す。あちこちを散策していると、どこからともなく、低い声が微かに聞こえてきた。お経だろうか、独特の節がある。

「……何やろ、こんな夜中に物好きなの。はよ寝りやええのに。」

普通の人間ならビビってるとこだが、生憎とこちらはそんな生半可なヤツではない。

ボソツと呟き、北は声のする方へと向かった。近付くにつれ、はつきりと聞こえてくるのは毘沙門天の真言。

昔、部室で谷中と木下が真言で盛り上がっていたのを思い出した。

「まさか、毘沙門堂か？」

更に進むと、開けた中庭のようなところに出る。そこに小さな御堂が建っており、声は中から聞こえた。

こんな所で、毘沙門天の真言なんぞを唱える人物はたった一人。中を覗き込もうとしたとき、声がふつつりと止む。

「そんなところにいると、風邪を引いてしまいますよ。入りなさい。」

バレた、と思いながらも、北はあまり動揺していなかった。

「えらい遅うまで起きとるんやな、謙信様は。」

悠々と御堂の中に入り、北は毘沙門天像の前に座する謙信に呼び掛け……目を丸くした。そこには、昼間と全く見た目の違う謙信がいた。

いつも被っているトレードマークとも言えるべき白い頭巾はなく、肩の辺りで切り揃えた紺色の髪。ほっそりした身体を被うのは、桔梗の描かれた白地の単。何より北が注目するのは、首から下のふっくらした膨らみ。

「……詰め物？」

「違います。」

思わず吐き出した言葉を、謙信は苦笑しながら否定した。

「む、胸？謙信様に胸？嘘やん、マジで？マジで？」

バタバタと鶏のように謙信に近付くと、北は目を皿のようにして『彼女』の胸をまじまじと見詰めた。

「ホンマに本物？触ってええ？」

「はい、どうぞ。」

恐る恐る手を伸ばして、膨らみに触れる。

「や、やーらかい……！」

若干変態チックなのは仕方ないが、感触、形共に間違いなく女性の胸。

「信じて頂けましたか？」

「はいばっちりと。」

すっかり北は頷き、信じられないと呟いた。謙信本人の纏う雰囲気も随分違っていて、別人ではないのかと疑いたくなるくらいだ。昼間の『彼』は、穏やかながらも厳しく凛々しい顔付きをしており、口調や声だって勇ましかった。

しかし夜の『彼女』は、どこか憂いを帯びたような儚い表情で、柔らかな口調と静かな声をしている。

「謙信様、こりやどういことなん？あんだ、何者？」

向かい合わせに座り、北はじつと謙信を見詰めた。

「私は、この上杉家に元々姫として産まれたのです。ですが、男として育てられました。」

「男の子、産まれんかったん？」

はて、と北は首を傾げた。上杉家にそんな話などなかった筈だ。しかし謙信は首を振る。

「いいえ、いました。私が産まれる前に一人……ですが、人として暮らせる身体を持つて、この世に出てこられなかったそうです。」

「……奇形児か。」

謙信の悲痛な面持ちと言葉から、すぐにわかった。

「奇形児……？」

「たまにな、あんねん。産まれた子供の手が三本あったり、目が一つしかなかったり。母親のお腹ん中におるときに、ちよつとした事故でそういう身体になってまう子。」

北は続ける。医者の娘だけあって、こういうことはよく見聞きしていた。

「ま、このご時世、呪いだの災いだのって言われてるけど、そういうのじゃないんよな。でも、奇形児の子ってあんまり長生き出来んとは言うで。」

産まれた男の子がどういう運命にあったか、大体予想はついていた。

「……母は、姉と私を産んだ後に亡くなりました。父は養子をとることが許せず、私を男として上杉の頂点に立たせようとしたのです。しかし、それを哀れに思った姉は、私に女としての誇りを忘れてはならないと説き、そのお陰で私は自分自身を失わずにすんだのです。」

話を聞き終えた北は、興味深そうに謙信を眺めて言った。

「……あたしにそんなこと話してよかったんか？」

明らかに今は重要そうな話だ。はつきりいつて部外者である自分に、あっさりと謙信は話してくれたが、それでもよかったのだろうか。

ところが、謙信はゆったりと微笑みを浮かべて、こう言った。

「貴殿方になれば、話しても大丈夫だと……毘沙門天が仰いました。

「……あ、そーですか。」

電波な答えに、北はげんなりして溜め息をつき、胡散臭げな目付きで、堂々と立つ毘沙門天像を見上げた。

「北殿……もし宜しければ、また明日の夜にこうしてお話出来ませんか。」

「それも毘沙門天のお告げ？」

にやっとした笑みで北が問えば、流石に困ったような顔で謙信は首を振った。

「いいえ……私個人的なお願いです。兼続や定満では、気軽に語り合うことが出来なくて……。」

「まあ、あいつらは部下やし。ってか、あたしとは気軽に話せるんやな。」

「……北殿は、私を一国の主としてではなく、ただの人間として見

てくれますから。」

少し嬉しそうに言う謙信に、殿様には殿様としての人間関係の悩みがあるのかと思う北だった。

「さて、と。そろそろ寝ようや。あたし、なんか眠たくなってきた。」

あくびを噛み殺して、よっこらせと北は立ち上がる。謙信もそれに続き、二人は一緒に毘沙門堂を出た。

「それじゃ、また明日。夜は今日と同じ時間帯に来るわ。」

お誘いの返事をする、謙信の顔がみるみる輝いた。

「はい、楽しみにしています。」

謙信と別れ、部屋に戻る途中。不意に北は足を止めて、にやりと口元を歪めた。

「そないに睨んでも、あたしはさっきのこと誰にも言わへんよ。いちいち殺気飛ばしな、気色悪い。」

くるりと振り向き、黒く淀んだ闇の中に呼び掛ける。忍の気配を感じたからだ。北に居場所を見破られたのに動揺したのか、闇の中の気配が揺らめいた。

「城内の見回り、ご苦労さん。ついてこんでええから、とつとあつち行き。」

片手を上げて、わざと風鯨を喚び出してみせる。

これ以上くつついてきたらどうなるか、威嚇してやると、気配はするすると遠ざかっていった。その方向に目をやり、北はクククツ、と喉の奥で笑った。

「ま、この世界の人間には……言わへんよ。」

そう言い、ふらふらと北は廊下の暗闇に消えていった。
翌日のこと。

「起きろよ、おい。いつまで寝てんだ！」

「っさいな……耳障りな……声で……騒ぎなよ……。」

足の辺りをゲシゲシと蹴飛ばされ、ぶつぶつ文句を言いながら北は起き上がった。キツクの犯人は梅本だ。

「……何でお前、そんなに眠そうなんだ？ 同じ時間に寝ただろうが。」

寝巻きの単の襟元を正しながら、小川はいぶかしげに尋ねた。

「そりゃーお前………zzz………」

「「起きやがれッ……！」」

お約束の展開に、小川と梅本のツイン・拳骨が北の脳天にクリーンヒットしたのは言うまでもない。

着替えて朝食を済ませ、ちよつとまったりとした後に、鍛練場へと出ていく。

「身体が鈍ったら困るからな。」

「そろそろ始めよか。」

神器を構えて、ニタツと梅本と北は意地の悪い笑みを浮かべる。二人の目の前には、同じく神器を手にした小川の姿が。

「何で二人同時なんだ!？」

「「ジャンケンで負けたお前が悪い。」」

納得いかないと叫ぶ小川に、二人は声を揃えて言う。
ジャンケンで負けた奴は、勝った奴に攻撃されるのだ。

「……火傷しても恨むなよ……!」

忌々しく舌打ちして、神器を振りかざして飛びかかってくる二人を迎え撃つ。辺りにガンガンと響き渡る金属音。威力は弱めだが、神憑きの能力も使用可能だ。

だがそのせいで、一兵卒は鍛練場に立ち入ることができない。
そんなことは全く頭にないだろう三人を、少し離れたところから眺めるのは、上杉が誇るダブルブレーンの兼続と定満。二人は言葉を交わすことなく、じっと、注意深く彼等を観察した。

「……妙だとは、思いませんか？」

先に口を開いたのは、定満。

兼続は黙ったまま、視線だけで続きを促した。

「あの若さで、もうあれだけ己の能力を使いこなせている。見たところ、彼等が能力を安定させる薬を飲んでる様子はない。薬無しに、あそこまで自在に能力を調整できるなど……。」

定満の目は、欺瞞というよりも純粹な好奇心に輝いていた。それに対して、兼統は眉間に深い皺を刻んだ面持ちを崩さない。

「随分と興味深そうに観察しているな。監視という目的を忘れてもらうては困るのだが。」

「つまらない事を仰る。彼等ほど不思議な……いや、奇怪な存在を、我々は初めて見たといえますのに。」

兼統の言葉に、定満は苦笑しつつ視線は三人から外さない。

「そんなことはどうでもいい。軒猿からの報告、知らぬ貴殿ではないのだろう!」

苛々と、兼統は語気も荒く定満に言い寄る。

軒猿の報告……それは、謙信が女性であると、北が知ってしまったということだ。

「謙信様が性別を偽っていらつしやることを知るのは、城内でもごく僅か。それを、ああも簡単に余所者に教えてしまうとは……何を考えておられるのか。」

困惑したように言う兼統を見やり、定満は微かに笑った。

全く、毎度のことながら心配性な家臣だ。

「気持ちわかりますが、殿にも考えあつてのことでしょう。そう構えずともよろしいでしょうに。おや、そろそろ訓練も後半ですね。」

「定満殿は構えなさすぎだ!」

ビシッと肩を叩かれながら、定満はしぶとくドンパチやる三人に、

そろそろ一兵卒に鍛練場を譲ってやってくれと伝えに行くのだった。
軽く身体を動かした後、三人は馬を借りて城下に向かった。勿論、ちゃんと許可を受けている。

「ってかさ、何でお前のお買い物に俺等が付き合わなきゃいけないだよ。」

「やかましいわ、あたしかて好き好んでお前等なんぞと行きたくないし。」

「……言動と行動が一致していない気がするんだが。」

北に半ば強制的に連れ出された男二人は、とっても不満そうな顔をしている。それに北は馬を寄せ、出来るだけ声を押さえて言う。

「話したいことあんねん。あそこじゃめんどいから、到着したら言うわ。」

珍しく真面目そうな口調に、二人は文句を止めて頷いた。

いつ来ても、古今東西城下とやらは賑やかしく喧しい。
馬を預け、あちこち店を見回りながら、北は要点をかい摘まんで

話した。

「……確かに上杉 謙信には女性説があったが……まさか本当に女だったとはな。」

雑多とした通りを歩きながら、小川は深々と息を吐いた。

「やろ？あたしも最初見たときびっくりしたわ。胸触ってやっと信じられたけど……あ、ちゃんと柔らかかったで。」

「最後の一言いらないだろ。」

感触を思い出したのか、いやらしいニタニタ笑いを浮かべる北の頬を、梅本はぎゅむっと引っ張った。

「とりあえず、甲斐の三人に伝えとこうぜ。それから、お前今夜も行くのか？」

つねられた頬を嫌そうに擦り、北は頷いた。

「……梅、俺達は行かない方がいいと思うぞ。」
「何でだよ？」

小川は梅本のやろうとしていることを先に読み取り、釘を刺す。

「女同士の会話に男が入ると、ロクなことにならないだろうが。散々な目に遇うのがオチだ。」

「いや、それウチの女達の場合じゃないのか？んでもって、そんな目に遇うのはお前だけだろ。」

妙に感慨深そうに語る小川に、梅本は笑顔でつつこんだ。何やらズズンと凹んでいる小川を後目に、でもコイツの言うことも一里あるなと思う梅本。

「おい、マンボウ……って何やってんだテメエは。」

見れば、北は反物屋で立ち止まり、ああだこうだと店の人間と話している。

話をほっぽりだして反物の値切り交渉をしている北に、二人は痛み頭を抱えて頂垂れるのであった。

二十九の噺 「戦国って、燃える逸話とか伝説とか多くね？」

（後書き）

こんにちは、皆様もう七月ですね。ホントに暑いです。

謙信様女性説……結構好きなんです。

なので欲望に任せて女の人になってもらいました！

あー、にしても川中島決戦に辿り着くにはまだまだ長そうです（汗）

早く書きたいけど、そういうわけにも行かないんですね。

そういえばもうじき七夕ですね。

七夕短編も考えているんですけど、当日までに書けたらうーぷする予定です。

そしてお気に入り登録が70人になってました。

読んでくれてる皆様、本当に有り難いです！

それですね、感想が取りあえず自由に書き込めるようになった……のかな？

なんかイマイチ解りませんが、そういう規制が外せるようになりましたので、一応お伝えしておきます。

なのでユーザー登録してない人もしている人も書き込みが出来るかと思われまします。

まだ感想が六つしかないので、是非お願いします。

えーっと次回はside甲斐から始まります、まったりと待っていてくださいまし！

三十の嘶「過去を変えたいと思ったことは、人生に何度ある？」

それから数日間、北は真夜中に起きては謙信のもとに足繁く通った。そんなある日のこと。

「謙信様は、気になる男の人とかおらんの？」

昼に、恋バナで盛り上がっていた女中達の事を思い出し、何気無く北は話をふつてみた。

「気になるお方……？それは、お慕いしている方のことですか？」
「あー、そうとも言っな。」

謙信はしばらく考え込んでいたが、やがてぽつりと言った。

「強いて言っなれば……武田 信玄殿でしょうか。」

「……すまんもつかい言って？」

「強いて言っなら、武田 信玄殿かと。」

間。

「何あつまり言うもん!？」

「言えと言ったのは、北殿でしょう。」

一瞬ピシッと固まった北は、我に還って叫んだ。

「ちよお待ち、ホンマかそれ。ホンマにお館様のこと気になるんか？」

再びの大ニュースに、北は我が事のように慌てて謙信に詰め寄った。

「……あの方は、私に勿体無い程の方。私を認め、真の武人としていつでも真っ直ぐに向き合い、刃を交えて下さる。大切な好敵手です。」

「ん、ようわからんな。好きなんやでな、お館様のこと。」

何やら複雑な感情入り交じる告白に、北は首を傾げずにはいられない。

(これはツンデレか……? ヤンデレとはまたちゃうな。)

そんなことを思いつつ、ふとあることが気になった。

「……戦になったら、お互いに命の獲りあいするんやろ? 一応、謙

信様はお館様のこと好きやのに、そんなことしてええの？」

その問いかけに、謙信は少し悲し気な、諦めに近いような微笑みを浮かべた。

「私は上杉を、あの方は武田を背負って立つ者。どうして寄り添うことが出来ましょう。私は、戦場であの方と刃を交える……ただそれだけでよいのです。たとえ、此度の戦で雌雄がつこうとも。」

北は黙って溜め息をつき、ガシガシと頭を掻いた。これぞ殺し愛、と言うべきか？

とにかく後味の悪いことを聞いてしまったものだ。

「あのさあ、ちょっと極論過ぎひん？あたしはあんまり、愛だの恋だのは鬱陶しいから好かんけど……。」

重たい話題だと思うが、こう言わずにはいられない。何なんだこれは。情熱？ 情念？ それとも執念か。

眉を寄せて、難しい顔をした北に、謙信はふふつと笑ってみせる。

「貴女には理解できないことかもしれないね。ですが、一武人としてあの方と戦うのを私は楽しみにしているのです。お慕いする気持ちもありますからね。」

策を巡らし、鎬を削り、火花を散らし、猛り狂う激情を余すところなくぶつけ合う。そんな滾りを交わすのも、また良いものだ。そう言う謙信を、どうも腑に落ちない表情で北は眺めていた。

「って話なんやけど。」

大まかに話し終えた北は、ああ疲れたと白湯を一口。

「複雑すぎるだろ、その話。」

「……どこからつつこむべきだ、おい。」

顔を引き攣らせて、梅本と小川は呻くように言った。

「あの上杉謙信が実は女で、武田信玄に惚れてて、けど敵同士だから言えなくて、最後は戦でやり合う？」

「……今時ゲームやドラマや映画にしかないシナリオだぞ。」
「ゲームやん、この世界。」

小川のボケに、珍しく北がつっこむ。

「よし、マンボウ。甲斐の三人に伝えろ、何から何まで。」

「あー、無理。電池いつこ減ったから。」

メールの指示を出す梅本だが、即行に却下される。

「……え？何で？」

メールは交代で送っている為、そんなに電池を使わない筈だ。なのに、何故もう電池が減っているのか。

「いや、ちょっとドラクエやってもてな。」

「お・ま・え・は――！！！」

あはは、と笑いながら白状した北の脳天に、梅本の拳骨が落とされた。

「無闇に使っなくなって言っただろーが！アプリするとかアホか！！？」
「はっはっはっは。」

襟首を引つ掴み、ガクガク揺すられても北は一向に反省する様子はない。

小川はもう付き合っのが嫌になったのか、煙管片手に明後日の方角を眺めている。

「王子、悪いけどメールしといてくれるか？マンボウ、お前はそこ座れ。正座しろ正座。」

説教モードに入った梅本を一瞥し、了解の意味を込めて小川は煙管をユラリと揺らした。いやはや、今日もいい天気である。

side 甲斐

即時配達、飛脚いらずのメールを受け取った甲斐の三人は、とてもない内容にびっくり仰天するはめになる。

「うっわ……それなんていうシェークスピア？」

「驚きを通り越して鳥肌ものですね。」

「マンボウってスッゲー！！」

謙信が女だという事実も驚きの一つだが、その謙信が信玄に想いを寄せているということはもっと驚きだ。

「なんとも劇的な話ですね。いかにもというか、王道というか……」

携帯を閉じて、やれやれと溜め息をつく山中。

「なんかさア、これでいいようにオレは思えないぞ。もしどっちかがやられちまえば、絶対悲しいに決まってるぞ。」

木下は顔をしかめて、納得がいかない様子だ。

「覚悟してるって言っても……言い方は悪いけど、所詮言葉だけのものだよね。心や身体は、きつと痛いだろうし。」

頬杖をつき、谷中は溜め息混じりに言った。

「……伝えさせてみる、というのはどうでしょう？」

「はい？」

山中の言葉に、二人は首を傾げて顔を見合わせた。

「戦に加わり、どうにかしてあの二人に話をさせる時間と云うか、隙と云うか……とにかく、そういうものを作ることはできないですね？」

何とまあ、壮大な提案か。谷中と木下は目を丸くした。

「今、私達がバラバラになっているのは、案外都合ですね。正式に戦に参加するということを明確にして、越後の三人と携帯で連絡を取り合う……川中島の戦いの、歴史を変えてみるのも面白いと思いませんか？」

ニタリと笑う山中に、二人はうーんと考え込む。普通なら、異世界のことはいえ、歴史を変えることに躊躇いを感じるものだが、彼女達の答えはこうだった。

「それ、いいね。歴史を変えるなんて、誰もやったことないよ。」

「面白そうだったー！のったぜミナちゃん！」

躊躇いなんぞ、少しもない返答。理由は単純、好奇心だ。

歴史を狂わせれば何が起きるのか、世界はどう変化するのか、それが見たいだけ。俗世にまみれた願いだが、遠い過去を変えてみたいと思ったことはある。それに。

「恋というものはよくわかりませんが……好きあっている方々が戦うのを、無関心で見ている程、私達は情のない人間ではありませんしね。」

「だよなッ！オレは悲しいのキライだ！」

「どうにかなるなら、どうにかしたいよね。」

三人はうんうんと頷き合い、ふとあることを思い出した。謙信は信玄のことが好き、ならば信玄は謙信のことをどう思っているのだろうか？

「お館様って、独り身だよな？」

木下は彼の周囲の人間を思い出し、そう言った。

史実で信玄は、「三條の方」と呼ばれる京都出身の妻と、「諏訪御前」と呼ばれる側室がいた筈だ。

しかし、この世界ではそのような人物を見かけない。つまり、独身貴族？

「よし、じゃあさりげなくお館様に聞いてみようか。それから一応聞くけど、僕達は戦に参戦するんだよね？」

「「勿論！」」

いい加減にコレを決めておかないといけない頃だ。谷中の問い掛けに、二人は声を揃えて答えた。

「そろそろ決めないとなッ！今まで話はするものの、保留になってたし。」

早速越後にメールを送る谷中を見ながら、木下は気合いを込めるように拳と掌をパシン、と打ち鳴らした。

送信完了、と携帯を閉じる谷中を待つて、三人は部屋を出る。目的地は信玄の部屋だ。

「信玄の部屋」

「お館様、元気？」

失礼しますも何もない、いきなりの入室。

もしここに信方や勘助がいたら、眉をひそめられるだろう。しかし、そんなことは知ったこっちゃない三人は、ひょこつと顔を覗かせる。

そして、ピタツと固まった。

「お、お前達が噂の六武衆だな。ほほお、実物のめんこいことめんこいこと。」

中には、見たこともない男が一人、座っていた。鳶色の短髪に細い目、ニヤリと三日月の弧を描く口元。纏う着物は、

目に痛い程鮮やかな猩々緋。その背中に、白抜きで一際目立っている『六文銭』。

ポカン、と口を開ける三人を前に、男は立ち上がった。

よく見ればその派手な羽織を一枚、前を閉めずに着ているだけで、その下は上半身裸だ。下は足首を縛ったズボンに似た形の袴？を穿いている。

「……お館様の部屋に、変態がいるぞ。」

「だあれが変態だ。」

「お前。」

しばし互に見つめあい、木下とそんなやり取りを交わす。

「おれは真田 昌幸。初めまして、可愛らしい鬼のお嬢さん方。」

相変わらずのニヤニヤ笑いを崩さずに『表裏比興の者』は軽く会釈した。

予想通りの言葉に、三人は目を白黒させて戸惑う。

真田 昌幸、言わずと知れた六文銭を家紋とし、真田 信幸・幸村の父である。彼は信玄子飼いの武将で、第四回川中島の戦にも参戦している。

「申し遅れました。私は山中 美那、こちらは谷中 若菜様、木下 千尋様です。」

器用に片眉を上げて何かを待つ昌幸に、慌てて山中が名を告げる。すると彼は満足そうに笑い、ドカツとまた腰を下ろした。

「なーにそんなトコで突っ立ってんだい。入んなよ、お館様に会いに来たんだろ。」

チエシヤ猫のような顔で、昌幸はともすれば胡散臭く見える赤銅色の眼をキラリと光らせた。

三十の嘶「過去を変えたいと思ったことは、人生に何度ある？」

（後書き）

お久しぶりです・・・ホントにお久しぶり。

久々の更新です、最近色々あって筆が進まなくて（泣）

内容はですね、まあありきたり？ですけどこんな感じで。

でもそんなにベタベタにするつもりはありませんよ、もっとあっさりとスツキリと上げたいと思いまする。

で、ついに登場しました真田様。

今は昌幸パパだけですけど、ちゃんと息子もそのうち登場させますよ。

ふっ・・・にしてみやつと三十話到達です。

なかなか進展しないですみません。

でもボチボチ感想が増えて嬉しいう限りです。

次回ものんびり待っていてくださいね。

三十一の嘶「君の本心は五里霧中!？」

昌幸に手招きされ、三人はおずおずと中に入り、少し離れたところに座る。すると。

「ここだよここ。ここに座んなよ、そんな他人行儀な。」

「いや、僕達めちゃくちや他人だし。」

ぺんぺんと自分の隣を叩いて言う昌幸に、すかさず谷中が突っ込んだ。

「手厳しいなア。ほれ、饅頭やるからこつち来なよ。」

「饅頭!？」

ぴくつと木下が反応した。どこから取り出したのか、昌幸は饅頭をひらひらと振ってみせる。

「ほーれ、饅頭専門店、望月屋名物の望月饅頭だ。うーまいぞオ」
「食べるッ!!マッキー、それ食べるぞッ!!!!」

目の色を変えて、木下は昌幸に飛び付いた。まるで犬だ。

「…………お手。」

ぼすつ、と木下の手が昌幸の手に乗る。

「おかわり。」

これもまた、反対の手が乗る。

「顎。」

顎が乗り、堪らず昌幸は吹き出した。

「……よし……！」

震える声でOKを出すと、木下はがぶつと饅頭にワニの如く食らい付いた。それを見て、踞り笑い出す昌幸。

「ううまああー！これちょー美味しい！！！」

「……よかったですね。」

「ていうか、マッキーって何。」

饅頭の美味さに吼える木下を、溜め息を吐きながら山中と谷中は眺めた。

「……し、死ぬ…笑い死ぬ……！」

ひくひく痙攣する昌幸は、ゼーゼー言いながら起き上がった。

「何かすみません。チロちゃん、食べ物には見境ナシなもんで。」

「そのようだなア。ちなみにマッキーたあ、おれのことかい？」

谷中が頷き、山中が付け加えた。

「昌幸、でマッキーですね。あ、申し訳ありません！失礼なことを！」

しかし、昌幸はいやいやと首を横に振った。

「ははっ、構わんよ。しかしマツキーか……なかなか粋な呼び名だなア。」

何がどう粋なのか教えてもらいたい。

「なあなあ、マツキー。やっぱ戦うから、ここまで来たのか？」

饅頭を食べ終えた木下は、首を傾げながら問い掛けた。

「あー、そうだな。普段は上田の城で寝てんだよ。」

「仕事して下さい。」

山中の呟きに、昌幸はへらへらと笑って答えた。

「いいんだよ、信と幸がやってくれっから。」

「のぶ？ゆき？」

大体わかつてはいるが、一応聞いてみる。

「おれの息子達だ。かーわいいんだぞオ、信幸と幸村つつてなア。」

たちまち顔を緩め、昌幸は嬉しげに語り出す。ここから彼の息子自慢が続くのかと思いきや。

「む？何じゃ、お主等来ておったのか。」

スツと戸を開け、部屋の主信玄が登場した。

「早速仲良くなったようだの。昌幸、この者達は面白いだろう。」

「ええ、そりやもう。いいもん見つけましたね、お館様。」

昌幸の言葉に、信玄は満足そうに頷きながら何やら文机の周囲を
ごそごそと漁っている。何かを探しているのか？

「お館様、何をお探しなんですか？」

次第にあちこちをひっくり返し始める信玄に、目を白黒させて山
中は尋ねた。

「……ない。」

「何が？」

信玄の発した低い呟きに、三人は顔を見合わせた。

「お、おやつにとっておいた、儂の望月饅頭が……ない！」

悲痛な声で叫ぶ信玄、それに木下の顔が引き攣る。

「……オレ、食べちゃったぞ……！」

呆然と言う木下。

「謀ったな！マツキー謀ったな！！？」

その後、我に還って彼女は昌幸に掴みかかった。

「おや、あれアお館様のおやつだったのか。悪いねエお館様、木下
嬢に喰わせちゃったよ。」

白々しい口調で昌幸は言い、片手で木下の頭を撫でながら引き剥がす。

「まーさーゆーきいいいい！！！！またやりおったなあ！？儂のおやつ返せ！！！」

「嫌ですねエ、御油断めされるなどあればと言ってるのに。これが戦場なら、お館様はコレですよコレ。」

ギヤーギヤー喚く信玄に、昌幸は水平にした手を首の前で横に動かしてみせる。

「それとこれとは関係ないだろうが！！あの饅頭買うのにどれだけ時間かかったと思うておる！？」

「さーあ？いいじゃないですかア、饅頭の一個や二個ぐらい。」

黙っていたら延々とこの不毛なやり取りが続きそうなので、そろそろストップをかける。

「はいはい、やめやめ。いつまでやってんのさ！」

睨み合う両者の間に、谷中が割って入る。

「ごめんな、お館様。オレ、あの饅頭がお館様のおやつだって知らなかったんだ。」

申し訳なさそうな表情で、木下はペコペコ頭を下げた。楽しみにしていたおやつを誰かに食われる程、悲しいことはない。

「いや、木下殿のせいではない。悪いのは全てコヤツ！」

信玄は憎々しげに昌幸を見るが、本人は何処吹く風。

「まあ、お饅頭はまた買いに行くとして。お館様、少しお話があるのですが……お時間よろしいですか？」

山中がそう切り出せば、信玄は僅かながらギョツとした顔をする。余程あの芋虫攻撃が堪えたんだらう。

「少し個人的な話になります。つきましては昌幸様には退出をお願いしたいのですが……」

「ん？ああ、別に構わんよ。」

昌幸からあつさり出たOKに、山中は些か驚きを見せた。

「なアにびつくりしてんだい、山中嬢。おれが素直に下がるのが、そんなに不思議かい。」

よつこらせ、と立ち上がりながら、昌幸はやっぱりチエシヤ猫のような顔で笑っている。

「……そうですね、不思議です。」

彼女の言葉を聞き、昌幸は軽く息を吐く。

「他人様の重要そうな話に聞き耳をたてるなんて真似、おれは好かんだけさ。時が経ちゃあ、わかるんだしな。」

羽織の裾をぱさりと翻し、昌幸はすたすたと部屋を出ていった。襖を閉める間際に、ごゆつくり、という言葉を残して。それを見送り、山中は静かに口を開いた。

「随分と変わった方ですね。」

「変わったを通り越しとるわー!!」

憤慨した口調で、信玄は鼻息も荒くドカツと腰を下ろした。

「で、何の話をしに来た？」

昌幸のせいで、外れに外れた話にやつとメスを入れることができない。

「重要な話、というわけではないのですが……お館様の口から、上杉謙信がどのようなお人なのかを直に知りたく思いました。」

山中の申し出に、信玄は不思議そうな顔をする。

「何故そのようなことを聞きたがる？」

「敵を知るって、大事なことなんですよ。僕達に態々越後まで行けっというの？」

呆れたように谷中が言い、隣に座る木下もそれに続けと口を開く。

「オレ達、戦に出るって決めたんだ。だから相手のこと、よく知らないといけないんだぞッ！」

信玄はまじまじと三人を眺めた。以前に芋虫を持って、自分を脅しにきたときとは違い、何処となく真剣な面持ちだ。何かを決意したときに見せる、真摯な眼差し。

それが一体何なのか、信玄には見当がつかないが、彼はその目が嫌いではなかった。

「ふむ、まあ別に構わんが……。」

「お館様や謙信様程の人が、話さなくちゃお互いのことなんてわからない、なんて軟派なこと言わないよね？」

少しばかり挑発するように谷中が言えば、信玄はふん、と鼻で笑った。

「当たり前のことを聞くでないわ。儂と彼奴を誰と思うておる。刃を交えれば、大概のことはわかるものよ。」

三人はふんふんと頷き、信玄の話を聞く体勢に入る。

「それでは、お聞きしてもいいですよ。謙信様のこと、どう思ってたらっしゃるんですか？」

山中のストレートな問いかけに、二人は思わず声が出そうになった。

（ミナちゃん、せめてオブライトに包んでくれ……）

二人とも、こう思った。聞きようによっちゃ、何か違う意味に捉えてしまわなくもない。

「ちょ、直球な問いだの……む、こうもすぱつと聞かれたら、何やら答えにくい……」

暫し腕を組み、信玄は考え込む。そして。

「刃を交えることが、あれほど楽しいと思つた相手は彼奴が初めて

だ。今まで名だたる将と戦ってきたが、彼奴は……上杉 謙信は別格。」

戦に関しての内容は、想定内の返答だ。

「つまり、謙信殿はお館様の中で『特別』なんだね。うーん、仲良くなったら、凄い組み合わせになりそうだなあ……」

龍虎のタツグ、是非とも見てみたいものだ。

谷中の言葉に、信玄はふっと微笑みを溢した。

「確かに……もしそのようなことがあれば、共に酒を酌み交わしてみたいものだ。前言撤回になってしまいが、戦いの中ではわからぬことも、杯が交わることでわかるかもしれんな。」

三人は気付かないが、そう言う信玄の眼に、何か言い知れぬ感情が宿っていた。

「そう思っても、やんないんだな？」

木下はじつと信玄を見つめ、そう言った。

「木下殿。儂等は武人、そしてこれは戦。左様なことは、決してあり得ぬことだ。儂等は敵同士……相容れぬ者。」

厳しい顔で信玄は言い、三人は小さな溜め息をついた。成程、やはり武将。

「よくわかりました。お館様、ありがとうございます。」

山中はぺこりと頭を下げ、二人も後に続く。

「む？これだけでいいのか？僕はあまり話していないと思うのだが。」

「そんなことないぞッ！お館様、色々教えてくれてありがとな！」

ニツと笑う木下に、信玄は若干首を傾げながらも三人を見送った。

「……どう思う？」

部屋に戻ると、開口一番に谷中がそう聞く。

「ビミョーだな。はっきりしないんだぞ。」

「私も同じですね。」

北も全く同じ理由で首を傾げているのを知るよしもなく、三人は頭を抱えた。あんまり突っ込んだことを聞いて、何かを企んでいるのかと疑われても困る。

「でもさ、好きか嫌いかでオレ達が判断すると……」

「嫌いじゃない、（ですね）（よね）」

木下の言葉に、山中と谷中は声を揃えて言った。

わかったのはこれくらいだが、もとより好きか嫌いかを判断するために話を聞きにいったのだ。これだけわかれば、後の細かいことを、ああだこうだと言い合う必要はない。

何故なら、めんどくさいから。

「まあ、必要な事はわかりましたからいいでしょう。」

「なあにがビミョーではつきりしなくて必要なことがわかったんだい？」

いきなり響いた、三人以外の声。目が驚きに見開かれ、ザッと全身が総毛立った。

さて、この声の主は如何に……そして、どうするチーム・the 甲斐。

三十一の嘶「君の本心は五里霧中!？」（後書き）

今回は更新が早かったですね。

こうやって更新の速度にバラつきが出てくるんですよ。

こんにちは、最近名前をちょこつと変えた夜です。

今回は武田側がメインでしたが、まだしばらくこれが続く……の
かな？

ところでですね、最近ちょっと悩み事がありまして……やっ
ぱり執筆は音楽を聞きながらが一番はかどるかと思うんですよ。

でね、自分の作品やキャラのイメージっぽい曲を聞きながらやるの
がイチバンだと！

でもあんまり自分じゃ探しにくくてですね（汗）

ですから皆様の意見をお聞かせ願いたく候、です。

お願いします、何でもいいです、何でも！

ではまた次回ッ！

三十二の斬 「ラブストーリーは突然に、ピンチだって突然に。」

スツと襖が開かれ、三人は飛び上がりそうになった。

木下や谷中に至っては、神器を喚び出して身構えている。

「待った待った！おれだよ、マッキーだ！」

今にも強烈な一撃を喰らわされそうな状況に、慌てて昌幸は両手を挙げて部屋に入ってきた。

「……いつから聞いていたんです？」

神器をしまわず、木下と谷中は昌幸をいつでも攻撃できるように取り囲む。

山中はそれを見ながら、静かに口を開いた。表情、声共に、とてもなく冷たい。

「あー……謙信殿のことをどう思う、ってところがっ！！？」

「ほとんど最初からじゃねーかよッ！！！人間なら、自分の言ったことに責任持てよッ！！！」

ガンッ、とすかさず影蜈蚣が昌幸の頭をぶん殴った。頭を押さえて呻く昌幸。

「い、いきなり殴らないでくれ……！」

「ふざけたこと言ってんじゃないよ、マッキー。盗み聞きは好かんとかカツコつけといて、何をあっさりやっちゃってんのさ。」

バチッ、と谷中の持つ電王に電気が走る。にしてもおかしい。

自分達は、気配を消している筈の忍でさえも見つけられた筈だ。なのに、何故わからなかったのだろう。

「そ、それは謝る！ちよいと気になっちまってなア、神器でちよこつと。」

「神器で盗み聞き？方法をお聞きしても？」

ジロリと山中が昌幸を睨み付けて、彼に詰め寄る。

昌幸はバツが悪そうに両手を出すと、そこに白い光が集まり、弾け飛ぶ。現れたのは、肘の辺りまでを覆うガントレットのようなもの。先程みた光と同じ色をしており、ガツチリとした丈夫そうな造りだ。各指の付け根にあたる部分には、小さな突起物がそれぞれついている。

「光糸・白蜘蛛……まあ、糸でおれは戦うんだがね……」

「ああ、大体わかりました。」

深々と溜め息を吐いて、山中は腕を組む。

「糸って、音を伝えるもんね。」

「糸電話の応用編だなッ。」

三人はジリジリ、と昌幸を囲む距離を縮めていく。

どうする？人の口に戸は立てられぬと言うが、今まさに三人の心中はそれだった。

先程の会話だけでは、詳しいことはわからないだろう。だが、確実に自分達が戦に関わることにについて、何かを企んでいることだけはわかる筈だ。

「あー、何だ……その……」

口ごもる昌幸に、三人はササッとアイコンタクトを取り合った。

「知リたそつな顔ですね？」

山中がそう言えば、昌幸は居心地悪そうに視線を逸らした。

その目に、明らかな好奇心の色が見え隠れしているのを、彼女は見抜いていた。

元々山中は、他人の顔色や感情を読み取るのが上手い。

「罪悪感があるときは、表裏比興というわけにはいきませんか。」

昌幸はやれやれと肩をすくめると、次には表情を一変させた。

赤銅の瞳は鋭く細められ、能面のような無表情になる。

「勝手に話を聞いたことは、謝る。だが……聞いちまった以上、おれアお前達に聞かなきゃなんねェんだよ。何を企んでやがる、つてなア。」

三人は頭を抱えて叫びたくなった。ああ、もうややこしい！

真っ先にそんな気持ちを口に出したのは、木下だった。

「もうヤダ！お前めんどくさいッ！！何だよこの変態野郎！お前ホントめんどくさいマジで存在自体めんどくさい！！！」

「いきなりおれの存在全否定かい。」

ビッシイと昌幸を指差し、木下は憎々しげに叫ぶ。そして残る二人も。

「ほんつと最悪……いい年してんだから、空気読めよって感じだね。」

「最悪で最低ですね。挙げ句の果てには脅すとか、人間の風上におけないです。」

どよんとした空気を背負い、シラツとした目で眺められる。

あれ、何これ？おれ今コイツらを尋問してるんだよね？

何やら自分が凄く悪い奴、もしくはどうしようもない奴のような扱いをされて、昌幸はちよっと毒気を抜かれた。

「……おれア、一体どうすりゃいいんだ？」

思わずそう呟いてしまった。

そうこうしてる間に、三人は額を寄せて話し込む。

「どうする、話す？」

「テキトーに話しても見抜かれそうですよね。」

「とりあえず核心の核心はハズして言えばいいんじゃない？」

仕方がない、そうしよう。三人はコクリと頷いた。

やけにあっさりしているが、彼女等の勘が多分大丈夫だと告げている。さしずめ「囁くのを、私のゴーストが」と言ったところか？

「マツキー、今から話すこと、聞いてくれる？」

後は好きにしていいいから、という谷中の言葉に、昌幸は何ともいえない表情を作った。

「あのね、僕達は、この戦をいい方向に向かせようとしてるんだ。」
「いい方向、だと？」

昌幸は一瞬、虚を突かれたように目を見開いたが、すぐに嘲笑うかの如く、口元を歪ませた。

「戦に、良いも悪いもあるのかい？馬鹿げたこと言っちゃ」

「そんなもん、あるわけないだろッ。」

彼の言葉を遮って、木下がきょとん、とした顔で言った。

「どんな理由があつたって、喧嘩や戦争や小競り合いはよくないことだぞ。けどさ、起きちゃったもんは仕方ないよな。」

話の辻褄が全然あつてない。

「でも、その中で上手く動けば……起こらなくていいことを回避できる。逆に、起こってほしいことを起こすことが出来るぞッ！！！」

意味がわからない。何が言いたいんだコイツ。

「要するに、私達は武田と上杉に、「戦って欲しいけど戦って欲しくない」気持ちを持ってるんです。」

山中の言うことも、昌幸には余りにも曖昧過ぎてわからなかった。

「さっぱりだ。おれにも解るように言ってくれ。アレかい、上杉に拐われたお前達の仲間も関係してるのかい？」

困惑したように眉根を寄せ、昌幸はそう言った。

「それもそうだけど。でもさ、よく考えてみてよ……越後の三人は、謙信様のところで世話になってるでしょ。僕達はお館様のところで世話

になってるよね。恩義がある人同士が戦い合うの、見てて気分いいと思う?」

肩をすくませて、谷中は溜め息交じりに言った。

「……これア戦だぞ。そこんとこ、わかって口きいてんのかい。」

格段に低くなった昌幸の声に、怯むことなく三人は頷いてみせた。彼は頭が痛むのか、額を手で押さえた。正直、ふざけるなど言いたい。お前達戦をナメてんのか、とも言いたい。

「で、お前達はとうしようって算段なんだい?」

そんな気持ちを抑え込んで、昌幸は質問を続ける。

「だからな、戦はしてもいいけど、潰し合いはしてほしくないから、今どうしようか考えてんだ。」

腕を組み、神妙な顔で木下は言う。

つまり、『戦うこと』と『殺すこと』とは別物という考え方をしているのか。

「要するに、お前達は双方に害がないようにしたいってことか。そいつアスゲエ。」

未だ、昌幸の嘲るような表情は消えることはない。

その様子に、やれやれと三人は溜め息をつく。

最も、最初から理解を得ようなどとは思っちゃんかったが……。

「あのさあ、何でそんなに意固地なの。僕達のやろうとしてること

って、悪いこと？そんなに間違ってる？」

あまりの頑なさに、若干疲れ気味の谷中。

「善か悪かで言えば、間違っちゃアいないな。けどな、武士としては間違ってる。」

そんな昌幸に、すかさず山中が言い返す。

「武士よりも何よりも、私達は人間です。人の道に反してまで、私達は戦をしたいと思わない。人道に比べれば、武士道なぞ大したものじゃありません！！」

「じゃあ何故戦に出るんだ！？何故武器をとる！？お前達の志は何なんだ！？」

鞭打つような怒声が昌幸からあがるが、それでも怯まずに木下は喰い付いた。

「お前等、志がなけりや何にもできないのかよッ！！オレ達はやりたいからやるんだ！！自分が正しいと思ったようになッ！！！」

自分達現代の人間と、戦国の人間の考え方が途方もなく違っているのは認めよう。

だが現代人には現代人としての意地や信念がある。暫し昌幸と三人は睨み合い、目には見えない火花を散らした。

やがて昌幸の方から目を伏せ、額を手で覆った。

「……本気なんだな。」

その手の下から、低い問いかけが流れる。

三人は静かに頷き、次の言葉を待った。重苦しい沈黙が続き、やがて。

「ああ、畜生！わかったよ、勝手にしな。」

今までの中で一番大きな溜め息を洩らし、昌幸はやけくそだと言わんがばかりにその場に座り込んだ。

「いいんですか？私達は、戦を邪魔しようとしているんですよ？」

少し困惑したように、山中は彼の顔を覗き込む。

「両軍に被害は出ないんだろ？なら好きに動けばいい……何だ、認めてほしくないのかい？」

三人は慌てて首を振った。

しかし、さっきまであんなに反対していたのに……これは一体どうしたことが。

三人の表情を見て、昌幸は続けた。

「もう腹決めちまった奴相手に、何を言おうと無断だろオが。それになア、悔しいがお前達なら大丈夫なんじゃないかって、頭のどこかで思っておれがいるんだよ。不思議なことになア……」

自分でも、腑に落ちないと言いたげな昌幸。

「にしても、話に聞いた通りの曲者揃いだねえ。おれ達「武士」って存在を、こうもきっぱり否定されるたア思わなかったぜ。」

彼はゆるりと口元に苦笑を浮かばせた。

今まで、自分は幾多の人間を見てきたが、彼等は逸そ馬鹿馬鹿しいまでに真っ直ぐな物の考え方をする。

恩義があるから戦ってほしくない、だから戦をどうにかしたい。自分に何か徳があるわけでもなし、何かの野望を抱えているわけでもなし。

「で、おれは何をすればいいんだい？」

「「「は？」」」

しみじみした表情を消し去り、昌幸はキラキラした目で三人にじりよった。

「何をつて……何を？」

谷中の啞然とした顔に、彼はにんまりと笑いかけた。ああ、嫌な予感……。

「何ボケた面してるんだ？お前達の企み事に、おれも入れるって意味さ。見張りも兼ねてるが、たった三人だけで仕掛けようってエのは、些か無理があると思わねえかい？」

「……マツキーさ、結構騒ぎを起こすの好きだろ？」

決して善人面とは言えない笑顔を見ながら、木下は呆れた顔で言った。

さて、何やら思わぬ協力者が現れたのはいいのだが、果たして昌幸をあつさり信用しても大丈夫なんだろうか？三人は首を捻って考えた。

「マツキーさん。私達は貴殿方と違って、策略を巡らせる頭もありますし、相手の本質を見抜くことも素人です。ですから、貴方が

もしこの件について何か別のことをお考えになつていても、それを知ることは出来ません。協力者として、貴方を信用するしかないんです……………この意味、お分かりいただけますよね？」

そう言う山中の声は、どこか困つたような様子だった。

そうだ。自分達は、戦のプロである彼等とは真逆の生活を送つてきた人間。もし裏切られても、どう対処すればいいのかわからない。「……………おれの要望は二つだけさ。一つ、両軍はともかく、武田が不利になるような動きだけは絶対すんな。二つ、隠くしごとたア感心しねえぞ。以上だ……………これだけできたら、おれアお前達に力を貸すよ。」

昌幸の言葉に、がつくり頂垂れる。何で隠し事があるつてばれたんだ。

つまりは、最初から話せとそう言いたいんだな。

「……………わかつたよ。全部教えてあげる。」

谷中は深々と息を吐き出し、今自分達を知る全てのことを、昌幸に語り始めた。

「数十分後」

「……………こいつア驚きだ。」

「だよなー。オレもびっくりしっぱなしだったぞッ。」

とりあえず全部話し終わると、昌幸はその細い目を真ん丸にしてみせた。それに、木下がうんうんと同意する。

「というか、どうやってその話を聞いたんだい？出所は勿論、越後に拐われたお前達の仲間なんだろう？ここから越後つたら……………」

「あはは、だってほら、僕達『六武衆』だし？」

「……………そういうことにしといてやるよ。」

谷中のワザとらしい言い方に、昌幸はジト目で言い返した。

「わかっているとは思いますが、くれぐれも秘密にして下さいよ。」

険しい顔で念を押す山中に、昌幸はこくこくと頷いてみせるが、何だろうこれでよかったのか？と思わざるをえない。

「しかし、何ともたまげた話だよ。あの軍神が実は女で、ウチのお館様にホの字たあな。で、お前達は川中島の戦を利用して、両軍の大將同士に話をさせようって魂胆だ。上手くいけば武田と上杉にや太い繋がりができる……………そんなことは前代未聞、成功すれば天変地異でもおこるんじゃないのかい。」

そう言いながらも、昌幸の顔は楽しみで仕方がないというように

ニヤニヤしている。

「マツキー、何でそんなにわくわくしてんだ？ 変わり身早いな。」

木下が問えば、昌幸は嬉々として答える。

「わくわくもするさ。考えてもみな、とんでもなく突拍子もない計画なんだぞ。それを、たった四人でやるうってんだ。楽しくもなるだろうが。」

「そーいうモンなのか……？」

きょんとする木下の頭を撫でて、昌幸は谷中と山中を見る。

「ま、表の動きはおれに任せときな。お前達は策が決まったら、なるべく早くおれに教えるんだぜ。じゃあな。」

よっこらせ、と昌幸は立ち上がると、三人が止める間もなく、するりと部屋を出ていってしまった。

「ミナちゃん、大丈夫かな？」

心配そうな谷中の声に、山中は微妙な顔で肩をすくめた。

「わかりません。ですが、多分他言はしないかと……。」

全く、本当に表裏比興という表現がぴったりの奴だ。二人がやれやれと溜め息をついていると、木下があっけらかんとした調子で言った。

「ま、いいんじゃないの？ 何とかなるぞ、絶対。マツキー、色々考

えてるだけでさ、変なことはしないと思うぞッ!」

勘だけどな、と呑気に笑う木下に、二人はもう一度、溜め息をついた。

三十二の囁 「ラブストーリーは突然に、ピンチだって突然に。」（後書き）

九月です。うおお、もうこんな季節ですか!?

皆さんこんにちは、夜です。

えー、ハイ……。取りあえず昌幸パパを引きずり込んでみました。

うーん、戦の心構え?をつらつらと考えるのは実に難しいですな。悩みまくった結果がこれです、キャッホーイお粗末だ!。

理屈ってメンドクセー!

えー、次は越後でのスタートですよつと。

あ、もうじきしたらキャラ設定があがる……。かもしれません。

今更?今更ですよ。

まあそういうワケで次回もこうご期待!

そうそう、活動報告?つぱいの始めました。

皆様よければコメント残して下さいまし、すっげえ喜びますんで。

三十三の嘶「こっちも決めよう、大事なこと！」

Side 越後

「成程な……あゝ、にしてもどうすんだよ。」

「……味方が一人、増えたのはいいとして。」

「参戦するって、謙信さんにも伝えんとあかんわな。」

甲斐の三人から届いた、戦に出るという決意表明メールを読み、越後の三人はボケーツと午後のお茶を飲みながらそれぞれ呟いた。ついさっきまで、鍛練という名の忍いじめをして遊んでいたところだ。

まあこれには理由がちゃんとある。

軒猿、という上杉の忍隊、三人が上杉の重要な秘密を握ったことを知った兼続に命じられて、昼夜問わず三人に張り付いているのだが……如何せんTPOがお粗末なのがいただけない。

「トイレや風呂や着替える時までくっつかれたら、流石にキレるよな。」

梅本の言葉に、二人は何度も頷いた。

まずは地国天と陽炎丸が忍の潜む壁or天井をぶち破り、風鯨が彼等を叩きのめすか水に叩き込む。

誤解してほしくない、これは最終手段だったのだ。

「……何度も止める、程々にしろと言ってやったのにな。」

「まあ死んでへんからええやん。」

ズズツ、と年寄り臭く茶を啜り、小川と北はヘツと笑った。

現在、この部屋の付近には、忍っ子一人存在しない。

全員直ぐ様見つけ出され、いじくりまわされ、完膚なきまでにブツ飛ばされ、泣きながら逃げ帰っていったのだ。

とりあえず、ナニをどうされたのかは、忍達があんまり可哀想なので察してやってほしい。

「アレやな、灰と山椒の粉末は忍でも効くな。」

「……お前、二度と室内で使うなよ。」

一体何をやらかしたのか、北の納得したような口振りに、梅本は胃に当たる部分を押さえて呻き、小川は心底嫌そうな声で釘を刺した。

さて、こちらでも決めようじゃないか。

「向こうが出るなら、こっちも出ないとなあ。」

湯飲みを置き、コロンと梅本は仰向けにひっくり返った。

「一応、上杉にも参戦してくれと言われてるしな。だが、色々知った後になると、請われたから戦に出たという理由だけじゃ、少し気が悪い。」

甲斐の三人の考えは、メールにもしつかり書いてあった。

「参戦の理由は十分あるんやけど……問題は戦そのものやな。桶狭間んとときと違って、今回は武器もあるし能力だって強なった。人ぐらいあつさり殺せるで。」

心配の種はそれだ。人を殺すつもりで戦うのは簡単、だが人を殺さないつもりで戦うのはどうも難しい。

どうしたもんか、と頭を悩ませるが、ふと先程の忍いじめのことを思い出した。

あらかじめ仕込みを行っておく、というのはどうだろう。

兵士や武将も、皮を剥いしまえばタダの人間である。鍛え上げられた肉体がどののご託を並べあげても、弱点は必ずある。

「こりゃ、ウチの悪戯帝王様にご提案だな。」

ニマツと笑って、梅本は携帯を開いた。素早く打ち込み、送信完了。

「……弱らせば大丈夫そうだな。それに、いつぞや盗賊とやりあったときのように戦えば、なんとかなるか。」

「力加減さえ間違わへんかったら、多少の怪我くらい平気やわな。」

小川と北は、そう結論付けて立ち上がった。
相変わらずのテキトーさだ。

「さて、と。それじゃあ謙信様に、遅くなった参戦のお返事を伝えるに行くか。」

三人はのほほんとした顔付きのまま、謙信の元へと向かった。

〈謙信の部屋〉

「失礼します、小川です。」
「入れ。」

短い返事を聞き、三人はそつと謙信の部屋に入った。

謙信の座る机の前には沢山の書簡があり、お仕事だったようだ。

「すみません、俺等出直した方がいいですか？」

それを見て、梅本は少しバツが悪そうに言った。

「いや、構わんよ。今、一段落ついたところなのだ。」

散らかっているがな、と困ったように謙信は微笑み、申し訳なさそうに足の踏み場を作り出した。

「……手伝ったほうが、よさそうですね。」

至るところに、何かよくわからない色々が置いてあり、ぶつちやけとても座れたもんじゃない。

小川はそう呟くと、あちこちに散らばる書簡をまとめ始めた。それに、残る二人も加わる。

程なくして、なんとか小さなスペースを作り上げ、ちよつと一息。

「ぎょーさんあつたなあ……何や、仕事でも溜めとつたんか？」

ちよこんとそこに座り、北は平積みになれた書簡だかなんだかを見回した。

「そろそろ忙しくなってくる頃だ。終わらせておける仕事は今片付

けておこうと思ってな。」

忙しくなる、という言葉の意味を、三人は間違っことなく捕えた。

「……戦の話ですが、答えを持つてきました。」

小川がそう口を開けば、謙信は少しだけ驚きに目を見開いた後、表情をキリッと引き締めた。

「そうか、長い間悩ませてしまったが……。」

一度座り直し、謙信は話を聞く体勢に入る。

「遅くなりましたが、俺達は戦に出たいと思います。」

小川があっさりと告げると、謙信は微かに目を見開いた。

「何か不都合でもありますか？」

眉を寄せて、梅本は怪訝そうな表情をつくった。

それに、謙信はいや、と首を振る。

「最初、この話を持ちかけたときはえらく困っていたように見えていたのだな。今が随分とあっさりしているような……。」

三人はへらりと苦笑した。

そりゃ、甲斐とのタッグがあるからだ。

「嫌やな、本来これが目的であたしらのこと拐ってきたんちゃうんか？」

ニヤーツと意地の悪い笑い方をして、北は謙信を眺めた。

「……それを言われると、少々耳が痛いな。」

「おい、それはこの人のせいじゃないだろ。」

申し訳なさそうに俯いてしまう謙信を見て、梅本はフォローを入れた。

事実、あれは兼続の独断で、謙信が命じたものではない。

「とにかくにも、礼は言わねばならないな。感謝する、六武衆の方々。」

謙信は三人の方をしつかりと見ると、軽く頭を下げた。

「大将になる人が、簡単に頭なんか下げていいんですか?」

苦笑を浮かべて梅本が問えば、彼はニヤツと笑って言った。

「何、今は私しかない。越後の龍も一皮剥けばただの人間……そなた達の前では、私は一人の人間なのだろう?」

北に笑みを含んだ目を向け、皆でくつくつと笑いあった。

「何や、覚えとったんか。」

「中々響いた言葉だったのでな。」

北との会話が終わるのを待ち、今度は梅本が付け加える。

「ただし、条件があるんですよ。」

「条件、か？」

梅本はしばらく間を空け、一つ息を吸い込み、おもむろに口を開く。

「俺等を、自由に動かしてくれませんか。」

甲斐の三人と同じ願いを、申し出てみた。

「あたしら、あれこれ命令されんの嫌いやねん。せやから、戦んときは自由にさせてほしいんよ。」

きよとん、とした顔で自分達をみる謙信。さて、このお願いは無事に通るのだろうか？

「わかった。そなた達の希望通りにしよう。」

いや、それ無理。と答えられたらどうしようと身構えていたが、さらっとOKが貰えて拍子抜けする。

「……マジですか？」

「まじ？」

「……本当ですか？」

思わず出た現代の言葉を何食わぬ顔で言い直し、小川は確認をとる。

「全ては毘沙門天の導きのままに。どうしてそれを疑えようか。」

胸の前でそつと合掌し、謙信はニコリと微笑んだ。

「あー……何かよくわかんないですけど。」

これは自分達もやっといたほうがいいのか、と梅本に続き、二人も微妙な表情ながら手を合わせる。

ハタから見れば、ちよつと変な光景だ。

「失礼しま……何をやっておられるのです？」

「あ、うさみー。」

スツと空いた襖から顔を覗かせた定満は、それを見て無意識につこんでしまった。

「ちなみにうさみー、とは？」

「……宇佐美からとった呼び名ですね。」

「ウサミミよかマシだな。」

真顔で言い合う小川と梅本。それにどう反応したものが、若干困った顔の定満。

堪らず謙信は吹き出し、腹と口元を押さえて笑いだした。

「……殿？」

笑われてますます情けない顔をする定満に、ちよつとタンマとばかりに謙信は掌を突き出した。

「いや……すまん、定満……！うさみーなど……あんまり愛らしい、呼び名だったので……つい……！」

ハー、と息を吐き出し、謙信は無理矢理笑いを押し込めた。

「……もうつまみなり何なり、好きにお呼びになってください。私は気にしませんので!」

珍しく投げやりな口調で、定満は出来上がったのであろう書簡の束を抱えた。

「大変やなあ、うさみーも。」

「原因の方が何を言いますか。」

ジロツと定満は北を睨み付け、やれやれと言わんがばかりに部屋を出ていつてしまった。

「ちなみに、兼続は?」

何やら期待に満ちた目で謙信が尋ねる。北は暫しの間考え、ポツリと一言。

「カネゴン……とか。」

小川と梅本の脳裏に、カエルとカタツムリを掛け合わせたような怪獣の顔が浮かび、ブハツと息を吐き出した。

「カネゴン……ぶ、くくくくくつ……!」

謙信は謙信で、奇妙な文字の響きに再び笑いの波が押し寄せる。一頻り笑って、痛くなった腹を擦り三人は立ち上がった。

「どうへ?」

そう尋ねる謙信に、肩を回しながら北は言った。

「ちょっと鍛練や。戦に出るって決めたぶん、強おなつとかんとかんしな。」

思えば正式な初陣なのだ。本番でヘマをしないように、出来る限りのことはしておかなくてはいけない。

「では、兼……いや、カネゴンにでも手合わせを頼むといいだろう。恐らく、一人で鍛練場にいるだろうから。」

悪戯っぽく謙信は微笑み、鍛練場の方を指差した。
三人は楽しげに頷くと、一つ礼をして部屋を出ていった。

「……殿。」

それを見送った後、謙信の前に一人の忍が降り立つ。

「兼続から聞いた。あの者達に随分とやられたようだな。」

からかうような謙信の声に、忍はガツクリと頂垂れる。

「お恥ずかしい限りです。」

彼も被害者の一人だろう、陰鬱とした声でポツリと言った。

「フフ……まあそう気を落とすな。して、武田の動きは？」

「躑躅ヶ崎館内が少しずつ慌ただしくなってきました。それに、上田の知将、真田 昌幸が参上いたしました。」

真田の名を聞き、謙信の口元がふわりと弧を描く。

「やはり来たか。表裏比興の者……」

忍はその様子を見、それから、と言い辛そうに報告を続けた。

「これはまだ断言は出来ませぬが、甲斐にいる六武衆の三人も…戦に加わるとか。」

謙信の目が険しさを帯び、みるみるうちに尖った。

「恐らく……それは断言していいだろう。」
「わかりました。」

謙信のきつぱりした返事に、忍は同意を示す。
そして、すぐに顔を曇らせてしまった自分の主に、氣遣うような視線を向けた。

「……彼等は、そのことを知っているのだろうか。」

少し沈んだ謙信の声に、忍は自分出来ることを口にしてみる。

「……よろしければ、私が伝えておきますが。」

謙信はそうしてくれと言うと、忍は小さく頷き姿を消した。
それを見送り、謙信は溜め息をつく。

「……予想していたこととはいえ、やはり躊躇いを隠せぬ。毘沙門天よ、これでよかったのでしょうか。」

複雑な感情が滲む問い掛けに答える者は、この場にはいない。

三十三の嘶「こつちも決めよう、大事なこと！」

(後書き)

はい、どうも皆さんおはこんにちばんわ。

越後の三人も参戦決定です。

何かもう秋ですね、朝晩のさつむいことさつむいこと。

風邪ひかないようにしないといけませんね。

ではまた次回。

三十四の嘶「仲間同士が戦いあつて？ やるワケないじゃん、めんどくさい。」

「そおらっ！」

「はっ！」

ギンツ、と噛み合う小太刀と大槌。

片や地国天を降り下ろそうとする梅本、それを下から防ぐのは兼続だ。

「がーんばれ力・ネ・ゴン！つーよいぞ力・ネ・ゴン！」

ギリギリと鏑迫り合いの最中、思いつきり間抜けな声援が聞こえ、思わずずるつと滑る二人。

「ちょ……おまつ、本人の前でそれはムリッ……ぶはははははっ！
！！」

「何だそのふざけた呼び名はっ！？」

堪らずゲラゲラ笑う梅本、目を白黒させながら怒鳴る兼続。ちなみに、その声援の送り主はやっぱり北だ。

「何って、兼続さんの呼び名や。かねつぐ、でカネゴン。ええやろ？」

ぬぼーっとした顔で、北は淡々と言った。相変わらずム力つく真顔である。

「どこがだ！今すぐ止める！」

「細かいことイチイチ気にしないや」。そんなんやからいつまで経

「つても独り身なんやで？んな狛犬みたいな顔しとつたら、男一人寄つてけーへんやん。」

そして相変わらず相手の一番痛いところを的確に突いてくる。顔を真つ赤にして唸る兼続の隣を、ぜーぜー息を切らした梅本が通り過ぎた。

「あー、腹筋が死んだ……王子水くれ。」

小川は竹筒水筒を梅本に差し出し、兼続にもそれを渡す。

「……流石に強いな。その小太刀、名前は『鳳・三条宗近』だっけ。」

小川は感心したように言い、まじまじと兼続の神器を眺める。柄は濃紺、鐔は翡翠のような色合い。刃の造りは少し変わっていて、切っ先から数十センチは両刃、そこから鐔までは片刃という構造だ。

木下がいれば、それはバスターソードという西洋の剣の造りと同じだ、と言っだろう。

「突き刺すんも、斬るんも出来るんやな。で、カネゴンは風の神憑きか。」

確認するように尋ねる北に、兼続は頷く。もう呼び名の訂正は諦めたようだ。

「そうだ。にしても……お前達、中々に出来るな。」

兼続は兼続で、噂に違わぬ三人の強さに内心舌を巻いていた。

一通り相手をしてみたが、それぞれ特徴があり面白かったのは秘密だ。

小川は神器の長さを考え、常に一定の距離を保ったまま素早い斬り込みを入れてくる。

梅本は技の手数は少ないものの、神器を巧みに操り、一発一発が強烈な重みを持つ。

北は普段の鈍い動きを一変させ、ワン・ツ一の攻撃を常に密着した状態で放つ。

（……とても子供の腕とは思えんな。）

と、感心する兼続。

お気づきの方も多いだろうが、この世界に来てからというものの、六人は一度も自分の歳を口にしたことはない。

つまり、周りの人間は誰も彼等が二十歳過ぎだと思っていないのだ。

そんなに自分達は年相応に見えないのだろうか、と苦笑いする三人だった。

（まあ……面白いし、都合のいいこともあるからだまっていよう。）

ひっそりそう思い、三人は再び鍛練を開始するのであった。

その日の夜。

「おら、起きや野郎共。」

「んがつ!?!」

すやすやと気持ち良く眠っていたのを手荒く蹴り起こされて、目を覚ます。

寝惚け眼で見上げた先に、偉そうな態度の北がいた。

「お前いきなり何すんだよ!？」

「っていうか、普通他人の頭蹴るか……?」

梅本と小川は青筋をたて、北に掴みかからんばかりに詰め寄った。

「あたしは何べんも声かけたわ。起きひんかったお前等が悪いんやろーが。とっとと着替え、行くで。」

「何処にだよ!？」

用件も何もなく、いきなり行くぞと言われても。

「うるさいな、謙信様のトコに決まってるやろ。」

面倒くさそうに言う北は、もうすっかり着替えていて準備万端だ。二人はいきなりの招待に面食らいつつも、とりあえず寝間着の上に一枚着物を羽織り、帯を無造作に巻き付ける。

「何なんだよ、一体。」

「……俺達は、行っても大丈夫なのか？」

今時分、謙信は「彼」から「彼女」に姿を変えている頃だ。

北は別として、自分達はそのことを知らないという設定……の筈。

「大丈夫や、ええから来い。」

モタモタする男二人に痺れを切らし、ついに北はするりと部屋を出ていってしまう。

二人は慌てて後を追ひ、北の左右に並ぶ。

「軒猿がな、何か呼びに来たんよ。今日はお前等も一緒で行けつて。」

暗い道を、北はスタスタと歩いていく。

「……本当に暗いな。よく歩けるもんだ。」

一寸先は闇、小川は足下に注意しながら進んでいく。
やがて、見たこともないような中庭に辿り着いた。そのど真ん中に佇む、小さなお堂。

「ここ、がそうなのか？」

北に続き、恐る恐る足を踏み入れる男二人。

「まあな。謙信さん、入るで。」

北は戸を開け、すたすたと中に入っていく。

「お待ちしていましたよ、北殿。」

柔らかな声と、奥に座する姿に、小川と梅本は絶句した。

「……謙信さん、か？」

頭巾に隠されていた濃紺の、長く美しい髪と胸元の膨らみに啞然

とする。

「この姿でお会いするのは初めてですね。お初にお目にかかります、小川殿、梅本殿。」

静々と頭を下げ、謙信は言った。

「お前等いつまでそこに突っ立つとるんや。案山子やないんやから、さつさと座り。」

北の呆れたような声に我に返り、二人はぎこちなく腰を下ろした。

「あの、これは一体……？」

怪訝そうに、梅本は謙信を見る。

「おや、北殿から私のことを聞いていないのですか？」
「いやそういうことじゃなくて。」

小川のつつこみに、きょとんとした顔で謙信は北に視線を向けた。

「あー、つまりはあたししか知らんっていう設定の筈なのに、自分達にその姿を見せてええんかっていいたいんよ。」

早速足を崩し、北はそう説明した。

「北殿は、彼等に何も言っていないのですか？」
「いや、一応言っただし。コイツらが気イ使っただけやで。」

ヘラヘラと笑って、北は二人を指差した。何だろうこれもしくは馬鹿にされてる？

とにかく、今は何故自分達がこの場に呼ばれたのかを聞かなくては。

「……………どうして俺達をここに？」

小川がゆっくりと尋ねると、謙信はスッと目を伏せた。

「昼頃、そなた達が兼続の元へ行ったとき……………軒猿から知らせが届きました。甲斐にいるそなた達の仲間が、もうじき始まる戦に加わる可能性が高いと。」

なあんだ、そんなことかと内心で思う三人だが、一応ここでは初めて聞いたことになっている。

そんなことを思っていると、反応が遅れたのを別の意味に捉えたのか謙信は困惑したような目を向けてきた。

「驚かないのですか……………？」

「ま、そうなるやろうと思ってたしな。別段びっくりする必要ないやろ。」

さらっと答えた北に、謙信は眉を寄せる。

「しかし……………友なんでしょう？私は」

「あのさ、俺等がやろうとしているのは殺し合いじゃないから。」

彼女の言葉を遮って、梅本は苦笑を浮かべた。

「……俺達はちゃんと自分の目的の為に動いている。それは、あいつらも同じことだ。」

胡座を組み直して、淡々と小川は言った。

そうだ、自分達は殺しに行くんじゃない。

どうにもならないと誰もが思い込んでいること、出来っこないと決め付けていることを、どうにかなるんだ、出来るんだと見せつけてやるために戦に出るのだ。

「それにさ、俺等、武田にも上杉にも世話になってんだ。一宿一飯の恩くらい返したいだろ。」

「一じゃすまん、何宿でもしとるし。」

冗談めかして梅本が言い、北も笑いながら答える。

そんな彼等を、謙信は目を丸くして見ていた。

「……驚きました。此度のこと、やはり軒猿より直接私の口から言わねばならないと思い、そなた達をここに呼び寄せた次第ですが……。私が言うより先に、そなた達は既に心を決めておりましたか。」

やがて、感嘆の溜め息と共に謙信はそう言った。

「……そんな大層なものでもない。ただ単に、自己中心的なだけだ。」

ふん、とそっぽを向いて、小川は居心地が悪そうに言い捨てた。

「自己中心的、ですか。私にはあまりそうは見えませんか?」

口元を袖で隠して、謙信は淑やかに微笑んだ。

さて、真面目な話はもう終わり。

「さて……こうも早くこの話に決まりがつくとは思いませんでしたね。お二人には悪いことをしました。」

「謝ることあらへんよ、一昔前は平気で夜更かししとったしな。」

眉を下げ、申し訳ないと謝る謙信の肩をポンポンと北は叩いた。

「……むしろ俺はお前には是非とも謝ってほしいな。」

さっきの起こし方とか何かもう色々、という小川の呟きを、北は明後日の方向を向いて無視した。

〈side 甲斐〉

日が過ぎ、次第に騒がしくなっていく躑躅ヶ崎館。
そんな中で、甲斐の三人は何をしているのかというと。

「殿下ー！山椒の粉、調達できたぞ！」

「こっちも唐辛子を調達してきました。」

せつせと戦の為の下準備に精をだしていた。

梅本からメールを受け取った谷中は、嬉々として戦の「仕掛け」に応じた。

「いいねいいね、山椒に唐辛子！後はこれをいい感じに調合して、目眩くスパイシーな世界が広がれば最高だよね！」

うふっ、うふふふ、と谷中は二つの袋をもみみしながら怪しく笑う。

「でも……これ、私達は被らないようにしないといけませんね。」

布の切れ端を風で細かく操る練習をしつつ、山中は呟いた。

目潰しを自分達まで食らっていたら、それこそ笑いである。

「あとは、川中島の地形を知つとかないとなつ。」

「地図はまだかな？今日辺りに、現場周辺地図が出る筈なんだけど。」

「

木下の言葉に、やっと我に帰った谷中が顔を上げた。

第四回川中島の戦いでは、最終的に両軍は八幡原という場所で衝突する。

しかし三人は、戦場所がどのような所なのかを知らなかった。

どこに何があるのか、利用できそうなものはあるのか、それを知っておかねばならなかった。

「忍さんを脅し……こほん、お願いして、現場の下見に行ってもらってるんですね。」

何やら物騒な言葉を咳払いで誤魔化し、山中は遅いですねと風をくるくると回した。

すると、小さな気配がして、天井からコンコンと音がする。

「お、噂をすればだな！お帰りー、八嶋の兄ちゃん！」

木下の楽しいげな声を入室の合図に、板がコトリと動いて、旅人の姿に化けた忍の青年が降り立った。

「お疲れー。どうだった？いい感じに描けた？」

三人は膝を使って忍の青年、八嶋ににじり寄った。

「……このような感じで宜しいでしょうか？」

八嶋は懷から折り疊んだ紙を取り出し、広げてみせた。

「うん、キレイキレイ！流石忍だね！」

そこに描かれていたのは、上空からみた戦場の地図。

「おおー、スッゲー！」

「これならわかりやすいですね。」

正確に的確に描かれた地図に、木下と山中は感嘆の声を上げた。

「あの、山中様……例の件ですが、その……」

三人の満足そうな反応を見て、おずおずと八嶋は口を開いた。

「ああ、そうですね。ちゃんといいお仕事をしてくれましたので、
「あの出来事」は私の記憶から抹消しておきますね。」

にっこりと山中は女神のような笑みを浮かべて言った。
顔は笑っているが、その裏側の表情は八嶋にとって物凄く恐ろしいものだろう。

「ほ、本当ですね！？本当に、忘れて下さるんですね！？」

八嶋の顔付きがガラツと変わり、必死な様子で山中に詰め寄った。

「約束は守りますよ。「あの話」は私が死ぬまで誰にも他言しません。」

「お願い致しますよ！！絶対ですからね！」

山中は眩しい笑顔を少しも崩さない。それに若干退き気味になりつつも、八嶋は何度も念を押して、逃げるように天井から出ていつてしまった。

「……ミナちゃん、一体あの人の何をネタに揺すってたの？」

引き攣った顔で谷中が尋ねるが、彼女はニコニコと笑ったまま何も言おうとしなかった。

「ま、まあ気を取り直してだ。作戦会議するんだろ？」

場を仕切り直すかのように、木下は手をぱんぱんと鳴らす。

これ以上聞かない方がよさそうだと判断した谷中は、素直に引き下がって地図に目をやった。

「史実だと、武田で使われた策は『啄木鳥の戦法』だったよね……ある意味有名な。」

「それを上杉 謙信が見破って、両軍がドンパチやり合った、っていう話だぞ。」

「たしか、上杉が最初に布陣したのが妻女山……あ、ここですね。そしてここには載っていませんが、武田は海津城に入ります。」

さあ、ここからが未来を知る者達の見せ場だ。

三人は一体全体、どのような邪魔を……いや戦い方を頭に思い描くのだろうか？

三十四の嘶「仲間同士が戦いあつて？ やるワケないじゃん、めんどくさい。

はい、仕事も見つからないまま十月になりましたー！

おはこんにちばんわ、夜さんです。

いやー、やっと作戦を練るところまでやってきました！

ここからがめんど・・・ごほん、難しいところですね。

よくわかる戦国時代っていう本片手に、あーだのこーだの考えてます。

そして、多分「いや、駄目だろお前」っていうような作戦が出てきます。

ええ、ホントに。

ところで、「異世界戦国大乱記 短編集」ってのに短編纏めました。なのでお気に入り登録&評価お願いします。

そして短編の量増えました。

で、十月三十一日ハロウィンに向けてハロウィン短編制作中だったります。

ハロウィン当日にup出来るといいのになー、そーだったらいいのになー・・・。

じゃ、さいならーさいならー。

三十五の嘶「寝返り？裏切り？とんでもない、それも作戦です。」

地図を中心に、三人は額を寄せあつて考える。

「ところで、どうやって謙信は啄木鳥の戦法を見破ったんだっけ？」

不思議そうに木下は首を傾げ、ジッと山中を見つめる。

「……炊き出しの煙がいつもより多く見えたことから、これは何か仕掛けてくると予想して、最初に布陣していた才女山を降りたという話です。」

「流石ミナちゃん、得意なのは中国史だけじゃないね！」

ワザとらしく手を叩く谷中を、苦笑いを浮かべて山中は一瞥した。

「なら、その煙が解らなかつたら、この戦法は成功してたわけだ。」
「成功させちゃダメじゃねーの？」

木下の言葉に、山中も頷いた。

「両軍を上手く噛み合わせて、私達は大将同士を引き合わせなくてはならない……なるべく史実通りに動きたいですが、互いの被害も最小限に止めたい。」

難しい話だ。それこそ、この戦国乱世ではあり得ない話。

「そこで、僕が仕込みをするんだけど……うん、一人じゃ無理だよ。お手伝いが欲しいとこだけど、もう揺する人はいないでしょ？無

理に動かして、足がついても困るし。」

山椒と唐辛子の粉末は強力だが、相手は何百何千という人数だ。

「雑魚はそれで適度に足止め出来ても、神憑きはそんな小手先の仕掛けでどうにかなるとは思わないしな……」

腕を組み、木下は唸った。

問題はそれだけではなく、他にもある。例えば。

「武田が背後から廻した別機動隊も困り者だね。えーっと、あの時って上杉チームに守衛隊いたっけ？」

谷中の質問に、山中は頷いた。

「武田の別機動隊と上杉の守衛隊……この両方を妻女山で抑えておきたいですね。この戦、前半は上杉の勝ち、後半は武田の勝ちと言われています。後ろから別機動隊がくれば、ただでさえ複雑な戦いが、もっと面倒なことになる。」

そう言いながら、山中は地中を指先で撫でる。

「じゃあ、別機動隊と守衛隊の中には、オレ達と向こうの三人のうちそれぞれ一人ずつを潜り込ませておくってのはどーだ？」

「そうするのが一番いいのかな……とりあえず、あっちの三人にもそれ、提案してみようか。」

しかし、内容が内容なだけにメールを送るのは面倒だ。

「チロさん、悪いですけど配達頼めますか？」

山中は荷物を漁り、帳面と筆を取り出す。

「あ、それオレも言おうとしてたトコ。オレなら影を抜けて直ぐに行けるもんなっ！」

久し振りの活躍である。

木下はテンション高く言い、ビシッと山中を指差した。

その間、山中は立ち上がって墨と硯の用意をする。

いつも山中が絵を描いたりするので、道具一式は部屋の中にあるのだ。

「地図も一応写メしとくか。」

谷中は念の為、地図を携帯のカメラで撮って送信する。
北と違って、余計なことはしていないので、電池はまだ大丈夫だ。

山中は素早く墨を摺り、帳面の紙に作戦のことをすらすらと書いていく。

しばらくすると、木下の届ける手紙が完成し、山中は丁寧にそれを折り畳んだ。

「今から行っても大丈夫かな？」

「大丈夫だろ、無理なら影から出なけりゃいいだけだし！」

山中が手渡した手紙を、木下は大事そうに懐に入れる。

「それじゃ、お願いします。」

「気をつけてね。」

木下は頷くと、立ち上がって自分の影を映す。

「じゃ、行ってくるなッ！」

元気よく言い、するりと自分の影に入り込んで行った。

「さーと、僕達はお館様のところでも行って、作戦の確認でもしてくるかな。」

「どこで戦つか、それも追々考えていかないと。」

木下を見送った二人は、のんびりと信玄の元に向かった。

｝side越後｝

その頃、越後の三人も、同様に作戦について頭を悩ませていた。

「……これからどうする？」

谷中から送られてきた地図を見ながら、小川はボソリと言った。

「まあ、この写真が送られてきたってことは、色々考え出したってことだよな。」

腕を組み、梅本はうーんと首を捻った。

「第四回川中島の戦かあ……武田が上杉を挟み撃ちにしようとして、

失敗したっつーことしか知らんな。」

大体伝わっていることはそれくらいだ。

「あつちの考えてる作戦がわかんねえ限り、こつちも考えようがないやな。」

暢気に梅本はごろりと仰向けに引っくり返る。
すると、背中をつんつんとつつく何かあり。
これはもしか、と梅本は直ぐ様辺りを探る。

「……今のところ、大丈夫か？」

忍の気配はない。梅本は身を起こし、よっこらせと立ち上がる。

「チロだろ？出てきてもいいぞ。」

ゆらり、と彼の影が揺らめき、急に濃さを増した影から見知った顔が覗く。

「よっ、久し振りだなっ。」

声を低めて木下は言い、影から這い出してきた。

「……便利な能力だな。」
「いいだろ、羨ましいだろ。」

ニシシと得意気な笑みを小川に向け、木下は懷に手を突っ込んだ。

そして、手紙を取り出して梅本に渡す。

「何だこれ。」

「作戦と解決すべき問題点。メールだとめんどくせーから、オレが届けに来たんだぞつ。」

手紙を渡し終えれば、もう仕事は完了だ。

「じゃ、そゆことで。ちゃんと考えるよっ!」

ヒラヒラと手を振って、木下は三人が止める前に、再び影に消えてしまった。

あっさりしてるというか、薄情というか。

「相変わらずやな……小動物並みにせこせこしてるわ。」

やれやれと北は肩をすくめ、山中からの手紙をむしりとリ、畳の上に広げた。

そして、三人で額を寄せあい目を通す。

「……武田の別機動隊と上杉の守衛隊を妻女山で抑える為に、両隊に六人のうち二人を入れるのか。」

「でも、これだと寝返りみたいにならなかいかな?それに、抑えるつつたって言っても、たった二人でとか……」

小川の言葉に、無理だとしても言いたげに梅本は顔をしかめた。そりゃそうだ、二人だけではいくら何でも。

「攻撃範囲の広いやつと、攻撃距離の長いやつなら何とかならんかな?」

北は眉を寄せて、そう提案してみる。

「史実やと、結局武田の別機動隊が後ろから来てなんとかやったな。そしたら、お互いに攻撃するフリしといて、後半一気に畳み掛ければええんとちゃうん？」

随分と腹黒い作戦だが、軍師でもなんでもない自分達が思い付くのは、これくらいしかない。

「あんまり気は進まねえなあ……でも、俺も他の作戦なんて思い付かないし。」

梅本は難しい顔をして、溜め息を吐きながら言った。

これはかなり良心が痛む作戦だ。出来れば寝返り役なんて、引き受けたくはないが。

「じゃ、妻女山チームは梅と殿下な。」

「はあ！？おま、何勝手なこと言ってるんだよ！！！」

いきなりのご指名に、梅本は北に喰ってかかった。

しかし彼女からは、普段からは想像もつかない程に知的な返事が返ってくる。

「お前、あたしの話聞いてたか？さっき言ったやん、適役は攻撃範囲の広いやつと、攻撃距離の長いやつて。それ、お前と殿下がぴったりなんやで。」

「……詳細希望だ。」

珍しく何やらマトモな事を言い出す北に、小川は視線を向ける。

「謙信さんにな、教えてもらたんや。あたしらの能力の特長ってやつ。」

ニヤツと北は笑い、話し始める。

北が言うには、神憑きの力には特長があるらしい。

「今は細かいこと省くけどな、あたしらの中で一番攻撃範囲が広いんは、地の神憑きのお前やねん。で、一番攻撃距離の長くて早いは、雷の神憑きの殿下。」

「……広範囲、長距離で片付けるか。なら丁度いいな。」

梅本抜きで進む話に、彼は口をぱくつかせた。

ちよつと待てと言いたいが、口を挟む隙がない。

「……なら、それをあっちにも言ってみるか。」

「いや、おいっ！！！」

携帯を取り出そうとする小川の手を、慌てて梅本は押さえ込んだ。

「諦めの悪いやつちゃん。どない考えてもお前が最適やろ。ぐちゃぐちゃ言うな、このへっぴり腰。」

「うつせえ！！！そんな大それたこと言われて、はいそうですかって簡単にOKできるかよ！？」

小川から携帯をむしり取るうとする梅本と、それを妨害する北。

「……諦める。」

「うわ熱っ！？」

いいザマだ、と笑う小川の体から炎が沸き上がり、梅本は思わず手を離す。

邪魔は北にまかせ、その隙に素早くメールを打ち込む。

「……送信、と。」

「最悪だ……マジで最悪だ……！」

ズーンと効果音が付きそうな程に、梅本はがつくりと頂垂れた。暗雲を背負い、ブツブツと陰鬱な呟きを発している彼を一瞥して、無情にも小川と北は作戦の続きを話し出した。

「……とりあえず、機動隊と守衛隊の話は置いといて。俺達の位置はどうする？」

晴れやかな顔で、小川は機嫌が良さそうに言った。

「個人的には一番後ろがええけど……でもそれを決めるんは謙信さんやろ。」

手紙を弄る手を止め、北はゴキリと首を鳴らした。

「……おい。」

さっきまで沈んでいた梅本が、まだ陰鬱な声のまま口を開いた。

「何や、粘菌。」

「……可哀想になってきたからあんまり言っちゃるな。」

流石に酷いので、小川は北を諷めた。

粘菌呼ばわりは地味に凹む。

「……霧が出たよな。」

「霧イ？」

部屋の隅でいた梅本は、のそのそと二人のところまでやってくる。

「第四回川中島の戦にはな、濃霧が出た筈なんだよ。その霧のせいで、両軍は互いに気付かずに、すぐ近くで鉢合わせちまって、とんでもない大乱闘になったんだ。」

「……なら、その霧を利用して、妻女山チームの時間稼ぎができるな。」

もつどう文句を言っても、この配役は覆らないと悟ったのか、梅本は小川の言葉に頷いた。

「ってことは、ゆっくり進んだ方がいいんやな……ん？そや、よう考えたら、あたしらの位置って最前線の方がええんとちゃうん？」

北は思い付いたようにいい、小川と梅本は顔を見合わせた。

「何でだよ？」

「だってさ、時間稼ぎすんならゆっくり進まなあかんよ、って言わんとあかんし、被害を最小限にするんには、相手を殺す気のないあたしらが一番気張らんとあかんやろ。」

めんどくさそうに、北は目を細める。

確かにその通りである。

「……お前、一年に数回はまともなことを言っな。」

「褒めとん？ 貶しとん？」

「……勿論貶してるが。」

舌打ちしながらギリギリと睨み合う小川と北を横目に、梅本は一人、キリキリと痛み始めた胃を押さえるのであった。

＼side甲斐＼

一方こちらでは、甲斐の三人が軍の会議に乱入していた。

彼女達の参戦を知った重臣達は、最初はあまりいい顔をしなかった。

彼等曰く、客人である三人を戦に出すわけにはいかない、とのことだったのだが、その三人の強い要望と信玄の推奨により、半ば押し切るような形で重臣達を納得させてしまったのだ。

「しかし、本当によいのか？」

未だに踏ん切りがつかない表情の信方は、何度もこう尋ねてくる。

「大丈夫だよ、ガツキー。僕達、一応六武衆なんだし。」

「それにさ、三ツ者だって言っただんだろ？ 越後のあいつらも戦に出るって。」

いい加減に同じことを繰り返すのも面倒だ。

心配してくれるのはいいが、何事もほどほどが一番なのである。

「板垣殿、さように心配せずとも大丈夫でござろう！彼等はなかなか手強うござる、きつとよい働きをしてくれましょう！」

ニコニコしながら言うのは、武田の猛虎こと虎昌。

彼は一度谷中と手合わせをして、雷で黒焦げにされた経験がある。

「ですが……仲間同士で戦い合うことになるんですよ？」

困ったように眉根を寄せて虎泰は言うが、それを山中が一笑に伏せる。

「そこは私達も十分承知の上ですよ。ですけど、私達全員は武田でも上杉でもない……互いを攻撃しなければいいだけの話です。」

その言葉に、武田四天王は顔を見合わせた。

「あっさりしていますね。どちらが勝とうと負けようと、仲間が無事ならば問題ないということですか。」

「ま、そーなるな。オレ達の目的は、皆が無事に会うことだし。」

昌信が苦笑混じりに聞けば、能天気な顔で木下は笑った。

武田四天王としては、少しでも寝返り・裏切りの可能性のある輩は戦に参加させたくはないところだ。

だが、是非戦に加わらせてくれと頭を下げて頼み込んでくる。

戦が近いこの頃、『六武衆』と呼ばれる彼等の参戦は、正直切り札としては好ましい。

何度か勘助や信方が、武田に仕える気はないかと尋ねてみたが、彼等は笑って一様に言い放った。興味がない、と。

「まあ、そう気を張らなくともいいでしょうがよ、四天王の皆さん方。あちらさんも三人、こっちも三人、これで互いに過不足なしの戦が出来る。それに、それぞれが越後と甲斐に恩があるんだ。いくら得体の知れねエ六武衆でも人の子、いい加減疑うのはナシでいいんじゃないのかい？」

へらへらと笑いながらも、その声色の底にピシリとした響きを含ませたのは昌幸だ。

「珍しいこともありますな、真田殿。いつもならば、貴殿が真っ先に噛み付いていように。」

隻眼を瞬かせ、勘助が驚いたように昌幸の方を見る。

「それは儂も同感だの。昌幸よ、お主が飛び入り参加の者を買うつは。」

信玄もどいう風風の吹き回しだ、と言いたげである。

昌幸は笑みを崩すことなく、三人に顔を向けた。

「失礼ですねエ、揃いも揃って、人を山犬かなんかのように思ってるんで？ほら、お前達も言ってやりやあいさ。」

三人は頷くと、決意表明とばかりに高々と宣言した。

「先程、ああは言いましたが……私達は貴殿方武田を、悪意を以て陥れるようなことは絶対に致しません。」

山中は静かに、だがキツパリと。

「今は、武田の為に尽力する。必ずいい結果を出してみせるから、期待しててよ。」

谷中は力強く、余裕を持って。

「だから、オレ達のこと信じてほしいんだ。この戦、絶対に良いように終わらせてみせるぞっ！！！」

木下はグツと拳を突き出して、勢いよく。

それぞれの言葉を聞き、信玄はおもむろに口を開いた。

「ようわかった。お主等の覚悟、この武田 信玄しかと受け止めた。」

武田四天王も名軍師も、一様に頷き微笑む。

それを見ながら、三人は多少心が痛んだが、同時に必ずこの戦を良い方向に向かわせようと身に力を込めるのであった。

三十五の嘶「寝返り？裏切り？とんでもない、それも作戦です。」（後書き）

軍議の様子がマジにわかりませぬお館様ああ！！！！

・・・・・・どうも皆様、夜です。

十月も終盤ですね、時よ止まれお前は美しーーーー！！！！
はい、ごめんなさいちょっと暴走しました。

次回からはいよいよ戦の準備編ですよつと。

早く進めばいいのに・・・・・・ストーリーがなかなか（汗）

三十六の嘶「決戦まであと少し！彼等の過ごし方は。」

（side甲斐）

あれから何度か、メールのやり取りを繰り返し、両軍の軍議にも顔を出していた六人。

互いに情報交換を繰り返し、彼等の作戦も固まりつつあった。武田の別機動隊と、上杉の守衛隊を抑える役目になった梅本と谷中は、必死に鍛練を積んでいた。

谷中には、事情を知る昌幸から嬉しいお届け物が。

「……えーつと、誰？」

鍛練を終えて、汗を拭きつつ戻ってきた谷中の前に深々と平伏する青年の姿。

ぽかんと口を開けて谷中が言えば、青年はスッと顔を上げた。キリツと釣り上がった目は、深い海の色。

同色の髪はポニーテールにしており、流れるようだ。

「昌幸様から名を受け、貴女様の駒となるべく参りました。海野六郎と申します。」

もう一度深々と頭を下げる青年に、どうしたもんかと谷中はポリポリと頬を搔いた。

海野 六郎、真田が使う忍集団『真田十勇士』の一人。

「ご用があれば、何なりと。」
「あ、待ってよ！」

そう言い残し、六郎は姿を消そうとする。それを慌てて谷中は呼び止めた。

怪訝そうに振り返る六郎に、谷中はにこりと笑いかけた。

「海野さんっていったよね。知ってると思うけど、僕は谷中 若菜。よろしくお願いします。」

ペコツと一礼しようとした彼女の頭を、やんわりと六郎は押さえた。

「今、貴女様は我が主……簡単に頭を下げてはなりません。」

淡々と六郎は言い、シュパツと消えてしまった。
残された彼女は、やれやれと苦笑を浮かべる。

「堅物なんだなあ、まったく。」

真面目そうな六郎の顔を思い出し、谷中はそう呟いた。

さて、こちらは木下と昌幸の二人が向かい合って座り、何かを話している。

「出陣は一応七日間後だ。いいか、まずおれ達は海津城に入る。そこから上杉の出方を見つつ、策を練る。」
「海津城、な。」

確認するように呟いて、木下は神妙な顔で昌幸に問い掛けた。

「皆、戦の準備してる。マッキー、他に俺達に出来ることってないか？」

昌幸は少しだけ苦笑すると、安心させるように彼女の頭を撫でながら言った。

「ねえよ。お前達は自分のやらなきゃならないことにしっかりと気イ回してる。戦の途中でも、おれの力が必要になれば絶対に言うんだぜ。」

こくり、と木下は頷いた。表のことは昌幸に任しっぱなしで、少し申し訳なく思ってたの言葉だったが、どうやら必要なかったらしい。

「わかった！じゃあ、オレはオレのやることをするっ！てなわけでマッキー、相手よろしくつ。」

「またかよ。」

ずるりと影蜈蚣を引つ張り出し、勢いよく立ち上がった。

最近、木下はよく誰かを捕まえては鍛練に付き合わせている。

昌幸が思うに、気が昂って居ても立ってもいられないんだろう。病気ではないが、これはまだ、戦の経験が浅い神憑きによく起こる症状だ。

（これが起こるってこたあ、まだまだ戦いに関しちゃひよっこってことだなア。にしても、随分と気性の荒い雛だ。）

何度か昌幸も彼等三人の相手をしたが、日に日に成長しているようだ。

（この戦……意外と早くケリがつくかもしれないなア。）

そう内心で笑い、昌幸は早く早くと急かす木下の後に続いた。

そして山中はというと。

「っ……！これは、中々手強いですね……」

愛馬白蓮に乗り、躑躅ヶ崎館から少し離れた草原で宙に「浮いて」いた。

新しい技、『鳶舞』の練習である。

耳元でひゅっひゅっとうと風が鳴り、山中は懸命にバランスをとる。

「戦までに、これをマスターしておかないと……」

空を飛べるということは、何かと便利だ。

偵察や上空からの攻撃なんかに使えるし、是非とも早く覚えたい。

よろよろと危なっかしい飛行を続ける山中の額に、じわっと汗が浮かぶ。

「山中殿ー！」

そんなとき、下から彼女を呼ぶ声がして、山中は足元に目を向けた。

ふわふわしたアマ色の髪的美青年は、昌信だ。

「高坂さん……？」

ゆっくりと下降しながら、山中は彼がどうしてここにいるのかと首を傾げた。

差し出された手を取り、ふらつくことなく着地すると、昌信はにこりと微笑んだ。

「鍛練ですよ。居場所、忍に聞きました。私も同じ風の神憑きです。何かお手伝い出来るかと思ったのですが……」

それは初耳だ。ならば、練習するのにもってこいの相手である。

「ありがたいです。どうもふらついてしまつて、速く飛べないんですよ。」

苦笑いを浮かべながら、山中は汗を手拭いで拭った。

「少し見ただけですが、どうやら力の放出が遠慮気味ですね。もう少し多めに放出しても大丈夫だと思いますよ。」

昌信のアドバイスに、山中は成程と頷いた。

「わかりました。じゃあ、少しだけ。」

再び、山中の周りにはヒュウヒュウと風が渦を巻く。

呼吸を整えて、心を落ち着けて、山中は軽く地を蹴った。

「あ……凄い、高坂さんの言った通りですね。」

さつきよりかなり安定した飛行をする山中を見上げ、昌信は眩しげに目を細めた。

｝side越後｝

「おい梅、避けんと思ぬで！」

「は……？　ぎゃあああああ……！！？」

間延びした北の忠告に、怪訝そうな顔で振り返った梅本は、自分めがけてフツ飛んでくるタイヤ程の大きさの氷塊を、絶叫しながら地国天で叩き潰した。

「テメエエエ……！殺す気がコラアアア……！！」

槌部分を半分ほど地面にめり込ませたまま、梅本は鬼の形相で怒鳴った。

「いやー、すまんすまん。ちょっと氷系の技の練習しとつたら、つい暴発してもうたわ。にしてもマンガみたいな展開やな。」

「……もうヤダ、こんなヤツ……」

ズーンと影を背負って、梅本はその場にしゃがみこんだ。

泣いてないよ、これは目から汗が出てるんだよ。

北はそんな彼の様子などお構いなしに、しげしげと地国天があけた大穴を眺めている。

「何ですか、今の音は!？」

地響きと轟音に驚いたのか、目を丸くして定満が登場した。

「あ、ごめんなあうさみー。ちょっとした事故や事故。」

手をヒラヒラ振りながら、北は定満に向かってあははと笑ってみせた。

「大丈夫ですか、梅本殿。お怪我は？」

「すんません、大丈夫です。」

心配そうに定満は彼に駆け寄り、梅本は溜め息を吐きつつ立ち上がった。

「鍛練に精を出すのはよろしいですが、戦に行く前に怪我をしてしまつては本末転倒ですよ。」

「わかつてるんですけど、何と言つか……何もしないでいると、落ち着かなくて。」

どうやらこちらの三人にも、あの症状はしっかり起きているよ

うだ。

梅本は沸々と沸き上がってくる奇妙な感覚に、ぶるつと身体を震わせた。

「神憑き特有の症状なあ……難儀なもんやで、じつとしとつたら、気持ち悪うて昼寝も出来んわ。」

ぼーっとするのが好きな北は、顔をしかめて心底迷惑そうだ。

「さすがにそれだけはどうもできませんね。そういえば、小川殿はどちらに？」

困ったような表情を作った定満は、いつも三人一緒にいる彼等が一人足りないことに気付いた。

「ああ、あいつは症状が酷いみたいで……個人差ってあるんですね、今ちよつと城下の人に貸し出し中なんですよ。」

ふふんと笑った梅本の言葉に、ワケがわからず定満の頭上には疑問符が散乱している。

「貸し出し中……？」

きよんとした顔の定満を横目に、北は今頃忙しそうにしているだろう小川の姿を想像して、口許を緩ませた。

で、話中の人はというと。

「もうちょい火力上げてくれ！」

「はい。」

鍛冶屋で刃物作りの手伝いをしていた。

炎の神憑きは症状が重く出ることが多く、小川も例外ではなかった。

じっとしていると、畳や襖を焦がしてしまいそうな程に熱気が溢れ出すし、かといって鍛練をしても抑えが効かずに相手を吹っ飛ばしてしまう。

ド派手に炎を吹き上げても大丈夫なところといえば、鍛冶屋が絶好の場所だ。

「おーい、こっちも頼むよ！」

「わかりました。」

黙々と炎を操り、小川は灼熱の仕事場を汗も流さず悠然と行き来する。

能力のせいか熱さをあまり感じないので、一人涼しい顔だ。

一つ息を吐き、小川は黒々とした鉄に炎を吹き付けた。

たちまちそれは赤く輝き、振り下ろされる槌の音が響き、火花が飛び散った。

「よし、今日はここまでだ。お疲れさん。」

「お疲れ様でした。」

しばらくすると、バイト時間が過ぎ、小川は鍛冶屋の親方に一

礼した。

懐にはしっかりとお給料が入っている。
親方と別れ、預けていた馬を受け取る。

「……こら赤兔、舐めるな。」

甘える愛馬の鼻面を軽く叩き、馬に跨がり城への道を駆ける。
ある程度鍛冶屋で力を使ったので、今のところ熱気が溢れ出す
ことはない。

風を頬に受けながら、小川は残すは僅かとなった戦のことを思
った。

（力のせいかな、戦うことに妙な高揚感があるな。）

この様子だと、本番は色々とトんでしまいそうだな。

（炎の神憑きは苦勞するとカネゴンに言われたな……まったくその
通りだ。）

小川は緩やかに走る赤兔の鬣を撫でて、深々と溜め息を吐いた。

（side甲斐）

さて、各自思い思いの過ごし方をして、いよいよ前日までに日

が迫った。

兵糧の準備だの、兵士の鍛練だの、情報の探り合いだの、一際賑やかしかった両軍も、前日となれば準備も整い、静かになっていた。

しかしその静けさも穏やかなものではなく、ピリピリと張り詰めた、実に居心地の悪いものだ。

当然と言えば当然だが、慣れぬパンピー共にはちと堪えた。

「あー、何か心臓の辺りの圧迫感がヤベエぞ……」

くたりと座り込んだ木下は、げんなりした顔で左胸の辺りを掴んで呻いた。

「僕もだよ……何か緊張しちゃうし、夜も寝れないし……」

谷中も同じく、がっくり頂垂れて情けない声を出す。

「でもさ、俺達って……」

「うん、まだマシだよな。」

二人は顔を見合せ、ちらりと隣を見る。

そこには、顔色が真っ白になっている山中がいた。

「ミナちゃん、大丈夫か？何か新雪みたいな顔色してるぞ。」

気遣わしげに木下は山中を覗き込む。

「大丈夫です……と言いたいところですけど……あんまり大丈夫じゃないです……」

か細い声で山中は言い、両肩と二の腕をこしこしと擦った。

「武者震いってヤツ？」

「そんな勇ましいものでもないですよ……」

「ぶつちやけ怖いよな。」

三人の表情は、眉を寄せた情けないものになっている。

ま、無理もない。桶狭間での戦いは正式な手順を踏んだものではなかったし、精神的に切羽詰まった状態だったので何とか戦えた。しかし今は違う。

「思えば無茶で無謀で無理な作戦立てたよね……僕達超バ力かも。」
「言えてるー。」

それを言ってしまったていいのか、君達。

そうこうしてる間に、光陰矢のごとし、時間はすぐに過ぎていく。

三人は夕食を食べた後、自室に籠り必死に精神統一をしていた。そんなとき、懐に入れていた携帯がぶるぶると震え肩が跳ねる。見れば、越後チームからのメールだ。

『明日の出陣、ちょっと早くなるみたいだ。』

「……とすれば、啄木鳥の戦法が考え出されるのは、出陣してからすぐではなさそうですね。」

梅本からのメールを読み、山中はそう言った。

「そーなのかー？」

ひょこつと右側から顔を覗かせた木下に、山中は頷く。

「この世界だとうなるかはわかりませんが、確か数日間睨み合いがあったような……」

「まあ、いきなりドンパチってことないよ。ってか、上杉が啄木鳥の戦法に気付いた理由って、炊き出しの煙を見たからだよね。ということは、作戦は夜に始まるってこと？」

さらに左側から谷中が顔を出し、そう言う。

「だったら、夜道はオレの出番だなッ！能力のせいかな、やたらと夜目が効くようになったし。」

得意気に木下は胸を張ってみせた。

「とりあえず、戦が始まって時間もありませんね。追々調整していきましょう。」

山中の言葉に二人は頷くのだった。

甲斐の虎と越後の龍、内に伏せ隠した想いを宿したまま、両者は牙を剥く。

そこに割り込むのは、異なる世界からやって来た六人の異分子。彼等の練った作戦は、前代未聞の大仕掛け。

破天荒で向こう見ず、一体全体どう落とし前をつけるのやら…

…。

次回はいよいよ第四回川中島の戦いの幕開けだ。

三十六の嘶「決戦まであと少し！彼等の過ごし方は。」（後書き）

次回から！川中島入るお！

どうも皆様、夜です。お久しゅうございます。

ちよつとこここのところ立て込んでまして、更新がすつごく遅れました。

いやー、なんだかんだでようやく決戦ですわ・・・・・・・・ここまてくるのにどんだけかかったんだ自分。

次も頑張りますよー、お楽しみにです。

三十七の嘶「開戦！参戦！激戦へのプレリユード！」

side上杉

その日が、遂にやってきた。

愛馬に揺られながら、戦装束をその身に纏った三人は、緊張した面持ちで腹に力を込める。

「あれが妻女山だ。」

隣を進む兼続が、静かに目前に見える山を指差した。

春日山城を出陣してから丸二日間、ようやく最初のポイントに到着する。

今からあそこに布陣するのだ。

「……大丈夫ですか？」

あまりにも強張った顔に、定満が心配そうに後ろから声をかけてきた。

「大丈夫、とは豪語出来ないですね。」

梅本は苦笑いを浮かべるが、それすらもぎこちない。

上杉が動き出したことは、甲斐にメールを送信済みだ。

今頃、少し遅れて（といっても日単位の話だが）武田も出発しているだろう。

馬を降り、手綱を引きながら布陣する場所へと山道を歩いていく。

「あ、もう布陣してるやん。」

北が陣の様子を見て、目を瞬かせた。

そこには既に兵士や将達が集まり、どやどやと騒がしい。

「……兵糧とかの積み荷が割とあるからな。」

小川はそう言い、辺りを見回した。どの兵士の顔も、引き絞られた弓のように張り詰めていた。

「皆の者、殿の御成であるぞ……！」

兼続がピシリとした声で叫べば、皆一斉に整列し、道を空けた。まるで海を真つ二つに割った、モーセのようだ。

謙信は悠然とした足取りでその道を行き、一番前に立つ。

「我が戦友諸君！幾度にも渡る武田との戦も、四度目を迎える！此度の戦、六武衆と名高い神憑きの内、三人が加わってくれることになった！」

いきなり謙信に紹介され、三人は慌てた。

え、何か皆こっち見てるし。

三人はときまぎしながら、目を泳がせる。

「おい王子、お前何か言え！」

「はあ！？ふざけんなよ何で俺が……」

「こーいう時に役にたたんで、いつ役に立つねんアホンダラ。」

梅本と北に背中を小突き回され、小川は物凄く嫌そうに何と云おうか考えを巡らせた。

「……あー、微力ながら、お力添えしたいと……思います。」

変な汗がだらりと出てくるのを感じながら、小川は至って普通のことを言い、次はお前だと梅本を肘でつついた。

「げっ！？俺もか？」

梅本は顔を歪めるが、沢山のオーディエンスの視線にがつくりと肩を落とした。どうやら三人とも、きつちりと喋らされるらしい。

「えーと……どこまで役にたてるかわかりませんが、今までの飯と宿の分はきちんと働きます！」

何とも微妙な言葉である。梅本は自分でそう思いながら、北に視線を送った。

彼女はいつも通りの無表情のまま、淡々と口を開く。

「お互い、死なへんように気合い入れて行こか。」

どうもしっくり来ない三人の一言に、やれやれと溜め息をつく上杉軍。

本当に大丈夫なのかこれ、と言いたくなるようなチームTHE・越後とは対極的に……。

｝side 武田｝

「みーなーぎーるああー！！！」

「キバツて行くぜ！！！」

「一万一心ですッ！！！」

チームTHE・甲斐は、ミョーにテンションが高かった。

現在、武田は茶臼山を目指して進行中だ。その道中、三人はずつとこんな調子。

「……のう、何である者達、あんなに元気なんじゃろ？」

信玄は三人の豹変振りに、顔を引き攣らせていた。

「きつと、闘志がみなぎっておるのでしょうッ！某も負けてはおられませぬな。」

にこにこ陽気に笑って虎昌が言うが。

「そんな訳ねエだろ。おい、海野。お前何盛った？」

呆れ顔で昌幸は後ろを走る忍、海野 六郎に尋ねる。

「……少し、気分を高揚させる薬を。」

「少しじゃねエよな、あの様子だと。」

何か言いたそうな昌幸のジト目に、六郎はふいっと顔を背けた。

「まあ、確かに戦が近づくにつれて、塞ぎ込みがちになっておりましたからな。」

勘助がまじまじと、キーキー喚く三人を眺める。

うん、何か目がイッチャってなくもない。

「例の症状が薬と相成って、精神がぶっ飛んでおられるようですね。」

それってヤバくないのか。むしろそれって、頭にマのつく薬じゃないのか。

虎泰の冷静な観察に、ナレーションも忘れてつつこみたくなる。皆様、薬物はダメ、ゼツタイですよ。

とりあえずこの話は一端置いておいて、話を進めよう。

現在、武田軍は最初予定していた海津城ではなく、そこから西に見た茶臼山に向かっている。

先に海津城に向かっていた高坂 弾正こと、高坂 昌信から妻女山に上杉軍が布陣したという連絡が入ったのだ。

急遽武田軍は上杉軍の退路を絶ち、尚且つ妻女山を見渡せる標高を持つ茶臼山に布陣することを決定した。

「茶臼山に到着するまで後少し。それまでに、彼等の元気がなくならなければよいのだが。」

信方は心配そうに三人を見て、ぼそりと呟いたのであった。

目的地である茶臼山に到着するまで、四日かかった。

そこに布陣を完了させ、両軍は暫しの睨みあいに入る。

）side上杉

「……武田も無事に布陣完了、か。オープニングはこんなもんだな。」

パチンと携帯を閉じ、小川は一つ息を吐いた。
つい先程、谷中から武田軍の様子を知らせるメールを見た。
睨み合いに入って、十数時間。未だ両軍の動きはない。

「小川殿、ここにおられましたか。」

携帯をスッとしたところで、小川の背に声かけられた。

「……宇佐見さん、何かありましたか？」

彼は振り向くと、自分呼びにきたのであろう定満に言った。

「軍議が始まっていますよ。本陣へ行きましょう。」

そう言えば、と小川は思い出したように頷き、急いで本陣に向かった。

そこに到着すると、もういつもの顔触れが揃っており、申し訳なさそうに頭を下げつつ、小川は梅本の隣に座った。

「揃ったな。」

謙信は一同の顔を見回し、荒削りに作られた卓上の上に地図を広げた。

「さて、皆の者……まずは一言言おう。信玄に先手を打たれたようだ。」

楽しげに笑いながら、謙信はまるで危機感のない口調で言った。

「先手、と申されますと？」

こちらも全く焦っていない顔で、兼続が口を開く。

「何、大したことではない。信玄の奴が、我が本陣を見下ろせる茶臼山に布陣したのだ。勿論、我等の退路を絶つためだろうな。ふふ、最初は海津城だと思っていたのだが……速いものだ。」

すいません、特に大変さを感じられないのですが。

三人は思わずそう言いそうになるのを、ゴクリと唾と一緒に呑み込んだ。

「ならば、どう致しますか？」

定満は、もう謙信が何と答えるかわかっているようだ。

「何、まだ動かんさ。信玄は必ずや先に動く。我等はそれを待とう。」

「そう言うと思っております。」

謙信の答を聞き、やっぱりと定満は苦笑する。

「……なあ、あたしらここにいっても意味ないんとちゃうんか？」

「奇遇ー、俺もそう思ってた。」

「以下同文。」

ひそひそと梅本に耳打ちしてきた北に、うんうんと梅本と小川は頷いた。

（side 武田）

「どうだ、動きは？」

「依然、ありませぬ。」

こちら軍議の真つ最中だった。

「フム……。」

忍の報告に、信玄は腕を組んで溜め息を吐く。

「まだ動かぬか……くくく、これではまるで逆よ。謙信め、動かざること山の如しときたか。」

ニツと笑う信玄に、虎泰がやれやれと言わんがばかりに言った。

「お館様、ニヤニヤ笑っている場合ですか？今上杉が動かないのは、もしかしたら越後からの援軍を待っているからかもしれないよ。」
「その通りですぞ。上杉がその気になれば、我が軍を上回る程の大軍、容易く動かせましょう。」

続いて信方も、険しい面持ちで言う。
双方の意見に、信玄はわかつている、と言いつ返す。

「ならば仕方ない。ここはあ奴の望み通り、動くでしょう。皆の衆、海津城へ向かうぞ。」

ぼーっと先程までのやり取りを聞いていた三人は、え、今からかと目を丸くした。

辺りは真つ暗、夜である。

「夜ならば、直ぐ様移動出来よう。飛んでくる矢に怯える必要もない。三ツ者達に周囲の監視をさせよ！」

「「「御意に！」」」

忽ち忙しく動き出す彼等の間を通り抜け、信玄は三人の元にやってくる。

「木下殿、勘助と二人、夜道は任せたぞ。」
「おうッ！任せられたぞッ！」

軽く信玄に肩を叩かれると、木下は目を輝かせて勢い良く返事をした。

その日は満月でもなく、三日月だった。月明かりはアテになりそうにないが、敵には見つかりにくい。

「よろしいか、木下殿。」

「いつでもいいぜ、勘助のおっちゃん！」

軍の先頭に勘助と木下が並び、互いに視線を交わし合う。

「二人とも頼んだぞ。」

「お任せ下さい、お館様ッ……！」

ハモった言葉と掛け声の後、二騎を先駆けに武田軍は海津城を目指した。

＼side上杉＼

「ふうん……武田は海津城に移動したんか。」

夜も更けかけた頃、珍しく目が醒めていた北が、山中からのメールを見ていた。

「……何やってんだ、メールか？」

仮眠をとっていた梅本がごそりと身動きして尋ねた。

「ああ？起きとつたんかお前。」

「満足に寝れるかよ。で、何て言ってるんだ。」

北が男二人に目をやると、二人共目を開けていた。
北はズイツと携帯を差し出してやる。

「……海津城に行ったか。」

「よく夜道を行けるな。」

「まあ、チロやヤマカンもいるしな。大丈夫やろ。」

もう少し寝るか、と会話を止めると、三人は掛け布を引っ張り上げて目を閉じた。

早朝、慌ただしい声が聞こえてきた。

「申し上げます！武田軍、茶臼山より海津城に移動しております！」

軒猿の報告に、ざわざわと周囲がざわついた。

「殿の仰る通り、先に動いたようですね。」

兼続はそう言い、朝焼けの光を眺めた。

「それで？あたし等はどーすんの？」

欠伸を噛み殺して北が問うと、小川が横から言った。

「……まだ動かないつもりだろう。」

「左様。まだ我等は動かぬ。」

正解、とばかりに謙信は微笑み、ゆったりと椅子に腰を下ろした。

「海津城は、あの山本 勘助が築城したもの。守りが固い城だ……迂闊に攻めてはこちらが疲弊してしまう。」

つまりはまだここにいてわけか、と三人は退屈そうに視線を交わした。

「……なら、朝飯を食わないか。腹が減った。」

「ああ、そうしよう。炊事隊、準備をしてくれ。」

小川の提案に謙信が頷き、指示を飛ばす。

「……なあ、マンボウ。一個だけつつこんでいいか？」
「なんや。」

炊事隊とやらをチラツと見て、梅本が言う。

北の表情は、何とも言えない半笑い。

「何で炊事隊……割烹着着てるんだ？」

「そりやお前、炊事隊やからやん。」

むさ苦しい男の割烹着姿に、梅本はげんなりと項垂れた。

可愛い和服美人の割烹着は嬉しいが、何が悲しくて野郎の割烹着姿なんか見なくちゃいけないんだ。

っていうか、炊事〃割烹着って標準装備なの？

「寧ろあたしらの土気がダダ下がりやと思っんやけどな。」

「……止めとけ、もう諦めろ。」

三人は溜め息をついて、敵地の方角を遠い目で眺めるのだった。

side 武田

こちらは一晚の内に海津城へ移動した武田軍。
只今作戦会議の真つ最中だ。

「お館様、この策は如何にございましょうか？」

特に言うこともないので、黙ったまま軍議の成り行きを見守っていた三人の前で、勘助が口を開いた。

「まず、隊を二つに分けます。一つは本隊、もう一つは上杉が本陣を背後から攻撃する別動隊、という具合に。」

啄木鳥の戦法を説明する勘助に、虎昌が加わった。

「成程！わかりましたぞ、勘助殿！その別動隊が妻女山の上杉軍を追い落とし、我が本隊と挟み撃ちにするのですな！」

ぽん、と手を叩いて、虎當はきらきらした目で言った。

「それは妙案。お館様、これで参りましょう。」

昌信も賛成らしく、黙って考え込む信玄の方を見る。

「……ふむ、確かに。それでは、別動隊は……」

隊の振り分けを開始する信玄に、ちよつと待つたと谷中が声をかけた。

「お館様、僕もそっちに入れてよ。」

すつくと立ち上がり、谷中はじつと信玄を見据えた。

「どうしたのだ、いきなり……三人一緒にいたほうがよいのではないか？」

突然の申し出に、信玄は目を瞬かせた。

「何言つてんのさ、僕達の参戦の理由は、武田を守る為っていうのもあるんだよ。一人くらい入れておいたほうが安心じゃない。」

保険だよ保険、と谷中は笑って言う。

「そいつアありがたい。噂の六武衆が一人いてくれるたア、随分と心強いじゃねエか。」

思案の視線が交わされる中、昌幸の楽しげな声が響いた。

「お館様、谷中殿は雷の神憑きでいらっしやる。獲物を追い落とすには、効果的な手かと。」

ニヤリと目を細め、昌幸は含みのある笑顔を見せつけた。

「それでは、私とチロさんは本隊で迎え撃ちましょうか。」

「そーだな！ーし、気合い入ってきたあああ！！！」

山中と木下の二人は顔を見合わせ、どうだと言うように信玄を見つめた。

「しかし、上杉本陣にはお主達の仲間がいるのではないのか？」

ところが、信方が待ったをかけた。

「一人を別動隊に加えてしまえば、谷中殿は上杉方のお仲間と刃を交えることになってしまいますぞ。三対一では、いくら何でも……」

だが昌幸が口を挟む。

「奇襲をかければ上杉軍と言えど、少なからず混乱するだろうよ。そこから一気に移動が始まるんだ……形勢的にはこちらが有利、このままで大丈夫だと思いますがねエ。」

双方の言葉を聞き、信玄は腕を組む。その判断は。

「よかるう、谷中殿は別動隊へ。他の二人は儂の隊へ来てくれ。」

「やった！ありがとね、お館様っ！」

ガッツポーズをきめて喜ぶ谷中を見て、信玄は険しい顔で続けた。

「しかし、無理は許さんぞ。危ないと思うたら直ぐ様退くのだ、い

いな。」

「勿論！任しといて。」

安心させるように、谷中はグツと親指を立ててみせた。

かくして、山本 勘助立案、勘助『啄木鳥の戦法』がここに決定し、やっとこさ戦らしくなってきた。

別動隊は、高坂 昌信、飯富 虎昌、真田 昌幸、それと谷中の率いる隊、本隊は川中島の八幡原で上杉を待ち伏せることになった。

「お館様、決行はいつにすんだ？」

木下の問いに、信玄は答えた。

「今夜だ。皆、早速準備にかかれ！」

三十七の嘶「開戦！参戦！激戦へのプレリユード！」（後書き）

あゝ・・・・・・・・長かった、やっと戦だよ戦！

どうも、おはこんにちばんわ夜さんです。

よく見てみたら別働隊って「昌」のつくヤツしかいねーじゃないの、今気づいたよ。

ようやくここまでたどり着きました、でも進むことに難しくなるんだよねー。

そろそろ四十話かー、長いなあこれ。でもこの話で武田と上杉両方攻略（？）するから仕方ないか。

早く書き上げてしまいたいぜ・・・・・・・・。

三十八の話「げつとだうん・えねみーず！巻き込まれたイヤツだけかかってこい

）side上杉）

あれから少しも動くことなく、上杉軍はのほほんと妻女山で時間を潰していた。

しかし、三人だけはそういうわけにはいかなかった。

「……どうだ、降りそうか？」

近くの川辺にて、小川は辺りを警戒しながら北に訪ねた。

「雲の出は充分や。後はあたしの力次第やな……」

唸るようにいう北は、片手を空に、もう片方を川に向けて、何やら必死に念じている。妙なポーズだが、笑ってはいけない。

今彼女が必死で行っているのは、「雨喚び」という技である。簡単な話、これは雨乞いだ。

「ここで俺と殿下が粘らなくちゃならないんだ、絶対少しくらいは降らせるよ。」

そんな梅本の言葉に、北は忌々しげに舌打ちした。

「よう言うわ、しんどいんやでこれ。」

この技は、いつぞや携帯に載っていた自分達のデータから見つけた技だ。

雨を喚ぶ技なんて、あんまり使うことはないだろうと思ってい

だが、案外早くその時はやってきた。

うんうん呻く北の額や首筋に、幾つも汗の筋が出来ている。

次第に、彼女の頭上から雲の色が黒みを増していく。雨雲に変化していつているのだろうか。

「ッ、もう無理や！これ以上やったら、あたしが使い物にならんくなるわー！」

力尽きたのか、ベタツと北はその場に座り込み、大きく息を吐き出して汗を拭った。

「ほれ、水。」

竹筒を手渡し、梅本は空を仰ぎ見た。

雲の黒さは出てきたので、後は雨が降るのを祈るばかりといったところか。

「……雨が降れば、妻女山の戦いで時間が短縮される。運次第だな。」

涼しい顔で言う小川を、ジツトリと北は睨んだ。

「あいつだけ倍は働かしたろ。」

そう呟く声を梅本だけは聞きとったが、あえて聞こえないフリをしてやり過ごした。余計なことと言わない方が得なのだ、何事にも。

とりあえずやることをやって、本陣に何食わぬ顔で戻ると、どういうワケか空気がピリツと張り詰めている。

何事かと急いで近寄れば、彼等の姿を見つけた兼続が声をかけて

きた。

「何処をほつつき歩いていた。軍を移動させるぞ、早急に準備しろ。」

「はい？」

思わず間抜けな返事で返せば、定満が更に説明を加えた。

「海津城から通常より多く、炊き出しの煙が上がってしまっていてね、どうやら武田に動きがあるようなのです。」

ああ、始まったなと三人は目配せをした。

「……わかりました。すぐに馬の用意をします。」

小川はそう言い、北と二人で直ちに愛馬の元へと走った。

「やっと来よったな。」

「……ああ。」

声を低め、二人はそう言った。

川中島の戦いの目玉、『啄木鳥の戦法』がついに始まるのだ。

馬に乗り、小走りに本陣に向かうと、兵卒から白い布を渡される。

「……これは？」

布を受け取り、小川は首を傾げる。結構分厚い布だ。

「馬の蹄にお巻き下さい。物音を立てられませんので。」

成程、と合点が行った。消音効果か。

二人は素早く布を巻き付けた。

「それでは守衛部隊。後を頼んだ。皆の者、武運を祈る。」

支度をしながら聞かされた作戦は、守衛部隊をここに残し、本隊は山を下る予定だ。

「恐らく信玄は、明朝までに動いてくるだろう。私の考えが正しければ今夜、ここに夜襲がかかる筈だ。だが信玄にとってここは地形的に不利な場所……攻撃は見せかけよ。決戦はどこか別の場所で行うつもりだろう。我が軍の動きを読み、待ち伏せをしている筈だ。」

謙信の考えを聞きながら、小川は口を開いた。

「およそ先に戦地におりて敵を待つものは佚し、後れて戦地におりて戦いに赴く者は勞す。故に善く戦う者は人を致して人に致されず、よく敵人をして自ら至らしむる者はこれを利すればなり、だな。」

これは孫子兵法の一説である。簡単に言うと、相手より先に戦地に布陣して、敵が来るのを待っているものは楽だが、後れて到着し、戦に赴くものは苦勞するだろう。

戦争巧者は主導権を握って相手を思いのままに動かし、自分は相手に惑わされないようにする。相手自ら行動にまで至るようになるには、利益を見せて誘うのである……ということだ。

「そんじゃ、梅。生き残れよ。」

「うるせーよ。ハナからそのつもりだ馬鹿野郎。」

軽口の挨拶を交わして、梅本は遠ざかっていく本隊を見送った。

「……コンティニューは効かないんだよな。」

強張った顔で、ポツリと梅本は呟いた。

〈side 武田〉

同時刻、武田軍も本隊と別動隊に別れて支度をしていた。

「海野さん、出陣するときに飲ませてくれた薬ってまだ持ってる？」

改めて武器の確認を行っていた六郎は、顔を上げて声をかけてきた谷中に目をやった。

「……持つては、いますが。」

淡々と答え、彼は腰に着けていた袋から薄紙に包まれた薬を取り出した。

「それ、またもらえないかな？」

申し訳なさそうに谷中は言うと、僅かに六郎は顔をしかめた。

「あまり多用するのは勧めませぬ。後がお辛くなります。」

そんな彼の表情を、谷中は苦い笑みを浮かべて見ていた。そして、押し殺した声で呻くように言う。

「わかつてるよ。けど、今回だけお願い。僕の役目、マツキーから聞いてるでしょ？何かで気分を上げとかなないと、まともに動けそうにないんだ。」

顔の前で両手を合わせ、谷中はお願いと頭を下げた。

彼女の役目は、六郎も知ってはいる。

だが例の薬は、少量なら問題ないが多量服用すると肉体への負担が大きいのだ。長時間効果を持続させるには、それなりの量が必須である。

しばらく六郎は考え込んでいたが、仕方ないと言わんばかりに薬の包みを彼女に渡した。

「……あの方々の分も、余分に渡しておきます。貴女様がお決めになったことだ、私に逆らう権利はございません。」

ですが、後々覚悟してください、と六郎は付け加えた。

薬を数個手渡され、谷中は軽く溜め息を吐いた。

「ごめんね。今はどうでもしないと、本当にヤバイんだよ。」

「私も微力ながら、お側でお力添え致します。貴女様お一人ではありませぬ、それをお忘れなきように。」

常に無表情でいる六郎が、励ますように微笑して谷中の肩を叩いた。

「……うん、ありがとう。」

谷中は六郎を見上げ、ポツリと言った。

「さあ、早く持ち場へ参りましょう。」

彼に連れられ、谷中は皆のところに戻る。

「殿下、大丈夫か？」

気遣わしげに木下は谷中に近寄り、顔を覗き込んだ。

「うん。いけるよ、心配しないで。はい、これ二人の薬。」

緊張しているときは、少しでも平気そうなフリをすれば平気になるという。

谷中は薬を渡しながらへらりと笑ってみせるが、やはりぎこちない。

「本当に大丈夫ですか？」

山中も傍に寄り、心配そうな顔で彼女を見つめた。

「大丈夫ったら大丈夫！ほら、いつまでも僕の回りにいないで、本隊に行く！」

谷中はわざと大声を出して、緊張と不安を振り切るようにピシリと言った。

これ以上心配をかけては、二人にもよくないし、作戦にも支障を出す。

「谷中様には私がついております。どうかご安心を。」

六郎にも言われ、二人はやっと谷中から離れた。

「……谷中殿、そして全ての者。策の成功と、無事を祈る。全員、死ぬのは許さぬ。必ず儂の元に戻ってこい！」

信玄の激励を受け、応、と勇ましい声があがる。

啄木鳥の戦法、これより始動する。

｝side谷中｝

本隊と別れ、谷中は勢いよく自分の頬を叩いた。

「……ッ！ よし、行こうか黄麟^{おうりん}！」

愛馬、黄麟の首をぽんと叩き、手綱を握り締める。

「谷中の嬢ちゃん、動けるかい？」

別動隊の元に向かうと、赤と朱の戦装束を纏った昌幸が声をかけてくる。

「行けるよ。僕、先頭だったよね。」

隊の先頭へと谷中が馬を進めると。

「進軍開始！」

号令一発、全軍が一斉に進み始めた。

相手に気取られないように、こちらも蹄に布を巻いている。

谷中は腰に下げている袋に手を突っ込み、中で携帯を広げた。

（ショートカット設定にしておいてよかった。）

内心でほっと一息つき、谷中は指定された番号を押して梅本に電話をかける。これは進軍を梅本に知らせる合図だ。

ワン切りして、谷中は携帯を閉じた。

「薬、そろそろ飲んでおこうかな。」

揺れる馬の背で、谷中は器用に六郎から貰った薬を口に含み、水筒の水で流し込んだ。

）side 梅本）

ブルブルと携帯の震えを感じとってからしばらく経ち、梅本は人知れず深い息を吐いた。

「どうなされた、梅本殿。」

隣で座っていた兵士が、彼の様子を見て声をかけてきた。

「いえ、緊張してるみたいで……何か落ち着かなくて。」

肩の辺りを擦り、梅本は真っ暗な夜空を見上げた。

まだ、雨が降る様子はない。

待機を始めてかれこれ数時間、耳を澄ませしてみるが物音は聞こえない。

やれやれと肩を竦めたそのとき、再び懐の携帯が震え、すぐに止まった。

梅本の顔色が変わり、彼は弾かれたように立ち上がって呟いた。

「……来たんだ。」

様子が激変した梅本を見て、他の兵士にも緊張が走った。

そして、聞こえてくるのは蹄鉄の音。

漆黒の夜を引き裂いて、金色の稲妻が唸りをあげ突き刺さる。

谷中の一撃だろうか。

瞬く間に怒声が飛び交う中、梅本は静かに地国天を喚び出した。

side谷中

「これはどういうことだ!？」

どう見ても、目の前の敵が最初の狙いであつた本隊に見えない。
虎昌や昌信は思わずそう叫んでいた。

「これは一杯食わされたなア！上杉の野郎、読んでいやがったか。」

昌幸は苛々と舌打ちした。

上杉の本隊はここにはいない、いるとすればそれは……。

引き返すか、という昌幸の考えを、彼の真横から放たれた雷の矢が消し飛ばした。

「引き返してどうなんのさ！？余計なことを考えてる暇があんなら、一刻も早く相手をぶちのめせばいいんだよ……！」

完全にスイッチが入っているのか、谷中の目は爛々と光っていて、さながら虎のようだ。

「駿雷矢！」

電王が目映く輝き、弦から雷が湧き出る。

それは矢の形に姿を変えると、バンツという音を残して発射された。

空を斬って飛んだ金色の矢は、五本に分かれて敵地に襲いかかった。

ドン、ドンと矢は爆発し、それを見届けずに新たな矢がつけえられた。

「おーおー、血気盛んなこつて。」

昌幸は苦笑すると、片手を横に軽く振る。すると、彼の神器、光系・白蜘蛛から細い光の糸が流れ出た。

「そんじゃあ、ちよいちよいつと片付けちまうか。」

昌幸の手首や指先の動き一つで、硬質化した糸が相手を切り裂いていく様は、まるで舞を舞うかのようだ。

「あの雷の神憑きを先に仕止める……！」

最も厄介な人物がやっとわかったのか、数人の兵士達が谷中に武器を向けるが。

「……退がられよ。」

煙のように現れた六郎の投げる手裏剣に、ことごとく阻まれる。そうしている間にも、谷中は脅威的なスピードで敵を撃破していく。

「払う露も頂けませんなあ……」

虎昌は目を丸くして、雷の爆発に巻き添えを食わないように距離をとりながら呟いた。

side梅本

「うーっわ……殿下がいつちゃってるよ……」

地国天をぶんまわし、梅本は顔を引き攣らせて呟いた。

何やらミョーな薬でもキメたのか、目付きが怪しい。

「ま、俺もドン引きしてる場合じゃないな……よっと！」

大地を叩きつけると、メキメキと岩が突出し、鯨の背鰭せびれのような形になった。

「おニユーの技、威力はいかほどに……土地鯨しちけいッ！」

地国天で背鰭岩をぶん殴れば、それはまさしく鯨が獲物に急接近するが如く、猛スピードで大地を疾駆した。

敵の神憑きが放つ攻撃も何のその、岩の背鰭は次々に何十人もドカドカと撥ね飛ばしていく。

が、それで終わりではない。

動きが止まり、迂闊に近付けば……。

「あ、それバーンってなるんで気を付けろよ。」

ケラケラと笑う梅本の背後で、バーンと爆ぜる音。

岩の背鰭が爆発し、幾つもの礫つぶてがひゅんひゅんと弾丸のように辺りに飛び散った。

「にしても、マンボウのヤツ……本当に雨降るんだろうな。こつちとあつち、だいぶ人数に差があるぞ。」

上杉の守衛隊は、武田の別動隊に比べれば結構人数が少ない。加えてあの状態の谷中が暴れているのだ、そう長くは保たないだろう。

それに、こちらの守衛隊にはそこまで強力な力を持った武将はいない。武田と戦うべく、皆本隊に移動している。

「真田さんはともかく、飯富と高坂をここで足止めしないといけな
いんだよな。くそつ、雨さえ降れば……」

何十本も飛んでくる矢や炎や風の塊を、防ぎ、避け、梅本はど
うするかを考えた。

完全に倒せなくてもいい。動きさえ何とか出来ればいいのだ。

「おニュー技その二なら、何とかなるか？」

おニュー技を使うには、どうしても雨が必要だ。

頼む、雨よ降ってくれ。

梅本は祈るように、暗黒の空を見つめるのであった。

三十八の話「げつとだうん・えねみーず！巻き込まれたイヤツだけかかってこい

やあ、皆様。

やっと続きが出来たよ、うんしんどかった！

戦闘シーンは本当に難しいね〜……………ああ、これから更に
うpスピードが遅くなると思うよ。

だってほとんど戦闘だもの。

……………で、お気に入り登録がいつのまにか150件越えててビ
ツクリしますた。

ありがとうございます、次の目標は200ですね。

感想・一言・質問、いつでも受け付けしております。

どんな短い御言葉でも、尻尾を高速に振って喜びますんで、是非ど
うぞです。

ではでは、これにて御免ッ！！！！

三十九の嘶 「げつとだうん・えねみーず！巻き込まれたイヤツだけかかって二

）side 武田）

夜明けが近いのだろうか。

八幡ヶ原を覆う、白い霧。

その中を、武田軍はゆっくりと進んで行く。

「殿下、大丈夫かな？」

眉根を寄せ、木下は情けない顔で山中に囁いた。

「……大丈夫ですよ。海野さんもいますし、殿下さん、今まで頑張
って鍛練してましたし……新しい技だって、習得しましたし。」

山中は、自分に言い聞かせるように答えた。

心配は消えない。何せ、これはとんでもない無茶だから。

八幡ヶ原と海津城を隔てる千曲川を越えている途中、辺りに漂
う霧を見たとき、もうじき上杉と鉢合わせる頃合いだと気づいた。

谷中の心配ばかりしている場合ではないのだが、それは出来な
い話。

「今の内に、コレ飲んでおくか？」

「……そうしますか。」

二人は頷き合い、谷中から渡された薬を飲む。

今現在、別動隊と別れて二時間経過していた。

武田軍のとる陣形は、守りの固い「魚鱗の陣」。読んで字の如
く、魚の鱗のような陣形だ。

「お館様、妙ですね。」

薬を飲み込み一息ついたとき、虎泰が重苦しく口を開いた。
それに、信玄が答える。

「…………お主もそう思つか、虎泰よ。」

びっくりと木下と山中の二人は、張り詰めた空気に反応する。

「もうそろそろ、別動隊が上杉軍を追い落としている頃合い。ですが、妻女山の方からは…………」

虎泰は鋭く細めた目で、妻女山の方角を見つめた。

先程から、ズシン、ズシンと爆音が聞こえてくる。霧のせいで光は見えないが…………おそらく、谷中の暴れる音だろう。

「…………様子を探りに行かせた忍も、いつこつに戻りませぬ。」

信方が淡々と言った。

「…………まさか。」

信玄がぼつりと呟いたとき、霧の向こうに何かが見えた。

一気に空気が緊迫し、息を呑む音があちこちからする。

目前を覆い尽くすのは、白く翻る旗物。その旗の中央に堂々と、黒く太く『毘』の一字。

「う、上杉、軍……………！」

呻くように、背後から聞こえた言葉。

白い旗の一軍の前で、それらを背負うかのように立つのは、美しい白馬に騎乗した軍神の姿。彼の手がすいと武田軍を指し示し、その口が叫ぶ。

「全軍！！進撃開始！！！」

上杉は円型の陣形を組み、くるりくるりと回りながら迫ってくる。これこそ、かの有名な『車掛かりの陣』である。

「鶴翼の陣に変形せよ！上杉軍を畳み込む！」

驚いたのも一瞬、直ぐ様信玄は指示を出す。兵卒はさすがに混乱しているのか、陣に乱れが生じる。苛々と舌打ちした信玄の目に、猛然と駆ける二騎が映る。木下と山中だ。

「お主等！下がれ、下がらんか！！！」

慌てて二人を呼び止めるが、そんなの止まるわけがない。

「行つくぞミナちやああああん！！！！！」

「はいっ！！！！！」

そんな雄叫びを響かせて、特攻していく。

すると、疾走する馬がいきなり急ブレーキをかけたではないか。勿論二人は、慣性の法則よろしく敵地に向かってフツ飛んでいくのだが。

「鳶舞！」

空中で山中が木下を見事キャッチ、そのまま勢いを殺さず滑空していく。

地面が近づくと、ザザッと木下は両足を広げて着地、そこから両者戦闘体制に入った。

「影爪！バージョンアップその2！」

木下の命令に反応した影が、彼女の手から肩までを覆い隠す。華奢な腕は一変、黒く太い丸太のような腕に型を変えた。

「さあ、夜はこれからだっ！お楽しみはこれからだっ！ハリー！ハリー！ハリー！」

ニターツと不気味に笑い、木下は化物じみた腕をワキワキと動かした。

「行きます、舞風！」

山中は懷に手を突っ込み、小袋を掴み出した。それを空へとぶん投げ、舞風を大きく動かす。

轟、と巻き起こされた風に煽られ、袋の口は簡単に開き、中から赤い粉末がぱあっと舞い散った。

なんだあれは、と上を見上げた兵士や武将達の顔に、再び山中の巻き起こした粉末混じりの風が叩き付けられる。すると…………。

「うぐっ！？」

「ぐおおおおお！！！！？」

「めッ、目が！目がああああ！！！！！」

何処かで聞いた悲鳴に、ぷふっと吹き出しながら、木下は山中

にグッドサインを出してみせる。

「ミナちゃん、ナイスコントロール！」

上手く風を操り、敵兵だけに『殿下特製 スターダスト唐辛子
(その他香辛料多数含む)』を炸裂させると、次は木下の番だ。

「そーーらあああ！！！」

ぐん、と異形の腕を横に薙ぐ。

するとその腕は飴のように伸び、痛そうな打撃音を何発も響かせながら敵兵を跳ね飛ばしていく。

「このッ……小娘があ！！！」

幸いにも唐辛子の難を逃れた者が、木下に刃を向けるが。

「私のこと、忘れないで下さいね。」

横から山中に顔面を強かに殴られ、呆気なく昏倒する。

畳めば鈍器の舞風、いやはや実に硬い造りだ。

「よくそんな応用編を思い付きましたね。神器、いらないじゃないですか。」

「影爪バージョンアップモードその2、モデル『A○RMS』の『ジャバウオック』だ！」

「何となく漫画に登場するものだとなりました。」

わかる人にはわかるが、わからない人にはさっぱりな木下の返答に、山中は半分呆れ気味で言った。

「木下殿！山中殿！」

二人が蹴散らした敵兵の中を、目を丸くした虎泰が急いで駆けてくる。

途中、仕留め損ねた雑魚を切り払いながら。

「何をしているんですか！？下がれと命じられた筈ですが！！」

鮮やかな水色の長柄の先に、半月型の刃をとりつけた槍を肩に担ぎ、虎泰は声を荒げた。

「いいですから！甘利さんは軍の混乱を鎮て下さい！この混乱具合では、鶴翼の陣すら組めませんよ！」

振り向いて負けじと叫んだ山中の背後に、デカイ岩の塊が飛んできた。

「山中殿ッ！」

虎泰の神器、『深蒼・流水月』が、彼女の顔すれすれを通過して岩を突き砕いた。

「ッ……！？あ、ありがとうございます。」

飛び散る礫を舞風で防ぎ、山中は虎泰に礼を言った。

「今、板垣殿と勘助殿、そしてお館様が軍をまとめ直しているところです。私もここで、敵を仕留めることにしよう。」

そう虎泰は言い、にんまりと笑った。そしていきなり、朗々とした声で叫ぶ。

「武田四天王が一人、甘利 虎泰はここぞ！命のいらぬ者から順にかかってくるがよい！」

同時に、どこからともなく水流が溢れ出し、彼の背後に広がった。その形は、まるで鷲のようだ。

堂々とした名乗りに応え、上杉側からも似たような名乗りがする。

「柿崎景家と剛冑・斧玄山がお相手つかまつる！」

のしのしと効果音が付きそうな雰囲気で、雑兵を掻き分けて登場したのは、筋肉隆々の体軀をした武将だった。

くしゃくしゃした真っ黒な髪と虎髭、がっしりした太い腕には、煤けたような包帯がぐるぐると巻かれていた。

その手に握られているの神器だろう、持ち主に似合いの大戦斧。バトル・アックスと同じ形をしていた。

「ほう、豪腕の柿崎か。いつぞやは、我が本陣まで見事な攻め込みっぷりを披露してくれたな。」

「抜かせ蒼鷺。己がこの俺を阻んだのであろうが。毎度毎度邪魔立てしよって、いい加減己の顔は見飽いたわ！」

両者の間にバチバチと散る火花。

あれ、君達知り合いなの？木下はそう言いたいのを堪え、山中に目をやると。

「柿崎さん……張飛にお顔がそっくりです……！これで武器が蛇鉾

なら、パーフェクトです！」

「どーでもいいんだぞそれッ！！！」

グツと両手を握り締め、キラキラした目で語る山中に、彼女は全力でつつこんだ。

「だ、だってチロさん！よく見てくださいよ！ほんとに、ほんとに張飛にそっくり！」

「張飛だか提灯だかどーでもいいっつーの！！今戦中だから！戦争の真っ最中だから！」

これも薬の効果だろうか？山中のテンションが妙に高い。

何やらギヤーギヤー言い合う二人に、隙ができたかと兵士達が一斉に攻撃を仕掛けるが。

「うるさいっ！！！！！」

舞風と木下の影が、ドガツとまとめてフツ飛ばす。

「……おい、あれは己のどこにいる六武衆の片割れ共か？」

「……………」

「……まあ、気にするな。」

微妙な顔で二人の言い合いを眺め、両者は改めて戦いの構えをとった。

side上杉

「あつぶな、氣イ抜いとなら掠つたし今。」

車掛かりの陣の中、北は愛馬の翡翠に乗り、武田の兵士を叩きのめしていた。

今現在、彼女は兵団一つと共に、鶴翼の陣の端を攻撃している途中だった。

「雨は……もうちょいで降るっぽいんやけどなあ……ってか降ってくれんとヤバイし……水流弾っ！」

深い霧の水分を凝縮し撃ち出す。

ちらりと向こうを見れば、小川が豪快に火柱をあげていた。

「おい！あんまり最初から飛ばすなよ！後々もたんで！」
「いらん世話だ！それくらいわかってる！」

北が声を張り上げて叫べば、噛み付くように小川は言い返した。その目には、いつものどよんとした雰囲気はなく、獲物を狙う肉食獣のような猛々しさがあつた。

炎の神憑きは、他の神憑きに比べて苦勞するとはこのことか、と北は納得した。確かに普段よりも、かなり闘争心が上がっているようだ。

「……退け！炎狐！」

陽炎丸を一振り、すると湧き上がった炎が三つ、彗星のように尾を引いてしゅうつと飛ぶ。それは狐が駆け抜けるように見えて、敵地に鮮やかな朱線を残した。

しかし、敵兵を焼き倒す炎の塊を切り伏せた者がいた。

武田四天王の一人、板垣 信方だ。

「……板垣さん。」

くすんだ黄金色と深紅の戦装束、両手で構えるのは上下に刃のついた槍。

「小川殿、お退きあれ。そなた達には、辰市を救って頂いた恩がある。某は刃を向けたくはない。」

落ち着いた声で、信方は諭すように言った。が、おいそれと退けるわけがない。

彼等武士に比べれば軟弱な人間だが、それなりに腹を据えてここまで来た。

「……こちらにも事情があります。俺達は簡単にこの戦を放棄出来ないし、する気もありません。」

きつぱりと言い切って、小川は陽炎丸を信方に向けた。

あわや一触即発かと思いきや、彼はにんまりと笑って陽炎丸を下ろしたではないか。

「それに、板垣さんの相手は俺じゃありません。」

そう言う小川の声聞きながら、信方は右へと視線を向けた。

「……宇佐美 定満殿、とお見受けする。」

いつからそこに居たのか、青葦毛の馬に跨がった定満がひっそりと立っていた。

「貴殿は板垣 信方殿ですね。」

定満は軽やかに馬を降りると、軽く会釈した。

「小川殿。ここは私が引き受けましょう。」

「…………… お願いします。それと…………… 感謝します。」

小川は深々と定満に頭を下げる。

定満は軽く微笑み、先に行くよう手で促した。

「赤兔ーっ！」

愛馬の名を呼べば、忠実な彼は直ぐ様姿を現した。

定満の隣を通り過ぎる瞬間、戦の喧騒に混じって彼が何事か囁く。その言葉に、小川は目を見開いた。馬上で振り返ると、定満の片手が上がり。

「グ、グッドラック？」

「ほお、うさみーも結構ノれる人やったんやな。」

恐らく、自分達が何かの拍子に行っていたのを見ていたのだろ
う。

「ほら、行くで。殿下と梅が来るまで、できるだけぎょーさん倒し
とかな…………… そういや、さっき何て言われたん？」

馬を寄せ、北は小川に尋ねた。

彼は少し黙り込み、微妙な表情を作って口を開いた。

「殿をよろしく頼む、と言われた。」

「……………どういう意味でのよろしくやろうなあ。」

ちよつと、いやかなり色々考えてしまつ一言だが、二人は首を振つて雑念を払つた。

（side妻女山）

「あつははははは！ほらほら、早く逃げないと黒焦げになつちやうよー！」

バリバリツと谷中の身体の周りを稲妻が這いずり回る。

響く高笑いと轟きは、容赦なく敵兵の鼓膜を乱打していた。

「おおおおらあああ！……！」

梅本の咆哮に応え、大地は隆起し、次々に飛ぶ岩が刃を阻み、矢を砕く。

唯今妻女山、大混戦中である。

うっかり踏み込めば、瞬きする間に昏倒する破目になること間

違いなし。

「くっそ、雨はまだかよ！」

忌々しげに空を見上げ、梅本は呻いた。

そろそろ太陽が昇る頃だろうか。

後もう少し、もう少しで雨が降りそうな気がするのに。

「地壁ッ！」

数十枚もの土の壁が足元からせりあがり、敵兵達は空高く放り投げられる。

梅本はそうやって、少しずつ武田軍を削り取っていった。

三十九の囁 「げつとだうん・えねみーず！巻き込まれたイヤツだけかかって

どうもー、最近温かくなったり寒くなったりで大変ですね。

お待たせしました、三十九話のp出来ました。

まだまだ終わりそうにない川中島編、多分次くらいには龍虎激突出
来ればいいなあと思っております。

・・・・・・よ、予定だよ予定。

では、また次回っ！

四十の斬『げつとだうん・えねみーず！巻き込まれたイヤツだけかってこい！

混戦の中、昌信が声を張り上げた。

「弓兵！構えよ！」

昌信の命に従い、一斉に弓兵が弓を引く。

一人二人なら大したことはないが、何十人、何百人といれば話は別だ。

「放てッ！……！」

数百本は下らない数の矢が、映画でしか見たことのない光景のように、自分に向かって飛んでくる。

「ヤ、ヤベッ！？」

喰らえば針ネズミ、梅本は慌てて壁を立ち上げようとして、ふと思い直す。

自分だけではなく、周りの兵達も守らなくては。

おニュー技の出番か、と舌打ちした。

「あーあ、あんまり早い段階で見せたくないんだけどな……うまくいけよ、龍隆岩ッ！……！」

地国天が地面を殴り付ければ、字の如く大地が龍の背のように、長く隆起した。

思ったより広範囲に技が効いて、出した本人である梅本自信も目を丸くしたくらいだ。

降り注ぐ矢の嵐から仲間を守る中、ふと梅本の頭の天辺にぽつりと感じた滴……これはもしや。

最初はぽつり、ぽつりと頼りなかった滴も、たちまちザアザアと勢いを増していく。

「雨だ……！マンボウの野郎、遅いんだよやつとかよ！」

水滴を荒々しく拭い、愛馬の地角を呼ぶ。

直ぐ様駆け付けた地角に跨がると、ハイヨーシルバーと言わんがばかりに駆け始めた。

先程起こした岩の隆起に地国天の槌部分を押し付けて、沿うように。

すると、彼が進むにつれ、土煙と地響きを立てて隆起が横に伸びていく。

「地角、もっと早く頼む！」

愛馬の首を叩いてスピードアップを促せば、地角は一声嘶いて加速する。

血の薫る戦場を突っ切って、彼が進むとその後を追うように、大地の隆起が両軍を囲む。

「っしやあ！箱庭だコノヤロー！殿下っ、一発デカイの頼んだぞッ！……！」

なるべくその場所から距離をとるため、駆けながら梅本は叫んだ。

「まっつってましたアー……！お前の罪を数えろオオオオ……！！！」

谷中はフツ飛んだ答えを返すと、電王を天に掲げ弓を引く。
天候は雨、頭上には真っ黒な雲、この状況で狙うのはたった一つ。

「元氣ハツラツう！？駿・雷・矢！！！！」

雷の弦から眩い稲妻が溢れ、馬鹿デカい矢を作り出す。
限界まで引かれた弦が手を離れ、金色の矢が発射された。当然、物凄い轟音と衝撃を伴って。

震える空気、天に突き刺さった一撃は雲を照らし、梅本の囲った巨大な箱庭の戦場に幾つもの稲妻となって落ちてくる。

雨で濡れた大地に落ちた雷、そこにいればどうなるのか……予想はつくだろう。

爆音と激しい光を、梅本は馬上で耳を塞ぎ目を瞑って何とかやり過ごした。

愛馬の耳も、必死で身を乗り出し肘を使って塞いでやる。

やがて音も光も治まり、やっと感覚が戻ってくる。

耳鳴りと目のチカチカを堪え、カムバックしてきた視界に映るのは、見事に全滅した両軍だった。

岩の囲いは先程の一撃で壊れている。

「おいおい……死んでんじゃないのかよ、これ。」

「いや、見事に気絶してやがるぜ。あれだけ派手に落としたってエのに、器用なモンだ。」

青ざめた顔で呟いた彼の背後から、うつそりと答える声。

「あ……あんたが、真田さんか？」

恐る恐る振り返ると、呆れたような顔をした昌幸がいた。

「よオ、お前が六武衆の片割れの一人だな。知ってるだろうが、一応礼儀として名乗っておくぜ。おれは真田 昌幸だ。」

「話は聞いてます。俺は梅本 佑樹、今は武田に寝返ったことになってます。」

お互い軽く一礼して、改めて戦場を見回す。

「……あんの雷娘、大丈夫かア？おい、六郎！」
「……」

昌幸の背後に、スツと六郎が現れた。

「おい、谷中嬢はどこに置いて来たんだよ？」

「……………」

無言で六郎は一点を指差す。そこには……。

「ちょ、何で殿下までピヨってんだよ!？」

バツバタ倒れている有象無象の中に混じって、頭にピヨピヨひよこを回らせている谷中がいた。

「六郎…………？」

溜め息を吐いた昌幸に、六郎は淡々と言う。

「ただ単に、自分の力にあてられて目を回しているだけにございます。」

「で、お前は巻き添え喰う前にとんずらした、と。」

慌てて谷中を引き起こす梅本を眺め、昌幸は疲れたように肩を落とした。

「ああ、もう！起きろこのアホ！」

谷中をずるずる引きずりながら、梅本はギャンギャン喚いた。早く八幡ヶ原に向かわないと、皆が心配だ。

「忍さん、コイツ運んでもらっていいですか？」

六郎はこくりと頷き、谷中を受け取った。

傍には黄麟が控え、六郎が乗るのを待っている。

彼が谷中を抱えて黄麟に乗るのを確認すると、昌幸は一度首をゴキリ、と鳴らした。

「さーて、行くかい……真田忍隊、いるな？」

低く呟くと、何処からともなく答える声。

「然るべく。」

梅本はギョツと昌幸の方を見た。

「真田さん……忍隊、いたんですか？」

「おうよ。いくら何でも、おれと六郎とお前だけじゃあ、突っ込むにやあちよいと無理がある……あいつらには、この時まで潜伏するのが大変だっただろうがな。ま、これくらい出来ねエと、真田の忍は務まらねエよ。」

からからと笑って、昌幸はあっけらかんと言いつつ放った。

「……忍隊の皆さん、潜伏お疲れ様です。あと、これからもう一頑張りお願いします。」

溜め息をつき、梅本はそう言いつつ頭を下げた。

「昌幸様、梅本様……早く参りましょう。」

六郎の言葉に二人は頷き、愛馬に跨がった。

（side 八幡ヶ原、武田軍）

彼は、山本 勘助は、胸を抉るような後悔を必死で押し殺していた。

まさか、自分の策が見え透いていたとは。

「何と言う失態か……このままではお館様に申し開き出来ぬ……！」

なんとか軍の乱れを律し、ようやくともに迎え撃てるようになったが、攻め込まれ厄介なことになっていることに変わりはない。

「某も撃つて出らなければ……！」

勘助が握るのは、鞘も柄も鍔も漆黒の野太刀。

刀身だけは美しい白銀で、名は『不影・郷義弘』という。

神器と同じ漆黒の馬に跨がり、敵地をギリツと睨み付け、勘助は疾風のような勢いで駆け出した。

その後ろで、信玄が呼び止めるような声がしたが、敢えて振り返らずに。

勘助が一人無謀にも突撃したところ、木下と山中は二人背中合わせで敵をちぎっては投げ、ちぎっては投げを繰り返していた。

「やったぞミナちゃん！雨も降ったし、後は梅と殿下の到着を待つばかりだなっ！」

俊敏な動きで放たれる攻撃を避けつつ、影蜈蚣を振るう。
ちなみに、今の彼女の様子は……。

「影の腕が二本肩から生えて、生身の腕で神器を使って……壮大な言い方になりますけど、どこの仏像なんですか。」

山中は苦笑を隠せない。
確かに一面四臂、ミョーに気持ち悪くも見えないくない。

「三面六臂なら、阿修羅像になれただけだなッ！」

バキッ、と嫌な音をたてて、黒い腕が敵兵を薙ぎ倒した。
そのとき、何かを思い出したのか谷中が慌てたような声をあげた。

「しまった！！忘れてました！！！！」
「何だどうした何事だ！？」

それでも戦う手は止めず、二人は会話する。

「勘助さんのこと、忘れてました!!」

「あー!?」

顔を見合わせ、何てこつたいと叫ぶ。

「ミナちゃん、探そう。そうしねーと勘助、特攻して死んじまう!」

「でも、どこにいるのかわかりませんよ!」

「ミナちゃんは飛べるから、空から探してくれ!オレは白龍つれて、写楽と一緒に地上から探す!」

幸い、武田軍の混乱は収まりつつあり、もう二人が暴れなくても何とかなりそうだ。

「わかりました!見つければ、連絡いれますね!」

「おーらいミナちゃん!」

風を巻き起こして飛び上がった山中を見送り、木下は山中の愛馬を引き連れ、自分も馬に乗って走り出した。

＼side八幡ヶ原、上杉軍＼

こちらは小川&北チーム。

板垣 信方と宇佐美 定満を引き合わせた二人は、降り頻る雨の中を駆けていた。

「……やっと降ったか。」

「やかましな。えらそうに言わんと、ちったあ感謝しいや。」

互いにジロツと睨みあい、ジトジトと言葉を交わす。

「……で、俺達はこれからどうするんだ？」

「知るか。ただでさえ行き当たりばったり作戦やろ、テキトーにすりゃええんちゃう？」

戦場でもこの緊張感のなさは、どういうことか。

いや、もう既に緊張感のメーターが振り切れてしまったのだろうか。

二人とも、若干青ざめた顔色をしており、浅く早い呼吸を繰り返している。

メンタル的に、そろそろキツくなってきたのだろう。

「……おい、あれ……」

「ああ？」

ふと、小川はある方向を見やり、見覚えのある姿を捉えて北を呼んだ。

「なんや、何かおったか？」

「あれ……ヤマカンじゃないか？」

「あ、ホンマや……って、ヤバイやんけあいつボロボロやん！」

北はゲツ、と顔を強張らせた。

漆黒の装束は破れ、背中や腕には矢が突き刺さり、血みどろだ。

同時に、彼の握り締める神器も、恐らく上杉軍のものであろう血を浴びて紅く染まっていた。

「……今、あたしら行ったら、どうなると思う？」
「確実にアレの錆だな。」

即答した小川は、おもむろに掌を空に向けた。

「発火弾ッ！」

ボンッ、と爆音がして、紅の炎弾が空に撃ち出された。小川の合図だろう。

「……あっちにはミナちゃんがいるんだ、多分探してる筈だ。」

小川はそう言いながら、手を下ろした。

そのまま、二人は勘助を見守る。

彼がやられそうになったら、何とか助けに入れるように。

｝side八幡ヶ原、武田軍｝

空を飛び、山中は必死に勘助を探した。

途中、自分を狙って飛んでくる矢やら雷やら炎やらを、最小限の動きで避けながら。

「早く見つけないと……！早くしないと、ヤマカンさんが討死しちゃいます！」

だが、地上からみた戦場は何が何やらわからない状態だ。

そんな中からたった一人を見つけるのは、恐らく無理。

しかし放っておけるわけがない。

諦めそうになる気持ちを叱咤して、山中が高度を下げたとき、

ボンツ、という爆音と紅い光が視界の隅に入る。

「……もしかして、王子さん？」

まさか、と山中はその方向に向かうと……。

「いた！」

血まみれで、今にも倒れそうになりながらも戦う勘助がいた。
慌てて携帯を取りだし、木下を呼ぶ。

『ミナちゃん！さっきのつてもしかして！？』

ワンコールで電話に出た木下は、喧騒に負けじと声を張り上げている。

「はい！勘助さん見つけました！」

『オツケー！オレも近くにいるんだ、すぐ向かうぞッ！』

会話を切り、山中は急いで勘助の元に急降下する。

「退いて下さい、鎌鼬！」

舞風を振るい、勘助を取り囲む敵を一掃する。

「ご無事ですか！？」

着地すると、彼女は急いで勘助の元に駆け寄った。

「山、中…殿……申し訳…ない……」

「申し訳なくないです！何勝手に死にかけてるんですかあなた馬鹿ですか！？」

途切れ途切れの声で謝る勘助を、山中は叱り飛ばした。

彼に肩を貸していると、派手に敵兵をフツ飛ばしながら木下が到着する。

「生きてつか勘助！」

「半死にですけど生きてます！」

木下は安堵の表情を浮かべると、直ぐ様山中の愛馬の背に勘助を乗せる。

「すぐ本陣に連れて行こう。」

「はい。」

顔を見合わせて頷きあっていると。

「応急措置、いるか？」

「……おい、ここでできるのか。」

こここのところ聞いていなかった声がして、弾かれるようにそちらの方を見る。

「王子！」

「マンボウさん！」

そこには、上杉に身を置く小川と北が、悠然と立っていた。

四十の嘶『げつとだうん・えねみーず！巻き込まれたイヤツだけかってこい！

久しぶりの更新です。

やっと次に進める・・・・・・長い、長すぎる道のりですよ。

今回も戦場でどたばた、次回はもっとどたばたさせたいな！。

四十一の嘶「龍虎激突！危険なものは、遠巻きに見ると面白い。」

小川と北の二人は、武田軍の心配をよそに、怪我もなく元気そうだった。

「しばらくやな、二人とも。とりあえず止血くらいせんとあかんで。」

ニツと北は笑うと、戦装束のケープの下から何かを取り出して投げる。

「ほれ、包帯。ミナちゃん、あたしの言う通りに巻きや。」

山中は包帯を受け取ると、急いで止血を始めた。

「医者の娘は伊達じゃねえってか！たまには役に立つな、マンボウッ！」

木下と小川は、その場所を守るように立ち、止血の終わりを待った。

「……よし、できた。」

「ありがとうございます、マンボウさん。」

応急措置を施した勘助をまた馬に乘せて、山中と木下は本陣へと向かう。

「そろそろ鶴翼の陣も開いてる頃だな。俺達も一度本陣に戻る。」

車掛かりの陣は、敵が混乱している時こそ有効だが、周囲を取り囲まれてしまえば効力が下がる。

「上杉 謙信が単騎で武田に突っ込むのも時間の問題や。あたしはその道をこしらえる。そうこうしてる間に、梅と殿下がくるやる。」

北はそう言い、小川と共に走って行く。

「私達も行きましょう。」

「りょーかいっ！」

山中と木下も頷きあい、馬に跨がるのであった。

その頃、武田 信玄は自ら武器をとり、敵兵を蹴散らしていた。大將が共に戦うことで、自軍の士気も上がる。リスクは高いが、混乱した軍を鎮めて士気を高めるには、これが一番効果的なのだ。

「おのれ、あの生真面目軍師め！勝手に死ぬなとあれほど儂が

言っただのに、先走りよって！」

その手が握るのは、一本の刃。

朱色と深緑の柄は、普通の刀の柄よりも長く、刀身は切っ先にいくに従い幅広になっている。刀にあるべき反りは殆どなく、鉞に近い形をしていた。

名を『赤虎・来国長』という。

「誰ぞ勘助の姿を見た者はおらんか！」

配下の者に呼び掛けるも、答えはあらず。

ギリツと食いしばった齒の隙間から洩れた唸り声は、さながら怒れる猛虎のようだった。

すると、にわかに向こうの方が騒がしい。

「どうした!？」

声を張り上げて問えば、焦りを帯びた返答が返ってきた。

「勘助殿がお戻りに！酷い怪我です！」

「何だと!？」

ぐつと神器を握り締める手に力が入った。

その瞬間、来国長から炎が湧き上がり、うねる鞭のように敵兵を焼き払った。

「ここは頼んだ！」

「「お任せあれ!」「」

信玄は踵を返し、愛馬・黒雲に跨がった。

「ヤマカンの容態は？」

「ご安心下され、出血が激しゅうござりますが、恐らく大丈夫でしょう。木下様と山中様が、手遅れになる前に連れてきてくださいましたから。」

馬をかつ飛ばして、軍医の元に勘助を運んだ二人は、容態を説明しにきた彼に噛み付くように尋ねた。

「よかった……さすがは武人、体力だけは人一倍ですね。」

ほっと胸を撫で下ろし、山中は安心して微笑んだ。これで、勘助が討ち取られる未来は回避されたのだ。

そうしていると、ざわざわと辺りが騒がしくなり、顔中を焦りの色で埋め尽くした信玄が勢いよく飛び込んできた。

「勘助ッ！勘助は無事か！？」

直ぐ様、粗末な寝台に横たわる勘助を認めて、彼が無事なのを確認して安心したように長い溜め息を吐いた。

「心配させよって……知らせを聞いたとき、心の臓が止まるかと思うたわ。」

「お館様……彼等に感謝して下さい。彼等が軍師殿を見つけないければ、確実に命を落としていたでしょう。」

軍医の話聞き、信玄は二人に向き直った。そのまま、深々と頭を下げる。

「お主等には、部下を救われてばかりだのう……礼を言つ。」

「何言つてんだよつ、とーぜんだろ！」

「ヤマカンさんがいなくなれば、お館様の監視は誰がするんです？」

申し訳なさげな信玄の礼をあつさりと笑い飛ばし、二人はあつけらかんと言いつつ放った。

「ほら、さつさと戻れよお館様。大將がいなきや、他も底力出ねえぞ！」

木下はそう言い、竹筒に入つた水をぐいっと飲んだ。再び出撃するため、乾いた喉を存分に潤し、手の甲で口を拭う。

「チロさん、行けそうですか？」

山中も同様に水を煽り、空になった竹筒を外して放り投げる。

「そつちこそ。オレはもう行けるぞ！」

ぐつと拳を握る木下を見、山中は眠る勘助を振り返った。

「ヤマカンさんのこと、よろしく願いますね。」
「勿論にございます。お二方も、無事の御帰還を。」

丁寧に一礼する軍医を背後に、二人は馬の元へ走って行った。

＼side上杉＼

勘助を運ぶために、一度戦線を離脱した武田チームと別れた上杉チームの二人。

今は上杉の本陣近くで、謙信が武田の本陣に単騎で乗り込みをかけるのを今か今かと待ちわびていた。

「あー……遅い！遅すぎるんとちゃうん、乗り込み！」

苛々と舌打ちしながら、北は唸った。

彼女の周囲には、六つのバスケットボール大の水球が浮かび、水鉄砲と呼ぶには威力の高すぎるものを撃ち出していた。

「……………もう夜が明けたな。発破かけに行くか？」

小川も疲れたような顔で、炎の弾幕を発射している。

二人がよし行こうと動き出したとき、何やら騒音に混じって兼続の声が聞こえた。

「——様！——ち——さい！」

そもそも、こんなどえらい音が溢れてる中で特定の人物の声を聞き取れることじたいが異常なのだが、生憎慣れてしまっているの
で不思議に思わない。

そうこうしてると、もっとはっきりと声が聞こえてくる。

「謙信様！お待ち下さい！単身では危険です！」

「案ずるな兼続！道が開けているのだ、今行かずにいつ行けと！」

見れば、凄い勢いで疾走してくる白馬と、それを必死で追い掛ける焦茶の馬。

騎手は言わずもがな、謙信と兼続である。

やっと来たか、と二人は若干へばった己の顔を引き締めた。

「おら王子！とつとと行くで！」

「うるさい知ってる。」

馬を駆り、謙信の両サイドを並走する。

「よう謙信様。どこ行くん、付き合っわ。」

「……………俺も。」

埃と汗で汚れた顔をニタリと笑みの形に作る二人を見て、謙信は苦笑した。

「行き先は武田の本陣だ……危ないぞ。それでも共に来るか？」

「行く。」

ソッコーで返ってきた返事に、謙信は上等だ、と呟いた。

「ならば行こう。どうだ兼続、これで单身ではなくなったぞ！文句はあるまい！」

「おおありです！毎度毎度一騎打ちしようとして、こちらの身にもなってください！」

結局、兼続付きの計四騎で本陣に向かうことになったのだった。

上杉の本陣から武田の本陣まで、距離はそれなりにあるのだが、馬を走らせれば大したことはない。

ここで初めて二人は、謙信の戦う姿を見た。

神器の名は『電華・姫鶴一文字』といい、鮮やかな青一色の細身の刀だ。

柄部分は水晶のように透明で、濃紺の房飾りが一本、頭金の辺りに付けられていた。

さすがRPGの世界、武器は凝ってるなと、今更ながら実感だ。そして予想通り、謙信は速かった。何が？攻撃が。

「居合いかそれ。」

シュツ、と音が聞こえる度に、敵兵がスパツと切り払われていく。

「……まあアレだ、テンプレ？」

「……そーやな。」

「何の話だ？」

きょんとした顔で聞いてくる兼続に、何でもなーいとハモって誤魔化した。

敵軍の大將が突っ走ってきたのを見て、武田軍がワアッと集まってくるが、前後左右に死角無し、一太刀、一振りの内に崩されていく。

「……厄介な将は、いい具合に噛み合ってるな。本陣まで後も」

小川の言葉を遮って、謙信が鋭く叫んだ。

「散れッ！……！」

あまりの鬼気迫る叫びに、反射的に二人と兼続は言葉通り謙信から距離をとった。

刹那、バカでかい炎の塊が謙信に真っ二つに断ち切られ、瞬時に「凍った」。

「………え？」

思わず間抜けな声が口から漏れた。

ポカンと見ていると、謙信がにっと笑う。

パラパラと砕け散る氷の合間を縫って、謙信は白い矢のように神器を振り上げて何かに突進した。

「……このシーンって、まさか……！？」

小川がハッと息を呑む。

そう、まさかのまさか、川中島の戦の中でも最も有名なシーンである。銅像にもあったよね、これ。

振り下ろされる謙信の刃を、火花を散らして軍配で受け止める者。

虎の頭を模した冑には、毛先だけ深紅に染められた白い毛皮。鮮やかな赤い上衣や、黄金の装飾が付いた防具を纏う体軀は隆々と逞しく。

猛々しい笑みを浮かべた甲斐の虎が、咆哮した。

「久しい……！まこと久しいのう、謙信ッ……！」

対する越後の龍も、爛々と眼を光らせ、恐ろしいまでの気迫をみなぎらせて叫ぶ。

「この時を待ちわびていた！存分に、信玄ッ……！」

信玄は素早く攻撃を受け流し、軍配と己の神器とを入れ換えた。
龍虎激突の瞬間である。

side 武田

「ヤベエ超みすちー肌なんですけどオレ！」

「鳥肌と言いたいんですよね私もです。」

両雄が神器をぶち当てる度に、熱風や氷の破片が飛んでくるのを、木下はギヤーギヤー言いながら防いでいる。

隣の山中は、そんな彼女のテンションに呆れながらも、目の前の戦いを食い入るように見ていた。

既に、信玄の腕には氷の飛針が数本突き刺さり、謙信の肩には火傷が見える。

だが両者共に、その怪我が戦いの邪魔になっている様子はない。

「……痛みも何も、頭から吹っ飛んでいるようですね。」

クライマーズ・ハイならぬファイターズ・ハイだろうか。

「っーかよオ、もうアイツらお互い大好きなんじゃね？」

木下は顔をしかめて、頭をぼりぼりと掻いた。

周囲は、派手に鎧を削りまくる大将二人に近付こうとしない。

そりゃそうだ、巻き込まれたらやってられない。

凍るのも燃えるのも、断然お断りだ。

「さて……いつ私達はあの中に入れそうですね。」

今までののは序の口、こっからが本番、一番大事なところだ。

「とりあえずさ、梅と殿下が来るまで待とうぜ。」

さすがに二人ずつで龍虎の相手をするほど、自分達はまだ威勢よくない。

「それもそうですね。カタつけるならつけるで、適度に戦ってもらった後の方が、まだマシかもしれませんし。」

山中はふう、と軽く息を吐き、傍観する体制に入ったのであった。

〈side 龍虎〉

灼熱と氷結の中、刃と刃が混じり合い、凄まじい音をたてていた。

辺りは耳をつんざくような騒音に包まれているのに、二人の頭は冴えきっていた。

ああ、何て愉しいのだろう。謙信は静かに微笑んだ。想い慕う愛しき御敵と、倒れ逝くその時まで戦う。

今この時、この瞬間だけは、彼は自分のものなのだ。

「いつぞやの塩の礼……まだ言うてなかったな、謙信よ。」

猛る戦人の表情がふと緩み、信玄が柔らかな笑みを浮かべる。

「構わん。ここで貴殿と戦える、それが礼だ。」

鏑迫り合いを弾き返し、謙信は後ろに飛んで距離をとった。

ひゅうと風が、いや、冷気が渦を巻き、謙信の周囲を取り巻く空気の温度が急激に下がっていく。

そして、掲げた刀の切っ先の上に、きらきらと輝くものが舞っている。

それは、無数の氷の礫だった。

ダイヤモンド・ダストと呼ぶべきか、とにかくあれに触れたが最後、骨の髄まで凍り付く。

信玄は目を細め、来国長をしっかりと握り締めた。

「ふふ……そう来るか、謙信よ。今回はまた、随分激しいのう。」

信玄はそう呟き、身体にグツと力を込める。

謙信の時とは逆に、ゆらりと彼の身に揺らぐのは、陽炎と朱色の焰。

噴き上がった炎は、徐々に勢いと熱を増していく。そして、両者の力が最高潮に達した瞬間。

龍と虎は、天まで届くような咆哮を上げ、氷と炎が牙を剥き、互いに激突した。

熱さと冷たさがごちゃ混ぜになる中、二人は息を荒くして、そこに立っていた。

しかし、信玄は上半身半分が凍り付き、謙信は衣服こそ燃えてはいないものの、その下は火傷しているようで、身動き一つする度に顔を歪めている。

ダメージはそれなりに、二人の体力を削ったようだ。

それでも尚、ややふらつく足で神器を掲げて打ち合おうとした時、横から文字通り「横槍」を入れるように、ガキン、と何かが入ってきた。

「……悪いな、二人共。」

「残念ながら、ここで相手変更や。」

赤銅色の刀身と、水色の棍が、信玄の来国長をがっちりと押さええている。

「これ以上は、見ていられませんね。」

「ごめんな、オレ達邪魔するぞ。」

漆黒の棒が姫鶴一文字を受けとめ、銀の扇は謙信の腕に狙いを定めている。

六武衆、八幡ヶ原チーム……ついに龍虎と対する時来たり。

四十一の嘶「龍虎激突！危険なものは、遠巻きに見ると面白い。」

（後書き

どうも、おはこんにちばんわ夜さんです。

あの、とりあえず元気です。

そして九月までですが、市役所で臨時職員として働けるようになりました。

五月から仕事が始まりますが、これから更新が今までより遅くなる可能性もあります。

嬉しい反面、ちよつとあーあ。って感じもありますね。

さて、お待たせしました四十一話でございます。

ついに主人公達が両雄の間に乱入しました・・・・・・ははははは。殿下と梅は今どこ何をしているのか、この二人は多分次回登場します。

みんなが知ってるあの有名な文句とともに、昌幸も巻き込んで。

それでは皆様、四十二話でまた！とうっ！

四十二の嘶「切り札もヒーローも、後から出てくる。」

あーあ、やつちまった。

龍虎の前に立ち塞がった四人は、後に退けぬこの状況に舌打ちしたい気持ちだった。

目の前で燃えたり凍ったりした人間を見て、飛び出さないヤツがいるんだろうか、いやいない。

「……そなた等が、小川殿と北殿の仲間か。何のつもりだ？」

冷え冷えとした眼で、越後の龍は山中と木下を見据えた。

「別に疚しい考えはねーぞ。オレ達、自分のしたいことしてるだけだし。」

汗が首筋を伝うのを感じながら、木下は出来るだけ落ち着かせた声で言った。

「私と信玄を……戦わせないつもりか。」

尚続く謙信の問いかけに、今度は山中が答える。彼女も木下と同様、淡々とした口調だ。

「それも一理ありますが、八割は私達個人の願望ですね。」

謙信は訝しむような目付きで、無謀な二人を見詰めた。そして、甲斐の虎と向かい合うこちらの二人も。

「……行くぞ、武田信玄。」

「ナメとつたらエライ目見るで。氣いつけや?」

山中と木下を一瞥して、小川と北は宣戦布告を信玄に言い放つ。

「……仕方ない。だが後悔するなよ。儂等は今、ちいとはかり加減が出来んぞ。」

荒々しく言う信玄に、四人はごくりと固唾を飲み込んだ。

本来なら、膝が震えまくっているんだろうが……不思議なことに、恐怖心はあまり感じられなかった。

そのかわりに、どくどくと全身の血が沸き立ち、何か熱いものが胸を突き破ってしまいそうだった。

戦経験の浅い神憑きに起こる症状、というものだろう。

この症状に感謝して、四人は目の前のラスボスこと龍虎に、果敢にも挑みかかるのであった。

〈vs信玄〉

「……炎狐ッ!」

陽炎丸の剣先が信玄に向けられ、そこから三発、紅蓮の彗星が尾を引いて飛ぶ。

「面白い、儼と炎を競うか！」

豪快に信玄は笑うと、来国長をぶん回し、襲いくる炎を叩き潰そうとしたが。

「競うんは炎だけちゃうで。飛氷柱！」

風鯨の片方で来国長を止めた北は、もう片方から信玄の腕を狙って氷柱を撃ち出した。

そして、いきなり地面に膝をつき、上体を伏せる。

タツチの差で、伏せた彼女の背中の上を、小川の放った炎が通り抜けた。

「ほう、やりよるわ！」

信玄は楽しげに叫ぶと、片手に炎を宿らせる。

気合いを込めた声と共に、文字通り燃えるストレートが北の放った氷柱にヒットし、氷柱は砕け、水となり地に落ちる。

そして来国長も同様に、刀身に纏う炎で、小川の炎を切り払おうとする。

だが、三発の炎は同時に信玄の身体に被弾する。

切り払えたのは一発だけ、しかも予想外に重たい攻撃に、信玄は目を見開いた。

「やっぱ氷はあかな……水流弾！」

「うおっ！？」

被弾の勢いに、ぐらつと揺らいた信玄の足元から、新たに北の攻撃を宣言する声がした。

下から吹き上がる水鉄砲が信玄の肘に当たり、神器を握る腕が

真上に上がった。

「せーのっ！」

神器は跳ね除けられ、隙ありとばかりに、北の風鯨が彼の反対の腕に叩き込まれた。

来国長を持つ方の手ならば、風鯨を防ぐこともできただろうが、残念ながら狙われたのは武器を持たぬ方の腕。加えて水と炎とでは、勝敗は明らかだ。

ゴツツ！と風鯨の先端が、信玄の腕にヒットする。

北の扱うこの旋棍、先端には鯨の牙のような棘がついている。

それに殴られれば、当然流血沙汰になるワケで。

肘の下を強かに挟まれ、血の飛沫が飛び散る。

「ッ……！中々よのう、六武衆！」

「そいつは恐悦至極でッ！！」

するりと北がそこから退くのを確認し、小川は勢いよく陽炎丸を振り下ろした。

金属の打ち合う音と、炎が舞い踊る。

ギチギチと刃が噛み合い、睨み合う小川と信玄。

「……っ！！」

小川の喰い縛った歯の隙間から、細い吐息が漏れる。

体格は信玄の方が厳つく、純粹に腕力では小川の方が圧倒的に不利だ。

「おい、大丈夫か！？」

徐々に押される小川を見て、北が急いで加勢に加わろうとする。

「……大丈夫だ、問題ない。」

「いや、あるやる大問題やる。お前はアレか、。ルシャダイか？」

彼女が盛大につっこむという、非常に珍しい光景だ。

「うるさい、んなわけないだろ……こっち来んな。」

ギラツと光る眼が、信玄を捕らえる。

途端、熱気が二人を包み込むように蠢いた。

胸の鼓動が、身体を苛む熱が、一際激しさを増す。

ゆらりと小川の周囲に昇るのは、陽炎だろつか。

彼の様子が変わったことに、信玄が気付いて眉を寄せた。これは、この雰囲気はもしかして。

「来るか……！？」

信玄が呟いたと同時に、小川の声が響く。

「火輪尾ツ！！！！」
ひわお

彼の背後に、紅蓮の炎が立ち昇る。

それは狐の尾のような見た目をしていて、円を描きながら信玄に襲いかかった。

対する信玄も、それを相殺せんと吼える。

「瓔珞火！！！！」
しゅくか

頭上から、炎が流星のように降り注いできた。

その名の通り、瓔珞のような炎の雨が、美しく尾を引いて二人の上に落ちていく。

「こらあかんわー!!」

上も下も、真っ赤な火の海だ。

北は舌打ちして、小川の元に急いだ。

いくら彼が炎に強くても、あんなものをノーガードで喰らっては無傷で済むわけない。

「あつっ！ちょ、あたしまで燃えるやんけ！」

メイドイン・妖怪の戦装束は、素晴らしい防火性を示してくれたが、熱はそれなりに肌に伝わる。

幸いにも、雨上がりの地面には、水気がたつぷりと含まれている。

彼女は地面の消火をしながら走った。

炎の雨はまだ降り止まない。

その中で、必死に信玄と打ち合う小川を見つけ、北は慌てて加勢に入る。

「まだまだじゃのう！それでは儂に勝てんぞ！」

「うるさいオッサン！！！」

かか、と笑う信玄に二人は悪態をつくが、悔しいことにそろそろヤバかった。

これはリアルに死ぬかもという考えが頭をよぎったとき、救いの手は唐突に大地から現れる。

くvs謙信く

さて、時を少しばかり巻き戻して、謙信との戦いはどうなるのだろうか。

「そんじゃ、頑張ろうぜミナちゃん。」

「はい、頑張りますよね。」

パシリ、と二人は互いの手を打ち合わせ、励まし合うかのように笑った。

その時、第三者の声が割り込んでくる。

「謙信様ッ……!!」

何だとその方向を見れば、見たことのない女武将が一人。

「手を出すな、兼続。」

ピシリと言う謙信を見て、あの女武将が『愛の人』こと直江兼続だとわかった。

「しかしっ、一対二では……!!」

兼続はキツと二人を睨み付けるが、謙信は彼女の加勢を許さなかった。

「彼等は、私に戦いを挑んでいる。私はそれを受ける覚悟だ……それが『将位』たるものの務め。案ずるな兼続、私は負けぬ。」

きつぱりと言い切る様に、おおーっと内心感動する二人。

「……御意。ならば手出し致しませぬ。」

兼続はまだ何か言いたそうだったが、黙って引き下がった。

「話は終わりましたか？」

山中がそう尋ねると、謙信はこくりと頷いた。

「なら、行くぞ。いーち、にーの………」

木下のカウントに双方、神器を構えて。

「さんっ！！！！」

地面を蹴り、同時に駆け出す。

まずは第一発、謙信の周囲がキラキラと煌めいたかと思うと、次の瞬間、矢のような形をした氷が六本、唸りをあげて飛んできた。

「チロさん、私が！」

「おう！任せたぞっ！」

低空飛行で木下を追い抜き、山中が前に躍り出る。

轟、と空気が荒れ、開いた舞風に風が集まっていく。

「旋風！」

山中の声と共に、小さなつむじ風が氷の矢に牙を起て、硝子が割れるような音をたてて三本が砕け散った。

「残りは此方でやるっ！縛影！」

木下の足下から、太い影が蛇のように鎌首をもたげた。

そして、飛んでくる氷の矢をそれぞれ見事に絡めとったではないか。

次に彼女がやらかす行動を読んで、山中は急いで空高く舞い上がった。

「これっ！返すぞ！」

木下がニツと笑い、氷を持った影が大きく振りかぶり――氷をぶん投げた。

謙信の頭上に振り降ろされるそれだが、剣の間合いに入った瞬間、あっという間に細切れにされてしまう。

「げ、マジで……どわっ！？」

その勢いを殺さぬまま、謙信の刃が木下を捕らえるが、何とか影蜈蚣で受け止めた。

「ぼさつとしてると、命が散るぞ。」
「散ってたまるか！」

躊躇いのまったくない斬撃を、木下はちょこまかと小回りの効くステップでかわしていく。

「くそ、はえーんだよバカヤロウっ！影爪！」

このままじゃ埒があかない。

木下は影を纏った片手を、タイミングを見計らって前に突き出した。

それに、謙信がハッと息を飲んだ。

ガキッという音が聞こえ、木下の口元が笑みを描く。

影の鎧を装着した右手は、しっかりと姫鶴一文字の刀身を鷲掴みにしていた。

「っーかまえた……！」

どんなに速いものも、掴まれてしまえば動きは止まる。

舌打ちして謙信は冷気を集めようとするが、それを彼女が許す筈がない。

冷たい空気が凍る前に、影蜈蚣を握ったままの左手が、器用に謙信の手首を掴む。そして、そのまま全身に力を入れて。

「っせえええい！！！」

「なっ！？」

気合い一声、謙信の身体が宙に浮いた。

否、木下に投げられたのだ。

六武衆の中で最も小柄な彼女が見せた、豪快な投げ技。

「ミナちゃん！」

「待ってました！」

パツと手を放した木下は、山中の名を呼ぶ。

空中で体勢を満足に調えられない謙信の目の前に、急降下してきた山中が迫り、その脇腹目掛けて舞風がぶち込まれた。

武田戦に比べて、なんとというか力任せというか……とにかくこちらも、それなりに重たい一発を入れることができた。

地面に叩きつけられた謙信は、ダブルの衝撃で激しく咳き込む。

「ぐ……っ、魔王、め……何をどう、仕込んだ……!？」

どう考えても、並みの女の腕力じゃない。

どうやら、自分はあるの二人の力を見誤っていたようだ。

姫鶴一文字を地に刺し、それを支えに立ち上がる。

「……だが、私に勝機がある。」

そう呟き、謙信は向かってくる二人を視界に入れた。

「鉄砲水！」

湿った地面から集まった水が、唸りをあげて押し寄せる。

当然かわされるのだが、それで終わりではなかった。

「爆ぜろ！」

「え!？」

避けようとした矢先、謙信の命令通り水流が爆発したではないか。

大量の水を頭から被った二人は、視界を遮られ思わずたたを踏む。それがまずかった。

「凍れ、氷牢！」

しまった、と思う頃には、もう遅かった。

浴びた水はたちまち凍り付き、文字通り氷の牢が二人の自由を奪う。

「ミナちゃん、これ鎌鼬で切れねーのか!？」

「ごめんなさい、手が……！」

首を捻って木下が山中の方を見ると、舞風を握る彼女の手首ががっちりと凍っている。

「ヤッベエぞこれ!？このっ、割れるコノヤロー！」

ジタバタと暴れる木下の鼻先に、白銀の刃が突き付けられる。

「勝負ありだな……私と信玄の戦いに乱入するとは、自惚れているのか？」

冷たい目で見下ろされ、呆れたような口調で謙信が言う。

「……んだと、コラ。」

「……今、何と？」

ピキッ、と二人の額に筋が立つ。

「違うのか。ならばもう少し身の程を知るといい。甘い気持ちで戦場に立つな。」

コイツ黙って聞いてりや人の気も知らずに……！と二人の苛々がギュインと急上昇する。

そして、ぷちんと線がキレる音がした。

「黙らっしやい！あんたにだけは言われたくない（です）（ぞ）この大嘘つきの臆病者！！！」

一瞬だけ目配せして、二人同時に腹の底から見事にハモった怒鳴り声を響かせたその瞬間、抜群のタイミングで、天から救いの轟音と閃光が降り注いだ。

二つの助けは、小川と北に降る火の雨を、大地から盛り上がった岩の塊が防ぎ、天からの稲妻は、山中と木下の動きを阻む氷の牢を打ち砕いた。

「これは……！？」
「一体何だ！？」

いきなりの事態に、龍虎の口から驚きの言葉が洩れる。
すると、もくもくとした霧だか土煙だかの向こうから、意気揚

々とした声が聞こえてきた。

「一体何だと聞かれたら！」

「答えてやらんこともない！」

ビュウ、と風が吹き、土煙を払う。

「絆の破壊を防ぐため！」

「絆の平和を守るため！」

ビシッと格好よくポーズをキメて、遅れて登場する例の二人。

「愛と真実がバカを貫く！」

「グレートストレンジな救世主！」

「佑樹！」

「若菜！」

「乱世を駆ける六武衆がこの二人には！」

「縦横無尽！フリーダムな明日が待ってるぜ！」

どどーん！と何故か背後に爆発を背負い、良いのか悪いのか賛否両論ありそうな登場をした、我等が妻女山チームこと谷中と梅本の
そしてワンテンポ遅れて、引き攣った顔の真田 昌幸と無表情
の海野 六郎がラストを締める。

「な、なあーんてな……」

「そおーなんす。」

シーン、と辺りが静まり返る。

痛い、その静寂がものすごく痛い。

「「「「ア……アホかああああああ……！！！！」」」」

四人の盛大かつ壮大なつっこみが、戦場にながーく長く、木霊した。

四十二の斬「切り札もヒーローも、後から出てくる。」 (後書き)

何か勢いによって続きupしました。

ロケット団が登場するときの台詞って名台詞だよね、異論は認めない。

次回、「口舌の刃で、人を斬らなきゃいけないときもある。」お楽しみー。

四十三の嘶「口舌の刃で、人を斬らなきゃいけない時もある。前編だったりす

四人のピンチに、颯爽登場した妻女山チーム。

しかしまた、とんでもない出方である。

「何でロケッ。団なんだ！もうちょっとまともに出てこい！」

つつこみ役変更、小川が梅本に変わってお送りします。

「そーだぞ！それ、初期の口上じゃねーか！」

「根本的ところが違う！何でそんなに詳しいんだファンか！？毎週見てたクチか！？」

偉そうに言う木下に、小川はチョップをおみまいする。

「なんや、お前えらいつつこみに熱心やな。さてはアレか、梅の座を狙ったんか？」

「そうなんですか！？でも、なんでしよう……イマイチ梅さんに比べてキレがないですね。」

「誰が狙うか！誰か一人つつこまないとかオスになるだろうが！こんなの俺のキャラじゃないのにツ！！！」

北と山中でラスト、一通りつつこみ終えて、ハーハー息を切らせながら小川はがっくしと項垂れた。

とりあえず仕切り直してください、マジで。

「仕切り直してワンモアタイム」

「……ゴホン、梅本殿、これは一体どういうことだ？」

「昌幸よ、何故お前だけここにいる？他の者はどうした？」

謙信と信玄は、咳払いして、厳しい声で新たに登場した四人に問いかけた。

「どうもこうもないですよ。俺は仲間とやり合う程、あんたに忠誠を誓ってるわけじゃない。」

そう梅本が答えた瞬間、彼の身体が真横に飛んだ。

否、何者かに抱えられて飛んだ、という言い方が正しいだろう。その瞬間、唸りをあげた風の一撃が、さっきまで梅本が立っていた場所を深々と抉っていた。

「ああ、危ない危ない。気をつけて下さいよ、土竜様。」

いきなりすぎてポカンとしている梅本の目に、少しばかり呆れたような顔をした青年が映る。

狐色の髪に、深緑のノースリーブ状の上衣を纏い、額には同色の鉢金をしている。

え、誰こいつ？と首を傾げる暇もなく、青年は梅本をサッと地面に降ろす。

「俺は真田忍隊隊長、猿飛 佐助と申します。お噂は予々、昌幸様から聞いてますよ。」

早口に青年、猿飛 佐助は言い、大地を抉った一撃を放った方向を見る。

そこには、怒りに頬を染めた兼続が、忌々しげに舌打ちして立っていた。

「邪魔立てするな、忍風情がッ！！！」

「いきなり外から叩っ斬ってくるような輩に言われたくないっての。」

「どうやら先程の攻撃は、怒れる彼女の仕業らしい。」

「許さない……！恩義ある身にも関わらず、謙信様を裏切るなど！」

佐助はやれやれと肩をすくめ、チラリと昌幸の方に視線を寄越した。

昌幸は小さく頷くと、殊更へラヘラとした笑みを浮かべ、兼続の前に悠々と歩み出てきた。

「お怒りのトコ悪いけどよ、お前の相手はおれなんだわ。あいつらは先約があるんでなァ！！」

しゅっ、と昌幸の手が振るわれ、白い糸が兼続の神器に絡み付いた。

「貴様ッ！」

「おー怖エ怖エ。ちったあおしとやかさってモンを身に付けたらどうだ？狛犬みてエな顔しやがって。」

昌幸の小馬鹿にしたような挑発に、ビキッと兼続の額に青筋が

浮いた。

「こ、狛犬だとおお!!?」

以前北に吐かれた暴言、あれ実は地味にショックだったんですね兼続さん。

とりあえず、兼続の相手は昌幸に任せておいてよさそうだ。

「相変わらず、昌幸様は他人を怒らせるのが上手いですねー。」

佐助の苦笑いに、同感だと梅本は頷いた。

さてさて、それでは長い前置き終了。

六武衆vs龍虎、ここから真の始まりと相成る。

「……わからんのう。」

ぼそりとした信玄の呟きを、謙信は拾い上げた。

「確かに、理解に苦しむ。」

姫鶴一文字を握り直し、謙信は自分達の目の前に立ち塞がる六人を眺めた。

ちなみに、佐助と六郎は他にこなさなければならない仕事があるらしく、後ろ楯は全くゼロの状況だ。

「何故我々と刃を交えようとする？」

「そうすることで、お主等に何の得がある？」

龍虎の問い掛けを、六人は鼻で笑い飛ばす。

「……あるからこんな馬鹿げたことをしてるんだ。」

小川は頬の傷から伝う血を拭い。

「得がなきゃ、誰もやらねえよな……にしても無謀だ。」

梅本は苦笑して、肩につかけていた地国天を下ろし。

「ホンマやで。あたしだけなら絶対やらへんわ。」

北は溜め息と共に肩をすくめて。

「でも仕方ないじゃないか、こっちも後には退けないしね。」

谷中は組んだ腕をほどいて。

「このまま放置というのも、いい気分で旅ができません。」

山中は、ぼんぼんと装束の汚れを払って。

「オレ、嫌いなものはどーやっても認めらんねえや。」

木下は、気合いを入れるように地面を踏み鳴らし。
彼等は一斉に、龍虎目掛けて飛びかかっていった。

信玄を相手にするのは、小川、北、梅本の三人。
謙信を相手にするのは、谷中、山中、木下の三人。

「行つくよー！せーのっ！！！」

未だハイが残り気味の谷中が、電王を謙信に向けた。
すると、数個の小さな鉄球がふわりと浮かび上がってきた。

「電磁砲！」

彼女の掛け声がするや否や、その鉄球は雷を纏い、凄まじい勢いで次々に発射されていく。

「無駄なことをッ！！」

謙信は不敵に笑うと、迫りくる雷の弾丸を弾き返そうとしたが。

「んー、やっぱそうくる？」

谷中は軽く電王を振ると、弾丸の幾つかは急激に角度を変えて、謙信の足元に直撃した。

土台を吹っ飛ばされ、よろめきながらも残りを弾いた謙信の頭上から、銀色の輝きが振り下ろされる。山中の舞風だ。

姫鶴一文字が防ぐには間に合わない。

「飛氷牙ッ！」

掲げた片手から、鋭い氷柱が飛ぶが、岩を砕いたような音と共に、氷柱が粉碎される。

きらきらと氷の破片が、昇りきった太陽の光を反射して煌めく。

「風神の！盾ッ！」

山中が叫ぶと、風が急激に彼女の前に渦を巻く。

氷の破片を巻き込み、竜巻の塊が迫りくる。

そして、舞風が再び広がったとき、それは一気に爆発、いや、弾けたといったほうが正しいだろうか。

氷の破片は、爆発的な風の力を借りて、空を斬って飛ぶ飛針となった。

「速い……！！！」

打ち返すのは無理と感じた謙信は、姫鶴一文字を地面に突き立て、氷の壁を作り出す。ドガガッ、と壁に刺さる針。

だが、三人は謙信に一息つく暇も与えない。

「いづくぞ謙信!!!」

山中の背後から、黒い影が伸びる。木下の右手に纏った影爪が、氷の壁を貫通していく。

山中と木下が防壁を突破して、道を作り出す。

それを確認して、いつの間に移動したのか、遙か後方で谷中は弓に矢をつがえた。太く、銀色に輝く矢だ。

最後の一発の為に、電王を作り出した妖怪、雷獣の裂空に急遽こしらえてもらった特製の矢。

ところが、肘ががくがくと震え、目が霞んできたではないか。

「あー……やっときたんだ。副作用ってヤツ？」

舌打ちして、彼女はギリツと下唇を噛み締めた。

たった一本しか出来なかった矢だ、外してたまるか。バリツと雷が腕を伝い、矢の先端に集まっていく。

それは次第に大きくなり、先端だけに止まらず、矢全体にまで行き渡る。

彼女の現段階で、渾身の一発だ。

「届いてよ、絶対に。」

雷の弦を、谷中は離した。

耳をつんざくような爆音と爆風が轟き吹き荒れ、眩しく美しい黄金の矢が、目前で暴れる龍に真っ直ぐ飛んでいく。

それを見届けることなく、谷中の膝は力なく地についた。

両手を突き出して、無様に倒れることは回避したが、最早意識を保つだけでやっとだ。

「今は……これが精一杯……!」

当たれ、死んでも当たれ。
残りの二人に後を託して、彼女の身体は動かなくなってしまっ
た。

越後の龍目掛けて放たれた雷の矢。

その存在を、山中と木下はしっかり認識していた。

「あれを外したらもう無理ですよ、チロさん！」

「わあってるよ！」

叫び声に怒鳴り声で返して、数秒間のアイコンタクトを交わす。
こくりと頷き合い、やるべきことを確認する。

「これは…あの距離から射ったのか!？」

またまだひよつ子の神憑きなのに、まさかの長距離射撃。しかも、今までの攻撃と比べて格段にバカでかい。

「墜としてやる……！」

瞬時に冷気が渦巻き、周囲の温度が下がり、小さな氷の礫が現れる。

信玄と戦ったときに使用した技だ。

姫鶴一文字を黄金の矢に向け、氷点下の一発を打ち出そうとするのを見て、二人はマズイと顔をしかめた。

あの攻撃の威力はわかってる。

あんなものが射たれば、雷の矢は悪くて押し出し、良くて相殺。そうなれば今までの苦労が水の泡だ。

「ちょ、ミナちゃん！？」

いきなり身を翻して、謙信の元に向かう山中に、木下は慌てて声をかけた。

「アレを止めます！チロさんは、謙信さんを押さえてください！」

「はあああ！？」

ちよつと待て、と木下が手を伸ばすが、山中はするりとそれを掻い潜っていく。

そして、謙信の攻撃が放たれた瞬間、その前に山中が立ち塞がった。

「な……………！？」

無謀の一言に尽きる行動に、謙信の目が驚愕に見開かれた。

山中は舞風を開くと、風神の盾を使い、風の盾を作り出す。

高速で回転する風と、荒れ狂う氷の塊がぶち当たり、互いを喰い潰そうとする。

防いでいても、骨まで凍るような冷たさが、切り裂く氷の礫が身体を襲う。

「……少しでも……威力を下げられたら……！」

ビキビキと手から凍り付いていく恐怖に堪えて、山中は盾を支える。

しかし、それも長く続かない。

「もう……もたない……！！」

腕の力がなくなり、礫でいくつも切り傷を負い、山中は悔しげに呟いた。

風の盾が勢いをなくし、あわや直撃かと誰もが思ったが。

「そうはさせるかああああ……！！」

しゅつと木下が黒い影を伸ばして、山中の身体に巻き付かせ、横に引っ張る。

ちょうどすれすれで、雷の矢と氷の塊が衝突した。

飛んできた山中を、両手で受け止めた木下は、横倒しになった視界で二つの技の勝敗を見守る。

ギギギ、と押し合う雷と氷、一見、氷が優勢に見えるが、ビシビシとヒビが入る音がした。

「まさか……！」

「余所見してんな、コノヤロがつ!!!」

耳を打つ木下の怒声に、ハッと謙信が顔を向けると、間近にまで迫る黒い影。

直ぐ様回避の体制に移ろうとする謙信だが。

「逃がさねえぞ！大人しく喰らえこのヘタレ蛇！」

必死で木下は謙信の神器を影蜈蚣で押さえ付け、縛影で縛り付ける。

すると、後ろから聞こえるバーンという音。氷を打ち砕いたのだろう、もうすぐそこまで迫る雷の矢が見えた。

「貴様！私とアレを喰らう気か！」

「当たり前だチクショー！覚悟は出来てんだバカ！」

しかし、あと一メートル程、と言うところで、急にニタリと木下の顔が歪んだ。

「……………なんちゃって？」

「……………は？」

するり、と木下の身体が沈んだ。正確には、謙信の足下の影に散々揉み合った今の体制は、謙信が木下の前に立つもの。

つまり、雷の光を謙信が背負っているということだ。当然、その下には濃い影が出来る。そこを木下が影抜けで抜け出したのだ。しかも、縛り付ける影は残したまま。

直後、雷の矢は謙信に命中し、轟音と共に黄金の柱が立ち昇った。

四十三の嘶「口舌の刃で、人を斬らなきゃいけない時もある。前編だったりする

いやー……お久しぶりです（汗）

二ヶ月ぶりですかね、やっと、やっと更新できました。

描写の良し悪しは見逃してください、速さを重視したんです（泣）
思ってたより進まなくて、タイトルに前編とつけなくちゃならなかった……。

いい加減終われよ川中島。

いきなりめんどくさいストーリー設定にしちゃって自分でも後悔してます。

でも何とか龍を撃破できました。仕事があればもっと早くupできるんでしょうが、ないとダメですもんね。

合間を縫って書いてはいますが、それも微々たるもので進みません。やっぱり時間のあるときにガッツと書くのが一番ですね。皆様、長らくお待たせ致しました。

次回もこんな感じですが、よろしくお願いします。

タイトル↓「口舌の刃で、人を斬らなきゃいけない時もある。後編
だったりする。」

四十四の斬「口舌の刃で、人を斬らなきゃいけない時もある。後編だな。」

チカチカとした目の眩みと、痺れと、右肩の焼けるような痛み。

「う……こ、れは……？」

目の前に広がる、朝の眩しい光を宿す空。

どうやら仰向けに倒れ、肩口にあの矢が刺さっているらしい。

「よー、生きてるか上杉 謙信。」

ひよこつと視界に入るのは、疲れはてた木下の顔だ。

肩には回収してきたのだろー、くったりした谷中がもたれていた。その隣には、同じくくったりした山中が座っている。

「……何故？」

木下の手に握られた、自分の神器を見つめて、謙信は理由を問う。

神器の破壊が、討ち取ること。なのに、三人はそうしようとしていない。

「うつせーな、お前みたいな臆病者の首「神器」なんかいらねーぞ。」

顔をしかめて木下はそう吐き捨てる。

「まったくです……闘わずして逃げるような人の首捕っても、意味ないじゃないですか。」

「そうだね……後味悪いし、面倒だよ。」

山中は呆れたように溜め息をつき、谷中は力なくへらりと笑った。

「……私が、臆病者……？」

そんなこと、産まれて初めて言われた、と謙信は困惑したような表情を見せる。

「そりゃそうだろ。皆、お前のこと好きだからそう思わないんだ。」
「何度も、言っていたな……理由を聞かせてくれ」

謙信の視線を受け止めて、三人は声を揃えて言っている。

「……自分で考える努力をしろ！」

ピシヤリと叩き付けるように言われ、ますます困惑してしまう謙信なのだ。

とりあえず、場面転換といこう。

残る大将首、甲斐の虎との戦いの行方は……？

辺り一帯に、炎と土の匂いが満ちていた。

焦土を踏み締め、小川、梅本、北の三人は猛虎と対峙する。

双方共に、肩で息をしていた。

先程まで、地面を凍らし焦がし揺るがす、チャンバラと呼ぶには規模の大きすぎる立ち回りをしていたとこだ。

「…王子、大丈夫か？」

梅本が、特に疲弊している小川を気遣う。

炎の神憑きは、抜群の攻撃力を誇る反面、スタミナ切れが早いのだ。

「……いける。」

いつも以上に言葉少なく答える小川に、二人はああ、限界なんだなと思った。

だが、それは同じく炎の神憑きである信玄も言えることだろう。

「ふう……さすがに、お主等三人はキツいのう。」

表情こそ余裕そうだが、顔色の悪さと冷汗だけは隠せそうにない。

「そろこつちのセリフやわ……そろそろ終わりにしたいんやけど。」

北は吐き捨てるように言い、手や足にできている火傷の痛みに唸った。

「思うことは同じよ。甲斐の虎ともあろう儂が、お主等のような新参者の好きなようにされるとは……もう歳かのう。」

来国長が紅に輝き、熱を帯びる。煌々とした光に、三人は慌てて身構えた。

「……だつたら！」

「もう観念しろッ!!」

小川と梅本が叫び、信玄に向かって駆け出した。

「抜かせ、そういうわけにもいかんのよ！」

体力的な問題か、梅本の方が信玄に辿り着くのが早かった。降り降ろされる地国天を、熱を帯びて真っ赤に染まる来国長が受け止める。

「問うぞ六武衆、今一度!!何故斯様な無茶をする!?儂の納得する答を申せ!!!」

地国天を弾き、信玄は己の掌でそれを掴んだ。
続く小川の刀身を、来国長で防ぐ為だ。

「こた、えも…何も！」

ぐつと噛み締めた歯を抉じ開けて、梅本は言葉を続ける。

「あんたが認めて受け入れないと！俺等がいくら言ってもわかんねえだろッ！！」ってか気付けよこの朴念人！」

バキバキ、と彼の周りの大地が盛り上がり、蛇の鎌首のような形を作っていく。

「む……！？」

次々に突き刺さる岩の鎌首を、信玄は来国長で叩き落とす。その岩の間から、陽炎丸の切っ先が縫うように現れた。

深紅の袖を翻して、小川が陽炎丸を信玄目掛けて降り下ろす。

やむなく彼は、来国長で陽炎丸を迎え撃った。

防ぐもののなくなった岩の鎌首は、鋭く硬いその先端で、遠慮なく信玄の身体を切り裂いていく。

「ッ、調子に乗るな童供が！」

信玄の咆哮が上がった瞬間、紅蓮の炎が噴き上がり、周囲が爆発を起こす。

彼を切り裂いていた岩の鎌首は、一瞬で粉々に碎け散った。

当然、その爆発に巻き込まれた小川と梅本は、熱風と衝撃に、ぬいぐるみのように吹っ飛ぶ。

地面に叩きつけられ、肺の中の空気が一度に吐き出される感覚は、元一般人にあまりにもキツイ。

「う……こ、りゃ……マズイ……！」

痛みと苦しさに、梅本は身を擦った。

片目を開けて小川の様子を伺うと、既に息も絶え絶えのようだ。武田 信玄、なんというパワータイプだろうか。体力も筋力も、到底段違いである。

どうすればいいのか、と答に辿り着けない思考を巡らせていると、ふと、懐の奥から微かな振動を感じた。

間違いない、携帯のバイブレーションだ。

信玄に見えないように身体を壁にして、梅本は必死に携帯を掴み出した。

パカリと開くと、メールの送信者は『マンボウ』とある。そういえば、先程から北の姿が全く見えない。

「あんの、腐れ変態……！人が……死に、かけてんの……！」

憎悪の声もおどろおどろしく、梅本はメールを開いた。するとそこには、短い文面が。

『虎を抑えろ。炎上網をあげて、空を隠せ』

人間、追い詰められ過ぎれば、逆に頭が冴えてくることがあるという。まさに今、梅本の脳味噌がそれだ。

一行ちよつとの文章で、北が何をしようとしているのかが大まかにわかった。

「王子……！おい、起き……ろ！」

懸命に手を伸ばして、梅本は小川の肩を掴んで揺すった。

「……………う、め……………？」

目をゆっくり開いた小川は、ボーツと呆けたような顔をしているが、すぐに自分達の状態を理解して、正気を取り戻した。

「大丈夫か……？起きるぞ、よっと！」

歯を食い縛って、二人は身体を起こした。

信玄を見ると、彼も堪えてきたのか、片膝をつき荒い息を吐いている。

「王子……一回でいい、炎上網って、出せそうか？」

梅本は軋むような痛み顔に顔を歪めながら、小川に問いかけた。
今度で終わりにしないと、もう自分達が持たない。この一回で、止めを刺す。

小川は梅本の表情に何かを察したのか、一言だけ言葉を発した。

「……決めるんだな？」

「おう。」

頷く小川に、にんまりと笑いかけ、二人は神器を支えに立ち上がった。

よろめく足を、股をぎゅっとつねることで叱咤する。

「「せえええええのおおおお！！！！！」」

鬼気迫る顔で、腹の底から気合の絶叫をあげ、走れ孝研男衆！
風のように！

何やら雰囲気ガラリと変わった二人の勢いに、信玄は目を丸くした。

「伸びる土地 鮫ええええ!!」

ガアン、と梅本の地国天が大地を打ち付けると、鮫の背鰭型の岩が次々に起き上がる。

そしてその岩は、生き物のように地面を走り出す。

小川はその内の一つに飛び乗ると、真っ直ぐ信玄のもとに走った。

信玄は向かってくる背鰭岩を破壊していくが、出るわ出るわ、幾ら潰しても岩は途切れることはない。

彼の噴き上げる炎も、次第に威力を弱めていく。

「何と……しぶとい……!!」

苦々しく呻いた信玄が、来国長を大きく振るおうとしたその時、何やら硬い物が片手を封じた。

目をやれば、先端を伸ばした背鰭岩が二つ、己の腕にがっちり噛み合っていた。

そうこうしてる間に、残る手足も絡めとられてしまう。

背鰭岩の一つに乗った小川は、その瞬間を見逃さず、これが最後とばかりに陽炎丸を強く握り締めた。

「……翔べ、炎狐!!」

水平に空へ翳した陽炎丸の刀身から、炎が滝のように溢れ、空を鮮やかな朱に染め上げていく。

信玄の視界が、一面炎で一杯になったとき。

声が、聴こえた。

「上出来や、ご苦労。」

のんびりしているが、何処か傲慢な響きを持つこの声は。

突如、周囲の温度が下がり、炎上網がフツと消えたがと思うと、上空に見えた光景に、皆口をあんぐりと開けた。

何故か、北が飛んでいる。何処をつて、空を。

その両手……正確には風鯨の先に、バカでかい水の塊を持ち上げて。

「おま……その水……!？」

梅本がようやく言葉を吐き出し、何事か思い出したらしく、あつと声をあげた。

すっかり忘れていたが、川中島には何本もの川が流れている。

その中でも、一番太い川が『千曲川』である。

龍虎や自分達の力により、大半の川は埋まったり凍ったり煮えたりしたが、千曲川の水は乱入により距離が離れたのか、あまり被害を受けていなかったのだ。

彼女は、小川と梅本が必死に信玄と戦っているどさくさに紛れ、馬を捕まえて千曲川まで走り、水を背負えるだけ背負ってきたのだ。どうやって空まで昇ったのかは謎として、余程疲れたのだろう、北にしては珍しく、汗だくだった。

「行くで……!防げるもんなら、防いでみいや、水・流・弾……!」

直径50センチはあるだろうか？

通常よりも遥かに大きい水の弾丸が、マシンガンの如く乱射される。

それを信玄はもろに受ける。あまりの威力に岩の枷は砕け、彼の大きな身体は地面へと倒れこんだ。

「まだ終らんで!折角重たい思いして運んだ水や、全部受けてもら

「うわ……!!」

ギラリと目を光らせ、北はグツと力を込めた。

途端、ビシビシと水の塊が凍り始め、瞬く間に巨大な氷塊に姿を変えていく。

信玄は何とか身を起すが、北は落ち行く中で狙いを定め、氷塊を思いきり信玄に叩き付けた。

「むう……！　させんぞ……！」

仁王立ちになり、真つ向勝負の構えをみせる信玄。彼の身体から熱気が立ち昇り、来国長に炎が宿る。あれだけ疲れきって尚、彼の炎は絶えないのか。

全身全霊を込めた熱いフルスイングが、氷塊とぶつかり合う。

ジュウウウ、と水が蒸発する音と水蒸気の煙が、辺りを漂う。

しかし、流石の業火の猛虎も、しこたま水を浴びせられた状態で炎を出し続けるのは無理だった。

元気なときならいざ知らず、今は力尽きる一歩手前なのだ。

腕が徐々に下がり、肘が曲がったその瞬間、巨大な氷のハンマーは信玄もろとも地面に激突して、虎の敗北を周囲に知らせたのであった。

うつ伏せの視界、肌を刺す冷たさ。

呻き声も出ない中で、下から何かが右肩を押し上げた。

そのままどさり、と少々手荒に仰向けにされ、信玄はくぐもつた声をあげる。

「俺等の、勝ちだな。」

見えるのは、地面に四肢を付いている梅本と、横倒しになって気絶してる小川と、座り込んでいる北の三人。

彼等の真横に突き立てられているのは、己の神器である。

どうやら、梅本が小さな地壁で信玄を仰向けにさせたようだ。

「……壊さんのか。」

「壊さへんよ。」

神器を横目に、吐き捨てるように言った北の言葉に信玄は苦笑する。

「壊さないかわりに……一つ、言うことを聞いてもらうぞ、武田信玄。」

ゼイゼイと喘息のような息の中、梅本は有無を言わさぬ口調で言った。

「……よかるう。」

穏やかな声で、信玄は頷く。

不思議と、絶望感はなかった。

「多分、あんたはこの後……謙信さんと話をすることになる。そのとき、余計なことを考えずに答えてあげて欲しい。」

「余計なこととは？」

信玄の問いに、梅本はやれやれと肩を落とした。

「城主だとか、武田のお家とか……んなしょーもないもん全部ナシで、ただの人間の野郎として答えろって言うてんねん、察しろやボケとんのかオッサン。」

苛々と北が舌打ちして、信玄をジロリと睨み付けた。

疲労で彼女の機嫌は、すこぶる悪い。

遠くで、陣太鼓の音が鳴っている。

戦の終わりを知らせるべく、昌幸の忍達が駆け回り知らせているのだらう。

第四回川中島の戦い——両軍の大將が共に戦闘不能という、極めて異例な形で、終結となった。

四十四の嘶「口舌の刃で、人を斬らなきゃいけない時もある。後編だな。」

できたー！！！！

長かったよ川中島！

やっと一番ややこしいところが終了しました！

タイトル詐欺なのはごめんなさい。

そして！いよいよ近づいてきましたお気に入り200件！

ナメクジ以下のスピードですが、頑張って書いていきます！！！！

四十五の嘶「認め合いこそイイ大人の証だって、テレビとかで言ってた。」

痛い。熱い。だるい。疲れた。喉乾いた。腹減った。

そんなことばかりが、頭の中をぐるぐる回転する。

閉じた目を開けることさえ億劫だが、ぼやーとした中で、自分達が今どのような状況なのか、あの二人はどうなったのかということが、フラッシュバックのように現れた。

「……お館様!?」

「……謙信さん!?」

ガバツと飛び起きれば、ゴツチーンと頭に衝撃が走る。

「……うおおおおお……!」

目にチカチカツと星が散る。

どうやら、お互いの頭を結構な勢いでぶつけ合ったらしい。あまりの痛みに呻いていると、クスクスと笑う声がした。

そちらを見れば、互いの傷の手当てをする龍虎の姿。

「起きる瞬間まで、お主等は騒がしいのう。」

「本当に。見ていて飽きない。」

両者の間に漂う穏やかな空気に、六人はパチパチと目を瞬かせた。

まだ頭がガンガンするせいか、状況が脳みそに浸透してくるスピードが遅い。

「……で、全員どうなったんだ。」

やっと、小川がぼつりと口を開いた。
龍虎はチラリと目配せしあうと。

「とりあえず、六武衆（お前達）の勝利といったところか。」

その言葉を聞いた六人は、ぽかーんと口を開けて固まった。

勝利……勝利……！？

その言葉が頭の中をリフレインする。

真っ先に反応を示したのは、木下だった。

「いいいつやったあああ！！！！！」

身体の痛みも忘れて、木下はバネのように飛び上がって喜ぶ。

「いやあ……まさかホントにこの龍虎に勝っちゃうとはね。ま、僕も頑張った甲斐はあるかな。」

薬の影響で、まだキツそうな谷中だが、彼女は満足そうに頷く。

「これで私達も、心置きなく前に進めますね。」

山中はバサバサに乱れた髪を治しつつ、にこりと笑った。

「は——っ……疲れた……マジに疲れた。」

梅本は安堵に天を仰ぎ、小川は無言でにんまりと口角をあげる。

「……お、何かようさん来よったで。」

戦中には影を潜めていた北の塩鯖のような目が、遠くの方から集まってくる一群を見つけた。

赤と白の旗印がごっちゃになったそれは、上杉軍と武田軍だった。

「お館さまあああああ……!!」

「殿おおおおお……!!」

うわうるせー、と六人が顔をしかめている間に、一群は物凄い蹄鉄の音を響かせて、それぞれの主を取り巻いた。

がやがやと騒ぎ立てる部下達の眼は怒りに燃え、それは明らかに六武衆に向けられていた。

龍虎は視線を交わし合うと、すつくと立ち上がり。

「鎮まれ、この馬鹿者共ッ……!!」

川中島に、龍虎の雷が落ちた。

その威力のハンパないこと、この怒鳴り声には全く関係のない六人ですら、首をすくめ姿勢を正した程だ。

シーンと静まり返った中、謙信が口を開いた。

「我等の戦は終わったのだ。我等が六武衆に敗北したのは、偽りなどない。」

その後を、信玄が引き受ける。

「その通りよ。この者達は、純粹に己の「武」のみで我等に挑み、見事勝利を納めたのだ……そうであろう、真田の忍達よ。」

チラリと後ろを振り返ると、いつの間にかいたのか、真田忍隊が

恭しく片膝を付いた姿勢で畏まっている。

「仰る通りで。」

「我等の名にかけて、真なり。」

忍と言えど、只の忍ではない。武田に仕える「真田の」忍なのだ。

しかも、さっきの言葉は真田忍隊のデュアルホーンこと猿飛佐助と霧隠才蔵のもの。

そんじょそこらの一兵卒とは格が違う。

「ほら、これ返すよお二人さん。」

これ以上のいざごさはナシだ、の意味を込めて、梅本は二人の神器を龍虎に手渡した。

神器を破壊せず、尚且敵である二人にそれを返したことに、周囲は驚愕した。

「……これが俺達のやり方だ。」

「お館様も謙信様も、スゲーいいやつだしなっ！世話になったってのに、恩を仇で返すことはしねーよ。」

まだふらつく身体を、よっこらせと小川と木下は起こした。

彼等の行動に、周囲は困惑の色を隠せない。

「さて、それではお二方。敗軍の将として、私達の要求を呑んで頂きましょうか。」

「ミナちゃん、それ脅迫っぽく聞こえるで。」

爽やかな笑みを浮かべて、有無を言わさぬ口調の山中に、北が

半笑いでユルいつつこみを入れる。

あまり穏やかではなさそうな言葉に、再び周囲は敵意の眼差しを向けた。

それを龍虎は一瞥して制し、こくりと頷いた……のだが、流石は戦国時代。主人を想う心が人一倍強いヤツが、やっぱりいる。

「恥を知れ、この外道共ッ！！！！」

「「「！？」」」

燃えるような怒りの絶叫が響いた瞬間、巨大な竜巻が六人目掛けて放たれた。

いきなりの攻撃だが、梅本がギリギリのところで壁を出し、竜巻を防ぐ。

しかしその威力の強いこと、強固な壁がごっそりと挟れた。

「あつつつぶねえええ……！」

血の気が引くのを感じながら、ぐつたりと梅本はその場に座り込んだ。

「テメーいきなり何てことすんだ！！！」

木下が食って掛かる先には、切り傷だらけの女武将、直江兼続の姿があった。

「喧しい！！！！貴様等のような薄汚い裏切り者など、私は勝者と認めない！！！！」

再び風が渦を巻き、六人を狙う。

こりゃマズイ、と彼等の背中に汗が滲む。

今あれを喰らえば、多分防ぎきれない。

しかし無抵抗でいるわけにもいかず、ああ畜生と悪態をつきながら立ち上がるうとした。

だがそんな悠長な時間を、目の前の女武将は与えてくれない。

「止めよ兼続！これ以上の戦いは無用！」

「いいえ、止めませぬ！上杉をここまで侮られて、どうして大人しく退き下がれましょう！？」

謙信の制止の声も、頭に血が昇りきった兼続には無駄らしい。

渦巻いていた風が爆ぜ、幾つもの鎌鼬が同時に六人へ刃を向けた。

「梅ッ、壁は！！？」

「だああああ！俺だってかなり限界なんだぞ！？」

まずいことに、一番攻撃力のある小川、続く谷中は、もう体力・精神力共にすっからからの状態だ。

残る四人も疲弊しきつて、兼続の攻撃に耐えきる自信はなかった。

「その血肉で詫びろ！！！」

詫びるかボケ、と叫びかけたとき、彼等の傍を白と赤が駆け抜けた。

そして、目の前に紅が散る。

「信玄……！！？」

「……無事だな、よかった……」

状況はこうだ。

六人を庇い、その前に立った謙信。

そのまた前に、信玄が立っている。

信玄は謙信と六人を、背中を鎌鼬に切り裂かれることで守ったのだ。

がくりと膝を突く信玄を、半ば茫然とした顔で謙信は眺めた。

「お館様っ！」

「誰か布！あと水も！」

いち早く我に返った六人が、血相を変えて彼に駆け寄った。

「馬鹿な、何故敵である貴様が……！？」

佐助と才蔵の二人がかりで取り押さえられた兼続は、信玄の行動に言葉を失う。

「……まだ解らないのか。」

兼続を険しい顔で見つめながら、小川と谷中が近付いてきた。

「敵だって言っても、色々あるでしょ……そのままの意味もあるし、また少し違う意味もあるんだから。」

諭すように谷中が言い、呆れたように溜め息をつく。

「……心酔するのは結構。でもその思いが、結局あの人にあんな顔をさせたんだ。」

そう言う小川の視線の先には、悲痛な面持ちで信玄の名を呼ぶ

謙信がいた。

思いもよらぬハプニングに、ドタバタすること数時間。

信玄の手当てに、いきり立つ両軍のまとめ直し、場所の変更、野営の準備……とにかくヘトヘトの身体に鞭打って、六人は戦後の川中島を駆け回った。

ようやく野営地を作り上げ、何とか落ち着きを取り戻した時には、日が傾きかけていた。

「……………死ぬわ。」

六人は、魂がはやーんと口から抜けそうになりかけている状態だった。

げっそりとした表情で、北が呟く。
暫しそこで、空虚を眺めていると。

「おい、大丈夫かよ。」

「食事を持ってきましたよ。」

茶碗の乗った盆を持って登場したのは、昌幸と定満だ。
どうやら、少し早めの夕飯を持ってきてくれたらしい。

「……ごはん……？」

ぴくつと木下が反応を示す。

昌幸と定満は、その様子に苦笑しながら、六人に茶碗を手渡し
ていった。

「一気に食べてしまっではいけませんよ。ゆっくり少しずつ、ね。」

定満はがつつこうとする木下の肩を押さえ、宿めるように言っ
た。

皆が注意通りに食事をする中、昌幸は彼等を見回して口を開く。

「それ食ったら、お館様のところに行きな。上杉の大將も、お前らを
呼びだ。」

「……りょーかい。」「」「」

もごもごとした返事を背に、昌幸と定満はその場を後にした。

茶碗に大盛りご飯をしっかり食べて、ちよつとだけ元気がでた六人は、龍虎の待つテント（？）へと向かった。

正方形に張られた幕の入り口を捲つて中に入ると、中央に横たわる信玄と、彼に付き添う謙信が見えた。

「お館様、怪我大丈夫か？」

すぐに木下が信玄の元に駆け寄つて、その枕元に膝をつく。背中に大きな傷を負った信玄だが、すぐに施した応急処置が功を奏したのか、そこまで大事には至らなかった。

「なに、儼ならこのとおり、ぴんぴんしておるわ。お主等こそ、身体は大丈夫なのか？」

謙信の支えを借りて信玄は身を起こした。

「とりあえず、半分死にそうだけどな。けど、まだやることがたくさんあるし……飯喰つて、何とか立ってるとこだよ。」

ドカッと梅本はその場に腰を下ろすと、胡座をかいた膝の上に頬杖をつく。

「そうか……すまない、迷惑をかけた。」

「謝ることはありませんよ。本を正せば、私達の仕掛けたことなんですから。」

申し訳なさそうな謙信を見て、山中は苦笑を浮かべながら言った。

「……そう言えば、兼続はどうなったんだ？」

兼続が昌幸の忍に取り押さえられてから、一向に姿を現さないのを気にしてか、小川が辺りを見回す。

「とりあえず、今は謹慎中にさせてある。軒猿の報告によると、大人しくしているようだ。」

謙信の言葉を聞き、六人は少しばかり微妙な表情を作った。
何と言うか、ちょっと悪いことしたかなー、というような感じか？

「謙信よ、あまり責めてやるでないぞ？ 儂はほれ、何ともないのだから。」

「わかつている……だが、どのような理由があれば、兼続のやったことは……」

一気に場の空気がどんよりしたものに変わるが。

「んなもん、後からグチグチ言うてもしやーないやろ。止めや辛気くさい……っーかお前ら、やることあるんとちゃうんか。」

どんより感なんぞ我関せず、いつでも言いたいことをビシバシ言い放つ北に、龍虎はうつ、と言葉を詰まらせた。

正論と言えば正論だろうか。

「だね。負けたときの話、忘れたとは言わせないよ。要求はただ一つ！全部正直に話すこと！」

谷中はふふん、と笑い、龍虎を眺めた。しかし。

「というか……私は色々初耳なことが多いような気がするのだが。」
「儂、一体何を話せばいいのかわからんぞ。」

あれ？と六人は首を捻った。

そう言えば、具体的な内容をはっきり言っていなかったような気がする……特に謙信には。

「……まあ、アレだ。謙信さんは自分のことと、自分の気持ちを全部話す。で、お館様は理解して受け入れて答えてやる。これが俺等の要求だ。今決めた、異論は認めない。」

説明が面倒になったのか、投げ遣りに梅本が言う。
残りの五人も、うんうんと頷いた。

「……確実に私の負担の方が多いか、それ。」

「何だよ、まだ逃げんのかよ。何でオレ達に臆病者呼ばわりされたのか、まだわかんないのか。意外と頭わりーんだな、お前。」

不満を溢す謙信を、木下が嘲笑う。

「……………」

キツい言葉に、謙信は悔しげに俯いた。

しばらくの沈黙の後、深々とした溜め息を吐き、顔を上げる。

「わかった。望み通りにしよう。」

「……そうこなくっちゃな。」

決意の瞳も力強く、謙信は信玄の方へと視線を向けた。
その表情に、小川が励ますかのような呟きを贈る。

「……信玄、私は……私は、今まで貴殿を騙していた。私は、その……お、男ではなく……女、なのだ。」

震えそうな声を必死で抑えて、謙信はそう告げた。
そして両手を伸ばし、自分の頭を覆う白い頭巾を、髪を留める紐を取り去った。

同時に、ぱさりと零れ落ちる濃紺の髪が、微かな白檀の香りと共に広がる。

注がれる視線を耐え忍んでいると、ようやく信玄が口を開いた。

「美しい髪よの、謙信。まさか、お主の本当の姿を見ることが出来ようとは。儂は、六武衆に負けてよかったわ。」

優しく笑った信玄は、慈しむように謙信の髪に触れたのであった。

四十五の嘶「認め合いこそイイ大人の証だって、テレビとかで言ってた。」（後

終わった……最近仕事がめっちゃ忙しくて、全然進まないですよ（汗）

あー、なかなかおわんねーなこれ。やっと正体暴露編まで来ました。あともうちょっとかな、あと2、3話で終わらせたい。いや終わね。いい加減次書きたい……短編も書きたいのに全然進まねえ！。えーと、じゃあそういうことで！また次回っ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6578j/>

異世界戦国大乱記

2011年10月16日12時54分発行